

ベルの兄がチートで何が悪い！！

シグナルイエロー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

なぜかHUNTER×HUNTERのカイトに転生した、しかも全然世界が違うんだが・・・。

夢はオラリオでミアさんみたいなお店を嫁と一緒に出すこと！

そのために冒険者になって稼ぎまくるぜ！！

荒唐無稽で夢へ向かって超遠回り！！

何でもありよりはべりなはちやめちやストーリー開幕！！

※主人公はカイトの皮を被っただけの別人です。CVは津田さんとかがいいなあ・・・

目次

オラリオ到来前

01 : 物心×祖父

02 : 天才×愛弟

オラリオ到来！

03 : 幼女×劍姫

04 : 劍姫×殺芋

入団試験！

05 : 期待×疑惑

06 : 面接×物理

07 : 面接×物理

08 : 面接×正常

09 : 面接×異常

冒険者開始！

10 : 歓迎×一步

11 : 登録×冒険

12 : 思惑×日々

襲撃編！

13 : 倍増×倍増

14 : 倍増×倍増

15 : 後悔×前進

16 : 誤解×前進

17 : 幸運×不運？

18 : 羞恥×会合

様々な出会い編

173

160

153

145

135

124

112

102

91

83

73

61

49

39

30

18

10

1

41	暗黒×卵焼		447
40	奮闘×号泣	後編	430
39	奮闘×号泣	中編	420
38	奮闘×号泣	前編	411
37	復活×銀腕		396
36	帰郷×過剰		381
	嫁と舎弟と時々妹		
35	失意×再起		368
34	絶望×切札	後編	350
33	絶望×切札	前編	343
32	最後×正義		333
31	殺帝×明王		320
30	双頭×明王		306
29	悪夢×進呈		291
28	悪夢×前夜		280
	悪夢の英雄編!!		
27	大神×武神		270
26	日常×風呂		264
25	巫女×秘密	後編	253
24	巫女×秘密	中編	242
23	巫女×秘密	前編	233
22	巫女×外道		222
21	神会×称号		213
20	昇格×降格	後編	198
19	昇格×降格	前編	187

42	： 姉妹×舎弟	前編	456
43	： 姉妹×舎弟	後編	472
44	： 珍客×屋台		486
弟子とスパルタ教育 地獄編			
45	： 手刀×暗殺		499
46	： 貴猫？凡夫		505
47	： 妖精？試験		510
48	： 妖精？試験	その2	523
49	： 妖精？試験	その3	539
50	： 師匠？弟子	前編	548
51	： 師匠？弟子	中編	565
52	： 師匠？弟子	後編	578
武神偏			
53	： 来訪？武神	その1	591
54	： 来訪？武神	その2	599

オラリオ到来前

01：物心×祖父

【転生】

これには大きく分けて二つのパターンがある

一つは何かが原因で死亡後に同じ世界、もしくは別の世界で赤ん坊から人生を別人になってやり直すというもの、

もう一つは何かがきっかけで前世を思い出し、結果的に転生したということに気づくパターンだ、

ちなみに俺の場合は後者だった。

|||||

片田舎の何てことはない普通の平屋、そこで老人が孫であろう男の子を膝に乗せて本を読んでいる

そんな、見ているだけで平穏という言葉が頭によぎる光景の中で俺は唐突に何の前触れもなく前世を思い出した

そのときの衝撃は凄まじいもの、というほどでもなかったな、うんまあびつくりはした、受験日に会場で受験票を忘れたくらいの衝撃

だ、一瞬頭が真っ白になるだけで済む

ん、洒落にならない？ 大丈夫大丈夫、来年もあると思えば開き直るから

まあ、最初はびつくりしたけど持ち前のポジティブ感でもって開き直ったって話だ。

|||||

「っえ!？」

なんじゃこりゃ、え？待って、ナニコレ、は？

「どうした『カイト』、突然声を上げて？」

見上げると髭もじやのじいさんが俺を見下ろしていた、

誰あんた・・・いや俺の祖父だわ、あぶね声に出すところだった
んでもってカイトって・・・カイト、そうだ、そうだった今の俺の
名前だ

「・・・んーん、何でもない、それよりも早く続き読んでー」

「?・・・ま、ええじゃろ、どこまで読んだかのお、おお、ここじやつ
たな・・・」『そうしてー英雄であるアルスターは——』

あつぶねーセーフセーフ、いきなり前世のことを思い出しまし
たー、なんて言ったらこの世界でなくとも間違いない痛い子扱いだ、
最悪、気味悪がられて捨てられかねない、まあ、今までのカイトとし
て生きてきた記憶からこのじいさんが孫を捨てるとは思えないけど、
変な子扱いされるよりは何も言わない方が双方のためだろう。

しかし、まいったねこりやマジで転生って奴なのか、完璧ではない
が何となく前世の地球人であった頃の記憶が今のカイト、俺の記憶に
追加されている

えーと、前世の死因は——ひき逃げつすか、しかもリア充っぽいヤ
ンキーカップルに挽肉みたいに念入りに殺られたと、クソがつ！

こいつら絶対許さん、文字通り死んでも許さんぞ、とりあえず末代
まで崇っておこう南無南無

閑話休題

さて一旦落ち着こう、とあえず今ままでカイトとして生きてきた5
年間の記憶からこの世界の情報をまとめてみると——

Q1：ここはどんな世界？

A1：剣と魔法の世界、時代は中世[♫]

Q2：家庭環境は？

A2：祖父が一人、両親いない、弟一人、裕福ではないが特別貧し
いわけでもないZe！

Q3：お名前は？

A3：かいとくらねる、よんさいです？
以上だ。

さすがに5歳児ではこの世界についても自身についても、持っている情報が少なすぎるな、今後は情報収集に努めよう

まあ、死んだのは残念だがこうやって生まれ変わったわけだから前向きに行こう

ただ、問題があるとすればここが異世界であるということだ、もし地球の現代なら色々と子供の頃から勉強やスポーツで無双できたんだが、剣と魔法の世界となると勝手が分からない、子供の頃から二次方程式や三次方程式が解けたところで役に立ちそうにない、っていうかよく考えたら前世で社会人になってからも役に立った事なんかねえな、英語がペラペラで筆記もOKでもここでは意味がないっばい、いや、だつって、そもそも文字自体が違うことが目の前の絵本を見れば分かってしまうし

前世の知識を活かせる気がしない・・・詰んでないか、これ。

こんなことならもっと転生ものの小説とかコミックを読んどくべきだったなあ

俺ってばコミック派でラノベとか転生系の小説とかはほとんど読んでないからこういうときどうすればいいのかよくわからない、転生もので読んだのは無職転生と幼女戦記、あとは本好きの下克上・・・のコミック版

全く役に立たないわけではないが原作に比べれば明らかに情報量は少ないだろう

とりあえずこの三作品で共通してるのは子供の頃から一定以上の努力で魔法なり内政なりを鍛えているという所だ

フィクションを見本とするのは褒められた話ではないが、実際にフィクションがこうしてこの身に起こってしまっている以上、今更とあった感じだ

それに前世では親孝行の一つもせずに死んでしまったから今世ではちゃんと親孝行をしてやりたい、してやりたいが、このじいさん見た目的には結構歳がいつている感じだ、急がねば親孝行する前にあの世にあばよと、なりかねない

・・・ふむ。

先ほどは詰んだ、と思った今世だが翌々考えてみたら色々やりた
いことが出てきたな

おかげでかなりやる気が出てきた、やはり人間、明確な目標を持て
ば自然と力が漲ってくるもんだな

『——めでたし、めでたし』と、ここまでじゃな、そろそろ畑を見
に行かにならん、カイト、ベルの面倒を見てやってくれ」

考え事をしていたらじいさんが本を読み終わってしまった

色々調べたいことがあるんだが・・・適当に何か言ってみるか

「じいちゃんっ！た、たいへんだ!!」

「ん、何がじゃ?」

「さつきちよつと声上げたときな」

「うむ」

「物心付いた」

「・・・は?」

じいじがポカーンとしてたが、これからの俺の変な行動はしばらく
はこれで押し通そう

あれ、でも物心ってこんなだっけ?

|||||

《side:ゼウス》

×1年○月△日

最近、上の方の孫、カイトの様子がおかしい

急に物わかりが良くなり、今まで何度も読んできたお伽噺話の本で
はなく、地理やこの世界の一般的な事に関する本などを読んでくれと
せがむようになった

それだけではない、今までより弟の面倒もしつかりと見るだけじゃ
なく、儂の畑の手伝いや、体を鍛えると言って村の周囲を毎朝走り、筋
トレまでするようになった

最初は急に物心が付いたとか言っておったが、人とはそんな感じに

物心が付くものじゃったかのう？

まあええか、人の子の成長はとにかく早い、こういうこともあるじやろうて

——とか、考えてた時期もありました

×3年○月△日

あれから、2年が経ち、ある日カイトが毎朝日課にやってる素振りを見たんじゃが、

ナニアレ

何回も振ってるはずの木刀が残像を残して気づけば振り下ろされているんですけど！

ていうか何その引き締まりすぎた細マッチョは!?

しかも最近は弟の方のベルまで兄のカイトの真似なのか細い棒を持って庭で振っている

ベルの方はさすがにまだ年相応の速度なことに安心した——

——儂がアホじゃった

×5年○月△日

あれからさらに2年、カイトは9歳、ベルは5歳になった、

最近は素振りじゃなく、二人並んで正拳突きをしたり、瞑想したりと、どこの修行者じゃと言いたい程に鍛えまくっておる、

あと、わしの眼と耳がおかしくなったのか、カイトの正拳突き、たまにだが、音の方が若干遅れて聞こえるような気が・・・いや、さすがに気のせいジャロ、気のせいだよね？

ベルの方も普通に正拳突きをしとるが拳を放つたびに空気を切り裂くような音がしとるし

これで修行ばかりにかまけて畑仕事を疎かにしておったら何か言

えるんじやが、そういうわけでもないので何も言えん、むしろ「兵農一体——!! Fooooooooo!!」と言つて喜んで畑を耕しておるし、最近は逆にすることがない。

他にも、前から儂の昔の女性達が偶に尋ねてくるんじやが、最近はカイトやベルばかり構うもんじやからちよつと寂しいのお、それだけでも精神的にくるといふのにカイトやベルに「あの人みたいにならないうように」とか吹き込むのもやめてほしいんじやが

その後の苦笑いしながら儂を見るときのカイトの目が・・・

『でもそんなじいちゃんでも僕の大切なじいちゃんなんだ』的な優しい目が逆にいたたまれない、良心の呵責に押し潰されそうじや・・・さらにその後ベルに「浮気物つてどんな物なの?」とか聞かれたときは本気で昔のことを後悔したのう

はあ、やはり男手一つで子を育てるのは思つていた以上に大変なのかもしれん

こんな昔の女達にボロクソに言われているじじいのことを孫はどう思つているのだろうか・・・

やばい、尊敬される要素や理由が思い浮かばない

ヤバイ。

×5年○月◇日

うおおおおおおおんうおおおおおん儂は幸せ者じやつた——!!

先日、何故そんなに強くなろうとするのかカイトに聞いてみたら冒険者になつて金を稼ぎ、儂の暮らしをもつと楽にしてやりたいと言つてきた、なんとという親孝行! いや祖父孝行な子じや——!!

こんないい子を少しでも怪訝な目で見ていた儂は最低じや——うおおおおおん

・・・よし、冒険者になりたいのであれば儂が色々・・・教えるのはさすがにまずいのう、うーむ・・・

そうじゃ、ヘルメスの奴に冒険者とは何たるかを孫に色々教えてもらおう、うん、そうしよう

そうと決まれば奴に手紙を書かねば、さっさと来んと昔の恥ずかしいことを神達に匿名でばらすと言えばすっ飛んでくるじやろ

×5年○月アホ日

手紙を書いてからしばらくしてから、ヘルメスが訪ねてきた

何のために姿を隠してるんですかと、小言を言われたが、知るか！

儂のかわいい孫のためならそれくらいは些事じゃい！

ほれ、とつと今のオラリオのことや冒険者のことについて教えてやらんか！

まあ、少々文句を言っていたが、カイトとベルの修行を見ると、急に態度を変えてぺらぺらと今のオラリオについて話し出した、怪しい・・・こやつ、何か企んだりしとりやせんだろうな？

まあ、ヘルメスのアホが何か企んでもこのかわいい孫達ならその企みごと食い破りそうじゃから、心配せんでもええかの

×6年○月ヘル日

あれから、二月ごとにヘルメスが家を訪ねてくるようになった、ついでに水色の髪のかわいい少女も一緒に連れてくるようになった、ヘルメスから聞いた話ではどうもこの少女どこかの王族らしい、王族の生活に嫌気がさしていた所をヘルメスが連れ出したらしい、まあ無理矢理ではなく少女の方から懇願してきたそうなのでええか

それにこのアスフィと名乗った少女、どうもカイトに少々気があるらしい、さすがはわしの孫、たった数回の逢瀬で身持ちの固そうな女子を陥落させおった

この分じゃとオラリオに行ったらすごいことになりそうじゃのう
それにしても、カイトとアスフィのやりとりは見てて微笑ましいの

う

ベルもアスフィのことを姉のように慕っておるようじゃし、ええのう、ええのう、何かこの感じええのう、ほっこりするわい

このような平穩をあと幾ばく見ることができるとは、ほっこりするわい。おそらく、あと数年の内にカイトはオラリオに旅立つじやろう、じゃがヘルメスから聞く今のオラリオは酷い状況だ、儂とヘラが居ったときとは比べものにならないほどに闇イザイルス派閥が幅を利かせ混沌と恐怖の日々に市民達は怯えて暮らしているそうだ、口惜しい、せめて儂かヘラの派閥が十全であつたならそのようなことオラリオで起こさせんというのに、いや、今の儂がいくら悔しがろうがただの負け犬の遠吠えじゃな、儂に何か言う資格などもはやはりはしない。

オラリオに行けば新人のカイトはおそらく様々な事柄に忙殺され村に帰ることもままならないじやろうて、だがそれまでこのような穏やかな日々を良き記憶として胸に納めておいてほしいのう

×7年○月メス日

数年以内にオラリオに旅立つじやろうとは思っていたが、その翌年に旅立つとは思わなかった

何でもアスフィも11歳で冒険者になつたらしく、なら自分も11歳で冒険者になろうと前から思っていたそうじゃが、おそらく背中をさらに押したのはアスフィのランクアップのせいもあるんじゃないやろう

ヘルメスのアホから聞いた話ではアスフィが最近Lv. 2になり、超の付く希少スキル【神秘】にも目覚めたと聞いた、わずか2年足らずでランクアップとは、数年間Lv. 1のままの冒険者が数多く居る中でこれはかなりの成長速度じゃ

やつぱ、あれかのお、惚れた女にこれ以上実力を離されたくないといった感じかの

ほっほっほ、カイトは年の割に大人びすぎていると思っていたが、存外ちゃーんと男の子じゃった

カイトのこういう所が見れてじじいちょっと嬉しいぞい

だがなカイトよ油断するでないぞ、オラリオには富も名声も何でも

ある、何でもはあるが、それは綺麗事ばかりではない、この世全ての悪意すらもその中には含まれるということじゃ

油断すればどんな者でも見えない何かに食い潰されることになるじやろう、だから油断せずに前に進め、振り返らずに前に行け

儂はベルと共にここからお主の活躍する噂を期待して過ごすしよう

ほっほっほ、泣くでない、せっかくアスファイからもらった帽子にシワが付いてしまうぞい

「……じいさん、ベル、行つてきます！」

うむ！良い顔じゃ！……いつてらっしやい。

PS

先日ベルが岩を何発も拳で殴り、その岩にヒビを入れておるのを目撃した……何で拳が無傷なのだ、ベル曰く自分は全力でこれだがカイトの方はもつとすごいらしい……オラリオでもカイトなら余裕かもしれない

02：天才×愛弟

○1年×月キン日

とりあえず、身近のことからコツコツと親孝行していくことにした弟のベルの面倒はもちろん、(むしろかわいいので積極的に愛でます)家事の手伝いから畑仕事までこなす傍らで、基礎体力を養うために早朝ランニング及び筋トレを行う。

この世界は魔法なんてものがあるだけじゃなく、(冒険者)なんていう現代ならお巡りさんに職務質問されそうな職業があるくらいファンタジーに溢れている。

最近では「最後のファンタジー」なんて名前なのにバリバリ機械感丸出しの飛空艇や車が出ているというのに、この世界では主な移動手段がいまだに馬車であることからどれだけ文明が発達していないかわかる、

つまりこの世界では戦国時代よろしく、暴力に溢れているということだ、自衛のためにも体を鍛えるのは当然なことだろう、

まあ、贅沢を言えば強くなって、職務質問されない方の冒険者やらになって金を荒稼ぎしたい

もちろん稼いだ金でじいさんに楽な暮らしをさせてやりたいからだ、便利な都会に移り住んで、のんびりセラブレライフつてのをさせてやりたい。

○2年×月ニク日

前世を思い出してから早いもので一年も経ってしまった、あれから日々身体を鍛えたり家事をしたりベルを愛でまくったりして過ごしていたわけだが、この生活サイクルを続けて1年以上経ってから筋トレ中に自分の体の回りに何か、こう、モワツとした何かが纏わりついていることに気付いた、

最初は運動後の熱放射と周りの気温差で体から湯気でも出ているのかと思ったが、どうも違うようだ

そこで俺は気付いたわけだ、これは、まさか、忍者的に言う所の(気)

という奴ではないのかと

もしそうなら全男子の憧れの一つである水上走りや壁走りができるのでは!?

さっすが異世界!

そう思った俺はその日の内に早速、近くの小川へ向かった

結果

普通に川に沈んだ、水に対して微塵も反発する気配がない

ちくしょーそれなら壁走りはどうだおらああああ、と木に向かって蹴りを放つように脚をかけて見たら

足裏で踏みつけた部分の木がベキリととんでもない音と共に陥没した

当然俺の足は木に埋まり、そのまま逆さ吊りの状態になって頭部を強打

痛みへのたうち回った後になんとか四苦八苦して木から抜け出すことに成功、

その後、改めてこのモヤつとした^{チャクラ}〈気〉(仮)について考える

おかしい、木が陥没するくらいの^{チャクラ}〈気〉が練れているのなら水の上に立つか反発力くらい感じてでもいいはずだ、つまり……

……どゆこと?

いや、俺はアホではない、はず

もちつと発想を柔軟にするんだ

このモワつと、というかどちらかと言うとネチヨつとしてる俺の^{チャクラ}〈気〉(仮)

もしかしなくともそもそも^{チャクラ}〈気〉じやないのか?

これに似たような力つて他の漫画で……あつた、あつたあつた、そーだわ、何で思いつかなかったのか

あまりに作者が仕事をせず、スツカリ雑誌からご無沙汰になってしまったせいですっかり忘れていた

たぶん、これ〈念〉だ。

○2年×月ニクニク日

〈念〉、人気コミックであるHUNTER×HUNTERで今では必須とも呼べる能力の総称

人が本来なら無意識に垂れ流している生命力を自身の意思で支配し操る秘技だ。

つてことは——だ。

〈念〉、俺の容姿、白髪、そして俺の今世でのカイトという名前——
——決定的だ。

どうやら、俺はHUNTER×HUNTERの主人公の恩人にしてハンターを目指すきっかけになった男——、カイトの身体を持って転生したようだ

そうか、カイトかー……ヤバくないか？

えっだって、主人公と再会後にすぐに片腕と首がなくなってから性転換しちゃった人だよ？

もしかして、今世でも同じ目に遭うんじゃない、いや、早計は良くない、この世界はそもそもHUNTER×HUNTERの世界とも異なっている感じだ、証拠に一般人にまで魔法の存在とか知れ渡ってるし、あの世界はこの世界よりも遙かに、下手をしたら俺の居た地球より文明が先を行っているかもしれない世界観だったはず。

今居る世界の文明はどう見積もっても中世といった感じだ

だが、この身体がカイトと同一もしくは似ているだけだとしても同じ運命を辿ることになるかもしれない

それを回避するためにもこれまで以上に訓練に励まねば、とりあえず念の基本四大行の内の、纏てん、絶ぜつ、練れんを基本に今後訓練をしていこう
ちなみに

纏てんは体内の精孔と呼ばれる気穴からあふれ出ているオーラを肉体の

周りにとどめる技術。

絶^{ぜつ} は纏の真逆、体内の精孔を閉じてオーラを絶つ技術で気配を消したり極度の疲労を癒すときなどに効果がある、注意点としては防衛力が紙装甲並に脆くなることだろうか

練^{れん}は体内の精孔を広げ纏の状態よりも多くオーラを生み出す技術だ

わかりにくければ纏で通常のサイヤ人に、練が界王拳、絶がヤムチャになると覚えてくれ

まあ、念を発動させる「纏」はできてるっぽいので残りのヤムチャと界王拳を集中的にやっつけていくとしよう

他の応用はもつと〈念〉の扱いに慣れてからだな

○3年×月トリコ日

念に気づいてから、一年たった。

毎日の訓練で何故かオーラを出さないようにする「絶」だけはかなり上達した、おかげで森の野鳥とかを楽に狩ることができるようになった、毎日の食卓に肉が並ぶだけでじいさんもベルも喜んでくれるので嬉しい

逆に「練」の方は微々たる進歩だ、俺の理想的なイメージとしてはスーパーサイヤ人みたいに『ドン！シュインシュイン』みたいな感じでオーラを纏りたいのだがどうも上手くいかない、

一応、量自体は増えているには増えているのだが相変わらずネヴァくとした感じで体にまとわりつくだけだ、ましになったのは持続時間くらいだろう、最初は1分ともたなかつたが1年で1時間くらいには延ばすことができた。

もうちよつとしたら应用到手を出してもいいかもしれない

そんなことを考えていた矢先のことだった、

いつもの日課となった訓練の一つ、練を纏いながら木刀での素振りをしていたら

かわいい我が弟のベルが兄である俺の！かっこよくて頼れる兄である俺の!!ああもうっ、なにそのくawaii顔は!?!とてとて俺の周

りを不思議そうに回らないでええええええ、ああああ今すぐ訓練を止めて、頭を撫でくりまわしてええええええ、ちよっ、こら、首をかしげるんじゃない！これ以上俺の心をピョンピョンさせてどうするつもりだ？！

と、まあ俺の心中など知らずにベルが俺の訓練をじつと見ていたときのことだった

「？・・・にいちちゃんのまわりがもやもやしてる、なにそれー」

・・・え、オーラが見えてる？

ベル三歳、俺が七歳の春のことだ

《side:べる》

○3年×月はれ日

きようはにいちちゃんにへねん<というのをおしえてもらいました
これができるとすごいのだそうです

ぼくはみえるだけでそのへねん<というのはつかえませんが
でもがんばればつかえるようになるとおしえてもらいました
ぼくはにいちちゃんみたいにつよくなりたいからあしたからにいちちゃんといっしょにがんばります。

○3年×月はれ日

なつになりました。

あれからにいちちゃんといっしょにがんばってへねん<がつかえるようになりました

にいちちゃんはてんさいじやてんさいじやとおじいちちゃんみたいなことばでよろこんでます

でもにいちちゃんにくらべるともやもやのおおきさがぜんぜんちが

います

もやもやはたくさんだせるとすごいじゃなくてすんごいんだそうです

はやくにいちちゃんみたいにたくさんだせるようになりたいです。

○4年×月はーれー日

にいちちゃんにおしえてもらった『ぜつ』がぜんぜんできません

でも『れん』といういっぱいもやもやだすのはちよつとだけできませんでした

そしたらまたにいちちゃんがてんさいじやてんさいじやとおじいちちゃんみたいなことばでよろこんでます

『ぜつ』がぜんぜんできないのでーやつたらできるのかにいちちゃんにきいたらかくれんぼをすることになりました

『ぜつ』ができました

やつぱりにいちちゃんはすごいです、にいちちゃんというとおりにしたらすぐにできました

でもあいかわらずにいちちゃんはてんさいじやてんさいじやと――

○5年×月はーれー日

さいきんはおじいちちゃんのとちのおばちゃんがいっぱいきます

ほかにもさいきんはほんもののぼうけんしゃのアスフイさんがいえにあそびにきてくれます

とかいのおはなしやほんとうのぼうけんのはなしはとてもおもしろいです

にいちちゃんはしょうらいぼうけんしゃになるそうです

にいちちゃんならぜつたいにつよいぼうけんしゃ、えいゆうになれるといったら

にいちちゃんはほくならもつとすごいだいえいゆうになれるといつてくれました

でもぜんぜんにいちちゃんよりつよくないから、がんばってはやくに
いちちゃんみたいにつよくなりたいなあ

○6年×月ぎつぷる日

さいきんはあすふいねーちちゃんとあそぶことがおおいです
あそんだあとにいちちゃんのすきなものやほしがってるものをよ
くきかれます

そーいえばもうちよつとでいちちゃんのたんじょうびです
もしかしたらなにかふれぜんとをかながえてるのかもしれない
なのでいちちゃんがぼうしをほしがっていることをおしえてあげ
ました

ぼくは木で作ったてづくりのねつくれすをあげようとおもいます

○6年×月ぎつぷりや日

だんじょうびのひからにーちちゃんとあすふいねーちちゃんのように
がおかしいです

かおをあわせるとふたりともかおがまっかになります

おじいちゃんはそれを見てわらっていますかふたりはけんかでも
したのかな？

おじいちゃんにきいたらいずれわかる、とだけいわれました
にーちちゃんみたいにつよくなったらわかるかなあ

よし、きょうもくんれんがんばります。

○7年×月泣き笑い日

今日、兄さんがオラリオに旅立ちました

さすがの兄さんも少し寂しかったのかちよつと悲しそうな顔をし
ていました

でもおじいちゃんに元気づけられて笑顔で馬車に乗り込んでいけ
ました

僕はおじいちゃんがいるからこの村でしばらく修行しつつ過ごそ
うと思います

おじいちゃんは将来行きたければベルも行っていいぞ、と言っていますがおじいちゃんを一人残してはいけません

それに兄さんの足下にも及ばない僕の念程度で冒険者なれるとは思えないから、もしなるのならもっと修行して強くなってから兄さんを追いかけようと思います。

さて、それじゃ日課の岩割りをやるとしましょう。

オラリオ到来！

03：幼女×劍姫

村から旅立ち馬車に揺られること数日

普通なら間違いなく尻が痛くなるだろうが、そこは便利な念能力者『凝』という体の一部にオーラを集中させる技を応用して尻にオーラ座布団をまとうことで退屈だが比較的快適な旅を過ごすことができた

暇つぶしに『流』というオーラを大体の分量で各部位に配分する練習をするだけで意外と暇を潰す事が出来た

俺の尻も守れて念の練習もできて一石二鳥である。

ちなみにこれをさらに高度な技に昇華させると『硬』になる、本来の『硬』は集めた部分以外には一切のオーラが出ない状態を指すが、同じ念能力者が今の俺を見たら、尻を中心に全身からローションを垂れ流す未熟者だ、俺の今の実力で完璧な『硬』を使用するにはまだまだ修行不足だ

『硬』は念の基本技を4つ同時発動させ、体中のオーラをすべてを体の一部に集める複合高等技術だ、ゴンさんはこれをほぼ一発で成功させていたが、俺は数年かかってようやく形になっているかな？といったレベルだ、さすがゴンさん、天才すぎる。

俺に念の才能がないわけではないと思うのだが俺のオーラは何故かドロドロしてる上に妙に圧縮しにくいせいで制御が非常に難しい、ここまでオーラの制御訓練のみを集中的に行うことはなかったため旅の間は意外と有意義な時間を過ごせたと思う。

そんなことをしていると御者のおっちゃんが声を掛けてきた
「おーい坊主、見えてきたぞ」

ようやくか、そう思っただけで馬車の幌から顔を出すと、かなりの距離があるにも関わらずその巨大さがわかる街壁が見えてきた

「おー、あれがオラリオ、世界の中心都市と謂われる街かあ」

ヘルメスとアスファイから聞いてはいたが、マジででっけいなあ

巨人が進撃してきても大丈夫なくらいの広さと高さがある

「坊主、オラリオは初めてかい？」

「ええ、というより村から出る事が初めてかな」

「はっはっはっはっは！それなら驚いただろうな」

「他の街もあんなにすごい壁が？」

「いやいや、一応他の街もそれなりの壁があるがここまでの街壁は世界でもここだけだよ、それを最初に見れた坊主はラッキーだな、村からって事は・・・坊主の目的は出稼ぎかい？」

世間知らずが冒険者を目指しにきたとはなんか言い出しにくい

「・・・ええ、まあ、似たようなもんですかね」

「そうかい、ただ最近のオラリオは物騒だから気を付けないといけな
いよっ。」

「話には聞いていますけどそんなに酷いんですか？」

「ああ、元々はそこまでじゃなかったんだけどねえ・・・」

そんな風に意外と気の良いおっちゃんとうちやんと適当な会話をしながらも馬車はオラリオに向かって進んでいった

その後、特に何のトラブルもなく検閲を終えて街に入ることができた

「お、おおう、この人混み前世以来のなつかしさ」

右を見ても左を見ても人、人、人、前世ならいざ知らず今世では見ることのなかった光景だ

「まあ、あそこは村だし、当たり前か」

この人混みのせいで村の穏やかな光景が、というかベルが恋しい・・・あとじいちゃんも。

ま、この数年で当初より色々と目的が増えたため村に帰るわけには
いかない

「まずは、ヘルメスがお勧めしてくれたファミリアから行ってみます
かね・・・大丈夫かなあいつのお勧めって」

悲しいかな、田舎者の俺にはオラリオにコネなどなく、あの胡散臭

は書きたくない、なんで全て手書きじゃないと駄目なんだあああ！

——問。

orz・・・マジかー、全部入団拒否された、一部OKそうなどころがあつたが、最後に言われた採用条件が怪しすぎたのでこちらからお断りさせてもたつた、さすがに何でもは無理だ、ナニをされるかわからん。

俺が入りたいのはダンジョンの探索をメインとするファミリアなのだが、このひよろつとした見た目と年齢のせいで中々採用してくれるファミリアがない

ちつくしよー覚えとけよ、いつか有名になつて勧誘されてもお前らの所だけは絶対受けねえ、とりあえず拒否られたファミリアはメモつとこ、俺は結構根に持つタイプなのだ

しかし、本当にどうしようかな、さすがにどこにも受かりませんでしたー、コネでヘルメスファミリアに入れてくれませんかねえ、うえつへつへつへと、ゴマを擦れたら楽なのだが、男のプライドに掛けてそんなかつこ悪いとこアスファイに見せられない、

ヘルメスにお勧めされたファミリアは全滅、となると直接自分で探すしかないか・・・

なんか業績の上がない企業戦士サラリーマンの気分だ

——三日後。

見つかんねええええええ！

もう、ヘルメスんところに入れてもらおうかな・・・

・・・は？

男のプライドはどーしたかつて？

なにそれ、おいしいの？

プライドじゃお腹は膨れねえんだよ！

路銀がもう尽きそうなんだよ!!

しかも泊まった宿に帰ってきたら闇派閥とか言う奴らに宿部屋ごと爆破されちゃったYO!!

幸いにも? 荷物は瓦礫の中から救出できたが・・・オラリオ治安悪すぎ!!

さすが世界の中心都市だね☆クソがつ!!

・・・はあ、とりあえず入れるファミリア見つけるまでバイトでもするか。

あ、ちなみにヘルメスを訪ねたらアスファイ共々留守だった

胡麻すら播れない、都会って怖い。

1ヶ月後。

そこは街中であるはずだ、だがその一角だけ今は静寂に包まれていた

「……………いくぞ」

その中心に居る男が小さな声で呟いた瞬間

手に持っていたジャガイモを中に放り投げる!

「シャシャシャシャシャシャアアアアアアア!!!」

一瞬でジャガイモだったものは小さく切り裂かれていく

「・・・っおばちゃん!!」

「あいよおおおー!」

かけ声と共に女性が所定の位置にボウルを持って立つ、するとそこに吸い込まれるように切り裂かれたジャガイモだったものが投入されていく

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ」

細かくなつたジャガイモを残像すら残るスピードで潰しつつ調味料を投入し混ぜる、その間、僅か5秒フラット!

「シヨオアアアアアアアアアア!!」

次におばちゃんと共に潰したジャガイモをもはや多重影分身のレベルで一口大に丸めていくこれは10秒フラット!

「せいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせいせい!!」

それをすかさず男は高温の油に投入していく、しかし驚くべき事に勢いよく入れているはずの油は一滴として周りに飛び散ることはなくノースプラッシュで揚げられていき、そして終に!

「完・成!!」

「!!」おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おお!!」

それを見ていた周囲から惜しみない拍手喝采がスコールの如く降り注ぐ

人を魅せる、しかし無駄のない動きで無駄に盛大に『じゃが丸くん』を作る充実した顔の男がいた。

・・・っっていうか俺だった。

「まいどーまたいらっしやいませー。」

どーも、お久しぶりです、意気揚々と村を出てから早いもので一月が経ちました、今では立派な一人のじゃが丸職人やっています

俺の大道芸じみた調理を見ていた人々が笑顔で次々とじゃが丸く
んを買っていつてくれるおかげで売り上げは上々です

最近のオラリオは物騒すぎて人々の笑顔が少なくなってきた
が、俺の大道芸で少しでも笑顔が戻ってきてくれるのは喜ぶべきこ
とだ

うん、それはいい、それはいいんだが・・・

・・・何やってんだ俺。

もう一度言おう、何やってんだ俺!!

あれから、バイトを募集していた「じゃが丸くん」を屋台売りして
いるおぼちゃんに何とか雇ってもらえたまではいいのだが、そこから
「じゃが丸くん」作りにちよつと熱が入りすぎた、一応買いに来てくれ
る客にそれとなくファミリアの情報とか聞くのだが、あまりいい情報
はない。

「いやーカイトのおかげで今日も完売!ここんとこ売り上げが上がっ
てきて助かるよ、まあちよつと忙しすぎるのが難点だけどね」

「ははは、すみません」

「ばーか、謝らなくていいんだよ、お前さんのおかげで新しい『じゃが
丸くん道』に目覚めたからね」

なんですか『じゃが丸くん道』って、あきらかにそんな道走っていつ
たら「スーパースイズミー」みたいな末路にまっしぐらじゃねーか

「それより、良いファミリアは見つかったのかい?」

「いや、それが全然ですねー・・・」

「・・・まあ、店主としてはあんたみたいな売れっ子看板が居てくれる
分には何も文句ないからいいけどさ、・・・いつそのことこの店に永久
就職でもしてみるかい?」

「最近はそれ、洒落じゃないレベルで頭をよぎるんで勘弁してくださ
い」

惚れた女が魔物と戦っている一方で男の方はじゃが丸くん作って
ますとか、かつこ悪すぎる、マジで勘弁してくれ・・・あれ、待

てよ？

・・・今まさにこの状況がそうなんじゃね？

いやいやいやいや、違うから、まだ俺はスタートしてないだけだから、ノーカンだよノーカン!!

そんな風に屋台の片づけをしながらあばちゃん(店長)と談笑しつつ自らの境遇に絶望しかけていた所に、息を切らして一人の女の子が店に向かって猛スピードで走ってきた

腰に届きそうな長い金髪を垂らした、かわいい少女だ

ただ、そんなかわいらしい少女が猛ダツシユしてくる、しかも無表情で

その様は「※ヒソカ」みたいな注意書きが必要なくらいには恐い、軽くホラーだ。

しかし、今では慣れたので特にビビることもない

「おー、今日も来たのか」

実はこの子、最近毎日ここにじゃが丸くんを大量に買いに来てその場でそれを全て食べ尽くすプチ常連さんだ

あの小さな体のどこに大量のじゃが丸くんが消えているのか、世の中不思議で一杯である

「う、うん、あ、あの・・・もしかして今日の分のじゃが丸くんは」

「わりい、売り切れちまった」

「あう・・・」

ガーンと音が聞こえてくるくらいにショックを受けている

いつも無表情の娘がここまでショックを受けているのを見ると罪悪感が半端ないな

うーむ、どうにかしてやりたいが材料がなければどうにもできんなー・・・あ、そうだ。

ナイスなアイデアと共に電球が頭に浮かぶ

「おばちゃん、今日はもう上がっても大丈夫？」

「いいよいいよ、あとは荷物まとめるだけだし・・・常連さんに接待

してやんな」

わあお、俺の考えてることばれてーら、さすが店長

ならば善は急げだ

「嬢ちゃん、今から時間ある？」

「?・・・大丈夫ですけど」

「うっし!じゃあ店長にも言われたので常連さんにサービスだ、嬢ちゃんさえよければ、材料買ってどつかでじゃが丸くんを作っとう」

「!!!」

暗かった顔がみるみるうちに明るくなった

「ほんと!?ほんとにほんと!?」

「ああ、男に二言はない・・・ないんだが材料は買えばいいとして問題は調理する場所なんだ、嬢ちゃんどつかいい場所知らないか？」

「知ってる!」

「よっしや、じゃあ材料買ってそこで調理といこう、まだ店に並んだことのない新作じゃが丸くんを試食させてやろう」

「し、新作!は、はやく!はやく材料買おう、はやく!」

「おわっ、ちよっ引っ張るなって、力ちからつよくね!」

そのまま引きずり回されるよう様にして市場で買い物を済ますと、嬢ちゃんの知るじゃが丸くんを調理できる場所とやらまでやって来た

・・・来たんだが目の中の建物に呆気にとられる

「・・・なんだこの建物」

何と言えればいいのか、そこそこの敷地に本来なら広大な城と塔をぎゅうぎゅうにくっつけてあちこちにサゼエさんハウスをはめ込んだような、まさに混沌カオスと呼ぶにふさわしい建築物だ

しかも一応お城という体裁のつもりか、いっちょ前にきちんと門番までいるし

「あ、おかえり!アイズ!」

「た、ただいま、です。」

「ん、後ろの人はどちら様？部外者を入れるわけにはいかないんだが」「えつと、この人は・・・」

なんかいきなり雲行きが怪しくなってきた、せつかく材料まで買ったのに作れませんでしたー、という展開だけは回避したいところだ

ここはお得意の口車でどうにかすんべ

「・・・どーも料理人^{シェフ}です、今日はお嬢さんや他の方々に出来たての料理を食べていただくように上の方(店长)に言われてやってきました」「え、そうなの？こんな小さい子が調理人？」

忘れてるかもしれないが俺の年齢は12歳、見た目は成長期に入るか入らないかくらいの子供だ、門番が怪しむのも当然だ

確認を取るように門番がお嬢ちゃんを見る、その際に口裏を合わせるよう軽くウインクしておく

「えつと、はい、今日は料理人さんに直接来て作ってもらうことに」

「いやあ門番さんも大変ですねー、料理ができたらあとでお裾分け持ってくるんで楽しみにしてください」

「おお！助かる！いやあ、門番って退屈でしかたがないんだが褒美があると思えばがんばれるな！」

「ご期待に添えられるように頑張りますねー」

ははははは、とお互い笑ってから、隣でボーとしているお嬢ちゃん、アイズと一緒に城に入る

先に行くアイズの後について廊下を歩いて行く俺

「・・・だ、大丈夫なんだろうかこれ、自分でやっというのだが不法

侵入とかにならないだろうな、いや大丈夫のはず、なんとたってこっちはここの身内(のはず)のアイズがいるのだ、最悪の事態だけは避けられるはずだ

「着いた、ここが調理場」

考え事をしていたらいつのまにか調理場まで来ていた
って、おお、めっちゃ広い！すげえな、ほとんどの調理器具がそろつ
てる

確かにこれなら思う存分調理できそうだ、

・・・ただその前に、ちよつと気になることができた

「お嬢ちゃんの名前はアイズ、で合ってるよな？」

「うん」

「アイズ・ヴァレンシユタイン？」

「うん」

「・・・マジかよ」

マジかよ、田舎から来たばかりの俺でもその名前は知っている

わずか8歳、しかも所要期間1年で冒険者L.V. 2になった最年少
かつ最速ランクアップの世界記録ワールドレコーダー保持者

オラリオに存在する無数のファミリアの中でも最大手のファミリアであるロキ・ファミリアに所属する『剣姫』という二つ名持ちの真正銘の天才、ここ最近はその話題で街中が賑わっていたが、まさかこの子のことだとは・・・

ということはつまり、だ

このヘンテコな建物は当然ロキ・ファミリアの拠点つてことか

ハア、こんな俺より4つも年下の子ですら冒険者に、それも大手のファミリアの団員として冒険者になれているのに、俺はじゃが丸職人か、グスン

・・・悲しくなってくるので深く考えるのは止めておこう

じゃが丸、そう俺にはじゃが丸があるのだ、剣姫でさえ首を垂れる
じゃが丸が!!

べ、別に悔しくなんてないんだからね!

「うっし、じゃあ早速作るか!早く食うためにも手伝ってくれよ、剣姫
?」

「うん、まかせて、でも何で泣いてるの?」

ほっといてください心の汗です。

そして現在、目の前にうず高く積まれたじやが丸くんをハムスターの様に、しかしダイソンよりも衰えない吸引力で一心不乱に食すアイズがいた

調理は結局、俺が一人で全部やった、この子に料理をさせてはいけない、じやがいもと一緒に台座ごとぶった切るような不器用さだ、俺の方から早々に戦力外通告をさせてもらった。

「はあ、しっかしまあ・・・」

「・・・？」

「うまそうに食べるもんだねえ」

「じやが丸くんは最高、あなたのじやが丸は至高」

「なはは、うれしいこと言ってくれるねえ、ほれ気にせず好きだけ食べ」

そう言うと黙々と食事を再開する

(こんなに嬉しそうに食べてくれるなら世界一の料理人を目指すのもありかもなー、アスフィごめんなー俺ってば主夫になるかもしれない) そんな悲観的ではあるけど精一杯ポジティブに未来を考えている

所に声が掛かった

「よう、坊主、家のファミリアに入らへんか？」

何か糸目の女性？からの突然の勧誘だった。

04：劍姫×殺芋

《side…あいず》

○6年X月つよい日

きょうもダンジョンにいつてきた
だけどまだまだ私は弱い

もつと強くならないと、
もつと強く

もつともつともつともつともつともつともつともつともつ
ともつともつともつともつともつともつともつともつともつ
ともつともつともつともつともつともつともつともつともつ
ともつともつともつともつともつともつともつともつともつ

○6年X月つよ日

足りない足りないぜんぜん足りない、はやく！

もつとはやくつよく！
足りない足りない！

もつと敵を、わたしが強くなるための敵をもつと！

○6年X月つ日

ロキとフィン達にダンジョンへ行くことを二日も禁止された
なんでじゃまをするの？

わたしは、わたしはつよくならないといけないのに

○6年X月つよ日

訓練も禁止された

リヴェリアに何のための休暇だと怒られた

わたしのじゃまをしないでほしい

ロキに無理矢理連れられて外で食事を取るようになった
余計なことをしないでほしいと思っただが、そこで初めてじゃが丸く
んという食べ物を食べた

これは うまい!!

じゃが丸くんをたくさん食べた!

ロキが財布を見ながら泣いていたが、今日は好きなだけおごった
でーとか言っていたので遠慮しない

もつとじゃが丸くんをロキにせがんだら財布ごと店主に渡してい
た

初めてロキが偉い神様に見えた。

○6年X月つよわ日

ようやく今日からダンジョンに潜ることができる

モンスターを倒してもつと今よりもつと強くなる

今日は朝からすぐく体の調子がいい休んだおかげだと思っ

○7年X月つよ日

Lv. 2になった

大変だったけど、色々大切なことに気付けた

私はこれから変わるだろうか

○7年X月つよわ日

Lv. 2になってまたダンジョンに潜るようになって三日ほどたっ
た

なんだが調子が出ない
どうしてだろう。

○7年X月よわい日

原因がわかった

じゃが丸くんだった

じゃが丸くんを食べてからダンジョンに潜ったら最高に気分がいい状態でしかもいつもより多くのモンスターを倒すことができた
さすがじゃが丸くん、なんてすごい食べ物なのだろうか
今度からじゃが丸くんを食べるのを私の日課にしよう。

○7年X月 ■ ■ ■ 日

敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸
丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸
丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸
丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸
丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸
丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸
丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸敵殺じゃが丸

○7年X月気づいた日

ここ最近、体の調子がすごい良い

やはりじゃが丸くんはすごい

しかも先日、最高にハイなじゃが丸くんを売っている露店を見つけた

いくら食べても飽きない

ここのじゃが丸くんを食べるために最近朝日が昇る前からダンジョンに潜り、昼過ぎには探索を終えるようにしている

フィン達からは今のよう生活サイクルを続けるように言われた

早く強くなりたいけど、じゃが丸くんがないと私は弱体化するよう
になってしまったようだからしかたない、しかたないっいたらしかたな
い。

○7年X月ふぃーばー日

ああ、なんてことだろう

ここのじゃが丸くんはおいしい

だからしかたないのかもしれない

でも急いでダンジョンから戻ってきたのに今日の分がぜんぶ売り
切れだなんて、神はわたしを見捨てたのかもしれない

帰ったらロキをとりあえず絞めよう

そう思っていたら、わたしより少し年上でいつも至高のじゃが丸く
んを調理している男の子がわざわざ材料を買って作ってくれるとの
ことだ

しかもわたしが買った材料の分だけじゃが丸くんを作ってくれる
と言ってくれた

おお、神はわたしを見捨てたりしてはいなかった

ロキに今度すこしやさしくしてあげようと思えた。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

《side…ロキ》

○6年X月黒潮日

うちは女神ロキ、泣く子も黙る天界の奇術師トリックスターや！

天界むこうはヒマでヒマでしようがないからあちこちに喧嘩ふっかけて暴
れ回ってたんやけど、いやー地上こっちは楽しいことも一杯、かわいい子供
達も一杯と、まるで果てまで続く豪華料理のフルコースが並ぶかのよ

うで飽きることがなくてもう最高や！

でもなー、最近ちよーつと悩み事があんねん

うちファミリアの中でも特にお気に入りの子にアイズって子がおるんやけど、

この子は自分の限界超えてもダンジョンに潜ってモンスターと闘い続けて、今までも何度も死にかけたりしてるんよ

最近は何にひどくなってきてんねん

ダンジョンに言って傷だらけになって帰ってきて、風呂と飯食って寝たと思ったら次の日の午前中から夜までダンジョンに潜りっぱなし

こんな生活が長く続くはずない、遠くない未来に必ずどこかで折れる

巷じゃそんなアイズの姿を見て、「人形姫」や「戦姫」なんて読んてる奴もおるらしい

うちのかわいいアイズをそう読んだ奴は絶対にとっちめたるけどな

でもそう呼ばれてもしかたないと思えてしまう程に今のアイズは危うい

フィンとリヴェリアとガレスに相談してどないかせんといかんなー

○6年X月白波日

とりあえずフィン達と相談してダンジョンへの行くことを二日禁止させた、これでちつとは体を休めるやろ

朝にアイズを見かけたら庭で剣の素振りをやつとつた

まあ、体が鈍らない程度の訓練は冒険者として必要やからええか、と思つてその場は邪魔しないように部屋に戻つたんやけど

夕方にまたそこを通ると、アイズが庭におつた

しかもまた素振りをしとる

・・・もしかして一日中そこで剣振ってたんか？

他の団員達にアイズを見かけた時間を聞いてみたらどうやら朝からずつとらしいということがわかった

おっふ、アイズたん、堪忍してや〜

ダンジョン禁止させた意味がないやーん

ママーーーーー！ヘルプミーーーーー！！

って言いながらリヴェリアの部屋に突っ込んだら着替え中やった

おっほ、ラツキーすけりあべし!?

リヴェリアに事情を説明する間もなく一時間以上めっちゃ怒られた

○6年X月黄桜日

フィン達との再度の話し合いの結果、うちが無理にでも外に連れ出して気晴らしさせることにした

ふひひひひひ、これで大義名分の元アイズたんといチャイチャデートができるでー

さっそく、アイズを連れ出して遊ぶ前に腹ごしらえしよ思て軽くつまめるもんでも食べるかってことで屋台名物のじゃが丸くんを食べたんやけど

アイズがこれをめっちゃ気に入ったらしい

めずらしくアイズがキラキラした飛びきりの笑顔（妄想）でうちにお願いをしてきた！

ここで子の願いを無下にしては女神の名が廃る！

そう思ったうちは気づけば財布ごと屋台の店長に投げ出していた
ああ・・・あれでソーマの酒を買おう思ってたんやけどなー

しかもアイズたんそのまま日が落ちるまでじゃが丸くんを食べ続けて結局デートができなかったorz

っていうかあれだけの量のじゃが丸くんがどうやってたらこの小さな体に収まるというのか

これも子供達の無限に広がる可能性の一つなんやろかいや、これはアイズ限定やろな。

事に思っているかわかってもらえたからやで!!

抱きつくといつも殴られるけど!

ペロペロしようとするやと切られそうになるけど!

きつと小宇宙コスモ的な何かを感じ取ってくれたんよ!!!

○7年X月赤霧島日

今日も今日とて、うちは新たな酒とかわいい子を見つけにあつま
でえ!!

いやー、アイズたんが無茶なダンジョンアタックせんようになった
おかげで心配事が一つなくなったわー

めっちゃ嬉しいわー

だからお酒に財布の中身全部使ってしまったのもシカタナイワ
アヒヤヒヤヒヤヒヤ

これでアイズたんのかわいい笑顔とか見れた・・・ら?

食堂ですごくうれしそうに何かを食べてるアイズがおった、しかも
とびきりの笑顔付きで

うええええええええええええ!!?

アイズがめっちゃいい笑顔でじゃが丸くん食べとる!?

いや、なんでじゃが丸くんがあないに大量にあるん!?

いやいやいやそんなことよりアイズたん萌ええええええええ!

リスみたいに一心不乱にじゃが丸くんを頬張るアイズたんキヤワ

ワ!!

うつひよー！ー脳内に永久保存やああああ!!

お?坊主ええ所におるなー

今、めっちゃ気分ええねん!

うちのファミリア入ってみんかー?

○7年X月森以蔵日

・・・あつたまイタイ、飲みすぎたみたいや
なんか昨日の記憶が曖昧なんやけど・・・

ん？

なんやこれ

ステイタスの写しやなこれ、

名前は『カイト・クラネル』？

んんんんんん？

そんな奴うちのファミリアに——あー・・・これ昨日うちが酔つた勢いとアイズさんのキャワワな笑顔見てテンションがマックスハートになって身近にいた坊主をそのままの勢いで入団させたんやったなー・・・。

フィン達に何の相談もなく入れてもうたけど大丈夫かなー・・・

・・・ん！気にしなーい！

きつと大丈夫やろ、うちの勘がそう言うてる！

そんなポジティブに考えてる自分の肩を誰かがガシツとつかんだ

「ナニガダイジョウブナンダ？」

氷点下も真つ青のリヴェリアの声が・・・っいででででで、肩に指が食い込んでる食い込んでる！

あかん、無理やてこれ、後ろを振り向けんって、これ逃げ——

「コツチヲミロオオオオオオオオオ」
ぎやあああああ堪忍してえええええええええええええええええ

入団試験!

05：期待×疑惑

《side：フィン》

僕は小人族パウラムの「フィン・ディムナ」、ロキファミリア団長を務めている

自他共に認めるオラリオでも数少ないLv. 5の第一級冒険者だ
僕の夢は世界規模での小人族パウラムの復興だ

そのためにもオラリオで最大派閥の片割れでもあるこのロキファミリアの団長という役職は意味のある地位だ

ただ、団長という役職は多忙を極める、特にうちみたいに団員だけではなく主神の癖も強いファミリアの場合は特に。

「それで?」

目の前には副団長でもあるリヴェリアの前で正座をさせられ憔悴しきっている我らが主神ロキの姿

「今度は何をしでかしたんだいロキ?」

聞き出した内容はロキが僕たち幹部に無断で団員を増やしたという内容だった

そこまで重大なポカではなかったことに、とりあえず安堵の息を漏らす

しかし、こんなことが続くとファミリアの人員がすぐにパンクする
それに団員には最大大手ファミリアとしての自覚を持った行動が

常日頃から求められるため、よほどの実力者でもない限り入団試験と面接を行うようにしている

今回ロキが入団させたのは村から出てきたばかりの屋台でバイトしている少年とのことだ

・・・これはまた微妙に困った問題だ

現在の団員は他のファミリアから改宗^{コンバージョン}してきた第三級以上の実力者が厳しい試験と面接を経て入団してきた者たちが多い

そんな彼らはロキファミリアに入団できたことを誇りに思っている

そこに実力もなく試験も受けていない者が主神の鶴の一声で入団してきたとなったらどうなるか・・・胃が痛くなりそうだ

それでも既に恩恵^{フェアルナ}を刻んだ紛れもない家族だ

団長として皆に当たり障りないように説明しなければならない、そう言うとう

「いや、その必要はないかもしれんで」

正座のままロキがあっけらかんと言いながらポケットから取り出した紙をリヴェリアに渡す

「・・・なんだ」

「ええから見てみい」

「・・・ふむ・・・ほう、スキルか・・・これは・・・」

それに目を通したリヴェリアの目付きが何かに気付いたように見開かれる

「・・・なるほど、確かにこれなら皆も納得するだろう、ロキよ、これも神の勘というやつか？それともわかっていて恩恵^{フェアルナ}を刻んだのか？」

「いや、どうやらなー、昨日はけっこう飲んでたせいで泥酔状態やったし無意識のうちに勘が囁いたかもしれないけど、それに気付いたのもリヴェリアの説教が落ち着いてからでな、気づいたときは驚いたで、なにせ最初からスキルが発現してるなんて滅多にないからなー」

ニシシシと笑いながら柵からぼた餅つてあるんやなくとロキがつぶやく

2人が見たのはおそらくその少年のステイタスの写しだろう、この

2人が驚くほどのスキルに興味が湧く

「リヴェリア、僕にもそれを見せてもらってもいいかい」

そう言ってリヴェリアから受け取ったステイタスの写しには彼の
名前と初期のステイタス

通常の恩恵を刻んだばかりの者であればここまでだ、

だが『カイト・クラネル』の場合はそこからさらに下のスキル欄に
さらに追記があった

~~~~~

カイト・クラネル L.V. 1

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

俊敏：I 0

魔力：I 0

アビリティ

【

魔法

】

スキル

【念能力】

・ 魔力を身体能力へ能動的に上乗せできる、熟練度次第で効果は倍  
増する。

・  
・  
・

~~~~~  
そのスキル説明を読んですぐには気付かなかった、だがそれに気付いた瞬間、僕も目を見開いて驚きを禁じ得ずにいた

このスキルと似たような効果は存在する

身近な例を挙げればアイズが使う【付与魔法】が一番近い、あの子の場合風を武器や自身に纏わせることで攻撃力や身体能力を底上げすることができる

実際カイトの【念能力】も似たような効果だ、属性付与がない分他人には劣っている様にも感じることだろう、だが注目すべきはそこじゃない、本当に注目すべきはこれが【魔法】ではなく【スキル】であるということだ

【魔法】というのは発動させるために魔力を練りつつ呪文を詠唱しなければならぬ、これは絶対であり例外はない、さらにそれが強力であればあるほど詠唱時間と必要な魔力はねずみ算式に膨れあがる

だが、これが【魔法】ではなく【スキル】であった場合、それが必要でなくなる

冒険者というのは一瞬の選択ミスが死に直結する、その中で魔法と同じ効果を詠唱なしでスキルとして発動できるというのは破格の能力だ

「これは・・・確かに皆の説得は必要ないみたいだね」

それどころか彼が成長すればロキファミリア最強の近接戦闘士アタッカーにもなりうる

そこでロキが小さい声で笑い始める

「2人とも気付いとらんの？」

「魔法ではなくスキルとして付与魔法が使える以外に何かあるのか？」

「教えたから正座止めてもええかな」

リヴェリアに目線で合図する、確かに勝手に団員を増やしたのは良くはないが、今回はそれが悪くない結果として残ったのでこちら辺で勘弁してあげてもいいだろう、説教はリヴェリアがたっぷりとしてく

れたようだし

「…いいだろう、それで私とフィンが気付いていないこととは何だ」
あだだだだ、足がシビれる〜と言いなながら立ち上がりつつロキがとびきりの悪戯顔で僕の持っているステイタスの写し紙を指し示す

「スキルの念能力の欄をもちつとよく見てみい、まるでこれから何か
が追加されるような空欄があるで」

そう言われて改めて紙を見ると、確かに「スキル」の欄に明らかに
不自然な空欄が目立つ、これはつまり——

「スキルそのものが成長する可能性があるか、もしくは——」

「本来のスキルの一部のみが発現している、か…ありえるのか？」
「ありえるんやろうなく、くー…!!これやから下界は止められ
ん!!^{うちら}神達もわからん未知の可能性!!いつだつて^{うちら}神達を興奮させるの
は子供達やで!!」

その未知に狂気すら孕んで喜びを表すロキ

「ロキ、とりあえず落ち着いて、それよりもこれだけ希少な能力なら誰
かを直接指導につけた方がいいね」

「スキルといえど魔力を使用するなら私の方でも指導は可能だが、ど
うする？」

そんな風にリヴェリアと今後の彼の指導について話していると

突然の乱入者が現れた

「ならば、あやつの面倒は儂に任せてもらおうか!!」

そう言って扉を勢いよく開けて入ってきたのは最後のロキファミ
リアの幹部ガレスだった

しかもなにやら大分機嫌が良い、ただ気になるのは右目に包帯を巻
いていることだろうか

これはもしかして件の彼と何かあったかな？

それにしても、先ほど背中エンブレムを見せてもらったときに坊主の体付きも見ることになったが、年齢の割にかなり鍛えられていた
どれ、今の段階でどの程度見込みがあるか軽く試してみるか

ついでに今まで何をしていたのかと聞いてみると、一月程前にオウリオに初めて来てからは屋台でバイト、その前は村で祖父と弟の3人で畑を耕しつつ冒険者になるために体を鍛えていたということらしい

実戦経験は偶に森に現れたゴブリンを数匹討伐したくらいのことだが、恩恵を刻んでいない状態の子供がゴブリンを討伐していたというのは驚くべき事だ

・・・ふむ、ロキの気まぐれにしてはこの坊主、当たりかもしれない

|||||

《side：貧乳リヴェリア》

私はエルフの「リヴェリア・リヨス・アールヴ」、ロキファミリアの副団長だ・・・なんとなくだが今笑った奴に災いあれ

今回はまた主神であるロキが厄介事を起こした

つい最近、新たに団員を増やしたばかりだというのにファミリアの幹部に無断で団員を一人増やしたという

恩恵を与える代わりに神々が好き放題に生きるのは神代の時代が始まってから人が背負うべき対価ではある

だが、仕方がないとは言ってもこうまで次々と問題が起これると頭を抱えたくなる

不幸中の幸いなのは今回ロキが入団させた少年が希少なスキルに目覚めているということだ

これならば多少特別扱いということが入団させても他の者に説明しやすしいし、その子に対するやつかみも少なくてすむだろう

それにどうやらこの子のスキルは魔力を鍛えればそのまま他のステータスの底上げに繋がる能力だ、多少であれば私が指導することも

できるだろう、そう考えてフィンと話し合っている所に横槍が入った

「ならば、あやつの面倒は儂に任せてもらおうか!!」

ガレス・ランドロック、私やフィンと同じく、ロキファミリアの最古参にして幹部の一人だ

昔はよくこいつとは気が合わずに喧嘩したが、今では気心の知れた仲となった

そんなこいつが随分と嬉しそうに部屋に入るなりカイトの直接指導員になると言ってきた

ただ少し気になるのは頑丈さでは右に出る者のいないこいつが右目に包帯を巻いていることだろうか

カイトとは間違いなく何かがあったんだろう、酒と相撲や力比べの好きなこいつが気に入るとなると、模擬戦か何かでもしたのだろうかだが、その右目は何だ、まさかカイトが付けた傷なわけではあるまい

「ガレス、遅刻だよ」

「おお、すまんすまん、ちよつと意気のない坊主の相手をしとつたら思いのほか時間を忘れてしまったわい」

「その意気のない坊主というのはカイトのことか?」

「おう、そうじゃ、そのカイトじゃ! あやつ見所があるぞ、わしに育てさせてくれ」

ガレスがここまで入れ込むとは、どうやら思っていた以上にカイトという子は優秀なのかもしれない

そうやって三者三様で思惑に入ろうとしたとき、パンパンと手を叩いてロキが注目を集める

「とりあえず、カイトの情報を共有しよか、まずうちらの方から、その後ガレスがカイトと何があったか」

私達がカイトのスキルとその特殊性について説明するとガレスは納得した様に相づちを打った

「なるほど、どうりでLv. 1であの動きというわけか、それに成長する可能性のあるスキルか・・・なるほど」

「なんやガレス、やっぱカイトと模擬戦でもやらかしたんか？」

「おう、どの程度の実力か試験代わりに見てやろうと思ったんじやが、多少油断してたとはいえ・・・いいのを一発喰らっちゃったわい」

そう言つて右目に巻いた包帯に触れる

「「っ!」」

その言葉に私だけでなくロキやフィンも呆けた顔になって言葉がなくなる

ありえない、Lv. 5のガレスに昨日恩恵を刻んだばかりのLv. 1が一撃を、しかも負傷を追わせるほどの攻撃を決めた？

バカなという言葉が思わず漏れてしまった、カイトという少年は一体何者なのだ

「・・・ロキ」

「んー、そやな一応、うちの前で軽く面接といこか」

神の前では地上における人々は嘘をつくことができない、さすがにカイトが何者なのか問いたださねば成るまい

最悪の場合、ファミリアに害を為す存在になり得るなら即刻除名もありうる

剣呑なことを考えているとガレスがカイトを庇ってきた

「おいおい、カイトは何か後ろめたいことをしてきた奴じゃないと思うぞ、あの動きは日頃の鍛錬で磨き上げたものだったぞ」

「だとすれば、彼はアイズに並ぶ将来の幹部候補かな？」

「そう思ったからこそ儂が名乗り出たんじやろうが」

「こりや、棚からぼた餅どころか万能薬エリクサーでも降ってきた気分やな」

まったくくだ、だからといって今度から勝手に団員を増やすのは許さないが

「わかつとるがな、今回はちよつとした事故みたいなもんや、まあ転ん

でもただでは起きないのがうちやで〜」

「どうやら、あまり懲りていない様なので正座を一時間再開させてやった、ロキが悲鳴を上げたが知らん、いいかげん反省しろ、次同じ様なことがあったらギザギザの板の上で正座させてやろう・・・」

「まあ、とりあえず、面接はここににいる全員で食事前には行うとしよう」

フィンがそう言ってとりあえずは解散となった

カイト・クラネルか、怪しいところもあるが私も興味が出てきた、午後の面接が楽しみだ。

06：面接×物理 前編

どーもどーもカイトです

世の中何が起きるか分かりませんね

幼女(強)に、じゃが丸くんを作つてあげたら何故か最大大手のファミリアに入団できました

その際の、記念すべき初めての恩恵を刻まれた時の記憶は酒臭い女神にゲロを吐かれながらというものでした・・・最悪です

そのせいで、この女神は前世のアニメでちらりと見た水の駄女神と同類なのではないかと戦々恐々しています

きつと女神は無能でもファミリアのメンバーが非常に優秀なのでしよう

上が駄目だと下が非常に優秀に育つのは異世界でも同じようです

人を導くはずの女神が反面教師つて大丈夫だろうか、そう思っていたときに前世の知識からロキという神は確か悪戯の神様だったなど、ろくでもないことを思い出し今から不安で一杯です

大手だからと大丈夫と根拠もなく浮かれていた昨日の自分に腹パンしてやりたいです

とりあえず昨日は恩恵を刻まれた後、屋台の店長にロキ・ファミリアというビッグ中のビッグなファミリアへ入団できたことを伝えてバイトを辞めることを伝えることにしました

急な辞職の報告に何か言われるかと思つていましたが店長は笑顔でこれから頑張りなど応援してくれたときには涙が出そうになりました、この人本当にええ人や、拾ってくれたせめてもの恩返しに暇なときは口ハで手伝いにくる事を伝えて店長の屋台を後にして一ヶ月世話になった激安宿に帰りました

元々そこまでの荷物があるわけでもないので荷物をまとめて宿から引き払う準備には大して時間がかからなかったです

翌朝、ロキファミアの本拠である「黄昏の館」に向かいました。昨日のうちに門兵には挨拶ついでに約束通りじゃが丸くんを渡し、談笑できる程度には仲良くなったので顔パスで入れた。

入ってからとはとりあえずどこに行きやいいのだろうか、とりあえずそこら辺ウロウロして誰かにゲロキの場所を聞けばいいかなー

最悪門兵の人の所に戻って場所を聞けばいいや、と行き当たりばつたりなことを考えながら館の中に入ろうとしたら――

「おい坊主、ここはファミア関係者以外は基本的に立ち入りを禁じている所なんじゃが？」

そこで化け物みたいなおっさんに声を掛けられた

その存在を自覚し目にした瞬間、全身の毛穴が開いて冷や汗が止まらなくなつた

姿はズンぐりむっくりした典型的なドワーフの姿をしている、これだけなら問題ない、問題は

(なんちゅーオーラ量だよ!?)

そう、今の自分のオーラがただの燃えかすにすら感じられないほどの圧倒的なオーラをその身に宿していることが感じられることだ

やばい、なんか怪しい奴を見る剣呑な雰囲気を感じる、弁解を！

何も悪いことしていないけど早く説明せねばマズイ気がする!!

「えええええつと、一応昨日こちらのファミアに入団した者で、す」
「何じゃと、昨日入団した？」

はい、と答えると確認のために背中中のエンブレムを見せるように言われた、逆らう意味もないので大人しく服を真つ昼間からストリップ、ちよつとだけと言わず上半身全てを脱いで背中中のエンブレムを晒す

「間違いないのう、ロキの奴めまた勝手なことを・・・」

その言葉を聞いて自分の入団は気まぐれなロキの予期せぬ行動で

あつたことが伺えた、

あれ、もしかして俺つてばこのファミリアにとって厄介事になる感じなのか？

第一印象が悪くなるような事態は勘弁願いたい、そんな風に不安を感じていると

「・・・まあ、いいか」

と、思ったより軽い返しをされた

「え、大丈夫なんでしょうか、入団させてもらった身でこう言うのは変かもしれませんが・・・」

「大丈夫じゃないか？・・・儂あまり考えるのは苦手じゃし」

ああ、見た目通りの脳筋系なのね

「それにしても中々いい体をしとるのう、かなり鍛えていると見える、名前は何と言うんじゃ？」

「カイトです、カイト・クラネル」

「そうか、・・・いきなりで悪いがカイトよ少し付き合え」

「え、何ですかいきなり、ていうか、どこに？」

「何、普通とは順序が逆になってしまいが軽い模擬戦形式で一応現時点でのお主の実力を測らせてもらおうと思つての」

（あーなるほど、確かに新人の実力もわからないままでは訓練とかで色々和不都合があるんだろうな）

「ただし、あまりに不出来な結果じゃと即退団になるかもしれないが・・・」

「うええええ!？」

「くつくつく、なので死ぬ気で頑張れ、やる気だけでも見せればどうにかしてやる」

（冗談じゃない！バイト先の店長にもかっこよく送り出されといて翌日に出戻るとか情けなさすぎる！）

「・・・わかりました、未熟者ではありますが死ぬ気で頑張るので一手お相手お願いします」

「お主かったいのー、もうちよつと年相応の話し方の方がかわいい気がするぞ」

「初対面というだけでハードル高いのに、あんな脅しの様なこと言ってきた相手に無茶言わないでください、慣れたらもうちよつと砕けた話方になると思いますけど・・・」

「ま、それもそうじゃの、ほれこつちじゃ、裏に訓練もできる広場がある」

「そう言つて歩き出すおっさん、てか俺あんたの名前聞いてないんだけど」

歩きながらおっさんにこれまでの経緯と出身や年齢を聞かれたので素直に聞かれた内容について話した

そんな風に雑談しながら歩いていると、見えてきたのは結構な広さのある広場の様な庭だった、俺たち以外にも団員がちらほら訓練しているのが見える

なるほど、これだけ広ければ多少は暴れても大丈夫そうだな

「では、お互い少し離れてから開始といこうかの、審判は・・・お、ちようどよい、ラウルお主がやれ」

「へ？」

おっさんが声をかけたのはいかにも、ザ・平凡といった感じの少年だった

|||||間

「———というわけで、こいつの後日試験みたいなもんじゃ」
他の訓練をしていた同い年くらいの少年におっさんが事情を説明し審判に命じる

「・・・なるほど、そういうことなら任せてください、自分が審判を務めさせてもらおうつす、カイトって言ったすね、俺はラウルって言う者つす、頑張るつすよー！」

「お、おう」

あ、暑苦しい

なんか体育会系の部活によくいそうなしゃべり方だなこいつ、まあ悪い奴じやなさそうだけど

「とりあえず、ハンデとして儂がこの半径一メートルの円から出たら儂の負け、その前にカイトが戦闘不能になったらカイトの負け、ということにしておくか、ラウル、こっちはいつでもいいぞ」

そう言いながらガリガリと木の棒で周りに円を描いてその中心に立つおっさん

「え、そんなにこっちが有利な条件でいいんですか？」

「は？」

そう言った俺の言葉におっさんとラウルがキョトンとした顔になる

「ガハハハハハハ!!この条件でもお主には荷が重すぎるわい、それを有利とは！」

こちらに有利すぎるその条件について聞いて逆に笑われてちよつとムカツつときた

俺つてば舐められてない？

確かに最初はおっさんのオーラに気圧された

ぶつちやけ、今でも勝てる気はしないけど、それでも円の中から動かずにカウンターかこっちが力尽きるまで相手をして持久戦でも勝てると思われているのはちよつと面白くない

いや、しかたないとは思うよ、なにせ恩恵刻んだのは昨日だし、先人が自分の力に自信を持つのも悪いことじゃないけどさ、舐められて怒らないほど俺は人間ができていない

だって12歳だし、子供だしー大人げない？子供でうええす！

「えつとあんま無理しない方がいいつすよ、とりあえず始めるんでカイトの方も準備はいいつすか？」

「ちよつと待ってくれ、すまないけど帽子を預かってくれないか、…とても大切な物なんだ」

アスファイからもらった大切な帽子だ、その重要度はかの海賊の麦わ

ら帽子に匹敵すると言っても過言ではない、激しく動く模擬戦なんかで汚したくない、雑魚相手なら脱がずともいいだろうが今回は相手が相手だ、そんな余裕微塵もない。

「いいつすよ、もしかして彼女からもらったプレゼントとかつすか？まつさく」

「よく分かったな、とても大切な奴から誕生日にもらった物なんだ」

「・・・ハジメテイイツスカ」

あれれ、なんか急にラウルの目が死んで元気がなくなったぞ？

「?・・・あ、ああ、いつでもいいぞ」

俺の言葉を確認したラウルが少しふらつきながら審判として少し離れた中間に立つ、去り際に「——ジュウバクハツシロ」とか聞こえたような気がするがどうしたのだろうか

ま、いいか、先人に新人が勝てるわけがないと思っっているであろう、常識をぶち壊してやろう

おっさんと俺がお互い数メートル離れて対峙したのを確認したらウルが俺とおっさんを確認して開始の合図を放つ

「では、模擬戦始めつす!!」

（最初っから【練】全開!!）

【堅】!!

【練】は通常より多くのオーラを体から発する念の基本だが、これよりさらに全力でオーラを噴出させる技がこの【堅】だ、練との戦闘力を比べればその差は最高で数倍に達する、長年の修行でようやく数分間だけこの状態で戦闘行動が取れるようになった、なにせ最初は動かずに数分間【堅】を維持するだけに二月もの時間がかかったのだ、ただし以前にも言ったように自分のオーラの質はなんかネチョつとしているのでいつもの『ネバア』が『ゴポオ』といった感じになる・・・ぶっちゃけこれって本当に【堅】なのか?と思っただ人、大丈夫その疑問は俺も思っただが、大丈夫だ問題ない・・・タブン

さらに今回はそれよりもどうしようもないレベルの問題として、今の俺の【堅】の状態よりもはるかに質も量も化け物級なおっさんが相

手だということだ

まず間違いないガチの戦いでは今は絶対に勝てない、だが試合としてのルールでこのおっさんの鼻を明かすくらいはやってやる！

おっさんは俺が念を使えるということを知らない、なりたてホヤホヤのただのLv. 1のガキだと思ってるはずだ、付け入る隙があるとすればそこしかない

故に先手必勝！

全身を今出せる限界のオーラで包みながらおっさんに突進、全力で殴りかかる、殴る瞬間にオーラの部位量を【流】で制御、拳を70、全体防御30にして俺の動きに驚いているおっさんの顔面に向かって拳を放った

(もらったあ!!)

辺りに破裂音が響き渡る

「つつっ!?」

「・・・なんじゃ、この程度か？」

俺の拳はニヤリと笑ったおっさんの顔の直前で手の平によって難なくガードされてしまっていた

「マジかよ!? つどらあ!!」

すかさず蹴りを数発たたき込むが全て腕で防御される、しかも蹴った足に鉄でも蹴ったような感触が返ってくる、

(攻撃したこっちの方がダメージを受けるとかどんだけ頑丈な肉体だ!?)

防御している腕に蹴りを放った反動を利用して一旦距離をとる

(クツッ、なんだよ今の!?)

冷や汗が止まらない、今出せる最高に近い一撃を難なく防がれた事実とその後の防御力に思考が止まりかける

一方おっさんの方はガードした自分の腕を見てからゆっくりとベガ立ち体勢に戻って俺を見据える、ベガ立ちってのは腕を組んで直立不動の体勢のことだ、この体勢は見た目からも分かる通り腕を組んでいるので初手が遅れる上にまっすぐに立つて立っているせいで不意の攻撃によってすぐにバランスを崩す、およそ実戦では使うことのない立ち

方だ、だがおっさんはその体勢で俺の攻撃を完璧に防ぎきった、腹が立つが堂々とした絶対的な強者のみに許される余裕の姿だ、どうやら実力に驕っていたのはこちらの方だったようだ

(蹴りの方は納得できるにしても拳は当たる直前だった、普通に防御が間に合ってもそのまま貫く勢いだったのにベガ立ちのまま片手で完全に防御されるとか・・・どんだけだよ)

しかもこっちはおっさんが防御する際の動きが全然見えていない、おっさんの実力は過大評価していたつもりだったが、それでもまだ足りなかったようだ、更におっさんの実力を三段上に上方修正する、そこから出される結論としては——ヤツベ、常識をぶち壊す！とか、かっこつけたのに無理っぽいぞ、自分で自分が恥ずかしい、赤っ恥も良いところだ

残念なことに奇襲はもう使えないだろう、動きを見るだけの模擬戦ということで今回はお互い武器無しの徒手空拳、そのせいで距離を取っておっさんの手の届かない位置からの攻撃も無理となると残るは——

(あれに近接戦闘かあ、・・・うわあ超やだあ)

こっちの攻撃はほぼ完璧に防御される上にたとえ攻撃が届いても効くかもわからない存在と殴り合いとか、それもう死ねって言うてるようなもんじゃん

(・・・負けて元々、だったら一か八かの一発勝負の作戦で行くしかない！)

確率は百分の一か千か万か億か、ヤケクソだこんちくしょう、こんな勝ち目の薄い勝負が模擬戦でよかったと無理矢理ポジティブに考えておっさんに向かって全力で突っ込む

「ツシ!!」

ただし、できるだけ低く地面をすべるかのように疾走する、狙いは足下、足を刈り取るような鋭い下段蹴りを放つ

「ふん!!」

だがこれをまるで踏みつけるように足裏で迎撃されて止められる

が――

(これは狙い通り！)

「ぬううりゃああああああ」

脚と足裏が接触した状態のままです。そのまま全力で振り抜いた、自然とおっさんの片足が高く上がりその自重を支えるのが左足一本になる、その残った左足に向かって下段の後ろ回し蹴りを放つ

「甘いわい」

「ツガア!？」

蹴り上げたはずのおっさんの右足が俺の蹴りよりも早く、咄嗟にガードした左腕ごと俺の体を吹っ飛ばした

これだけで軽く10メートル以上吹っ飛ばされた

「くっそ、っ!?痛っくっく!!」

すぐさま起き上がるが蹴りを受けた左腕に激痛が走った、折れてはいない様だがこの痛みはヒビくらいは入ったかもしれない、左腕はこの試合中は使い物にならないだろう

(となると残りの右腕だけでおっさんの相手をするしかない……無理でしょ)

おっさんの体が少しでも浮いたらその隙にぶん殴って円外に吹っ飛ばす算段だったのが既におじやんになった今、文字通り万策尽きたような状況だ

おっさんは円内で未だにベガ立ちしている、その姿勢好きなのか？いや、そんなことどうでもいい、それよりマジでどーすっかな、

さっきおっさんに言われたが出来ない結果を出せば即退団なんて言われてしまっている、降参なんて下手な真似をしたらおそらく即退団だろうな

でもなー、ぶっちゃけ、もうやりたくない、腕とかアホみたいに痛いし、そろそろオーラが底を尽きそうでキツツイ、……けど、合格・不合格関係なくこのじじいの鼻を明かすのは死ぬほど気持ちいいだろうなあ

そんな弱気なのか強気なのかわからないことを考えていたら俺があきらめたと思ったのかじじいが話しかけてきた

「・・・まだやるかの？」

挑発するかのようには、ニヒルに笑いながら言ってくるじじいにかなりイラつく、あれだな、上から目線って人によってはこんなにも力つくんだな

「当たり前だくそじじい、古い先短い老人が未来ある若者になんてことしやがる、もちっと手加減しろや」

色々と脳内麻薬がドバドバ出ているせいもおっさんに対する敬語がなくなっていた

「年寄りの方を労わるのが普通じゃろ、あと儂はまだそんな歳じゃないわい」

「言ってる、くそじじい」

とはいえ、マジで手詰まり

そこで問題だ！ この片腕でどうやってあのじじいをぶっ飛ばすのか？

三択、一つだけ選びなさい

答え

1：オサレなカイトは突如新たな能力に目覚めてオラオラ

2：突如、友情に目覚めたラウルやその他団員が駆け付け参戦してオラオラ

3：このまま負ける。　現実是非情である。オラオラ

「どうした、さつさと掛かかって来んか」

じじいが指でちよいちよいと挑発してくる、いいぜえその挑発乗ってやらあな！

「選択その4！真っ正面からぶっ倒す!!」

こうなったら右拳に全オーラを集中、時間は掛かるがこれを防御なりなんなりで受けてもらって円外に少しでも出てくれることを祈ろう、かわされたり反撃されたら？：そんな時は知らん、どーにでもなあれというやつだ。

玉砕する覚悟を決めて右拳にオーラを集中し始める

『そいつはお勧めできねえなあ?』

だがそこに人を馬鹿にするような声が待ったをかけてきた
(まさか!?)

そう、俺には一つだけ思い浮かぶ事象があつた

この本来の身体クレイジースロットの持ち主であるカイトには固有の能力があつた、その名を【気狂いピエロ】

1から9までの数字がスロットによって表示され、その数字によって特殊な武器を使えるようになるという念能力だ

(ピンチによる能力覚醒キタアーーーーー!!)

そう思つて横を見ると俺の横にフワフワと浮いていたそれはまるでロキファミアアのエンブレムであるピエロがデフォルメ化され実体化したような存在……ではなく

「……なんだお前」

『おいおい、俺つてばかなり有名なはずなんだが、もしかして自意識過剰だつたりする?』

「いや、知つてはいる、めっちゃ知つてはいるんだけど……名前を知らない」

『あちやーそーいうパティーンカー、まあたしかに知名度はあるけど名前は知らないってのはあるかもなー俺つてば黒板消しの正式名称よりも名前だけは知られてないっぽいし、じゃあ覚えとけよ俺様の名前は「ジャンプパイレーツ」天下の大人気週刊少年誌のロゴマークだZe!!よろしくな御主人様マスター?』

まさかのジャンプマークのアレだった。

+++++

この片腕でどうやってあのじじいをぶっ飛ばすのか?

三択、一つだけ選びなさい

答え

1：オサレなカイトは突如新たな能力に目覚めてオラオラ

2：突如、友情に目覚めたラウルやその他団員が駆け付け参戦して
オラオラ

3：このまま負ける。 現実是非情である。 オラオラ

選択肢1・・・になるのだろうかこの場合。

07：面接×物理 後編

|||||

《Side：ラウル》

○7年X月平凡つす日

初めまして！自分はラウル・ノールド、今年で13歳になったつす、田舎暮らしの三男坊で日々親に兄弟にと、こき使われる毎日に嫌気が差して、男として一旗揚げるために世界の中心、ダンジョン都市オラリオに來たつす

來た当初は右も左もわからなかった所をロキに誘われ、ちょうど行われる入団試験で見事合格、おかげでロキファミリアの一員になれたつす

ただ自分が思っていた以上に冒険者というのは過酷なものなんすよ

まず単純に神に恩恵を刻んでもらってもすぐにダンジョンに潜れるわけじゃなかったつす

最初の2週間とちよつとは先輩方との訓練とダンジョンに関する様々な知識をつけるための勉強尽くしで、生まれてこの方農業しかしてこなかった自分には頭から煙が出るかと思うほどキツイもので、ああ、思い出すと涙が・・・

中にはさつさとダンジョンに潜りたいと言う反発心を持った奴も出て來たつす、原因はアイズさん、アイズさんはLv.2の冒険者で真正正銘の第三級冒険者しかも世界最速のランクアップの世界記録保持者・・・なんすけど何と年齢がわずか8歳、しかも見た目からはとてもじゃないけど自分達よりも強い様には見えないすよね、でもそういう奴は大抵がアイズさんに身の程を体に叩き込まれたつす、

おかげで反発心を持っていた奴らは全員が大人しく訓練と勉強に打ち込むようになったのは怪我の功名って言うんすかね？

入団して3週間後にはようやく、初めてダンジョンに潜ることに

なつたすけど自分は緊張で何も出来なかつたつす、他の皆はそれなりに闘えてたんすけど自分はビビッてゴブリン相手に終始逃げ回つてそのままその日のダンジョンアタックは終わったつす

悔しかつたつす、皆がモンスターと闘えている一方で自分だけが逃げ回つた

悔しくて悔しくて、その日は与えられた自室で夜中まで泣いたつすよ、同室の団員がいなくてよかつたつす

○7年X月脱つす日

あれから一月、最初の悔しさをバネに訓練とダンジョンアタックを超頑張つたつす、ステイタスももう少してIからHに上がりそうなものもあるつす、おかげで少しは自信が付いて3階層まで到達階層を伸ばせたつすよ

先輩方やガレスさんに実力よりも精神を鍛えるように言われてから、度胸を付けるために遥かに各上の先輩方やガレスさん相手にボコボコ、いやリント・・・訓練してもらつたおかげつす！

さあ今日もダンジョンアタックをがんばるつすよ！じやなきやあの訓練がががががががががががが

・・・モンスターヨリミカタガコワイデス。

○7年X月驚つす日

今日も訓練に励んでいたらガレスさんが昨日入団したばかりの新しい入りを連れてきたつす

事情があつて入団試験なしで入つたらしく、そのための後日試験とこのことみたいつす

その試験として軽く模擬試合をするので審判役を務めるように言われたつす

まあ、断る理由もないし、(というかガレスさんに逆らうとか無理)快く引き受けたつすけど

試合が終わつた後に自分は驚きすぎて放心状態になつちやう程だつたつす、彼、カイトは一体何者つすか？

えLv. 2でも受ければ気絶するであろう儂の蹴りを咄嗟に防御し立ち上がりおった!

さすがに無傷とはいかなかったようじゃがそれでも驚くべき反射神経と防御力じゃ、それにこの状況で儂に生意気な言葉を言い返す度胸もある

じゃが、これは今日一番の驚きじゃ、カイトの横にわけのわからん下手なおっさんの絵? の様な小さい何かが浮いておった

『ヒイヒイヒイハアアアアアアアアアア!!それじゃいくぜえええええ? 良い目が出るよお!!』

しかも喋っておるし

不思議な物体の口にあたりであろう部分から何かがスライドして出てきたと思ったらカジノにあるスロットの様に回り始め、数字の3が止まった、一体何の意味があるのだ、いやそもそもあれは何なのだ 困惑するこちらを見て不敵な笑みを浮かべるカイトの姿が不気味に見えた

「・・・おい、じじい覚悟しろよ、とびきりの物を喰らわせてやる」

カイトが体の正面に手を合わせるとその手の間に何か黒い何かが現れた、その禍々しさは筆舌に尽くしがたいほどだ

それを手にしつつ、こちらに今までで一番の速度で突っ込んでくる

「うおおおおおおおおお!!」

「むう!!」

(まさか伝説に聞く魔法、その中でもさらに異質と呼ばれる闇属性の魔法か!?)

だとすれば、あれは闇属性唯一の魔法!!

『ダークマター暗黒物質』を無から生み出したというのか!?!』

本能がアレに触れるのは不味いと警鐘をならす、直感に従い回避を選択、儂の顔面に向かって放たれるそれを最小限の動きで避ける、本来であれば距離を取ることで難なく避けられるが今はルール上この円の中から出ることが出来ない、そのせいで避けられる範囲が狭められているが、それでも儂は現役の冒険者、それくらいの芸当は朝飯前

のはずじやった

(っ避けられん!?)

だがカイトから放たれた黒い塊は追尾機能でも付いているかのよう
うに避けたはずの儂の顔に向かって追尾して来た

(っ・・・やむを得んか)

左腕を犠牲にする覚悟で『ダークマター暗黒物質』を腕で振り払う

『パン』という音と共に『ダークマター暗黒物質』が粉々に砕け散った、だが予想し
ていたようなダメージは何もなく拍子抜けしてしまう

(何もないじゃと?)

「何じやったんじゃこれは・・・」

儂が黒い何かに気を取られている間に背後へと回ったカイトが裏
拳を放ってくるが軽く腕で止める

「ダークマター暗黒物質じゃねえ、卵焼きだよ」

卵焼き?何を言ってるんじゃこいつは

カイトがそう言うと同時に儂に、向かい風が吹く、カイトが握って
いた拳を開くとそこには黒い塊の残滓が残っていた、それは風のせい
で儂の右目に向かって飛び散り、そのかけらが目に入った

「ダークマターこのどこが卵やkぐああああああ!?目があああああ目が焼
けるううううううう!!?!!」

まるで眼球が焼けるかのような激痛に襲われる

「見たか、これが卵焼きの実力だ!」

マジで何を言つとるんじゃこいつは!?

こんな卵焼きがあるかあ!!

「隙ありいいいいいい!!」

儂が激痛にのた打ち回っているのを好機と見たのか再びカイトが
飛び掛ってきた

「ぬおおおおおおお!!」

「おべえし!」

あまりの激痛に手加減を忘れて振り回した腕がカイトに命中した、
「しもうた!?!」

本気ではないとはいえ手加減抜きのLv. 5の豪腕をその身に受

けたカイトは先ほどの倍の距離を水平にすっ飛んでいき、庭の木にぶち抜いて壁に激突することでしょうやくその身を止めた

「まずい、やりすぎた！」

「ラウル！急いで回復薬を持ってこいつ、とびきり高い奴じゃ！なければ儂名義で万能薬でもかまわん!!」

「っ!? は、はいっす・・・って・・・嘘だろ!？」

ラウルに言いつけてから急いで吹っ飛んだカイトの元に駆け付けようとしたが、信じられぬものを見たような顔をしたラウルがカイトが吹っ飛んだ方向を見て呆けていた

儂とカイトを遠巻きに見学していた他の団員も同じ方向を見て呆けておる

まさかと思い、儂もラウルや他の団員の見ている方向に目を向ける
「・・・なんと」

まるで体中が錆び付いたかのように、ゆっくりとだが確実に立ち上がりつつある姿があった、

十秒以上かかっただろうか、本物の戦闘なら致命的な隙だが、L v. 1がL v. 5の手加減無しの攻撃をまともに受けた場合は本来なら良くて危篤状態重傷必至、最悪という可能性などなく、普通に死ぬだということにこいつは死ぬどころか立ち上がった

L v. 5の豪腕を受けたにも関わらず成り立てのL v. 1の冒険者は立ち上がった

おそらく防御に回したのであろう両腕は紫に腫れ上がり、もはやぶら下がっているだけの様にダラリと垂れている

肋骨か内臓もやられたのか口からは血を吐いたような跡が今もアゴから血の雫を落としている

その姿はまさに満身創痍

だがその目から放たれる威圧感をして一体誰がこの姿に満身創痍等という戯れ言を彼に被すことが出来るというのか

儂の方を見たカイトはまるで不気味な半月状の口で笑いながら言葉を搾り出してきた、その声は喉に血でも詰まったのか酷く掠れている、L v. 5の聴力がそれを拾い不思議と良く儂の耳に通った

「……え、円・内・から……出た……な……」
「!?」

気付けば僕は決められた円内から出ていた、今から駆け付ける所だったのでカイトを助けに行こうとして出たものではない

「……あ……まあ……だ……やるか……い？」

いくら目が死んでいなくともその身に刻まれた傷は本物である、だ
というのにこの言葉だ

「……くつくつくつくつくつく」

「……しっしっしっしっしっしっしっ」

どちらかが笑いだし釣られるようにもう片方も笑い出す

「ガツハハハハハハハ!! イヒツヒツヒツヒツヒツヒツ!!」

ダメだ笑いが止まらない、こんな楽しい馬鹿者は久しぶりじゃ。気に入った! 気に入ったぞ!!

此奴は僕が育ててやろう、いや僕が育ててみせる!

おっとその前にそのための一区切りの宣言をしてやらねば

「僕の負けじゃあっ!!」

僕がそう言うところの馬鹿は文字通り糸が切れたかのように顔面からぶつ倒れおった、元々限界を超えたダメージを受けていつ倒れてもおかしくないのを、精神力だけで支えて立っておったのじゃろう、くつくつく、なんちゅー意地っ張りじゃ、アイズ以上じゃの、これはほれ、ラウル何をボサツとしとるんじゃ、さっさと回復薬か万能薬でももってこんかい

おっとそうじゃった、リヴェリアに呼集されとつたのをすっかり忘れておった

おそらく呼集内容は間違いなく此奴の事じゃ、何か勝手に決められる前に僕が割り込まねばせつかくの此奴の教育係を別の誰かに取られかねん、

そこからはラウルの持ってきた回復薬を全てカイトに使わせて治療を行い、僕は包帯を巻く程度の軽い治療だけですませ急いで招集さ

れた場所まで足早に向かっていった

あれ程の激痛だったはずの右目が時間が経つごとに痛みも引き、視力も戻ってきた

本当にアレは一体何だったのか、断じて卵焼きではないということだけは確信を持っていえるのだが・・・本当に卵焼き等と言うのなら今度から卵焼きが食えなくなりそうじゃ

まあええか、今度改めてカイトに聞くとしよう

しかししまった、完つ全に遅刻じゃな、リヴェリアとフィンに小言を言われそうじゃ

《side out:ガレス》

目が覚めたら激痛が急に襲ってきた、ということもなく快適な目覚めだった

場所は先程と変わらず訓練所兼庭の様な場所

どうやらあの後、邪魔にならないように隅っこに寝かされていたらしいな

起きてから自分の現状を把握し始めて、体のどこからも痛みがないことに気付く

あれ、俺ってばかなりの重傷だったよね？

腕とか痛みがズンガズンガだったし呼吸はまともにできないし血が噴水みたいにくちからあふれるしで結構ヤバかったはずなんだが、今の俺の体には文字通り傷一つ付いていない、服はボロボロなのにその下にある皮膚だけが妙にツヤツヤして綺麗な状態に違和感を覚える

自分の状態を不思議に思っていると先程審判をしてくれていたラウルという少年が声を掛けてきた

「お、早いすつねもう起きたつすか、どこか体に異常とか違和感を感じたりしてないつすか？」

「いや、逆にどこにも異常がないことに違和感を感じるんだが、どれくらい寝てたんだ？ いや、その前に俺って模擬試合でおっさんにちゃんと勝ったんだよな？ 実は夢でしたー、とかじゃないよな？」

実は最初の一撃の後にカウンターでノックダウン、そこから先は

———という夢をみたのさ、良い夢見れたかよ？

とかだったら悪夢だぞ。

「安心するつすよ、カイトはちゃんとガレスさんに勝ったすよ、怪我とかは回復薬ポーションですぐに治したつす、治した後カイトは2時間くらい寝てたんすよ」

ラウルの話聞いてとりあえず夢ではなかったことに安堵する

それにしても、すげーな回復薬ポーションって、あんなだけの傷がすぐに回復するのか、現代医学もビックリだ、さすがファンタジー！

村ではお目に掛かることすらなかった初めての回復薬の効果に多少浮かれていたが、今のラウルの台詞におかしな単語が混じっていたことに気づき頭に電撃が走った

寝ていた時間ではない、俺と試合をしたおっさんの名前に関してだ
これが聞いたこともない名なら良かったのだが、ガレスというのはロキファミアにおいて1人しかいない・・・はずだ

もしかしたら俺が知らないだけで同じ名前の者が居るだけなのか
もしれないので一応ラウルに聞いてみた

「なあ、ラウル」

「どうしたんすか？」

「ガレスってもしかしてガレス・ランドロック？」

「そうつすよ」

「エルガラム重傑の？」

「し、知らないで試合してたんすか・・・」

スンマセン

あまりの事実に頭痛がしてきて頭を抱える

「普通、Lv. 5が模擬試合の相手とか思わないだろ・・・」

L v. 5とかガチで世界中を見回しても両手の指だけで数えられる位の第一級冒険者じゃねーか

「まあ、名乗らなかつたガレスさんもガレスさんっすけど、ここに入るのに幹部の顔も知らないカイトもカイトっすよ？」

返す言葉もないっすわ

「まあいいや、それで俺ってばこれからどうすりゃいいだ、このままここでキャンプでもすりゃいいのか？」

「ホームの庭で一人キャンプって悲しすぎるっすよ・・・」

うん、自分で言ってる悲しくなってくる

「まあ、冗談はここまでにしてマジでどうすりゃいいか聞いてたりしないか？」

「一応、『目が覚め次第、カイトの容態が大丈夫そうなら団長室で軽い面接だ』って、さつきガレスさんが伝えにきたけど・・・大丈夫そうっすね」

俺の様子を見て安堵したように言っているが、無理

「いや、無理、できれば三日後とかにして欲しい」

「あれ、やつぱりまだどこかがすごく痛むとかつすか？」

違う、そうじゃない、俺の想像通りなら精神が持たん、発狂するぞ

「いいかラウル」

俺はできるだけ声を落として呟くように声を吐き出す

「な、何すか？」

「俺はな、おっさんに軽い模擬戦って言われてこうなったんだ・・・つまり面接ってのはアレだろ？何かの隠語で実際には精神的な拷問とか尋問とかが待ってるってことだろ？」

模擬戦でコレだ、きつと精神と肉体の限界に面会とかそんな感じではないだろうか

「いやいやいやいやいや！あそこまで激しい試合は自分の入団試験の時でもなかつたっすよー！」

ナヌ!?

「え？じゃあ何であのおっさんあそこまで俺のことボッコボコにしたの、OKもらうまで死にもぐるいだったんだが」

「それはわかんないっすけど、少なくとも団長はそんなことするよう
な人じゃないっすよ、それに元々ガレスさんだつて普段の訓練はそ
りやあもう厳しいっすけどここまで怪我を負わせるほどのことはし
たことないっす」

「じゃあ、何で俺だけスタボロにされたんだよ」

「さあ？、案外気に入られてとかじゃないっすか？」

このファミリアは気に入った奴を半殺しにするのか、こえーよ

それにしても面接かー、しかも団長の部屋、ラウルの発言からも間
違いなく面接相手はこのファミリアのトップ

「今度は『勇者』^{フレイバー}フィン・ディムナ・・・か。」

確かに噂では相当な人格者であると聞いているが、はてさて

「あ、面接は幹部全員とロキの前で行うらしいっす」

「・・・それってラウルも入団試験のときに全員と面接したのか？」

「そーいや、自分のときはロキとだけだったすね、全員暇なんすかね
？」

珍しいなー、とかラウルがお気楽に言ってるが幹部全員にファミ
リアの主神ががん首そろえて面接

・・・それは尋問というのではないでしょうか？

やっぱ拷問とかが待ってそうだ

「模擬試合」(条件付き)

カイトVSガレス

カイトの勝利

両腕骨折 肋骨骨折 内臓中度損傷 全身重度の打撲複数

ガレス敗北

右目負傷

【ジャンプパイレーツの海賊印】

3 『お妙の卵焼き』 new!

顔面への命中補正

口内摂取の場合、即死以外の様々な状態異常をランダムで引き起こす

状態異常は毒・麻痺・発熱・腹痛・記憶障害 等多岐に渡る

口内摂取を長年続けた場合、状態異常への耐性が出来る代わりに失明まではいかないが視力が落ちる（某弟が眼鏡を掛けているのはこのせいだと言われている）

08：面接×正常

|||||

《side：フィン》

カイトが意識を取り戻し、面接を行うのに問題がないとの報告を受けてから1時間後

今、僕達の前に椅子に座っているカイトが居た

見た目は年相応より少し背が高く、白い雪のような髪を背中まで伸ばしている、そしてまるで鋭い目付きを隠すかのように帽子を深めに被っている。

こんな子がガレスに負傷を負わせたとは、直接本人から聞いたのではなければ信じられなかっただろう。

ただそれ程の子でも緊張はするのか椅子に座った状態で微かに震えているのがわかる

「あまり緊張せずに気を楽しんでくれてもかまわないよ」

「・・・無理っすう」

緊張を解きほぐすために気楽な感じを装って声を掛けるが帰ってきたのは拒否の声だった

「フィン、無茶言うたるなや、うちに加えてここの幹部が勢ぞろいなんやで？そりや緊張の一つもするんやろ」

確かにこの状況で緊張するなという方が無茶な話かと、そう思っているとロキの言葉に対しても否定の言葉が出てきた

「・・・正確には違う・・・います」

「「？」」

「俺が緊張してるのは、この面接とは名ばかりの尋問もしくは拷問試験に気後れしてる、ます。」

・・・カイトが言っている意味がわからない、尋問？拷問試験？

何をどうすればそのような考えが出てくるのか・・・まさか何か後ろめたい事情でも抱えているのだろうか

「自分はい先程の軽くと言われた模擬試合で両腕と肋骨をバキバキに折られた上に全身打撲に加え内臓が破裂して血をドバドバと吐いて、生死の境をさ迷う目にあつた、だからこの面接でも同じことが起きるのではないかと戦々恐々としてい、ます」

「……………」

おそらくではあるがカイトがこのような考えに至る原因のとおある人物に僕達の視線が集中する

プイと顔を背けるガレス

・・・ガレスそれは君がやってもかわいくない

君がそれで誤魔化すのは無理があるよ

その証拠にカイトの話の聞いたリヴェリアの目付きが鋭くなつてるしね

「ガレス、確かカイトはお前と軽く試合をしてその時にお前に負傷を負わせるために自らも負傷してすぐには動けない程度、と聞いていたが？」

咎めるような視線にガレスが小さくなる

そして僕からしか見えなかったが、二人のやり取りを見たカイトが突然ニヤリと笑つた

「あー・・・その、なんじゃ、ちーつとばっかしやりすぎたのは認めるがー」

「あいたたた、いたーいめっさいたいー！Lv. 5の英雄さんがLv. 1になりたての新人に容赦なく攻撃を加えた所がいたたたたたたた！」

「おい！傷は万能薬で治つとるじやろうが！・・・あ」

どうやら、カイトは僕達の会話から先の試合の結果はガレスのやり過ぎと察したのだろう、自分を殺しかけたガレスに意趣返しのもりか明らかになぞとだとわかる様に煽つてきた

それに対してガレスも要らぬ失言で自らの立場を悪くしてしまう、万能薬は本来なら気軽に使用できない超が付くような回復薬だ、その効果は死んでしまうような傷も瞬く間に完治させてしまう程だ、そして今回の模擬戦でガレスはカイトに万能薬を使ったということはその

ふむふむ、オラリオから北の山間部にある名前もないような村が出身、年齢は12歳、両親は幼い頃に他界しそれ以後は祖父がカイトと弟の面倒を見ていたとの話だ

壁に寄りかかるようにしてカイトを見ているロキの反応から嘘は含まれていないようだ

これでカイトがどこかのファミリアや国のスパイである可能性はなくなったな、懸念が一つ消えホツとする

「なるほど、じゃあ最後の質問だ、君は何のために冒険者になりたいんだい？」

これは新入りの団員に必ず最後に聞く質問だ、大抵の者は名誉や生活のためと答えるが・・・

「将来を約束した相手と一緒にするため」

カイトからは少々意外な答えが返ってきた、将来を約束・・・つまり婚約者？

まだ12歳の子供が言うにはませていると言われてもしかたがない台詞だ

「なるほど、君はその年で既に相手が居るのか・・・でもそのためだったら別に冒険者にならなくてもいいんじゃないかな、むしろ冒険者というのはいつ命を落とすか分からない、本当に相手と一緒にする未来を考えるのならもつと安全な職業に就くことを僕は勧めするよ？」

フィンの言うことは正しい、冒険者はどれだけ安全策を事前に練ろうともダンジョンの気まぐれで意図もたやすく命を落とす

そうなってしまうば残された者は悲しみに暮れるしかなくなる

この子は冒険者になる道しか選べなかったアイズとは事情が違う、他の選択肢もあったはずだが

「・・・相手は普通の身分じゃないんだ、ただの平民の俺が相手と一緒にするには世界に轟くくらいの名誉と財力がいる」

なるほど相手は貴族かどこかの大商人の娘といった所だろうか・・・
「失礼を承知で聞かせてもらいたい、それは本当に相手も君の事を想っているのかい？」

フィンがこのような質問をするのにも理由がある、貴族となると一

時の気まぐれや遊びで平民をたぶらかすことも多いことを思つての質問だ、大抵の場合は男の貴族がそのような下種なことをすることが多いが、逆のパターンがないわけではない

「そういう懸念はもつともだけどそういった心配はない、相手は家出同然で家を飛び出たつて言つてたし、そもそも向こうから『別に冒険者にならなくても私が養う』とか言つてきたし」

なんとも豪気な相手だ、だがそれなら尚更冒険者になる理由が分からなくなつてきた

相手は家を出ているのですぐにでも一緒になるのに障害は何もないように感じるのだが・・・

そう思っているとカイトがこちらの疑問に答えるかのように理由を述べてきた

「俺に両親は居ない、でもあいつの両親は健在だ・・・祖父が居たおかげで俺と弟はこれまで生きてこれた、もしあいつの両親の許可なく一緒になれて子供ができたとしてもその子にとつての祖父母に認められないなんてことは嫌なんだ、俺はあいつの両親に認められて、その上で幸せな家庭を築きたい」

なんとまあ、この年齢でこれ程までに将来のことを見据えているとは

ここまできちんと将来のことを考えた上でならばこの子は大丈夫だな、どこかの戦闘狂の娘にも見習つて欲しいくらいだ

「とりあえず、冒険者を目指した理由はこんな感じなんだけど駄目だろうか？」

「いや、予想以上にしつかりとした目標があつて関心したくらいだよ」「っ・・・それじゃあ!!」

「うん、文句なしの合格だ、これからよろしくねカイト」
うむ、この子は私が予想していたよりもしつかりしているようだ、

これからの成長が楽しみだな

「ふむ、とりあえず面接はこれで終わりかの？」

「ああ、一応これで全部になるね」

「ならばワシからカイトに質問がある、お主が模擬戦で見せたあれは

何じゃ、お主のステイタスの紙を見たがあの様な能力があるとは書いておらんかったぞ」

「どうということだ、カイトが明記されていない能力でも使ったというのか」

「ああ、それか、えっとロキ・・・様？」

「ロキでええよー」

「じゃあロキ、ちよつと俺のステイタス更新してみてくれないか」

何事もなく面接が終わったはずなのだが、どうやらまだ何かあるようだ

そう思つてカイトのステイタス更新を見守っていると

「・・・オーマイゴッド!!」

ロキが突然叫んだ

いや、女神のロキがオーマイゴッドで大丈夫かこいつは・・・いや大丈夫な奴ではなかったな。

《side out：リヴェリア》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

《side：ロキ》

うーむ、フィンが適時質問していく内容には嘘偽りがなかったんやけど、どーもまだ何か話してないことがあるような感じがする

まあ、自分の子供に隠し事全部話せなんていう無理矢理な感じは好かんし、隠し事の1つや2つくらい誰にでもあるやろうからええか

そんな風に思いつつこれからのことにも考えていたら、カイトがステイタスを更新して欲しい言うてきた、よお考えんでもLv.1がL

v. 5との模擬戦で、しかもLv. 5のガレスに負傷させる程の戦闘となればダンジョンの上層なんかで得られる経験値なんかよりはるかに多いはずやんな

そう思つてカイトのステイタスを更新してみたら――

ナニコレ

いつもの口調が変わるくらいおかしいことがカイトに起きとつた

~~~~~

カイト・クラネル Lv. 1

力：I 0 ⇒ H 102

耐久：I 0 ⇒ H 180

器用：I 0 ⇒ I 80

俊敏：I 0 ⇒ I 98

魔力：I 0 ⇒ H 110

アビリティ

【 】

魔法

【 】

スキル

【念能力】

・魔力を身体能力へ能動的に上乗せできる、熟練度次第で効果は倍増する。

【ジャンプの海賊印】※念能力のチェインスキル

・ルーレットの数字に対応した武器・スキルを一時的に具現化・習得する。

・出現した武器・スキルは最低一度以上使用しなければ消すことができない、ただし出た目の数字×100のステイタス値を生け贄に捧げることでキャンセルが可能

【英雄達の星の下】※ジャンプの海賊印のチェインスキル

・架空・実在を問わず本人が知る様々な武器・スキルを発現できる。

~~~~~

えええええええええええええええええええええええ!!?

ステイタス上昇値がトータル570!?

いや、それはギリギリ納得するっ!

さつきも言ったけどLv. 1がLv. 5に傷を負わせるってのはそれくらいの偉業や、それを踏まえてもこの上り方は凄まじいの一言に尽きる

けどそれ以上になんやねんこのスキルは!?

新たなスキルが発現しとる!

しかも二つも同時に!!

なんやねんチェインスキルって!?

っていうか三つ目のこのスキルヤバすぎるで!?

まじかこくs d s f l ; あどいあs d f j k : あs d p f k

間。

・・・ハアハアハア、うちがここまで混乱するなんて中々ないで?

とりあえず、うちの見たステイタスの写しを他の三人にも見せるとガレスは大笑い、リヴェリアは驚愕、フィンに至ってはいつも被つとる仮面が剥がれて昔みたいなお戦的な笑みを見せとる

三者三様の反応を見てようやく落ちついてきたわ、あれやな、自分以上の反応を見ると逆に落ち着くな

それと、ようやく冷静になってきたおかげで腑に落ちない点がいく

つか浮かび上がってきた

まず、一つ目がカイトがスキル「念能力」を使ってガレスとやり合えたというのがそもそもおかしい、スキルの内容には確かに習熟度によって効率が上がるとは書いてはある、でもカイトがこのスキルを発現させたのは昨日のはずや、それなのにスキルを使いこなしてガレスとやり合えたということ

二つ目はガレスの話の内容から推測するにカイトがステイタスの更新無しで新たなスキルを使用できたと言うことや、基本的にスキルや魔法はうちら神々がステイタスの更新をして子供達の中にある実現できる可能性を引つ張り上げることによって発動できるようになる、なのにカイトはそれをすっ飛ばして新たなスキルを使用した、はつきし言って前代未聞、うちら神々の地上での存在意義が疑われるで

そして三つ目がこの「英雄達の星の下」というスキルや、スキルちゅーのは魔法と違って、本人の心の奥底にある願望や、自身でも知らない本質が現われる、新たに現れた二つ目の「ジャンプの海賊印」はガレスと闘ってるときに何かを犠牲にしてもどうしても勝ちたいとでも思ってたんやろ、たしかに強力やけどその分の失敗したときのデメリットとしてステイタスを最低でも100も犠牲にせなんあかん、このスキルだけでも十分凶悪なのに三つ目のこのスキルは更にヤバイ、【英雄達の星の下】というスキル、これの名は別名「根源の渦」「宇宙の記録層」「アカシックレコード」と呼ばれる神の力すら超える存在のことを指す、この存在を知るのは神だけの筈や、もしかしたらどこぞの神が子供たちに教えた可能性もあるから——あああ
あもう面倒臭いことになりそうやでえ・・・ともかく、この三つ目のスキルはカイト自身以外からの加護か何かで発現した可能性がある
るっちゅーこつちや！

色々な可能性と考えなあかんことが次々に浮かんでくるけど、とりあえずカイトに三つ目のスキル以外の質問をすることにした



09：面接×異常

ロキにステイタスを更新してもらったら予想通りに新たなスキルがステイタス紙に記載されていた

だが、やはり自分の知るカイトの本来の能力である【クレイジースロット気狂いピエロ】とはかなり違う能力になっていた

自分の元ネタであるカイトの【クレイジースロット気狂いピエロ】は1〜9までしか数字がなく、しかも武器のみを具現化させるものだったはずだ、なのに俺のは武器を具現するだけでなくスキル、おそらく何かの能力まで使えるという、上位互換みたいな能力になっていた、ただしその分のデメリットもキツツイ、今回500以上ステイタスが上昇しているが、もし6以上の数字をキャンセルしたらマイナスになる、そしてこれは本能のような直感だがおそらく0を割ってマイナスになった場合………死ぬ

ヤバいなこの能力、発現させても扱いきれないような能力がきたらキャンセルするしかない、そんなことが続けば破産してリアルゲームオーバーだ、今後この能力は気軽に使わないようにしよう

そして完全に予想外の能力が三つ目の【アーカイシャ英雄達の星の下】というスキルだ、おそらくだが【クレイジースロット気狂いピエロ】が亜種みたいな異常変化を起こして【ジャンプジャンプの海賊印】なんてものになったのは間違いなくこのスキルのせいだ、そうでなければ何が悲しくてあんなかわいそうな卵を無から生成せにやならんのだ

たしかアーカイシャって世界の意思とかそんな感じじゃなかったけ？

昔何かの漫画かアニメでちらりとそんな単語が出てきたような気がする

まあ細けえことはどうでもいいや

とりあえず【ジャンプジャンプの海賊印】はよっぽどステイタスに余裕があつてピンチにならない限りは使用しない方向で頑張っていこう

そう考えると今回の模擬戦でいきなり使用したのはかなり危なかったかもしれない、もし扱いきれない能力や武器が出てきたら自滅

して死んでいた可能性もある、むしろ数字も少なく扱いやすい・・・もの？が出てきてラッキーだったかもしれないな・・・まさかあんなかわいそうな物体に感謝する日がこようとは。

色々と考え事をしてしているとロキが質問をしてきた、面接が終わった後の質問なので気張らずにあっけら感と答えられるので楽でいいな「カイトはガレスとやり合った際に、スキルを使用したんは間違いないか？」

当然だ、むしろ念能力無しでこの化け物みたいなおっさんとうやうややり合えというのか、というか全開で向かって返り討ちに遭いましたか何か？

「いや、そもそもそれがおかしいねん、何で昨日発現したばかりのスキルを使用できるだけじゃなくて使いこなしとんねん」

は？

いや確かに「ジャンプの海賊印」や「英雄達の星の下」は発現したばかりだけど念能力は最近じゃなくて6年前に自力で目覚めてましたけど何か？

村でのことなどを掻い摘まんで説明する

「はあ!?!スキルを自力で発現させたやて!?!」

ロキだけでなく幹部3人の視線が厳しいものに変わる

・・・え、なんかマズった？

「それ、ホンマか？」

誓って本当なんだけど

「・・・マジみたいやな」

信じるの早すぎないか？

あ、そうか人は神に嘘がつけないんだっけか、最強の嘘発見器だなそう思っているとあまり発言のなかった副団長のリヴェリアが信じられないといった風にしてロキに聞いただす

「ロキよ、そんなことがありえるのか？ 魔法種族が弱くとも恩恵なしで魔法を使用できるのは割と有名な話だが、ヒューマンが自力でスキルに目覚めたなどとエルフの国の書物ですら見たことも聞いたこともないぞ」

「・・・かなり前の話になるけど前例は確かにあるで、ホンツツトにかなり昔の話になるんやけどな」

「なんだ前例がいるんじゃん、でもこの3人が知らない位って事はかなり珍しいんだろうな」

「ハア~~~~、とりあえずカイトは先に部屋に行つて・・・つてそういやカイトの部屋どこになつたんやつけ」

「カイトならラウルと同室にしといたぞ、あやつは儂との模擬戦の審判役もやつとたから無用な諍いもないと思つてな」

「ああ、あの地味な少年か、少ししか言葉を交わしてないけど善良であるとわかる少年だった、歳の離れたおっさんとかより100倍ましだ。」

「ラウルならまだ庭で訓練中のはずじゃから部屋に案内してもらえ、ここから庭までの道はわかるか?」

「それはさすがにわかる・・・と思う。」

「じゃあ、皆へのカイトのお披露目は夕食のときに僕の方から行うとしよう、食堂へはラウルと一緒に来ると良い、初めての人は高確率で迷つちやうからね」

「りよーかいです団長閣下」

「フィンでいいよ」

了解フィン

「変な語尾みたいになつてるぞ、ついでに私もリヴェリアでかまわないう、これからよろしくなカイト」

了解、リヴェリア

「ちなみに儂は——」

おっさんはおっさんでよろしく

「おい、儂だけ扱いがおかしくないか!?!」

今更、呼び方変えるのも変だからいいじゃん

「あ、そうだ夕食時に紹介されるときに關してお願いがあるんだけどいいかな?」

|||||

《side:ガレス》

カイトが出て行った後、それぞれが色々な意味を含んだため息をつく

「・・・それにしても、自分のファミリーネームは秘密にして欲しいとは珍しい頼みをする奴じゃな」

カイトが部屋を退室する前に妙なことを頼んできた、普通はそんなことはせん、むしろ家族がおるならその名声が届くことを誇りにするものだ

「今のオラリオの現状を考えれば、闇派閥の手が家族に届く可能性を少しでも減らすためだろう」

むう、なるほどの、確かに奴らなら団員の家族を人質にとって何かをさせるくらいのはやりかねんな

「それにしても、去年はアイズ、今年はカイトか、もしかしたら来年はもつとすごい新人が入ってくるかもしれないね」

「アイズだけでも手を焼かされているのだぞ？　これ以上は勘弁してくれ」

最近は大分マシになったとはいえ、まだまだやんちゃなアイズに手を焼いているリヴェリエは疲労をにじませる様な顔でぼやく

「大変じゃのう、ママ？」

基本的にアイズの面倒はリヴェリエが主に見ておる、儂も偶に面倒は見るが精々ダンジョンでの御守くらいじゃ

「誰がママだ！私はまだ未婚だ!!」

お決まりの様な口論だ、此奴はこう言われるのが気にいらんらしい、面白いから最近はこれでおちよくることが多い

「はいはい、ミニコントはいいから話を戻そう、カイトに関してはガレスが面倒を見てくれるんだろう？　それにカイトはあまり手が掛かるようには思えないから楽だと思おうよ」

確かに、あ奴はあまり手が掛かりそうではないな、まあそれでも当

ようやく普段のロキに戻ったように感じるが、見開かれた目と口が笑みの形から戻っておらん、カイトが自力でスキルに目覚めたというのはワシも聞いたときは信じられなかったがロキ自身が前例があると言ったはずじゃ、前例があると云ったのはお主じやろうに何をそんなに興奮しておるんじや？

「ガレス、確かにロキは前例があると言ったがそれは随分前の話だと言っていたはずだ、寿命に関しては超越存在のこいつがそうとう昔と言っていたのだぞ？ 少なくともここ数百年のエルフや一般の書物でそんな記述は見たことがない」

それを聞いたロキがまた笑い出す

「リヴェリア大丈夫かーボケるにはまだ早いぞ？ ここにいる全員がその前例を知つとるはずやでえ」

ケツケツケと、さも面白おかしそうに笑うロキ

「……どうということじゃワシも知つとるじやと？」

フィンもリヴェリアも思い当たる節が無いのか眉を潜めている

「灯台元暗しつて奴やなー、ヒントは『子供の頃』や！」

子供の頃？

わからん、考えるのは苦手じゃ……こういうのはフィンやリヴェリアにお任せじゃな

「子供……前例……遊び……読み……ん？」

む、フィンは気付いたのか？

「ロキ、質問だけどその前例つてもしかして千年以上前のことだったりするかい？」

千年以上前……暗黒期の話じやと？ そんな馬鹿な!?

「なんやもう気付いたんかー、早すぎておもろくないで、そっちの2人はギブアップかー？」

「……ああ、お手上げだ」

儂は元からあまり考えとらんかったぞ

「……………」

「アホはほつといて、とりあえずカイトがスキルを自力で発現させたことの何が問題なのか聞かせてくれ」

誰がアホじゃ!!

「ままま、ガレスも落ち着きいな、・・・つまりやな、今まで自力でスキルに目覚めた存在っちゅーのはスバリ【英雄】や!! みーんながよお知つとつて、子供が大好きな御伽話、そしてうちら神々が認めた実在の英雄達の話『ダンジョン・オラトリア』!! そこに出てくる英雄達のほぼ全てがうちらが降りてくる前に自力で何らかの力に目覚めとる」

なんと、ではカイトはそんな者達と同じだと?

「間違いないでえ、うちの勘もビンビンに訴えまくつとる、それにそう考えるとカイトがうちのステイタスの更新無しで新たなスキルを使用した理由もわかるんよ」

なるほど、元から自力で使えたスキルの派生の能力なら更新無しで使えるのも納得できるな

「つまり、カイトは英雄足り得る存在である・・・ということか」

「これからでどうなるかはわからんけど、うちの育て方次第でどびきりの第一級になるで、間違いない」

ふむ、聞けば聞くほど育て甲斐があるのう

「ガレスに教育係を譲ったのはもったいなかったかな?」

「なに、別に教育係だからといって四六時中尽きつきりではないのだ、私達からも何かしら教えてやればいい、アイズと同じ要領でいけば問題ないだろう」

「まあ、当分はそんな感じでいこか、あと勿論このことはここに居るメンバー以外他言無用や、カイトにもスキルを自力で使えるようになったこともしやべらんように上手く説明したつてや」

むう、めんどくさいがロキの様子からしても間違いなくカイトは神々の格好の玩具にしか見えぬであろうな

食後にも事情を説明してスキルのことを口外せぬように伝えておくか

この後はロキを含めた4人で新人とカイトの訓練のスケジュールについて話し合い一旦解散となった。

冒険者開始!

10：歓迎×一步

「まじでガレスさんに勝ったのか、すげーなお前!」

「マジもマジっすよ、審判をしてた自分が証人っす」

「こんなちっこいのにねえ?」

「アタシも見てたけどすごかったよ?」

「試合に勝って勝負に負けたといった感じだったかな」

「お前さん酒は飲めるか?」

「おい、この子にはまだ早い」

「俺とも闘ろうぜ!!」

「いや俺が先だ!」

「いいや、俺だね!」

「「どーぞどーぞ」」

「・・・あれ?」

飯を食いつつファミリアの先輩方にもみくちやにされる俺

や、やかましい、飯を食わせて、おいやめろ酒をコップにつぐな、俺は未成年だぞ!!

ガレスのおっさんとは別のドワーフが酒を並々と注ぎ、それをエルフが止めようとするよりも先に酒が注がれ、されるがままに先輩に肩を組まされ、コントに巻き込まれる

うう、歓迎されないよりはいいが歓迎されすぎも困るものとは知らなかった・・・

現在は夕食時、ラウルに部屋を案内してもらい荷物整理をしている間に飯の時間になったのでラウルと共に食堂へ

食事前に団長であるフィンに紹介されたのはいいが、その際に俺がおっさんに試合で勝ったということ面白おかしく伝えた

そのせいでこの惨状である。

だが、俺がこの惨状に辟易していると先輩が気になることを言ってきた

「それにしても重傷を負うくらいのも擬戦をしたなら『高位の経験値』エクセリアが結構貯まったんじゃないか？」

あまり聞きなれない単語が耳に入った、アスフィからも聞いたことがない言葉だ

「高位の経験値？・・・普通の経験値とはちがうのか？」

俺がそう疑問の声を出すと、先輩はヤツベとでもいうかの様な表情になった、周りも、あのバカ、とでも言うかの様な雰囲気になっている

え、何この空気、俺にか変な質問でもしたのか？

「高位の経験値とはランクアップに必要な、通常とは異なる経験値のことだ」

俺の疑問に対する声が後ろから返ってきた

「リヴェリア様!？」

周りのエルフが跪こうと席を立とうとするがそれをリヴェリアが手で制す

「楽にしている、別にもう教えてもかまわんさ、隠すことでアイズの様
な二の舞はゴメンなのでな」

「それは・・・ですが、大丈夫でしょうか」

「ああ、この子はそこまで聞き分けのない奴ではない・・・おそろくだがな、少し隣を失礼するぞ」

「あ、じゃ、じゃあ俺がどきますね！」

肩を組んでいた先輩が顔を真っ赤にして恥ずかしそうにそさくさと去って行く

先輩ウブすぎるだろ、いや確かにリヴェリアは俺から見てもとんでもなく美人ではあるけどさ

だが、アスフィがいる俺にはあまり気にならない・・・フツこれが彼女持ちの余裕という奴か

・・・それにしてもアイズの二の舞ってのはどういうことだ？

「アイズに何かあったのか？」

「ああ、実は少し前にあの子がやらかしてな・・・」

リヴェリアからの説明によると冒険者が強くなる手っ取り早い方法はランクアップすることなのだが、それには通常の経験値とは異なる、自分よりも強いモンスターや人を打倒することでしか手に入らない特別な経験値が必要になるらしい、それを偉業といい、それを数多く、もしくは質の高い偉業を達成することでランクアップ可能になるらしい

それをアイズには隠してこの一年間、冒険者としての経験を積みせていたらしいが、中々上がらないレベルにアイズは大分イライラしていたらしい、どこかから聞き出したランクアップの条件を知って、さらにその条件を隠していたフィン達に激怒、危険なダンジョンアタックで死にかける目にあっただらしい

なるほどなー、ランクアップって大変なんだな、きつとアスフィも実は相当な苦勞を・・・いや、ちよつと待て

「え、じゃあもしかしてランクアップって今日の模擬戦みたいなことを何回もしなきゃいけないってことか!？」

命がいくつあっても足らんわそんなの！

「安心しろ、通常は十分に経験値を積んだ後に複数人のパーティを組んで、強者を打倒し高位の経験値を貯めるものなのだ、もちろんランクアップできなくとも通常の経験値も貯まるのでランクアップするための偉業が貯まるまでアビリティを上げつつ、それを繰り返すことでレベルを上げることになる」

それを聞いてホツとする

「よ、よかった、さすがに今日みたいなことを何回もやるのはキツイ」「重ね重ね、あの馬鹿がすまん」

本当に申し訳なさそうな顔をしてこちらに言ってくる、別にリヴェリアのせいじゃなからうに、なんかこっちが悪いような気がしてくる「いやいやいや、でもおかげで新しいスキルが生えたからどっちかというど得した感じだから!!」

「そう言ってもらえると助かる」

「そ、そういうえば俺ってば明日からどうすればいいんだ？そこら辺を全く聞いていないんだけど」

何か変な空気になったので無理矢理話題を変えてみる

「うむ、さっきこちらに来たのは実はそれを伝えるためにきたのだ」

随分と話は脱線してしまったがな、と苦笑するリヴェリア

「とりあえずカイトは明日の朝食が終わったら、フィンと一緒にギルドに行つて冒険者としての登録をしよう、なに、簡単な書類手続きだ、一時間もかからんさ」

なるほどなるほど冒険者つてのはギルドのバックアップがあつて初めて十全に活動できる、そのためにもギルドへの冒険者としての登録は必須であるとバイト中に仕入れた情報やアスファイから聞いた話で知つてはいるのだが・・・

「わざわざ、団長のフィンが付いてくるのか？」

「ちようどギルドに用があるそうなのでそのついでだな、私もガレスも別でやることがある」

「なぐる」

「登録が終わつたら軽く二時間ほどダンジョンに潜つてみる」

「え、いいの？」

？
普通はダンジョンに関する知識とかを得てから潜るんじゃないの？

「ああ、フィンが一緒なら上層ではよほどのイレギュラーが起こつても問題ない、要はダンジョンのお試し体験みたいなものだな、百聞は一見にしかずという奴だ、ただし二時間だけだ、それと帰つてきたらダンジョンに関する勉強会に参加しよう」

あ、やっぱそういうのあるのね

「それと明後日からは午前中はガレスや他の者との訓練、午後からは私の座学に参加しよう」

「あれ、ダンジョンは？」

「明日はお試しだと言つただろう、明日を除けばしばらくは探索無しで訓練と座学漬けだ」

まあ、仕方ないか安全第一だしな

「了解だ」

「……」

納得しているとリヴェリアがこっちをじーっと見てきた

「な、なに？」

「いや……聞き分けが良すぎて本当に分かっているのか不安になっ
な」

「安全第一って大切じゃん」

ダンジョン探索つてのは命がけだ、焦って命を粗末に扱うわけには
いかない

俺が今、命を掛けるのはアスフィとベルとじいちゃんのためだ、そ
のためにも簡単に死んでなどやるものか

「最初ここに入ったばかりの者はそれが理解できず不満を言う者が多
いのだ、特にアイズなんかは他の者達よりもさらにひどくてな、登録
初日から——」

その後リヴェリアから日頃の愚痴をぶちまけられた

苦労人やねこの人

愚痴を聞き終わった後は仲良くなった他の団員とも軽く談笑し、ラ
ウルと共に部屋に戻り床についた

床についてようやく体から力が抜けていくのわかった、やっぱかな
り緊張していたみたいだな

真つ暗な天井を見ながらこれからのことについて思いを馳せる

色々あったけどようやくスタートラインに着けた

明日のダンジョン、そして訓練、座学、やることが一杯だがこれか
らの生活にワクワクが止まらない

暗闇の中で天井に向かって手を伸ばす、まだ何も見えはしない、そ
れでもいつか夢を掴み取ってやる

そう意気込みつついつの間にか襲ってきた睡魔に身をゆだねて眠
りについた。

朝食はパン派のおれはむしやむしやとパンにかぶりついていた
さすが大派閥のファミリアは食事から違いますわ〜

贅沢にジャムを塗りたくれる環境、これだけでもここに入って良
かったと思う

今まで朝食は具のないスープやクツソ硬い黒パンだったからな、白
いパンとか久々に見たわ

俺の前には食パン一斤と肉の山、ポテトサラダに野菜の山、そして
米！

米ですよ皆さん米！！

前世が日本人の俺からすれば久しぶりの米はいくらパン派といえ
ど見逃すわけにはいかなかったのでこれまたてんこ盛り、そして最後
に大皿にスープとフードファイター並みの食事量だ

贅沢を言うならここで味噌汁が欲しいがないものは仕方がない、米
があるならきつと味噌もどこかで売っているはず、俺の食事当番のと
きに味噌汁を振舞ってそのままこのソウルフードにしてやろう

そうやってロキファミリア和食化計画などを考えている間にも俺
の腹からでかい腹の虫の音が鳴り響いてきた

いつもはこんなには食べないのだが、なぜか今日は朝から激しくお
腹の虫がハングリーと絶叫してきたのでこんな量になってしまった。

まあ原因に心当たりがあるっちゃあるのだが確証がないので考え
るだけ無駄だ、それよりもこの腹の虫を沈めることの方が急務であ
る、

そして本日二度目のいただきますをして食事に集中した

ちなみに食事は団員が交代制で作るらしい、今のと同じ量を再度の
おかわりにきた俺を先輩方が目を丸くして見ていたのが印象深かつ
た

「・・・すげー食欲っすね」

俺の食事風景を見たラウルが胸焼けしそうな表情で言ってきた

「何言ってるんだ、朝食は一日の行動の基本エネルギーなんだぞ、どれだけ朝食食べたかで一日の行動量が決まるんだ、それに朝食った分はいくら食べても脂肪にもなりにくいって言うしな、逆に夜に多く食べて朝が小食だと太るんだよ」

まあ今日みたいな量は例外だとは思うがな

「へー、カイトって結構博識っすね」

ラウルが感心している横で俺の話聞いていたのか多くの女性団員がガタガタと動き出した

「おかわりお願い、夜の分まで溜め込むわ!!」「こっちもお願い!」「私も!」「くっ最近の腹の肉は夜のケーキが原因か」「それは当たり前でしょ」

「・・・」

俺とラウルがその女性達の行動力にあきれる

「・・・何で女つてのはこの手の情報には敏感なんすかね」

「モグモグ・・・ソング、別に太ってるようには見えないのになあ」

「いつまでも綺麗でいたいからじゃないかな?」

ラウルと女性の理解できない行動ついて話していると、トレイにパンやサラダにスープにソーセージとバランスの良いメニューを載せたフィンが隣に座ってきた

「だ、団長!」

「おはようふいん」

「うん、おはよう、でもまた僕の名前が語尾みたいになってるから言葉を切って発音してくれると嬉しいかな」

へーい、と返事をしつつ食事を再開する、しばらくお互い食事に参加中していると

「・・・それにしてもすごい量だね」

呆れたような声でフィンが話しかけてきた

「それ、きつきラウルにも言われたよ」

「あはは、食べる量に反してカイトって全然太ってないからすごい違和感だよ」

「いつもはこんなに食べない、多分スキルのせい・・・かも」

今朝からの猛烈な空腹感にはそれしか心当たりが無い

「へえ、あれって使うとお腹がすくのかい？」

「んー、昔から使いすぎると体の中からゴソツと何かが持っていかれる感覚はあるけど、昨日みたいに全力で使い続けたことってないからなー、空腹の原因だとは思うけど確証はできないって感じ、また全力で使う機会があったら確定できると思うけど、当分は勘弁して欲しいなあ」

そんな風にフィンと何気ない会話をしていると隣でオロオロしていたラウルが我慢できないとでもいうように俺とフィンの会話に突っ込んできた

「っていかカイトは何で団長と普通にため口で会話できるんすか!？」

しかもカイトがスキルを使えるとか聞いてないっすよ!？」

「あ、そういや言っただけじゃなかったか、俺のスキルは——」「ちよつと待った!」

俺が自分のスキルを説明しようとしたら慌ててフィンが止めてきた

「カイト、君のスキルはおそらくレアスキルだ、同じ団員でもおいそれと吹聴していいものじゃない」

「ありや、そーなの?」

「レ、レアスキルツ!？」

フィン曰く何でもレアスキル持ちってのはそれだけで他派閥から個人的な勧誘だけじゃなく色々な意味で狙われるようになるらしい

特に今は闇派閥の勢力が幅を利かせているのでバレると冗談抜きで俺の身が危ないとのことだ

「あ、もしかしてギルドの登録にフィンが付いてくるのってそういう理由?」

「それももちろんあるけど、ギルドに用があるのも本当だよ、それとラ

ウル、今聞いたことは他言無用だ、いいね？カイトもこのことは同じファミリアの団員であつてもあまり教えないように」

「は、はいっす!!」

「あいよ〜」

びしつと敬礼して返事をするラウルを横目に俺は軽く返事をしつつ食事を進める手を休めない

それから数分間は黙々と衰えない空腹感を満たすために一心不乱に食事に集中した

周りがドン引きしていたが気にせず吸引力の衰えないダイソンとなる

そのおかげもあつてあれほどの空腹感が大分満たされた

あれからおかわりに3回行つて合計5回もおかわりしてしまった

「ふい〜、余は満足じゃ」

「こ、ここの食事には満足できたかい？」

さすがのフィンもこの食事に少し引いていた

「満足も満足、大満足！これで今日も一日頑張れる!!」

「そ、そうかい、じゃあ準備が出来次第ギルドに向かおうか」

「おう!!・・・って準備？ 準備って何すんの？」

よく考えたら俺つてば丸腰なんだけど、ゴブリン程度なら素手で倒す自信はあるけど装備つてどうすんだ

『武器は持つてるだけじゃ意味はないぞ、装備するのを忘れるな』つてのは有名な台詞だが、そもそも何も持つてねえよ

「一応、倉庫に君の先輩方のお古の装備が大量にある、ギルドで新人に有料で渡す装備よりも格段にマシなはずだからそこから一式そろえようか」

「助かるわー」

さすが大派閥！至れり尽くせりだな!!

なんでも倉庫は地下にあるらしい、つてかここ地下なんてあんなのかよ……。

食堂を出てからいくつかの通路を曲がり下に続く階段に到着、螺旋

階段になつてゐるそれを降りること三階分

途中には「書庫」と書かれた部屋もあつた

フィンに聞いたら団員であればいつでも使つていいらしい、ただし持ち出す場合はロキか幹部、もしくは上位団員に許可をもらわないといけないらしい、暇潰しや見聞を広めるのに役に立ちそうなので今度利用させてもらおう

そんなことを考えていたらようやく着いた

螺旋階段の終わりがそのまま倉庫の入口になつていた

フィンが鍵らしきもので扉を開けてから入ると、あるわあるわ、樽に無造作に突っ込まれた剣や槍を初めとした武器の数々、武器だけでなく木箱から溢れるくらいに積まれた防具が所狭しと並んでいた。

「じゃあ、とりあえずカイトの戦闘スタイルは近接つて聞いているけどそれで間違いないかな？・・・なければ近接を中心として装備を決めていこうか」

フィンから具体的にどんな装備がいいのか聞かれたので防衛よりも回避を念頭に置いた軽装備がいいと言つたらパツパツと動きやすい皮装備を見繕つてくれた、これに加え念のために軽くて最低限の急所を守ってくれるライトプレートも選んでくれたのでそれを装備することにした

「武器はどういったもの使うんだい？」

「んー・・・これと言つたこだわりはないんだけど、ん？」

俺の目に付いたのは奇妙な籠手だった、肘の先から指先までを一つとしたような一体型の防具にも見えるが、よく見ると右は指先から指の付け根まで刃物が付いていて、付けたまま素手の相手と握手でもしようなものなら相手の手をズタズタに引き裂けそうな機構になつている、一方左の方は指先だけが鋭利な爪のように尖つていて抜き手にすればそのままモンスターを貫けそうな形になつている

他にも色々武器はあるのだが妙にこの武器？に目が行く

(こういうときは勘に従つてみるか)

「・・・これでいい」

「また珍しい装備を選んだね、・・・でもカイトがいいならそれで行くか」

その後、箆手は常時装備するのは危ないので紐で腰にぶら下げてから倉庫を後にした

「それじゃあ、さっそくギルドに向かおうか！」

「おうよ!!」

オラリオに入ってから約一ヶ月、俺はようやく冒険者としてダンジョンに潜ることになった

——道中

(初のダンジョンから、何も起きずに無事に終えられるといいなー)

と、あえてフラグを立ててみる (笑)

いや、大丈夫大丈夫、フラグってのはあえて立てると叶わないものって言うし。

そう、今の俺はそんな風に軽く考えていた・・・なんちゃって

11：登録×冒険

ロキ・ファミリアの拠点である『黄昏の館』はオラリオの北に建っている、そしてギルドの位置は北西、そのため最も早く行くには北のメインストリートと北西のメインストリートの間である第八区画を突っ切って行くのが近道になる。

「——ただし、遠征なんかで荷物が多い時は街の中心、バベルを経由してからギルドで換金を行うんだ」

「なる、確かに大荷物を引いてこの狭い道を通るのは住民の迷惑だろうな」

雑談をしつつアスファイやヘルメス^ホから聞いたことの無い情報を頭の中で補完していく

大派閥だからこそそのダンジョン豆知識を道中でフィンから聞くのはかなり楽しかった。

そんな風に色々と聞きつつ歩いていると北西のメインストリートに出た、しかもちょうど目の前がギルドだ

さすがはオラリオで長く生活しているだけはあるな、この街でまだ一ヶ月しか生活していない俺ではまだまだ道が未知でいっぱい。ゲフンゲフンいや、なんでもない

くだらないことを考えている間にも俺とフィンはどんどんギルドの中に入っていく

お上りさんよろしく、キョロキョロと辺りに目を配る
「カイト、こっちだ」

数ある受付の中でも目的の受付口でもあるのかそこに真っ直ぐに向かっていくフィンに大人しく付いていくと、赤髪のお姉さんが受付嬢の窓口に着いた

「やあ、ローザ、ミッションの報告に来た、手続きを頼む」

「はいはいっと、相変わらず仕事が早くて助かるよ、そっちの子は？」
「うちの新人団員さ、この子の登録も一緒に頼むよ」

強気そうな受付嬢がこちらを見てくるので軽く頭を下げて挨拶と

した

「・・・この前、団員を大勢補充したばかりのはずじゃなかったのかい」
「ロキの気まぐれって言えばわかってくれるかい？」

「はあ、まーた神の気まぐれかい、苦労してるねあんたも」

「はは、君程じゃないさ」

「うっさい、ほらそっちの子はこの紙に必要な事項を書いてちょうだい、その間にフィンは奥で部長に細かい報告をしてきな」

「はいはい、じゃあカイト、ちよつと行ってくるからその間に手続きをしといてくれ」

「了解だ、早く終わったらそこら辺で時間を潰しとく」

「そうしてくれ、じゃあローザ、カイトを少しの間頼むよ」

「わかったから、早く行きな」

シツシツと追い払うような仕草でローザと呼ばれた受付嬢がフィンを奥の部屋に送り込むが、そこには長年による見知った相手への気軽さを感じた

とりあえず、登録のための書類にぎつと目を通してから自分の情報を書き込んでいく、フィンがいなくなつた途端に会話が途切れて微妙な雰囲気なので空欄を埋めながらこちらを見ているローザさんに話しかけてみる

「フィ、・・・うちの団長とは付き合いが長いんですか？」

「・・・まあね、私がここに就職してからすぐの付き合いになるからもう5年か6年の付き合いになるね」

「そりやまた結構長い付き合いですねえ」

「フフ、そうね、・・・こんなに長い付き合いはあいつらだけね、冒険者ってのはすぐにいなくなっちゃうけどずっといるのはあいつらくらいかな」

（そっか、受付嬢ってのは一番新人冒険者と顔を合わせる・・・必然的に死んでいった冒険者とも・・・）

少ししんみりしたが、その会話をきっかけにポンポンと言葉のキャッチボール、フィンやリヴェリアだけじゃなくガレスの昔の話も聞かせてくれた、以外な話として、ローザも人伝に聞いた話らしいが、

あの3人はファミリア結成当初相当仲が悪く口喧嘩ばかりだったらしいということだ・・・信じられん、しかもフィンは今とは違いかなり生意気な性格だったとか・・・これは聞かなかったことにした方がいいな、いつもニコニコしている奴ほど切れたときの反動は怖いからな、あつそうだ、これ聞いといた方がいいか

「ここに書いた情報って後で変更は出来るんですか？」

「具体的には？」

「名前とか家族構成とか」

「無理じゃないよ、基本的に冒険者ってのは無数にいるからね、大雑把に言えば名前と所属ファミリアがわかっただけで問題ない、脛に傷を持った奴なんてめずらしくもないし」

「なる・・・じゃあこれでいっかな」

名前を書き込む部分で家名だけを書かずに書類をローザさんに渡す

「・・・ふーん、じゃこれで受理するよ、おめでどうこれで正式にあんたはこの街の冒険者だ、後はフィンは戻ってくるまでそこ等辺で大人しくしてな・・・これから頑張りなよ」

最後に優しげな感じで叱咤されたので、へーい、と軽く返事をして広いロビーの中に数本立っている太い柱に背中を預けて目の前の人並みを視界に入れていく、バイトのときは忙しくて眺める暇なんてなかったけど、「凝」を使っていると、見た目とまったく異なる冒険者の強さがわかって意外とおもしろい、ただやはりフィン達ほどのオーラを纏っている者はいなかった

それからポケットとしていると5分もしない内にフィンが奥から出てきた

「すまない、待たせちゃったかな？」

「いや、5分も待つてない」

「それじゃあ、これからダンジョンだ、準備は良いかい？」

「おっけー」

そんなわけでギルドを出る前に軽く装備の確認をしてから街の中央のバベルへ、そしてその下に広がるダンジョンへと向かった、バベ

ルに入ると最初に巨大な螺旋階段そして東京ドームかよと勘違いする程の広いドーム状の空間に出た、そこから30人が手をつないで並んでも余裕がありそうなダンジョンへの本当の入り口が見えてきた
自分達以外に何人もの冒険者が出て行ったり今から入って行ったりしている

(おお、なんかそれっぽい雰囲気あるなー)

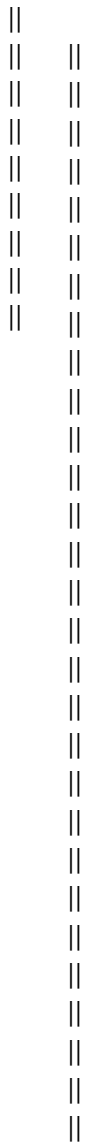
地味に感動だ、向こうの世界では一生お目にかかれないような光景だからな

「カイト、今回僕は基本的に手を出すことはないから自分の判断で進んでみてくれ、幸い上層の浅い階層ならソロでもほとんど問題ないはずだ、まあ、問題があったとしても僕がいるから最悪の事態は避けられると思つて緊張しつつ適度にリラククスしてくれ」

「んな無茶な、何だよ緊張しつつリラククスって・・・」

「はは、まあ、習うより慣れろってことだよ、じゃあ行つて見よう!」
「・・・おー。」

そんなこんなでついに、とうかようやくダンジョンに突入です。



《side：フィン》

(困ったなあ・・・)

現在、フィンは小走りです、といつても一般人からすれば短距離走における全速力に近い速度でカイトと共にダンジョンを走っていた

カイトと共にダンジョンに潜ったのはいいが目の前で起きていることに頭を悩ませる

「ほいほいつと、そりゃー!」

曲がり角から急に現れたゴブリンをカイトはまるで見えていたかの様に回避し、即座に反撃、しかも巧みなフットワークでモンスター
の死角から鋭利な籠手による抜き手で魔石を直接抉り出すという容
赦のない、しかし無駄のない動きでしとめている

現在の位置は2階層、本来なら1階層が限界のはずの新人団員はま
るで熟練のLv. 1冒険者のような立ち振る舞いでダンジョンを突
き進んでいた

(普通はもうちよつと気後れしたりするんだけどなあ・・・)

それどころかフィン
は聞いてしまった、見てしまった、初めてなら
誰でも緊張するはずのダンジョンでカイトは鼻歌をしながらまるで
楽しむかの様に闘う光景を。

『異常』『規格外』

フィンの頭によぎるのはそういった言葉だ

昨年、初めてアイズがダンジョンに潜った際にリヴェリアがアイズ
の戦闘を見たときの気分がようやくわかった気がした、ただ違うとす
るなら――

(カイトにはアイズと違って戦闘に対する不慣れや油断がない、しか
もさつきは無理だなんて言いながらきちんと気を張りつつ適度にリ
ラックスできている、というところだろうね、でも――)

だからこそ困った、とそう思う。

今のカイトを他の新人団員と共に訓練に参加させていいものか思
案する

明らかに他の新人団員との実力に差がありすぎる、はつきり言っ
て入ったばかりのカイトの動きや実力を目の当たりにした他の団員が
やる気や自信をなくしてしまう可能性がある

道中で話した限りではまだまだダンジョンに関する知識はそこら
辺の一般人よりは詳しいものの、新人冒険者に毛が生えた程度だった
ため、座学は一緒でもかまわないだろう

二日、いや三日程度で訓練を切り上げさせてダンジョンに潜らせた方がいいかもしれないな……

他の新人は午前を訓練にしてその間にカイトは勉強、入れ違えるように午後は他の新人団員が勉強会、カイトはダンジョンに、いやでもそんなことをしたら他の団員との交流が――

「おーいフィン」

思考の海に浸かっていたところにカイトから声がかかった

見ればカイトが3階層へと続く階段の前にいた

(しまったな、考え事に夢中になりすぎた)

フィンの実力からすれば上層の、しかも2階層など昼寝所か熟睡しながら突破出来る程度の階層ではあるが、新人であるカイトがこれ程早く進むとは計算外であった

(正直彼がどこまでいけるのかを見てみたいという気持ちもあるけど、初めてのダンジョンで3階層は早すぎる、ここは――)

「フィン、今日はここまで戻ってもいいか？」

自分が言う前にカイトから撤退を言われたことに内心で少し焦るが、それをおくびにも出さずに返答する

「……まだ余裕があるように見えただけどいいのかい？」

「ああ、確かにまだ余裕はあるっちゃあるけど『まだ行ける』って思った時点でそれは危険サインだと思ってるんでな、それにこのあと勉強会とやらもあるし勉強中に居眠りしてどやされるのは勘弁願いたい」

軽くおどけて見せるカイトは確かにまだ余裕があるように感じるが、それでも撤退を選択したカイトの判断に舌を巻く

(この年齢で、この実力にこの判断力か……未恐ろしい、いや……これから頼もしいと思うべきだね)

「え……あれ、撤退だめなのか？」

無言の自分を勝手に勘違いしたカイトが慌て始める、先ほどまでの異常な姿とはかけ離れたその姿に苦笑を禁じえない

「ふふ……いやすまない、うん、かまわないよ、午後の勉強会で居眠

りをされたら監督役だった僕までリヴェリアに怒られそうだしね」
「うわゝ、もしかなくてもリヴェリアって勉強とかに対してスパル
タだったりする？」

「まあ、そこそこかな・・・ちなみにアイズは二日で逃げ出した」
「・・・マジでか」

そこからは軽く談笑しつつ元来た道を逆走することに、もちろん帰
り道でもしっかりとモンスターと遭遇するのでカイトがそれを一掃、
その光景を見つつ改めてこの鬼才とでも呼ぶべき子を見いだした己
が主神の昨夜の取り乱し方に納得する

(Lv. 1のそれも初期の状態でこの実力・・・ロキ、君が興奮する理
由がよくわかったよ、でもこれなら僕が遠征で最前線に専念できる日
も近いかもしれないね・・・ふふ、今から楽しみになってきたよ)

今ではオラリオでも屈指の大派閥となったロキ・ファミリア、団員
も実力者が多くダンジョンの遠征も人数が増えたことで昔に比べ遙
かに大規模となった、だがその弊害として団長であるフィンヤリヴェ
リア、ガレスといった幹部は団員たちへの指揮が主な役割となり、昔
のように前線に立つことは少なくなってしまった。

Lv. 6に到達してから数年、もうそろそろ自身のためにも、そし
て何より一族再興のためにさらなる名誉を求めて前線に戻りたいと
思い始めていた、そしてそんなことをふと思いだした矢先に逸材とも
呼べる人材が文字通り転がり込んできた

(アイズの実力は問題なくこれからも上っていくだろう、だが全体を
見通せる指示を出せるようになるかと言われると、今の状態を見るに
難しい、でもカイトなら・・・)

現時点でこれほどの視野と判断力を持っているのなら、幹部、もし
くは自分の後釜として育成するのはありだ

(この子は稀有な人材だ、逃さないように多少の事は多めにみるつも
りで接していこう・・・そしてゆくゆくはすべて押し付けオツホンゲッ
フン・・・任せる。・・・ふふふロキ・ファミリアの未来は明るいなあ)

心の中でケケケと笑う

カイトの知らない内に実は腹黒い勇者が真っ黒なそろばんを叩き

始めていた

《side out:フィン》

|||||

コボルト2匹を悠々と相手をしている最中に一瞬寒気を感じたが特に何もなく討伐が終わったので気にしないことにした、というかそんなことがあまり気にならない程に今の俺はテンションが高かった(神の恩恵という奴は最高だな!!)

昨日までの自分とは全く異なる程の身体能力には自分自身で驚きと興奮が隠しきれない、おっさんに殺されかけたのは最悪だったが、それに対する見返りはでかかった、身体能力が上がったただけではなく、あれ程制御が難しかったオーラの部位量制御を行う【流】が少し楽になっているということに加えてオーラを自身から円形状に展開しその中での全ての動きを知覚することが出来る【円】というチート級の技が使えるようになっていた、まあ使えるところでも半径4mが限界だったけど・・・ノブナガさんちよりっすwww!!

だがそれでも上層のモンスターを相手にするには十分すぎたようで俺TUEEEEEEEE!といった状態だ

そんな精神状態なので先程自分から撤退を進言させてもらった、命の取り合いでは調子に乗った者から死んでいくとどっかの偉い人も言っていた気がするし

その後は何事もなく無事にダンジョンから地上に帰還

ギルドで魔石を換金して3000ヴァリスを受け取り、初の冒険者としての稼ぎを喜びつつ本拠に戻った、ちなみにじゃが丸くんの屋台でのバイト代は日給平均600ヴァリスなので一気に所得が5倍になったことになる、やったぜ!

◇◇◇◇

本拠に戻ったあとは食堂で昼飯を済ませてから軽く休憩を取った
そして今は他の団員と共に勉強中である。

他の団員やラウルもウンウンと唸りながらやっているが、受験戦争
体験者にとつてこの程度は特に苦にならない

パツパツと要点や重要な所を押さえてから細かい所は関連付けで
覚えていく

暗記系というのはいかに覚えるかではなく、いかに自分に思い出さ
せるかが勉強のコツなのだ

「・・・リヴェリアこれで全部できたと思う」

「ふむ、では採点をするので少し待て」

本日の勉強会最後の締めである確認テスト、一番に解き終えたので
先生役のリヴェリアに採点をしてもらう

「・・・どう？」

「・・・ふむ・・・むう・・・合格だ」

「いや、なんで面白くなさそうに言うんだよ」

「間違えすぎるのも腹が立つが、余裕綽々で一発合格されるのもテス
トを作った者としては面白くないものでな」

「副団長すげえめんどくせえ！」

そんな風に話しているとテストを解き終わった他の団員がチラホ
ラとリヴェリアに採点を頼みに来た、採点の邪魔としては悪いので机
に戻って今日教えてもらったことを軽く復習しているとラウルが肩
を落として採点から帰ってきた

「どうだった——・・・てのは聞くまでもないみたいだな」

「うう、夕食の後に再試験って言われたっす」

「どうやら不合格者は再試験らしい、おそらく合格するまで続くんだ
ろうなあ・・・」

「はあ、カイトは一発で合格だったすけど何かコツとかあるんすか？」
「んー・・・まあコツかどうか分からんが覚えたことをどういう風にす
れば思い出しやすいのか自分で色々試してみるのがいいと思うぞ？」

この後ラウルに効率の良い勉強方法を教えつつ勉強を見てやった
らあれよあれよと他の団員にまで教えを請われてしまった

め、めんどくせえ・・そう思っていたらリヴェリアに人手が足ら
んでこれからも確認テストに合格した後は手伝えと言われてしまっ
た

あれく俺ってば入団したばかりのヒヨコちゃんなのに何で先輩方
の勉強も見ることになってんだ・・解せぬ、その後、結局夕食の後
も勉強会に付き合わされた

この日、新人団員ですらこき使う現状に俺の中でロキファミア、
ブラックファミア説が浮上したのは仕方がないと思うわけだよ、う
ん。

まあ、他の団員との交流がてらに教えてやるとしますか！

12：思惑×日々

|||||

《side：ロキ》

今は夕食が終わり、それぞれの団員がゆったりと過ごす時間帯

うちの部屋にはフィンとリヴェリアとガレスの幹部メンバーが集合しとる

ただしその内のフィンとリヴェリアだけが頭を抱え、うちとガレスだけは笑いを堪えるのに必死やった

「いやー、それにしてもカイトは予想の斜め上に突っ走るなあ?」

「ガツハツハツハツハ！当たり前じゃ儂が認めた男じゃぞ！それぐらいわけもないわい!!」

今、フィンとリヴェリアが頭を抱えとる理由はカイトが何か問題を起こしたからやない

むしろその逆、何も問題がなさすぎる、端的に言って優秀すぎるということが問題になってもうた

最初のフィンからの報告では既に上級レベルでの探索が可能な実力に加え、自分の実力に驕らず油断もせずさらに余裕のあるうちに撤退を選択できるほどの判断力まであるとのことや、それを見てフィンは早急にカイトの訓練の質を上げて、ダンジョンに潜らせた方が本人のためにも良いということやった、将来的には最低でも幹部、できれば自分の後釜に納まって欲しいほどの人材らしい、カイトの訓練の質やダンジョン探索を積極的に行うというのにも驚いたのに最後の自分の後釜候補発言にはうちら全員の動きが固まってもうた

そんなフィンの報告の後にカイトに勉強を教えたというリヴェリアからの報告では、驚く程に知識の覚えが良く、また面倒くさいと言いつつも他の者に勉強を教えるくらいには面倒見が良いとのことや、カイトより先に勉強会に参加してた子たちですらカイトに教えても

らっているくらいには優秀とのことや、そんなカイトを見て今度はリヴェリアが自分の補佐として育てたいと言ってきた

これに対して教育係の主導を任されたガレスが何か言うかと思たら、戦闘面を自分が育てられれば他は別にかまわないと言ってきたるので現在ファミリアの団長と副団長が武をメインにするか文をメインにするか、それとも欲張ってどっちも英才教育するかで悩んでるっちゅー状況や

文武両道、天は二物を与えたっちゅー奴やな、チートここに極まれりや！

さてここで問題なのがカイトのこれからの育成方針についてや、カイトが才能に恵まれた子だとしてもあからさまな最良は他の団員との無用なトラブルを引き起こす、かといって他の団員と同じようにしてもせっかくの人材を腐らせるだけじゃなく、その才能を目の当たりにした他の団員のやる気を削ぐことになってまうかもしれん

あっちを立てればこっちが立たずな状況にうちらは頭を悩ませてる

どないしたもんかなーとうちらが頭を抱えとると

「・・・一応、儂には良い考えがあるぞ」

意外にもガレスから発言があつた、ただ発言するときの顔がものすごく悪巧みをしているときのうちの顔とそっくりやったことからカイトに対しての意趣返しの意味もあるんやろうなー、ただそれが良からうと悪からうとそのアイデアは確かにかなり無茶ではあるものの妙案とでも言うべきアイデアやった

他にも良い考えが思い浮かばないのでとりあえずしばらくはガレスのアイデアで行くことになった。

さーて、これが吉と出るか凶と出るか、神のみぞ・・・いや、神すらもわからんなあ？

まあ、カイトはここ数週間は地獄を見ることになるやろうけど頑張ってるなー？

《side out:ロキ》

んだねえ（笑）」

といった感じでこちらを挑発してきやがる

騙されてはいけません奥さん、実は三十歳を超えたアラサーシヨタの腹は真っ黒でした

そんなわけで現在脱走中、時間は深夜の丑三つ時

コソコソと夜逃げのように逃げ出す、ほとぼりが冷めてから戻ってこよう、

あ、ちなみに先程俺は逃げると言ったが違う、そう、これは・・・
一時的な撤退である！

十分な休息を取りしかるべきときにアイウイルビーバツクするための対処療法なのだ！

（夢を叶える前に俺の身体が保たない・・・幸いスマイルデビルな団長との無茶なダンジョンアタックのおかげ・・・とは言いたくないが資金は十分、これで――）

「おやあ？　こんな夜更けにどこに行くつもりなのかな・・・カイト？」

「!!??」
振り向けばどこぞのセーラー戦士の様に月をバツクに屋根の上に立つ影

「げえ、フィン!？」

驚く間もなく別の方向の屋根から声が掛かる

「まったく、子供は寝る時間だぞ・・・カイト」

「リ、リヴェリアまで・・・いや、これはちよつと夜風に当たって散歩を」

さらにまたまた別の方向の屋根ry

「そんな大荷物を持ってかの?・・・カイト?」

「おっさん!？」

(ツクソ！やっぱバレたか!!)

ここにきて俺の企みが三人にモロバレだったことに気付く、だが俺はそこであきらめたりはしない、即座に三人のいない方向に反転し自由への一時撤退を敢行する

「ぬおおおおおおおおおお!!」

走れ!! 走るんだ俺!!

誰よりも早く光の速さで駆け抜けりゆんだああああああああ

「「逃がさん」」

異様に目がギンギラギンの悪魔共がニヤリと笑いつつこちらに向かって跳んでくる

「くそがああああL v. 1の新人にL v. 5が三人がかりとか恥ずかしくねえのかあんたらは!？」

おれの全力疾走もむなしくあつさりと地面に叩き付けるように拘束される

だがそれは予想済みだ!!

「ぬおおおおおおおお」

蛇の脱皮が如く、重ね着していた服を脱ぎ脱出!!

「甘いわ！すぐに捕らえうおお!!」

「おい！引っ張るな!?!お前が引っ張るところがちがぬわあ!?!」

ちなみに脱いだ服には強力接着剤を塗布して動きを封じるようにしてある

「ふははははははは、これぞ忍法”空蟬の術”じゃあ!!さらばブラックすぎる職場！そしてこんには自由!!」

「まだまだ甘いよ」

「なぬう!?!」

どうやらフィンはお馬鹿なおっさんとリヴェリアとは違い引っ掛からなかったようだ

「だが、喰らえ!!コシヨウ弾!!」

「ははははは効かないなあ、そりゃ!」

「う、打ち返すだもげっほげっほぎゃあああ」

それからこつちが次々と飛び道具を出すも全て交わされるか逆にこつちが喰らい、そんなことをしている間に復活した怒りと恥辱やその他もろもろの感情により鬼と海龍に覚醒したLv. 5により俺は捕縛された・・・ちよつやめ、無理だから人間の関節はそつちに曲がらんカヒユ・・・

《side：ラウル》

『ピギイイイイイイイイイイイ』

屠殺される豚の様な悲鳴が聞こえてくるっす

現在自分は吹き抜け廊下からもはや8回目になる脱走劇をボケツと見ていたっす、ちなみに一人ではなく自分以外にもギャラリーがチラホラ見えるっす、中には今回カイトが何分持つか賭け事を始める者もいたっすよ

「ふわあくあ・・・なんのさわぎよー・・・」

渡り廊下の入り口から同期で猫キヤットヒーブル人のアキが眠そうにしながら来たっす

「あれっすよ、またカイトがさぼり脱走しでかしたんすよ」

「また〜？ これ何度目よ、いいかげんあきらめればいいのに・・・」

アキは呆れてるけど自分は仕方がないのでと思うんすよね

なにせカイトが入団してから数日して徐々にっすけどカイトに対しての訓練や教育が倍々で厳しくなって、今では自分を含めた他の団員もあまりのスパルタっぷりにドン引きしてるっす

ただすごいと思うのは団長達のスパルタっぷりだけじゃなく、それを全てギリギリでもクリアするカイトの負けず嫌いな所っす

イヤだイヤだと泣き言を言いつつも結局ボロボロになりながら団長達の訓練や課題を次々とこなしていく姿は自分たちも頑張らねば

と奮起させてくるつすよ

ただ問題があるとすれば団長達が予想以上にカイトが無理難題をクリアしていくのを面白く感じてしまったのか、ただでさえ厳しい内容にさらにとんでもない訓練を最近は課すようになり、そしてそれに負けじとカイトがクリアし、そしてさらに厳しい課題が――、というように負のスパイラルが発生し、ついにその我慢の限界を超えたカイトが脱走劇を一月と半前に起こしたのが始めとなり、それ以来このようなイベント? が起こるようになってしまったすよ

「それにしても、ガレスさんはともかく団長や副団長まで一緒になってこんな無茶をカイトに課すなんてらしくないと思わないっすか?」「さあね、とりあえず私は今のカイトを見て生まれて初めて自分に才能とかがなくてよかったと思ったわ、まあでも偶にその才能に嫉妬やあこが r 『WRYYY!!』メキメキメキ

「……………」

「また悲鳴が……最近カイトって人間やめてないっすか?」

「…………いや、ほんと才能がなくて良かったと心の底から思うわ」

「普通が一番すよ、普通が」

うんうん、とお互いに頷いてからお互い自室に戻ったす

騒ぎが終わってしばらくした後自室で寝ていたらガレスさんが泡を吹きながら簀巻きにされたカイトをベットに放り出して去って行ったつす……南無。

《side out:ラウル》

ネバーギブアップという言葉がある

決して諦めずに何度でもリトライするということだ

つまりはゲームとかでよくあるコンテニューのことなのだが

何度もクリアできないラスBOSを倒すにはどうすればいいのか・・・答えは簡単だ。

『レベルを上げて物理で殴ればいい』

だが悲しいかな・・・この世界でレベルはゲームの様には簡単には上らない、むしろそんな簡単に上ったらえらい事になるがな

レベルというのがどれくらい大事なのかというと、そうだな・・・わかりやすく別の漫画で例えるなら、科学と魔術が交差する超能力者達の基準だと思えば分かりやすい

最高Lv. のLv. 5、その第一位で『圧縮ウ♪圧縮ウ♪』『クケケケケケケケ』『ツイッーーーーー!!』とか頭のおかしい発言なのだ、ならば同じLv. 5のフィン達がおかしいのも当然な話ナわけだ

閑話休題

今現在、俺は呼び出しをくらってロキの部屋にいた

大方昨夜の脱走もとい一時撤退の件に関してだろう、だが俺にもきちんと言い分がある、入団してからの周囲とは明らかに異なる訓練内容と量

今まで無言の圧力ではぐらかされてきたが今日こそは文句の一言や二言は言わせてもらう

「まーた、訓練サボろうとしたんやって?」

「サボりじゃない、一時撤退だ」

「いや、一緒やからそれ」

「後ろに向かって前進しようとしただけだ!」

「やから、意味一緒言うてるやろが!!」

ぎゃーぎゃーと言いつけ合をするが今日こそはロキに聞いたですと

決めているのだ

「おいロキ・・・ちよつとマジな話しようぜ」

「・・・なんや」

俺の真面目な雰囲気を感じ取ったのかロキがとりあえず黙ってくれた

「正直、最近・・・というか最初からだ俺の扱いがおかしすぎるだろ、訓練も勉強も他の奴らより倍つてのはよ?」

「それだけ、フィン達が期待しとるっちゅーことやろ」

「それでも最近はやりすぎだろうが!」

念能力を全開でフルブツパしてもかなりキツイ、俺じゃなかったら死んじゃってるよ

「ただのかわいがりにしても限度がある、せめてここまで急激に訓練を課す目的を教えてくださいとこつちのモチベーションが維持できないんだよ」

俺だつてフィン達がただの面白半分でこんなことをさせてくるとは思わな・・・いやどーだろうな、やりそうな気がする、いやでも・・・だがしかし、毎度毎度、俺がギリギリより少し無理な感じの課題をさせるのは相当俺のことを見ていなければできないわけだから――

そんな風にドS幹部達の少ない良心について考えているとロキが観念したように口を開いた

「・・・ん・・・はあ、そやなあ、カイトは口が堅そうやからええかなあ・・・」

――間。

「なめてんのかごらあ!!」

ようやくロキから聞き出した内容はアホみたいな内容だった

「特別扱いすると他の団員のやつかみがあるかもしれないからって、文句も出ないくらいに厳しい訓練ってなんじゃそりやあ!?!」

いらんわそんな扱い!!

「あははー、まー絶対文句言われると思うて言えなかつたんよ」

「あーはいはい、短い間でしたがお世話になりましたー」

「ちよ!?カイトどこ行くねん!」

「うっさい黙れ!実家に帰らせて頂きます!!」

「後生やああああ!うちんこと見捨てんといてやあああ!!」

「は な せ え え え え !!」

部屋を出て行くこうとする俺の腰にへばり付くロキを引きはがそうとするも中々剥がれない、なめくじかこのアホ神は!

「まって!まってや!!まだ他にも理由があんねんて!」

「・・・んだよ、他の理由って」

一応聞くだけ聞いたやるために部屋を出る、というかファミリアを出て行くことを一旦保留にしてやる

「あんなー、その、あれや、アイズの新しいお目付役が早急に欲しいんや・・・最近のアイズは多少は落ち着いたけど、それでも一般の冒険者の視点からすればまだまだ過剰なダンジョンアタックを繰り返しとるのと変わらなくてな? それを押さえる人材、もしくはこれから成長次第でアイズの相方を務められるようなんがカイトくらいしかおらんねん」

「お嬢のお目付役にはフィン達がいるだろ」

実際ここ数ヶ月俺に訓練(拷問)をしていないときはお嬢に付き添ってダンジョンに行っていたはずだ

ちなみにお嬢というのは俺がアイズを呼ぶときの愛称みたいなものだ

「無理や、今まではそれでよかつたんやけどな・・・ここ最近闇派閥達の行動が激しくなってきたな、正直今でもフィン達の手が届ききつとらん」

それも知っている、オラリオに来る前からはチラリと、そして来てからは実体験を持って闇派閥の厄介さは身にしみている

爆破テロから殺人、暗殺、良派閥ファミリアへの過剰なまでの攻撃、弱小ファミリアへの一方的な虐殺とも言える攻撃など、奴らが犯した悪行を挙げればキリがない

そいつらを捕縛し闇派閥に所属するファミリアの主神を天界に送還、もしくはオラリオから永久追放するのがオラリオでも最大派閥の片割れでもあるロキ・ファミリアの暗黙の義務となっている、有名と無名との差はなまじっか良いことだらけではなく余計なしがらみも付いてくるということだ。

ガレスのおっさんも、奴らのせいで中々大規模遠征に行ける時間が作れないとぼやいていた

実際、俺が入団してから未だに遠征が一度も行われていない

案外遠征に行けないストレスも俺の訓練（拷問）にぶつけていたのではないだろうか・・・

だが、お嬢の面倒を俺に押しつけるため、早急に訓練のレベルを上げるってことは

「・・・もしかして近いうちに闇派閥への大規模作戦でもあんのか？」

ロキの表情は変わらない、だが腰にへばり付いているロキの身体に一瞬力が入ったことで疑問が確信に変わる

「・・・カイト、それマジのマジで外でもホームでも口に出すんやないで、思わせぶりな事を言うことも禁止や、主神権限での絶対命令や」

ロキの目が開いて瞳孔が丸見えのマジ顔モードで言ってきた

さすがにマジもんの神様なのか真面目モード迫力は背筋に氷柱でもぶち込まれたかのようなプレッシャーだ

「・・・わかってる」

萎縮するのは悔しいのでぶっきらぼうに返事をする

「カイト、重く感じるやろ思て口に出して言わへんかったけど、うちやフィン達は正直な所カイトにはめっちゃ期待しとるんよ、アイズに続く将来のエース級候補の団員、しかも今はまだアイズよりレベルは低くても冷静な思考や分析力はアイズより上や、これでレベルがアイズと同じになれば諸手を挙げてアイズの面倒を任せられる、期待するなって言う方が無理な話やっちゅーねん」

今度は先程の威圧感を感じさせない、むしろ真逆である母性を感じさせるような優しい声で背中がむず痒くなるような事を言ってくる

「だったら、もう少し大切に扱えや！ 訓練で身体がぶっ壊れそうな

んだが!？」

「ダイジョウブ! ダイジョウブ! フィンタチヲシンジテ!!」

「何で片言やねん!!」

うっかり関西弁でツツコんでしまった

とりあえずこの後フィン達にも事情を説明し、お互いの情報をすり合わせたおかげで以前より多少は訓練内容がマイルドになった

ただ今回の案を発案したと言うガレスのおっさんには例の卵焼きを今度はきちんと食べさせてやると脅したら青い顔をしていた、ザマアw。

襲撃編!

13：倍増×倍増 前編

オラリオ南東・第三区画、時間は既に日も大分前に落ちた時間帯
色欲の街区とも呼ばれる第三区画を一手に牛耳るイシュタル・ファミリアの本拠『女王の神娼殿』^{ペーレト・パベリ}で二柱の神が対峙していた

対峙していると言っても片や冷や汗をかき、もう片方の神はニヤニヤとしてはいるが全身から今にも吹き出しかねない憤怒が漏れ出し、飄々としている普段からは想像できない威圧感を放っている

「それでえ、この落とし前どうやってつけたるか、おどれらは滅ぼされる覚悟は勿論あるんやろなあ？」

威圧感を放っているのはロキ、言わずと知れたオラリオの双璧を為すファミリア、その片翼である、そして冷や汗をかいているのは美の女神イシュタルである

「ま、待てロキ、今回の件、私は完全に関与していなっ『ガン!!』ひっ」
「・・・イシュタル、うちはいい訳聞かためにならぬぞ足運んだんとちゃうんよ、お前んとこのガキがうちの子に手を出した、しかも襲われた4人のうち2人は重傷、その内の1人に至っては瀕死で万能薬使^{エリックサー}うてもまだ生死の境をさ迷うくらいに衰弱しとる」

ロキは今でこそ大人しくなったが、かつての天界では領土を無視して誰それかまわず、文字通り見境なく殺し合を吹っかけてくる手の付けられない暴れん坊であったのは神々なら誰でも知っている、そしてかつてのその姿を実際に目の当たりにしたこともあるイシュタルは焦りに焦っていた

(くそっ、どうしてこんなことにつ、あのガマガエル女なんて事をしでかしてくれたんだい!?)

——事件が起こったのは今から二日前。

イシュタル・ファミリアの団長、『男殺し』^{アンドロクトノス}フリユネ・ジャミール

によるロキ・ファミリア所属の『劍姫』アイズ・ヴァレンシユタイン及び下級団員3名への襲撃

しかし、駆け付けたフィン達のおかげで襲撃は失敗。

ちなみに、フリユネの動向を怪しんでいた同じイシユタル・ファミリアの構成員からイシユタル本人に密告があり、その報告を受けたイシユタルはすぐさま事の顛末をロキに知らせた、おかげでフィン達の救援は間に合ったが事は既に起こった後であった。

ただ、死者が出なかったことが不幸中の幸い、そうでなければロキはこのような話し合いの場など用意することなく問答無用でここを襲撃してきていただろう

(下手な手打ちを行えば、こちらが潰されるか・・・くそ)

数日後、

ロキ・ファミリアはイシユタル・ファミリアから多額の賠償だけでなく、希少なマジックアイテムや魔剣を譲渡させることで手打ちにした

余談だが、このときの賠償のせいでイシユタルのとある目論見は大幅に遅れることになる

|||||
|||

——二柱の神が話し合いの場を設ける二日前

場所は上層の10階層

「お嬢、前方1時方向にオーク3、同方向45度にインプ2」
「ん！」

『円』でいち早く相手の構成を読んだ俺がパーティメンバーに報告するやいなやアイズが相手に向かって飛び出す

独断専行気味だがもう慣れたのでこっちがお嬢に合わせる様に動く

「オークは俺とお嬢、インプはラウルとアキで対処、こっちが済み次第すぐに来るから最悪時間を稼げ、もしくは倒せるならそのまま倒してくれ」

「了解！」

お嬢に遅れること数秒、着いたときには3体の内一体が腕を切り飛ばされて頭をかち割られていた

「おいおい、あんまはりきりすぎないでくれよ、俺の分の獲物がなくなっちゃう」

お嬢の後ろに迫っていたオークを抜き手で魔石を抜き出して瞬殺しながら愚痴る

「早い者勝ち」

「さいですか、じゃあ残りは——」

俺がもらつちやうぞ、と言い切るまえに文字通り目にも止まらぬ速さで残りの一体をアイズが袈裟切りにする

「だああああ、早すぎるだろ!？」

獲物を先に倒されたのは悔しいがそれよりもラウル達の方の救援に向かう

「ってこっちも終わってるし!?!?! あれ、ラウルどうした」

現在のステイタスでは2人がかりでも相手にするのが厳しいはずのインプを倒しきったというのに何故かラウルだけが項垂れていた

「うう・・・アキに踏み台にされたっす」

「しかたないでしょー、最後のインプが飛んで逃げようとするんだもん、仲間とか呼ばれたら厄介じゃん」

「だからって何も顔を踏み台にしなくていいじゃないっすかー」

顔を上げたラウルの顔面には綺麗な足跡が残っていた

「・・・ぶっ」

「カイトはともかくアイズさんまでヒドい!？」

現在俺たちはパーティを組んで上層の中でも中層に近い10階層にきていた

アイズを除く、俺を含めた三人は本来ならこの階層はまだ早すぎる、だが俺がパーティに入るという条件でなら9階層まで、さらにアイズが加わった場合は11階層までの進出が認められていた。

無事に戦闘を終えてひとまず弛緩した空気が流れる、もちろん最低限の警戒は維持したままだ。

そのおかげで誰よりも早くこちらに迫ってくる何かに気付けた

(な!?)

『円』を張りつぱなしにしていたおかげで全員の顔面に向かって飛んでくる拳大の石を閃知

しかも当たれば大怪我ではすまない速度、声をかけてはとてもしゃないが間に合わない

(やばい!?)

判断は一瞬、気付いたと同時に身近に居たアキを押し倒してなんとか回避、だが残りの2人には声を掛けることすら出来ていない、一瞬最悪の光景を想像する

(ラウルとお嬢は!?)

お嬢の方を見るとラウルを突き飛ばし、自らは屈むことで難なく回避していた

「さっすがお嬢、そこにシビれる憧れるってな!」

「ちよつ、カイト!?!なにすん「敵襲!!」!?!」

押し倒したことでアキが文句を言ってくるが俺の言葉を聞いてすぐさま寝たまま体制を立て直し、すぐにほふく前進でその場から移動する、移動してからすぐさま先程まで居た位置に凶悪な速度の投石が襲ってきた

「っ……なによこれ!？」

ほふく前進しながらアキが悪態をついてくる

「だから敵襲だつて、しかもたぶんモンスターじゃなくて人の」

この階層でこの速度の投石が出来るとなるとモンスターは存在しない、そこからおのずとこれが人による襲撃であると説明する。

「まさか、イヴァイルス闇派閥じゃないでしょうね……」

「ひいひいひい死ぬつまじヤバイっす!？」

いつのまにかラウルとお嬢も合流していた、つてかラウル無駄に洗練されたほふく前進だな……

「落ち着けてラウル、ちったあお嬢を見習え、あと騒がしいと集中的に狙われるぞ」

「~~~~~!!!」

「ちなみに、お嬢、こんな感じの襲撃に心当たりは？」

「んー……わかんない」

「さいですか……」

まさか、ダンジョンでの初ピンチがモンスターではなく人の手によるものになるとは

(それにしてもイヴァイルス闇派閥の襲撃？　こんな浅い階層でわざわざ低級の俺たちを？　なんの意味があるんだ、人質とか？　くそ、せめて9階層ならまだ楽に対処できるんだが)

10階層からは初のダンジョンギミックとして霧が発生するようになってくる、そのためこのような遠距離からの襲撃の場合、目視での確認が困難になる、ちなみに俺の『円』の半径は初のおためしダンジョンから数ヶ月、リアルに血のにじんだ努力の結果半径20メートルまでは伸びた、だがこの程度の範囲では遠距離の相手を感じるのは不可能だ、放ってきた何かを感知して何とか避けるくらいが精一杯だ

(このままじゃ、相手に一方的に攻撃されて捌られるな……)

石が飛んできた方向から相手の位置を移動していることを含めて大凡で推測する

(問題はどうかやって相手の遠距離からの攻撃をいなしつつ接近……は

駄目だ、先程の攻撃から相手はおそらく格上・・・逃げるしかない）
状況分析から現在の最善手は一つのみと判断する

「全員聞いてくれ、相手はおそらく格上の冒険者、しかも複数の可能性もあるんでここから全力で逃げる、異論はないな？」

全員が俺の提案に頷いてくれる

「よし、じゃあ——」

「逃がさないよおおおおおお」

ズドン、という衝撃音と共に全身鎧を着込んだ、おそらく今回の襲撃をしたであろう敵が逃げようとした方向を塞ぐように降ってきた
「ゲツゲツゲツゲツゲ、最初のでやられてりゃいいものを生意気だねえ」

鉄仮面の中から聞こえてくる不気味な声はつぶれたガマガエルを想起させるような醜い声だ、手に持っている強大なスパイクと相まって余計に嫌悪感を与えてくる

「はあああああ——！！」

問答無用でお嬢が斬りかかる、おそらく相手は上級の冒険者、この中ではお嬢のレベルが一番高いため先手必勝は正しい判断ではあったが・・・

「甘いんだよおおお！！」

「くうっ！」

「お嬢！」「アイズ!?」「アイズさん!？」

L v. 2のお嬢があっさりと吹き飛ばされた

(やっばL v. 3以上か！)

「アキ、ラウル!!全速で救援を呼んできてくれ、時間は俺とお嬢で稼ぐ!!」

いつもの余裕もかなぐり捨てて全力で叫ぶ、こいつ相手にはマジで余裕はない

「で、でも!!」

「行け！早く!!」

「させると思ってたのかい！」

お嬢が復帰する間、先にこちらを仕留めると決めたのか襲撃者が襲ってくる

(オーラ!!全!!開!!!)

「早く行けええええ!!」

「ぬがぁ!!」

こちらをただのLv.1と思い油断していた所に後先を考えないくらいオーラを込めた体当たりをぶちかます

「でりやああああオーラオーラオーラ!!」

そのままの勢いでアキとラウルから襲撃者との距離をとらせるためにオーラを噴出させるようにして一緒に吹っ飛ぶ

「ぎ、ぐ、こ、このっ…調子に乗るなこの雑魚がぁあぁあぁ!!」

「ぐばぁ!」

吹っ飛んだ勢いが無くならない内に地面に叩き付けられる

「雑魚がこのアタシに何してくれてんだ、このクソビチグゾ野郎がぁあぁオーラ!!」

「ぐうううううあぁあぁあぁオーラがはっ!」

地面を紅葉下ろしよろしく引きずられて振り回されたあげく、投げ飛ばされてダンジョン内に生えていた木に叩き付けられた

(ぐお・・・やっべえ、まじで死ぬ)

後先考えずにオーラを全開にしていたのが功を奏したのか、幸いなことに深刻なダメージはそれ程なかったがそれも時間の問題だった、このままでは早急にオーラが尽きてしまい立っていることすらままならなくなってしまう、そうなれば後はただの人間サンドバックだ。

だが身体を張ったかいてもあってアキとラウルは離脱に成功したようだった、すでに先程居た場所にはその姿が確認できなくなっている、おそらく襲撃者の方も一緒だろう

「ちっ、面倒な、すぐに追いかけて殺してやろうか」

「させない」

アキとラウルを追いかけようとする襲撃者の前に復活したお嬢が

立ちほだかる、かつこいいなおい・・・ちなみに俺は現在死んだふり
をしている

「・・・ゲツゲツゲツゲ、まあいいさ、元々の目的はあんただから
ねえ」

「わたし？」

「そーさ、最近調子に乗ってるガキがいるって聞いてねえ、世界記録だ
かなんだか知らないが男神を含めた男共がうるさいったりやありや
しない、その不細工な面ズタズタにして二度とダンジョンに潜れない
くらいに痛めつけて、ガキに世の中の厳しさを教えてやろうと思つて
ねえくゲツゲツゲツゲ」

（うっわ、くっだらねえそんな理由で襲撃したのかよ・・・）

どうやら闇派閥イサイルスではなく敵対ファミリアによる襲撃のようだ、しか
もファミリアというか個人的で理不尽な怨恨によるものっぽい、しか
も口調や会話の内容から襲撃者は女のようなだ

・・・あれが女？

ゴリラに豚の贅肉を十倍にくつつけたような体系、声を聞いた
者に不快感しか与えないような・・・あれが女!?

「そんなことのためにこんなことを？」

「そーさ、あんたはそんな理由で潰されるただの雑魚って事だ！お
らあ!!」

俺が目の中の現実にフリーズしている間にもお嬢と敵の戦闘が激
化していく

『おい、どーすんだこれ、呼びだされて出てみりや大ピンチじゃねー
か』

死んだふりの俺の横に居る『ジャンプパイレーツ』が小声で話しか
けてくる、

何を隠そう、お嬢に全部丸投げで死んだふりをしていたわけではな
い、実はこつそりこいつを召喚していたのだ

ちなみに既にスロットの方も回し済みだ

「それで数字は？」

『6だな』

「6か・・・」

初めての数字だ、というか今までデメリットがやばすぎるので初めて使って以来フィン達から使用を禁じられていた、暇なときに話し相手としてこいつを呼ぶことはあってもスロットを回すことはなかったがさすがに今回は緊急事態だ、デメリットを鑑みても使用をためらう理由はないだろう。

そんなことを考えている間にスロット番号『6』の能力についての知識が頭の中に染み込んでくる

・・・こいつは、また、なんというか、えー・・・

強力なのは間違いないが俺の身体が耐えられるかわからない能力だった。

だが、目の前で徐々に、しかし確実にお嬢を追い詰めていくこの格上の襲撃者をどうにかするには多少の無茶はしなければならぬ
覚悟を決めて起き上がる

幸い、敵はこつちに気付いていないので『練』を全開にしつつ能力を使用する

「第一開門・・・開!!」

纏うオーラの総量が一気に倍になる

俺の頭の中に刻み込まれてきた『6』の能力は『八門遁甲の陣』

前世ではおそらく世界一有名な忍者漫画に出てきた禁術の一つ

その能力は単純明快、本来なら身体に負荷がかからないように無意識にセーブしている力を強制的に解除し、文字通り限界を超えた動きができるというものだ

(やっぱ、この技けつこうキツツううう)

ただし、この技は先程も言ったように無意識のブレーキを外すため身体に多大な負荷がかかるというデメリットが存在する、身体にかなるの負荷がかかるのがわかるが止めるわけにはいかない

「ヨォー！ブジかアおジョー！？」

「カイト!？」

乱入してきたのは先程まで気絶していたはずのカイトだった……
声が裏返っているのは何で？

14：倍増×倍増 後編

現在フィンはダンジョン上層を自身の持てる限りの速度を持って全力疾走していた

(Lv. 3、それもLv. 4にランクアップ間近の冒険者に襲撃されればカイトやアイズが居てもかなりマズイ)

事の起こりは自分がギルドでガレスとリヴェリアと共にギルド員と今後の闇派閥イヴイルスの対策について部屋で話し合いをしていたとき

ロキから使いとして言づてを頼まれた上級団員が息を切らせてノックも無しに部屋に飛び込んできたことから始まる

言づての内容は要約すると、とあるファミリアの第二級冒険者がアイズの襲撃を目論んでいるという内容で、その計画の首謀者である男殺アンドロトロノスしが先日から姿を消したという内容だった

イシユタル・ファミリアの団長フリユネ・ジャミールと言えば、あまり良い噂を聞かない冒険者の例として挙げられる程度には悪名が轟いていた、そんな者に狙われていると聞いた途端に、常に下の団員に冷静さを説いているリヴェリアが部屋を飛び出し、それに続くように自分とガレスも飛び出した

アイズには下級団員とパーティを組んでいるときは11階層までの進出を許可している、しかし上層、と一口に言ってもかなり広い、なにせ1階層から12階層までの広さを合わせればおそらくオラリオそのものの広さに匹敵する、それを手がかり無しで即座に探し出すのはいくらLv. 6といってもかなり難しい、だが今日に至っては手がかりはゼロでは無かった

(確か、今日はパーティメンバーにカイトがいたはず、ならギリギリ許可されている11階層にいる可能性が高い)

そう目算を付けて、2人に今考えていた内容を話す、

「つまり、私達は11階層付近を探せば良いということか」

「儂は一応9階層辺りから風潰しにアイズ達を探してみよう」

「頼む、僕は10階層から、リヴェリアは11階層を念入りに探してみ
てくれ」

「了解（じゃ）」

そこから散会して、それぞれの持ち場の階層をとにかく走り回る

2人と途中で別れてから数分もしない時にそれは起こった

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド

（何の音だ!?!）

音源はおそらくこの10階層からだろう、即座に音源に向かって疾
走する、なぜならその爆撃音の様な音を聞いた途端に親指がうずき始
めた、今まで何かがあるたびに自分に危機を教えてくれたうずきが、
何かがあると言っていた、今の状況ならば間違いない――

確信に近い思いで音源だった場所を探す

（くっ、せめてあと一度音が聞こえれば――）

そう歯齧みしているとフワリとフィンの髪を風が撫でていった

（風?こんなところで――）

次の週間に先程の衝撃の倍はあるであろう爆音が辺り一帯に響く

「これは――」

思考する時間も惜しいと、風が吹いた方向に向かって走る、そして
とあるルームに入った途端に今日ダンジョンに潜ってから一番の衝
撃が襲ってきた

「ぐっ!?!...っな、何だこれは...っ!?!」

衝撃により巻き起こる砂塵を堪えて目をなんとか開ける

そこで自分の目に飛び込んできたのはアイズが膝を突き、全身を血
に染めた満身創痍のカイトが吹き飛んでいるという最悪に近い光景

だった。

|||||

とりあえずお嬢は何とか無事だったらしい、とりあえず三門まで開けてから敵を蹴り飛ばしてみたが思いの外吹っ飛んでいった。多少は効いていてくれないだろうかという願いも空しく、ムクリと敵が起き上がる。

「ちなみにお嬢、あいつを倒せるような奥の手とか必殺技とかないか？」

「ある」

「だよなー、そんな都合良く・・・ってあんの!?!マジで!?!」

とりあえず望み薄いよなーといった感じで聞いてみただけなんだがまさかの返答にこっちがビビった

「でも、使うには時間がかかる」

あーはいはい、元氣玉的な感じで撃つのに時間が掛かるタイプの必殺技なんかねー？

ってことは俺は足止めのベジータ役か・・・ボコボコにされそう

「・・・カイトー人じゃアレの足止めは無理」

俺のスキルを知らないお嬢が心配してくれる

「そこら辺は心配しないでいいぞ、ちよつと奥の手使って時間稼ぎくらいならできる、だからお嬢は気兼ねなく奥の手とやらの準備を頼むわ」

「本当にできるの?」

「まーかせるー!だからいつちよ派手なのを頼む、外すんじゃないぞ?」

「大丈夫、ちゃんと狙う」

・・・敵をだよね?こちらを見ながら言われると若干不安になるんだが

「・・・一応言っとくけど俺ごとバーンとかは勘弁だぞ」

「?・・・当たり前」

で、ですよねー、疑ってすまん、素直なお嬢に心の中で謝罪する
「う、うっし、じゃあ気合い入れて行きますかね!・・・第四傷門・・・
開!・・・ぐっくう・・・つ、続いて第五杜門・・・開!!」
(無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理かっこつけすぎたああああ
ああああおろろろろろろ)

体中に激痛を通り越した向こう側の何かが全身の筋肉、神経を蹂躪
していく、正直三問当たりで許容限界を超えたのか体中から蒸気が吹
き出しそうな訳の分からん感覚まで襲ってくる

「ぐっ・・・お嬢、何分だ?」

「え」

「時間を稼ぐつつたろ!何分くらい稼げば良い!?!」

「2、ううん、1分で良い、それまでに何とか溜めてみせる」

「おっけ、じゃあその60秒死ぬ気で行ってみますか!!」

「がああああああああああああああああああああああああああああああ」

タイミングよく肉ダルマが突っ込んできた

「うるせえぞ雌豚がああああ!!」

痛みもあつて脳内麻薬がドバドバだぜ!!

|||||

フリユネは怒りを通り越してぶち切れていたが、腐っても第二級冒
険者、相手の異常さを感じると次第に冷静さを取り戻していった

(下級の雑魚があたしと互角だ?!?)

普段とは違う装備のせいで動きが制限されているとはいえレベルの差とはその程度で覆されるものではない

(・・・いや違う、こいつの動きは後先を考えていない奴の動きだ)

こちらの戦闘スタイルは言ってみれば長距離走、対して向こうは超短距離走

実際よく見れば攻撃を避けてダメージを受けていないにも関わらず相手は血反吐を吐きながら自分と攻防を繰り返している

(何が目的だい?!?いや、待て剣姫はどうした!?)

自分の拳と相手の蹴りが衝突しお互いが弾くように一旦距離を取ると同時に周囲へ視線を走らせる

(見つけた!)

だが見つけた瞬間に剣姫の纏っている風とその身に練られていく魔力に対して本能が警報音を特大で鳴らしてきた

(この雑魚は時間稼ぎが目的かい!!)

そうとわかればフリユネの動きは早かった、勝手に自滅していく雑魚よりも自分が敗北する可能性の高い何かを放とうとしている剣姫を先に打倒するのが正解だと思ったからだ

「死ねええええ剣姫いいいい!!」

この判断は通常であればフリユネの勝ちで終わっていただろう

だが

例外は何事にも存在する

「第六『景門』開」

あと一步で攻撃が届くと思った所で、またしても先程と同じように邪魔が入り剣姫の前から蹴り飛ばされる

「くっそがあああ何なんだ手前はあ!!」

吹き飛んだこちらを雑魚だと思っていた奴が追撃してくる

9

「朝 孔雀 !!」

8

「チィ!!」

まるで孔雀が羽を拡げた様な形をした炎とそれを作り出すほどの目にも止まらぬ拳撃が津波のようにフリユネを襲う

7

「鬱陶しいんだよ雑魚があ!!」

6

炎と拳の速度は厄介だがフリユネの耐久値で耐えられない程ではない

5

相手の攻撃が自分の耐久力に対して力が足りていないのが分かる、この技は明らかに時間稼ぎが目的だろう

4

(まずいまずいまずいまずい!!)

3

だが、それが分かったところで身動きを取ることが出来なかった、このまま被弾覚悟で剣姫に辿り着いたとしても、かなりの痛打をそれまでに受ける、一撃一撃は軽くともその量は津波と評する程なのだ、敗色は濃厚となってしまう可能性があった

2

故に、フリユネは決心を固め、剣姫の技への妨害を諦める

1

(邪魔できねえってんなら、正面から回避か防ぎ切っちゃまえばこちらの勝ちだ!!)

0

かつて、アイズがL V. 2にランクアップする際に倒したモンス

ターの名は「ワイヴァーン」適正Lv. 2以上、しかもその異常個体であった。(推定ではLv. 3ではないかと推測されている)

そして今のアイズはLv. 2

フリユネのレベルはLv. 3

「ああああああああああああああああああああ!!!」

溜めに溜めた暴風をアイズが身体と剣に纏わせ一気に爆発させる

それは後にアイズ自身が名付ける必殺の技『リル・ラフアーガ』、その速度は閃光

とてもではないがLv. 2では考えられない速度だった。

「ぎゃああああああああ!!!」

Lv. 1時のアイズでもLv. 2以上のモンスターに通じたその技をフリユネが完璧に回避するなど不可能、アイズの持つ剣がフリユネの左肩に深々と突き刺さった

だが

アイズにとって誤算だったのはフリユネはモンスターとは違う、多くの戦闘経験を有した人間であったことだろう

(・・・っ!?!こ、この人自分から私の剣に刺さり・・・違う! まさか、急所をだけを外してあえて私の剣を受けた!?!)

「っがあああ、ゲゲゲゲ捕まえたぞこの雌ガキヤアアアアアアアアアアア」

(剣が肩から抜けない!?!)

「くうっ!?!」

戦闘では(特にダンジョンの中では)武器を手放すことは死に直結しかねない、そのため何があっても武器を手放さないようにするという本来なら自身を守るための習性がここにきて仇となった

「この！クソガキ！があ!!あたしにいいいいいいいいいい傷を付けやがってええええええええ」

「が！く!!うあつ!？」

フリユネの無慈悲な攻撃がアイズに次々と叩き込まれみるみるうちにボロ雑巾の様になっていく

「お嬢—————!!」

「いい加減しつこいんだよおおお—————!!」

不意打ちで後ろからカイトがフリユネに迫るがカウンターの様にアイズを投げ飛ばし二人をまとめて吹き飛ばされてしまう

ようやく勢いが止まった頃には2人の姿は全身打撲と擦り傷だらけになっていた

(仕留めきれなかった・・・早く立たなきや、早く・・・)

投げ出されてしまった身体をすぐさま無理矢理動かそうとするも膝立ちするのがアイズには精一杯であった

それでも敵はそんなことはお構いなしにこちらに向かってくる

「グゲゲゲゲ死ねええええええ劍姫いいいいいいいい」

一直線に自分に向かってくる敵、いや、今や2人にとっての死そのもの

しかし、それからアイズを庇うように前に立ちはだかる男が一人

『切り札は先に見せるな、見せるなら更に奥の手を持って』

「・・・え?」

「俺の好きな言葉だよ、お前も覚えとけ」

ポン、と頭に手を乗せてからニカツと笑いながらそう言ったカイトの姿がかったの父の姿と重なる

「あ……」

「じゃ、ちよつくら行つてくるわ」

そう言つて自分と同じくらいダメージがあるにも関わらず敵に向かって走り出す

その光景が今でも夢に見る、悪夢と重なる

——
ダメ

またしても届かないと分かっているながら手を伸ばす

「第七・驚門」

二度とそんな景色を見ないように、起こさないように強くなったのにも関わらずまたしても手だけを伸ばすしかない

——
イツチャダメ

「開」

敵はアイズの眼前に立つ男に躊躇無く手に持った凶悪なスパイクを振り下ろす

そしてそれ以上の躊躇遠慮容赦一切無く、男はたった一つの究極の正拳を突き出す

その時、その瞬間、世界から確かに音が消えた。

由があつた

この歓楽街はオラリオの大事な収入源の一つにして、住人達（これは男女含む）のストレス発散場所でもある、そんな所を潰してしまえば住人の反感を買うだけになってしまう

それ以上に闇派閥が暴れている今のオラリオの状況で歓楽街を取り仕切るイシユタル・ファミアを潰してしまえばギルドからの重いペナルティだけでなく、ただでさえ治安が悪くなっている今のオラリオを無用に混乱させるだけだ

以上の理由からイシユタル・ファミアへの直接的な報復は断念せざるえなかつた

先程の言動からもわかるように最後までイシユタル・ファミアを直接潰すと言つて止めなかつたは実はこのロキであつたりする

ちやらんぼらんに見えて自分の眷属への愛情は深い

ロキが感情を全開にして憤怒を表したおかげでフィンとガレスと私も冷静になれたと思つている・・・まあ、このような事決して口に出して言わないが。

「それで、カイトはまだ目え覚まさないんか？」

「ああ、かなりの精神力を消費したようだからな、それだけでなく怪我をした際のシヨックも少なからず影響があるだろう」

「うちが見たときはもう怪我が治療されて綺麗になつた後しか見てないんやけど、そんなに酷かつたん？」

「あれは…酷いというレベルのものではなかつたぞ、特に両手首から先は骨しか残つていない損傷・・・いや、もうあれは損壊状態と言ってもいい状態だろう、万能薬エリクサーを使つてもキチンと肉と神経が再生するか不安になる程だつたぞ」

「うへえ・・・」

「それだけでなく両手首から吹き出す出血もさることながら・・・」
「いや！もうええから！ちよつストップストップ！想像するだけでもキツイから堪忍してくれ!!」

「ふむ、そうだな・・・まあとりあえず応急処置を済ませた後に私が背負つて回復魔法をかけながら地上に急いで帰還、その後すぐにディア

ンケヒト・ファミリアに預けたおかげで何とか一命を取り留めたわけだな」

今思い出しても何もかもがギリギリだった

あの時

フィンが駆け付けて吹き飛ばされたカイトを受け止めなければ、

その直後に着いた私の回復魔法が無ければ、

その後駆け付けたガレスの高級ポーションが無ければ

そしてダイアンケヒト・ファミリアで輸血用の血が足りなければ。

このどれかが欠けているだけでカイトは今頃神々の言うところの天界とやらに向かっていたことだろう

カイトは運というものには恵まれているのかもしれない

(いや、そもそも運が良ければこのような事件に巻き込まれることはないか・・・それと——)

「まだ目覚めぬカイトの方も問題だが、それよりも問題は・・・」

「アイズたんやなー・・・」

「アイズだけではない、ラウルとアキも・・・特にルームメイトのラウルは相当ショックを受けている」

今回の件で助けを呼ぶためとはいえ、カイトとアイズを残して逃げる様になってしまったラウルとアキはかなりの責任を感じてしまっている

「でも2人が途中でガレスと合流できたおかげでカイトの応急処置に使うポーションが足りたんやろ？ 大手柄やん」

「そう言ってはいるのだがな・・・」

「言葉でわかれば苦労はない、かあ・・・」

未熟な内は誰しも足手まといにならぬ様にと、自分よりも実力が上の冒険者に負けじと無理をするものだが、今回のラウル達の行動はどのように無理せず、正しい判断だったと間違いなく言えるものだ、しかし理屈と感情というものはそう都合良く一致するものではない、もし自分が強ければ、逃げなければ、今現在ラウル達はそういった後悔

に苦しんでいるのだろう。

「アイズに至っては――」

「せっかく良い感じに精神が落ち着いてきとつたのに、ちよつと前に戻ってもーたな――」

そう、ガレスからの報告で今回の事件以来、アイズはランクアップ前の様に無茶なダンジョンアタックをまた繰り返し始めたらしい

理由は私もロキも解っているが止めなければいけない、しかし、どうしても事件があつた夜に、あの子が私達の前で叫んだ慟哭が忘れられない、それを思い出すたびに止めるのを躊躇ってしまう

『私はまだ弱いままだった！守らなきゃ行けないのにつ！！今度こそ守らなきゃいけないのにつ！！私はっ．．．また．．．っ』

膝を抱えて泣き続けるアイズに掛ける言葉が思いつかず、泣き疲れて眠るまでただ頭を撫でることしかできなかつた

『また、守れなかつた』かー．．．」

「．．．．．そんなことはない、と言つたところで本人がそう思えなければ誰の言葉でも虚空を切るのみだろう」

「はあく．．．神様言うても自分の子供一人の悩みも解決できひんとは．．．無力な神やなあ、うち．．．」

その後は、私もロキもそれぞれ思うことがあり会話が途切れ、そのまま大通りの街道に出た所で都市内馬車を拾つた、馬車内では軽い雑談とイシユタル・ファミリアとの交渉内容に関するものに留めロキと共に本拠まで帰還した。

「んじや、あんがとなりヴェリア、明日は別のもんに護衛頼むからアイズとカイトのこと頼むな」

そう言つて手をヒラヒラ振つてロキはそのまま自分の部屋に帰つて行つた

(．．．様子を見に行つてみるか)

ロキに言われたからではないが、少し気になつたので自分の部屋に

帰る前にアイズの部屋を見に行ってみることにした

『コンコン』

扉の前まで来たのでノックをする

「アイズ、今時間はあるか？少し話があるのだが。」

返事がない

(寝てるのか?)

「アイズ、入るぞ」

仕方がないので許可はないが部屋に入らせてもらったが部屋は物
気のからだった

(・・・いない?)

既に日が落ちて大分経っているにも関わらず未だアイズは部屋に
帰ってきていなかった

(まさか、まだダンジョンに!?)

今のあの子のならやりかねない最悪の予想をしてしまう

急いでダンジョンに行こうと、ロビーに出たところで声が掛かった

「アイズならカイトの見舞いに行つたよ」

焦っているところに後ろから見知った声が掛かってきた

「フィン!? いや、そうか・・・カイトの所ということはディンアンケ
ヒト・ファミリアの療養所か」

教えてもらった内容にホッと安堵するが何故かフィンがニヤニヤ
していた

「なんだ」

「ふふ、いやあ、ロキじや無いけど本当に母親みたいだなー、って思っ
てね」

「わたしは未婚だ!!」

カクンと膝から崩れ落ちそうになるのを堪えて叫ぶ、つ、ついに、こ

いつまでそのネタで私をイジリにくるとはっ！

新たな頭痛の種に眉間にシワを寄せつつ文句を言おうとしたところに真面目な口調の言葉が帰ってきた

「・・・リヴェリア、アイズの方は任せてもいいかい」

「何だ、藪から棒に・・・」

「実は昨日からアイズだけじゃなくラウルのダンジョンアタックも自暴自棄になりかけてるって報告があつてね、それこそまるでアイズみたいな、彼らしくなく我武者羅にモンスターを狩ってるってね、アキの方は大丈夫みたいなんだけど・・・」

「どうやら先程ロキと話した内容と似たようなことのようにだ」

「ラウルの方はこつちでケアしておく、代わりに――」

「分かっている、ちようどここに來たのもアイズと今回の件について話をするためだったからな」

「助かるよ、やっぱり男は男同士、女は女同士じゃないと相談しにくいことや、わからないことつてあるからね」

「なんだ、えらく弱気じゃないか、そんなことだと嫁とやらを捕まえることはできんぞ?」

「耳に痛い話だねえ」

「さっきの意趣返しにからかってやるが軽く肩をすくませるだけで受け流される」

「そんな風に気心の知れた同士で軽口を叩いていると」

『だ、だだだだだだだだ団長――！！！！』
本拠の入り口からフィンを呼ぶ声が聞こえてきた

「なんだ?」

「この声、ラウルかな?」

「噂をすれば、と言う奴だろうか、ラウルが全力疾走でこちらに向かって走ってくる」

「ラウルこつちだ」

「だ、団長！あの、カ、カイカカ」

「落ち着かんか」

ズビシ！と音がする程度の軽いチョップを食らわせる

「イタイ!?あ、副団長も、ちょ、ちょうど良かったす!」

「なにがだ?」

私が居てちょうど良いこと?」

「カイトが！カイトが目を覚ましたんすよ!!」

「!?!」

暗い内容ばかりだった所に来た、ようやくの朗報にフィンと顔を見合わせる

「ふ、随分と寝坊助だったなカイトは、ようやく目を覚ましたか」

「カイトが目を覚ましたのは間違いなく本当のことなのかい?」

「はい！何せ起きたカイトとちゃんと話もしたんすかから！今は
ディアアンケヒト・ファミアリアの団員とアイズさんと・・・その・・・」

何故か最後の方でラウルが口ごもる

「まだ、誰か一緒に居るのかい?」

誰だ?思い当たるのはガレスや他の団員だが口ごもる理由が解らない

「その、・・・カイトの知り合いだつて言う男神ヘルメスと、カイトの
婚約者?つて言ってるヘルメス・ファミリア所属の子と一緒に・・・」

「・・・は?」

いやいやいやいやいや！なんだそれは!?

婚約者がいるというのは聞いていたが冒険者!?しかも別のファミ
リアの者だ?!?

ラウルから話を聞いてからフィンが胃の辺りを押さえ始めた

「うう・・・胃が痛くなってきた・・・」

「私もだ・・・」

せつかく朗報だと思つて聞いた内容の後に余計な情報が付いてきた、2人そろつて胃がキリキリと締め付けられる感覚に襲われることになるとは、寝てても起きてても心配を掛けるのは変わらない困った奴だと改めて認識させられた。

「ラウル、とりあえずこの事を今すぐロキにも伝えてやつてくれ」
「了解つす！」

敬礼しながら元気に走り去つていく姿からは先程フィンから聞いたような雰囲気は感じ取れない

「目が覚めたカイトと何かあったのかな？」

フィンもラウルの変化に気付いたようだ

「ラウルの変化も気になるがああの様子なら一旦保留にしても問題ないだろう、とりあえず、我々もカイトの様子を見に行くぞ、これだけ心配を掛けたんだ、愚痴の一つくらいは言つてやらねば気が済まん」

「一応、重傷の怪我人扱いだから程々にね？」

「分かっているさ、それよりもヘルメス・ファミアリアか・・・」

イシユタルの次はヘルメス、前の問題が解決しない内に次々と新たな問題が積み上がっていくな・・・

しばらく待っているとロキとガレスを連れたラウルが降りてきたのでラウルに事情を聞きながらディアンケヒト・ファミアリアの療養所に5人で向かうことにした。

16：誤解×前進

《side：名無しの団長》

私はヘルメス・ファミリア団長の?????だ!!

何かモザイク的な物が入った様な気がするが気にするな、神々の言う所の設定上の都合という奴だ!

さて、そんな私だが現在、ありえなさすぎる目の前の光景に対して完全にフリーズ状態だ

え?全然フリーズしてない?

いやいや、このように思考していることさえ目の前の光景からの現実逃避なのだよ

で、だ。

私が何故フリーズしているのかというと・・・目の前で主神であるヘルメス様がアスフィに顔をボコボコにされたあげく吊るされていたらだ

「・・・おい、これはどういった状況だ?」

私の近くでその光景を遠巻きに見ていた他の団員に事情を聞いてみる

「ヘルメス様が金庫からお金をちよろまかして遊びの金に使ったそうです」

・・・全てを把握した

「な、なるほど、それでアスフィがあんなに怒っているのか」

アスフィはLv. 2の時点でこのファミリアの将来を、いや次期団長として期待されるほどの優秀な冒険者だ

その腕と明晰な頭脳を買われて今ではファミリアの財政責任者を担っている

アスファイの計算された財政手腕のおかげでファミリアの収入はウナギ登り、しかし時たま我らの主神が金をちよろまかすせいでアスファイの完璧に計算された財政計画に綻びが生じたのだろう

「だ、団長く た、たすけてくれく・・・」

ヘルメス様が自分に向かって助けを求めてくる、自業自得だと思いつつもさすがに哀れみの気持ちが湧いてくる・・・いや、それ以前に主神だしな

「ア、アスファイ、ヘルメス様も反省しているようだし、もうその辺で・・・」

「では、次の遠征での団長の分け前から捻出を——」

「てめえ、こらボケ神もつと反省しろやあ!!」

「裏切り者お!？」

すまないヘルメス様、この次の遠征で儲けた金で高級娼館にいろいろと思ってるんだ、殴られて吊るされるだけでアスファイの気が済むのなら耐えてくれ

「ア、アスファイ、等価交換といかないか？」

なにやらヘルメス様がささやかな抵抗を試みている、アスファイは物等で釣られる様な性格をしていないのは重々承知のはずだが？

「何とです、金庫からちよろまかした金を今すぐに倍にして補填するというのがなら降ろしますか？」

「ば、倍はさすがにちよつと・・・でもこの情報は中々のものだけぞ？」

そこでヘルメス様がニヤリと笑った・・・逆さに吊るされた状態で顔が腫れてなければ様になっただろう

「いや、俺が娼館で手に入れた情報と——オボボボボ!？」

「なるほど、私達が血を流し、汗水流して稼いだお金を娼館そのようにに使った・・・と」

ちなみに逆さ吊り状態であるヘルメス様の頭のすぐ下には水の入ったでかいバケツが設置しており、アスファイの作り出した力のいら

ない魔道具の滑車と連動、アスファイの意思一つでヘルメス様が上下して水責めも出来るようになってる

だが、さすがにこれはやりすぎでは？

そう思ったのは私だけではないようで、他の団員もさすがに止めに入る

「ア、アスファイ、これって拷も——「お仕置です」

「いや、どうみても、ごう「ただのお仕置です」

「……」

「ただの軽いお仕置です、それともあなた方がこのアホが散財した分を補填してくれますか？」

「ちなみに、どれくらいの金額なの？」

「……これくらいです」

「……っつ?!」

アスファイが懐から出した紙に書いてある金額を見て私達は何も言えなくなつた

我らが主神ヘルメスよ、無力な私達を御許し下さい。

「オボベデエエエエエ!!」ゴボゴボゴボ

問。

しばらくの間、拷m……お仕置を見て見ぬ振りをしてると

「なんでそれを早く言わないんですか!!!」

今日一番の怒声が本拠^{ホーム}中に響き渡つた。

言わずもがなヘルメス様とアスファイだった

先程ヘルメス様が口にした娼館で手に入れた情報とやらだろうか？

「場所は?!いえ、その前に彼は無事なんですか!？」

「く、詳しいことまでは、わ、わからな——グベエ!？」

救援を呼ぶためと行っても自分たちの足じやダンジョン10階層からじやどう頑張っても片道1時間以上かかるっす

それがわかっててもその場を離脱するしかなかったっす

途中でガレスさんと出会えた時は奇跡とは存在するって思ったっすよ・・・でも自分たちが駆け付けたときには全てが終わっていて・・・ルームメイトのカイトは文字通りぐちゃぐちゃになっていて

団長や副団長、ガレスさんの焦ったような声が周りに響き渡るっすけど頭に入っってこなくて、自分は・・・自分は・・・

カイトはその後、何とか一命を取り留めたみたいっすけど、あの時の地に足が着いているのにまるで浮いているかのような気持ちの悪い感覚は一生忘れることが出来ないっす・・・

その日、カイトのいない部屋で寝ようとしても、今日のカイトの姿がまぶたの裏に焼き付いて眠れなかったっす。

○7年X月金りんご日

あれから三日経ったっす

自分はゴミっす、ただの生ゴミ、いや、それ以下のタダ生きてるだけの血袋の塊

ゴミが少しでも価値を上げるには強くなること

もう、あんな思いはしたくない。

○7年X月銀りんご日

今日、ダンジョンでモンスターを狩っていたらガレスさんにアイズさんみたいだと言われたっす

・・・どこがつすか？

自分とアイズさんとは実力が違いすぎて話にならないというのに。

○7年X月銅りんご日

カイトの見舞いに言ったらバッテリー、アイズさんと出会ったつすそのまま流れで一緒にカイトの病室に行くことになったつすよ
病室のベットで寝ているカイトの姿はすっかり元通りになってるつすけど、自分にはまだあの時のカイトの姿が忘れられないつす
しばらくの間、病室はカイトを見つめる自分とアイズさんの間で静かだったつすけど

「ごめんなさい」

突然アイズさんが謝ってきたつす

何故謝るのか事情を聞いたら、一番レベルの高い自分が守らなければならなかったのに守ることができなかったからと言われたつす

昨日のガレスさんといい今日のアイズさんといい

なにを言ってるんすか

自分は・・・守るどころか一緒に闘うことすらできなかったというのに・・・っ

○7年X月聖晶石日

今日はカイトが目を覚ましたつす!!

目を覚ましたカイトに今回の件を謝ったらデコピンを喰らってお説教までされて・・・でもその後の言葉で何もかもが救われた気分になったす、それは自分だけじゃなくアイズさんも同じ様な感じになってたっすよ！

なんていうか、カイトはやっぱ色々でけー男っすね、同期なのに器の違いってものを感じたっす。

あ、あとカイトが目を覚ましてからすぐ後にちよつとしたゴタゴタもあつたんすけど、カイトの彼女って、めちやくちやかわいい娘だったすよ！・・・ウラメシイ

まあ、別のフアミリアの眷属ってことでロキと相手の神ヘルメスと一悶着あつたみたいっすけど・・・自分は外で人払い兼、見張り役を命じられたので詳しい内容までは聞かせてもらえなかったっす

まあ、とにかくカイトが無事でよかつたっすよ！！

・・・本当に良かったっす、神は既に地上に居るけれど・・・それでも、もし今回の奇跡を起こした神が居るのなら

ただ、ありがとう。

そう伝えたいっす。

《side out：ラウル》

17：幸運？不運？

夢を見た

何故か俺の手首から先だけが妙に美肌で超美白になる夢だ

(・・・ナニコレ)

何故に手首だけ？

いやいや、それ以前に俺は確か敵を倒すために、今の俺では撃てないはずの『昼虎』という超を付けても足りないような技を『念』+『八門遁甲の陣』の二重発動というオーバードーピングの様な無茶をして本来の威力より大分弱体化したとはいえ強制発動したはず・・・まさか!?

『昼虎』に美白効果が!?

.....。

ふむ・・・何故だろう、『チガウ ソウジヤナイ』と、たくさん

の天の音が聞こえる気がする。

とりあえず改めて自分の手を良く見てみると俺の手は美白効果で白く

なったのでは、もちろんなく、ただ単に――

骨 になっただけだった♡。

|||||
|||

「アインズさまああああ!」

荒い息と共にベッドから起き上がると、そこは見知らぬ部屋だった、ちなみにそれなりに広い
(!?っ???)

知らない部屋で寝ていることに混乱するも、すぐに先程見た映像を思い出した

(それよりも手だ!! 俺の手は!?)

急いで自分の手を確認すると

「・・・ある、骨じゃない、普通の手だ・・・」

ためしに握ったり開いたりするが、何の問題もなく動くいつも通り
の手があることに落ち着く

「ゆ・・・ドリカム?」

すまん、ウソだ、まだめっちゃ混乱してました

そんな感じで、まっったく現状把握ができずに戸惑っていると、
俺しか居ないと一目でわかるこの部屋唯一のドアが開いた

「っ!」

警戒し、【円】を張るのに一瞬

(ん? これ・・・ラウルか?)

だが、そこから入ってくるのがラウルとわかりホッと気を抜く
「わ わ わ、忘れ物♪」

ラウルが変な歌を歌いながら部屋に入ってくる、てか何でその歌知ってた・・・歌の内容からして先程までここに居たのだろうか? とりあえず、声を掛けて見る

「オッス!」おら悟空!!といっても通じないので前文だけ言ってみる
「・・・エ」

元気に声を掛たはずなのに何故かラウルが固まった

「・・・」

お互い微動だにしないという微妙な空気に・・・え、なんで?

「ちよっ、ラウルなん」

「ほあああああああ!? あ、あ、あアイズさああああん戻ってきてくださいっすううううカムバアアアアアアックハリイイイイイイイ!!」

短い沈黙の後、ラウルが奇声を上げて部屋から飛び出していった
「なんだあいつ・・・カルシウム不足か?」

ストレスが相当溜まっているのだろう、今度一緒にどっか遊びに連れて行くか、と考え

時間が経つこと数十秒

外の廊下からこの部屋に向かって走ってくる音が聞こえた
(結局、戻ってきたのか)

程なくして、部屋のドアが勢いよく開く

そこに居たのは先程奇声を上げて部屋を出て行ったラウル

ではなく

「・・・アスファイ?」

俺の愛しの恋人だった。

《side：ラウル》

「はあ、はあ・・・こ、こっちつす！」

「わかつてる・・・！」

アイズさんと一緒にカイトの見舞いに行ったんすけど、まさか、その後の帰り道で気付いた忘れ物を取りに病室に行ったらカイトが目を覚ましてるとか、何てドツキリつすか!?

さつきは気が動転して病室を飛び出してアイズさん呼びに行っちゃったつすけど、もうちよつと何か話をすべきだったつす・・・

「ア、アイズさん、先に行つてくださいます、俺は後で追いつきますから」

「・・・ん、・・・ありがとう」

俺の速度に合わせて走ってくれていたアイズさんが一気に加速して見えなくなつたつす

「ぜえ、ぜえ、げっほ、はあ」

全力の走りから小走り程度に抑える

こちらは全力疾走でもアイズさんからしてみれば全然遅い速度、それが今のアイズさんと俺の実力差

(こののどこが似てるんすか、ガレスさん・・・)

先日言われたことに対して改めて疑問しか湧いてこない

そうやって、アイズさんに遅れること十数分、ようやくディアンケヒト・ファミリアの療養所に着いたつす

・・・着いたんすけど

「あの、大丈夫つすか？ もしもくし？」

なんか療養所の前で見知らぬ男神がボコボコにされた状態で野晒しにされてたつす、早くカイトに会いたいつすけど・・・さすがにこれを無視して行くのは、ちよつと気が咎めて無理だったつす。

「うう・・・犯人・・・は・・・ヤス・・・」ガク

「ちよつ!? 遺言みたいなこと言つて気を失わないでください!」

仕方が無いので手持ちの安いポーシヨンを飲ませてあげたつす

「んぐ・・・んぐ・・・ぷつは! 生き返ったあ!!」

「そ、そりゃよかつたつすね・・・」

安いと言つても俺の手持ちじやそう易々と買える物じやないんで、そう一気飲みされると複雑つす

「いやあ、おかげで助かったよ! あのままじゃ下手したら死んでたぜ、まったくアスファイの奴め、加減を知らんのか、ちよつとファミリアの金をちよろまかしたくらいでボコボコにするとか、まったく酷いと思わないか!? 親切な少年!!」

「めちやくちや自業自得じゃないつすか」

俺のポーシヨンは基本的に体力回復なので相変わらずこの男神はボロボロつすけど、とりあえず会話できるくらいまで回復できたみたいつす

「ふむ、それにしてもここは・・・ディアンケヒトの療養所? つてことはアスファイの奴、カイトに会いに行つたのか」

「っ!」

男神の口からカイトの名前が出てきたことに驚き、警戒心が煽られる

そんなこちらの様子に気付いた男神がこちらを見てニヤリと笑う

「おいおい、そんなに警戒しなくてもいいじゃないか」

「あんた・・・一体何者つすかつ!」

「俺は無力なただの神だぜ? 地上じゃ君達の方が遥かに強いんだ、もつとリラックスしてくれてもいいと思うんだが? なあ、ラウル・

「ノールド君？」

「!?」

(何で俺の名前を知ってるっすか!?)

お互い、・・・いや自分にだけ緊張が走る、相手は先程からまったく警戒も緊張もしていない、この男神が言ったように地上では神力を自ら封じている神々のほとんどは人より、特に恩恵を授かった地上の間より弱い

そして今、正体不明の男神に対して自分は敵意に近い感情を発しているというのに、この神は今だに余裕の表情を変えない、それがブラフなのかそれとも別に何かあるのか・・・不気味な雰囲気^{フェアルナ}に気押されて身動きが出来なくなる

そんな風に硬直していると

「ぶっ、・・・クククク、あっはっはっはっはっは」

突然目の前の神が大笑いし始めた

「何がおかしいっすか!？」

「い、いや、すまないラウル君、ちよつとからかったんだけど、あっはっはっはっは『あんた! いったいなにものだあ!?' ってぶっ! あっはっはっはっはっはっは」

この神、マジで笑ってたっす

「マジでなんなんすか・・・」

明らかに向こうはこちらへの敵意がないと感じられた

「~~~~はあー、笑った笑った、いやすまないね、本当に警戒はしなくていいぜ、俺はカイトの敵じゃあない、ちなみにカイトとの付き合いの長さでいえばかれこれ数年の付き合いになる、ルームメイトである君の数倍はあいつのことを知ってるぜ?」

嫉妬しないでくれよ? といいつつウインクしてきたっす

「はい!？」

「さて、改めて自己紹介だ、俺はカイトの恋人であるアスファイの所属するファミリアの主神ヘルメス!、よろしく、ラウル君!」

「え、は、恋人!?!はあ!?!えええええ!?!」

脳の処理が追いつかない情報内容に驚くことしか出来なかったす。

「ほらほら、ブーツとしてないでカイトの部屋まで案内してくれ、まだ入院中なんだろう? 意識の無い彼と会っても面白くないが顔を見るくらいはしてやらないとね」

「え、いや、実はさつきカイトの意識が戻って」

「ほう!そいつは重畳だ!なおさら会いたくなってきたよ、久しぶりだなく、何ヶ月ぶりだろう、アスフィとはコソコソ会ってたみたいだけど……」

案内しろって言いつつズカズカと療養所に入っていく神ヘルメス
仕方が無いのでカイトの部屋まで案内したんすけど……

「……んなつ!?!」

「はっはっはっはっは!相変わらず面白いなカイトは!!」

俺と神ヘルメスが着いたカイトの部屋では

入り口のドアが細切れになり

何故かアイズさんが正座でカイトに説教されてたつす。

「い、一体何が……」

《side out : ラウル》

「……アスファイ?」

ラウルかと思ったら部屋に入ってきたのはアスファイだった

「久しぶりだなアス——!?!」

と

泣いていた。

もちろん俺が——ではない。

いつも気丈でプライド高く、美しさを持ちながらもかわいらしさも併せ持つ俺の愛しい人が

——泣いていた。

ポロポロ、ポロポロと真珠のような大粒の涙を止めることなく、隠すこと無く

——泣いていた。

その姿はまるで、迷子の幼子がようやく親を見つけたときの、それまでの恐怖を思い出して泣くときの様な、そんな困ってしまう表情で。

「え……と……うお!」

呆然としているところに泣いている顔を隠すように、俺の胸に押しつけるようにして抱き付いてきた

「……アスファイ?」

「わ……わ・たし……あ、あなが意識不明のじゅうた……い、でここ……に、運び込まれたって……きいて……心配で……死ぬほど心配でえ……よかった、無事で……よか……たっ　生きてて……よかった……っ」

そこから先は言葉にならず、ただただ涙を流す声と嗚咽のみが続いた

「え……う……えっ」と

混乱しつつも胸の中のアスファイの背中に手を伸ばす

泣き止まない赤子をあやすように、俺はただ、ゆっくりと背中をさすることしかできなかった

その時になって、まだ俺が村に居た頃に、じいちゃんが言っていたことを今更ながら思い出す

「カイト覚えておけ、女の涙はのう、ありやもう男性特攻を持った兵器じゃよ、男があれに勝てないのは世界の理と言ってもええじやろうなあ……」

ああ……違う、じいちゃんの言うとおりだ
卑怯すぎるだろ、これ

惚れ直しちまったじゃねえか。

……惚気かよつて？ ああ、そうだよ惚気だよ、文句あつか！

「落ち着いたか？」

「……ン」

返事の代わりに俺の腕の中で頷くようにアスフィの頭部がモゾモゾ動く

……かわいいかよつ!!

閑話休題

ようやくアスフィが落ち着いてきたので話を切り出す

「……すまん、心配掛けちゃったか」

「当たり前です」

今度は小さな声できちんと返事が返ってくる

「ありがとな……でも……そっか」

「……？」

「いや、実はついさつき、意識が戻ったばかりみたいでな？ たぶんアスフィが会いに来てくれるぞ〜！ って何となく俺の勘が囁いてくれ

たのかも、だから目覚めたのかももしれないな・・・ふふ、アスフィは
やっぱ俺の女神だな」

「~~~~~!!」

恥ずかしくなったのか、アスフィが俺の胸にさらに顔をゴリゴリと
押しつけて顔を隠そうとしてくる

(ナニコノ かわいい生き物?!)

恥ずかしがっているアスフィを微笑ましく思いつつも、現在の状況
をようやく再認識した瞬間

脳に電撃が走る――。

彼氏と彼女

密室

時間は夜

雰囲気は最高ボルテージ

何も起こらないわけがなくっ!!

そんな事を考えているとどこからか声が聞こえてきた

ゆけえええええカイトオオオオオ! 今こそ大人の階段を昇ると
きぞおおおお!!

じいちゃん!?

そのままいくのじゃああああ、今こそ最終^{ラグナロク}戦争の時いいいい!!

俺の中のじいちゃん?が俺の背中を後押ししてくる

でも、じいちゃん俺まだ13歳なんだけど!アスフィとか14:
いやもう15になったんだっか・・・15歳なんですけど!?

安心せよおおおおお、この世界では12歳から成人扱い
じゃあああああ

マジかよじいちゃん!?

マジのマジじゃあああああああ

おなごに恥をかかせるなああああきらかに相手もわかってお
るううううう

なぬう!?

そこで顔を桃色に染めたアスファイと目が合う、その瞳は確かに艶を
持つて俺を見つめていた

・・・ゴクリンコ。

喉が鳴る!

鳴ってしまおう!!

いやさ、鳴らいでかあ!!!

ゆけええええええ我が孫よおおおお

うおおおお!行くぜじいちゃん!!俺はいくぜ!!!

「・・・アスファイ」

「・・・カイト」

寝ている体勢のまま、上に乗ったアスファイのリボンをはずす

それだけで年齢に見合わない程に大きく育った胸の一部が露出す
る

初めての緊張と焦りで手が震えてくるが、今度はお返しとばかりに
潤んだ瞳でアスファイが俺の服のボタンを外していく

お互いの荒い息づかいのみが妙に響き、心臓にいたっては息をつく
間もないくらい早鐘を打っている

そこで

聞き取れないほどの斬激音と同時にドアが細切れになり――

「カイトから離れて!!」

今からまさにというタイミングでお嬢が部屋に突っ込んできた。

彼氏と彼女　ただし事情を知っている者は少ない

密室　ではあるものの鍵が掛かっているどころか半開き状態

時間は夜　といっても陽が沈んだばかり

雰囲気は最高ボルテージ　のせいでお互い周りが目に入らなくなつ
てる

確かに・・・何も起こらないわけがなかった・・・

18：羞恥×会合

《side：アイズ》

今日もカイトは目を覚まさなかった。

ダンジョン帰りに見舞いに寄ってはみたけど昨日と変わらずその瞳は閉じたままだ

私と同じように見舞いに来ていたラウルさんと帰路に着く

途中でラウルさんがカイトの部屋に忘れ物をしたらしく取りに戻っていった

その姿を見送ってから十数分後、本拠^{ホーム}への距離が半分を切ったところだったと思う

「アイズさああああああん！」

大声で私を呼ぶ声が聞こえてきた

(ラウルさん?)

どうしたのだろうか

「カ、カカカカツ・・・カイトが！ カイトが目を覚ましたっす!!」
「!？」

(カイトが目を覚ました!?本当に!?・・・でも)

「アイズさん！何してるっすか!? 行くっすよ!!」

その事実には呆然となるがラウルさんの声で正気に戻る

「・・・うん!!」

その後はラウルさんに言われ、足の速い私が先んじてカイトに会いに行った

何も考えずに、とにかくカイトの部屋を目指してただ走る

しかし、療養所の中に入り、いざカイトの部屋へと向かおうとしたところで足が止まってしまう

(何を話せばいいんだろう・・・)

今回の事件で昏睡状態になってしまった原因は自分が未熟だったせいだ

本来なら守るべき立場の自分が逆に守られてしまった、そして実は、負い目を感じている理由はそれだけではない

そのことを改めて考えてしまい、どのような顔をして会えば良いのか今更になって怖くなってくる

(・・・でも)

ここで立ち止まっても仕方が無い、まずは意識の戻ったカイトに会うわなければ何もできない

止めていた歩みを再開させ、カイトが居る部屋の近くまで来たとき扉が半開きになっていることに気付く

(ラウルさん開けっ放しで来たのかな?)

今思い返しても先程までのラウルさんは相当焦っていたように見えたので仕方が無いのかもしれない

だが

「っ・・・!?!」

開いた扉の隙間から見えた光景に息が止まる

何者かがカイトに馬乗りになり首を絞めている様に見えた

弛緩していた考え、思い、全てが冷め、それが一気に殺意へと切り替わる

実は、今回の件でアイズが必要以上に罪悪感を感じていたのには理由があった

初めて人との本気の殺し合い、それは、まだ幼いアイズに攻撃を躊躇わせるには十分であった、そのためフリユネ・ジャミールに放った

最後の必殺の一撃も無意識ではあるが手加減した威力となり、結果としてそれがカイトが今回の昏睡状態に陥ってしまうことに繋がってしまった

故に

今のアイズは敵と認識すれば手加減という枷が外れていた

人であつても敵であれば一切の躊躇をしないと固く誓っていた

(もう・・・同じ過ちは犯さないっ!!)

「カイトから離れてっ!!」

相手に防御も反撃の隙も与えない、障害になる扉を切り刻み相手の意表を突いた速攻

しかし、それでも相手はこちらの攻撃を躲してきた

——違う。

見間違いで無ければカイトが何故か相手突き飛ばした様に見える

いや、敵の注意がこちらに向いた隙を突いて相手突き飛ばしたのだらう

タイミング悪くこちらとカイトの攻撃が被ってしまったことによる失敗と判断

即座に追撃を——。

そう思ったところでカイトが何故か敵との間に割り込んできた

どうして邪魔するの!?

「カイトどいて!そいつ殺せない!!」

「お、お嬢、落ち着けえ! こいつは俺の知り合いだから!! 敵じゃないから!!」

「・・・え?」

カイトの発言で一瞬、頭の中が真っ白になる

「え・・・でも・・・その人、カイトの首を絞めてた」

そう、確かに自分は何者かがカイトの首を絞めているのを見たのだ
「誤解!誤解だつて!むしろ逆でアスフィは俺のボタンを外そうとし

てただけで・・・あ」

「ボタン・・・？」

言われてみればカイトの入院服であるシャツのボタン部分が中途半端に外れていた

わざわざあんな体勢で？

そこで、敵だと思われた人物に目を移す

どうやら相手は女性のようだ、薄水色の綺麗な髪に眼鏡をかけたカイトと同じか少し上くらいの女の子だ

私と目が合うと、何故か顔を真っ赤にして目をそらされた

どうやら本当に敵ではないらしい

「・・・でも、何であんな体勢でボタンを？」

「うえ!?・・・あー・・・それはだな、その、ほら・・・俺ってばさつき意識が戻ったばかりでちよつと寝苦しくてさボタンを外そうと思っただけど起きたばかりで身体を動かさにくいなーって思っているとところにちょうどアスファイが見舞いに来てくれたからついでにちよつとボタンを外してもらおうと思ったらアスファイが思いの外不器用でな全然はずせないんだわそれで色々やってる内にあんな体勢になっちまっていやー大変だったよなアスファイ!!」

「え!?・・・ええ!!そうですね!!我ながらマジックメイカーであるというのにこの不器用さには辟易してしまいます、不器用すぎて何故か私のリボンまで外れてしまって本当に困ってしまいますねわたしもちよつとははずせないくらいでムキになってしまってあんな体勢でボタンを外すことになってしまっうなんてええもう自分の不器用さにはあきれてしまいます!!」

「ははははははははははははははははっ!!」

すごい勢いで2人が事情をしゃべりだし、お互い納得し合って何故か笑い出した

(・・・?? でも、まあ・・・いいかな)

「よくわからないけど、・・・カイトが無事でよかった」

何故だか分からないけど……このとき私は久しぶりに自然に笑えた気がした

「つつぐ!!」

カイトが突然、胸を押さえて苦しそうな表情になった

「カイト!? どうしたのもしかしてどこか痛むの!？」

「……いや、大丈夫だ……ちよつと良心の呵責に押しつぶされそうになっただけだから」

「……??？」

またしてもよく分からないが、とりあえず大事ではないようだ

「……えつとそれでこつちの人は?」

「ん?……ああ、すまんすまん紹介が遅れたな、彼女は——」

「こほん!……初めまして『劍姫』、私はアスフィ・アル・アンドロメダ、ヘルメス・ファミリア所属の者です、先程は誤解を与えられる様なことになってしまい申し訳ありません。」

ヘルメス・ファミリア?

いや、疑問に思うのは後だ、まずは先程のことを謝らねばならない
「は、初めまして……あの、こちらこそ さつきはごめんなさい、勘違いで斬りかかってしまって……」

「あなたはカイトの身を心配してあのようなことをしたのでしょう? なら私はあなたを怒ることは出来ません……もし私が同じ光景を見たら……そうですね、私は見間違いなどしませんから……自分を抑える自信がありませんねえ……」

何やら意味深な感じで最後の方はカイトの方を見ながら言っていた

カイトの方は、そんな事しねーよ、と軽くあしらうように手を振っていたがどういう意味なのだろうか?

「それにしても、お嬢的には久しぶりって言えばいいの?」

「うん、10日ぶり」

「はあ!?!……俺そんなに寝てたの!?!」

「知らなかったのですか？」

アスファイさんが呆れたようにため息を着いている

「いや、さつきも言ったけどマジで目が覚めたばっかなんだよ、お嬢、この10日間で何か変わったこととかあったら教えてくれないか？」
「うん」

その後に私は、この10日の間に何が起こったのかを、私が知る限り説明していった

事件後カイトが瀕死でここに運びこまれたこと

首謀者はイシユタル・ファミアアのL.V. 3、それもランクアップ間近の『男殺し』アンドロトロフスことフリユネ・ジャミールであったこと

今のオラリオの状況ではイシユタル・ファミアアに直接的な報復ができないこと

現在、ロキがイシユタルに対して報復の代わりに制裁を加えるためにイシユタルと直接話し合いをしているということ

そして最後に、ラウルと自分が責任を感じていること

「……ごめんなさい」

全てを話し終わった後に改めて私は頭を下げて謝った

何故謝る必要があるのかと、カイトに聞かれたので頭を下げたまま答える

今回、自分が相手に手加減を加えてしまったせいでのこのような事態になってしまったこと等を伝えた。

そしたら――

「お嬢、顔を上げてくれ」

そう言われたので顔を上げると

ビシ!!

「あう」

額にデコピンをされた

「馬鹿野郎……とりあえずお嬢、ちよつとここに正座な」

「……」

罰か何かだろうか、でもその程度の罰で許されるものではない

「いいか？ あの時の俺たちはパーティだ、そんなもつてL.V. 1とはいえ一応俺がリーダーだ、その俺の判断でこうなったんなら・・・そりゃ俺の責任だ」

「でも！」「確かに！・・・お嬢やラウル達が責任を感じる必要は全く無いとは言わない、だが責任の感じすぎはダメだ」

「でも私はL.V. 2で、守らなきゃいけなかったのに」

「別にいいだろ、お嬢——、俺たちは全員生きてダンジョンから帰れたんだ、それでいいじゃねえか、でもそうだなそれでも言うべき事があるとしたら」

カイトの手が私の頭を優しく撫でてくれる

——お疲れ様。

こんくらいのもんだろ？ あの時の様にニカツと笑いながらそう言った。

「——あ」

それだけで心の闇が晴れ渡っていく

事件後からずっと私を縛って苦しめていた何かが霧散していく

何故だろう、とてもポカポカするのに目がぼやけるのは

何故だろう、とても気分が良いのに涙が流れるのは

何故だろう、何故だろう、何故だろう

幸せだった昔を、父を、母を、皆を思い出すのは

不思議な感覚だった、まるで自分に兄が出来たような、そんな変な感じ

不思議な感情に困惑している内に、ラウルさんと神ヘルメスが現れ、ラウルさんも私と同じようにカイトと今回の件の話をして説教されていた

お疲れさん

ラウルさんも私と同じことを言われたようだ

心なしかさつきよりもラウルさんの顔が晴れやかになったような

気がした。

《side out:アイズ》

アスファイとヘルメスのことをアイズとラウルに簡単に説明した後、ラウルにはロキ達へ俺の意識が戻ったことを伝えに、一旦本拠へとひとっ走りしてもらった

そして現在、この病室にロキ、フィン、ガレスのおっさん、リヴェリア、ヘルメス、アスファイ、そして最後にこの部屋の仮初めの主である俺の、総勢7名が雁首を揃えていた。

ちなみにお嬢とラウルは、今から行われるであろう話し合いを聞かれないように廊下で人払兼護衛をしている

「そーれーでーカイトく・・・これはいったいどういうこっちゃねん」
こちらの頬をゴムのように引っ張りながら好き放題にしつつロキが聞いてくる
「にやにがだ」

扉のことなのか、それともヘルメスのことなのか、アスファイのことなのか、代名詞が指すこれが多くて特定できない

っていうか俺の顔で遊ぶのをいい加減止めろ
「せやなー、それじゃまずこの胡散臭い神との関係からやな」

「別にそんなに大した話じゃない、この胡散臭い馬鹿との出会いは数年前からでな・・・」

「ねえ、ナチュラルに俺をデイスるの止めてくんない？」

無視して俺はヘルメスとはオラリオに来る前、住んでいた村の近くにある遺跡の調査とやらで訪れた際に何度か会っていたことを話し

た

そしてその際に同行していたアスフィと何度か会う内にお互い恋仲になり将来を約束した仲であるということもついでに話す。

話し終わった後で、ほとんどの者が顔を苦渋に染める

その中でロキが口を開く

「カイト、知つとる思うけどな、異なるファミリアの者が一緒になるいうんはかなり難しいことなんやで？ そりや例えばファイたんこの子とかとやったら、うちとファイたんの仲がええから問題ないかもしれんけど、それですらかなり難しいんや」

「知ってる」

ちなみにファイたんと言うのは世界一の規模と実績を誇るオラリ才最大の鍛冶ファミリアである、ヘファイストス・ファミリアの主神、燃えるような灼髪に右目の眼帯が有名な神ヘファイストスのことだ
「やったら、何でうちのところに入ったんや？ その子がヘルメスんこの眷属なら・・・嫌やけど！めちやくちや嫌やけど!!・・・そのままこいつのファミリアに入った方がよかったんちゃう？」

自分の眷属に、他の派閥のファミリアに入った方が良かったのでは、そう言ったときにロキの顔はとても嫌そうで苦しそうな表情だった
た

そんなことを実は眷属への愛が人一倍強い女神に言わせてしまったことを申し訳なく思う

反論するために、ロキが来てから静かにしていたアスフィにアイコンタクトで確認を取る

「・・・かまいませんよ」

話しても言いという許可が出たので全てを話すことにする、最悪このファミリアを出て行くことになるかもしれないが覚悟の上だ。

「入団での面接でも言ったが俺は婚約者、そこにいるアスフィと一緒にになり、アスフィの親にも認められたい、そのためには世界に轟くような名声がある、ここまでは話したよな？」

確認を取りつつ話を続ける

「ヘルメスのファミリアはダンジョン探索がメインじゃない、色んな商売にも手を出してるから、強くなりたい俺の目的とは微妙に合致しないんだ、そりゃあ、ヘルメスの所でもダンジョンには潜れるには潜れるが、俺が求める名声ってのは中途半端な名声じゃ駄目なんだ……何故なら、アスフィの親は、とある国の王様、つまりアスフィはとある国家の王族なんだ、ただの村人だった俺が認められるには冗談とか、目標とか、夢じゃない、俺は……本当の意味で世界に轟くほどの栄誉が欲しいんだ……」

俺の話した内容に全ての事情を知らなかったロキ・ファミリアの面々が絶句

特にアスフィが王族であるということ、そして俺が夢物語のような英雄になりたいという台詞に唾然としている

だが、俺は本当にそれを目指しているんだ

「……ロキ、もしアスフィとの仲が認められないなら、俺は……」

そこから先は言葉にできない、したくない

まだ半年とはいえ家族同然……いや、もはや自分にとっての第二の家族と言ってもいい帰るべき場所になっているとこを辞めるなど……

だが

それでも

課程のために目的をあきらめるなど本末転倒もいい話だ

—————それだけは絶対に出来ない。

………。

部屋に沈黙が続く

それを破ったのは意外にもヘルメスだった

「……ロキ、取引と行こう」

「……なんやねん」

「今後、俺たちのファミリアはそっちのファミリアの依頼を優先的に

受ける、もし眷属の中に遠く離れた家族に手紙や物を贈りたいといったものもあれば他よりも優先しよう、どうだい？ 2人の仲を認めるとはいかなくとも黙認するくらいはしてもらえないか、どうせ今すぐどうこうなるものではないだろう？」

「ヘルメス・・・お前・・・」

「気にするな俺と君の仲だろう？」

感謝の言葉を言おうと思ったがこちらに向かってウインクしてきたので言う気が失せた

「・・・なんか気持ち悪」

「ははははは!!照れるな照れるな☒」

「照れてねーよー!」

たえ照れていてもこいつにだけはそんな事言いたくない

そんな風に少し場の雰囲気が弛緩し始めたとき

「・・・くくくくっだああああああああああ、わかった!うちの負けやあ!!好きにせえ!!」

ロキが折れてくれた

「・・・ロキ」

「ただしやー!さっき言ったヘルメスの条件は全部飲んでもらうで!うちには森から出てきたエルフの子がぎよーさんおるから覚悟せえよ!!」

ビシッとヘルメスに指を指して宣言するロキ

「わかつているさ、俺はヘルメスだぜ?・約束は守るよ」

それに対して軽い調子で返答するヘルメス

軽く受け流されたロキは不機嫌になり、乱暴に椅子に腰掛ける

「・・・ふん、それにしてもお前が眷属のために・・・いやそれ以外の者のためにも動く甲斐性があったとは思えないんやけどなあ」

「なに、偶には子供の機嫌を取ってやらないとね、これでも自分の子を俺なりにではあるが大切に思ってるんだぜ?」

まだ、神々の間で確執がありそうだがとりあえず話はまとまったと判断してもいいのだろう

(・・・やったなアスファイ)

(はい・・・カイトもお疲れ様です)
アスファイと無言で目を合わせお互い、喜びをあらわにする

そうやってようやく話が平和にまとまり後は解散かと思われたとき

「それはそうとカイト、さっきは聞きそびれてしまったんだが・・・何で扉が細切れになってるんだ？」

ヘルメスのバカがとんでもない爆弾を投下してきやがった

(くつ、誤魔化せたとおもったんだが・・・)

「あー・・・それな、いや、実は俺の部屋に居たアスファイを襲撃に来た敵対派閥の刺客と勘違いしたお嬢が――」

仕方が無いので嘘を混ぜず、そうなってしまった原因を話さないようにいい訳をする

「・・・ふーん、『剣姫』がねえ？」

「アイズたんだったら・・・お茶目やなあ☆」

ロキ達の後ろでは今の話を聞いたフィン達も苦笑い、リヴェリアは例によって例の如く、頭痛を堪えるように眉間のシワをもんでいる
「まあ、そういうわけで扉がご臨終なさってしまったというわけだ」
(ヨツシャー！イケる！このまま誤魔化しきれる！)

そう勝利を確信してしまったのがいけなかったのか

「ん？・・・それは本当のことなのかなあ」

ヘルメスの野郎が何かに気付きやがった

(こ、こいつ 余計なことを言うんじゃないやねえ!!)

「カイトくちよつと、質問に答えてくれるかな、一つだけでいいんだよ、うん一つだけ」

「な、なんだ、よ」

ニヤつとでも聞こえてきそうな笑みでこちらを向くヘルメス、嫌な予感しかない

「アスファイと何か『いや〜ん♥』 なことでもしてた?」
「ブツ!?!」

俺とアスファイが同時に吹いた、まさかここまでド直球な質問が来るとは!?

「っ………」

それに対する俺の答えは沈黙、

地上の子は神々に対して嘘をつくことが出来ない、より正確に言うならば嘘をついてもすぐにそれが嘘とわかってしまう

そのためここで、それを拒否してもすぐに嘘だとバレる

だが、真つ正直に、「ハイしてました、でも未遂なんで無罪です」

——なんて言えるわけがない。

かといってこのまま沈黙を続けるのは肯定しているのときさほど変わらない

(助けてクラピカア!!得意のクラピカ理論で助けてくれえ!!)

非情なるかな

偉大なクラピカ理論の提唱者、クラピカの「沈黙こそが正解」もここでは通じない

(もう……万事休すなのかつ……俺に救いの手はないのか!?)

そう絶望しかけたとき、俺の肩に優しく触れる手が置かれた

「……ロキ?」

唯一の希望に一縷の望みを懸け、振り向いた先で見たロキの顔は――

「ホッホーウ? それでそれで? カイトー? ウチも続き聞きたいわく、ほほう? ほほう?」

悪戯小僧・百割増しみたいな顔でこちらを煽ってきた

「ロキイイイイイイイ!! 貴様もかあ!?!」

まさかのロキの裏切りである。

「ほほう? ロキ、君も気になるかい?」

「ほほう? 何、当たり前のこと言うんねん、自分の子供の貞操やぞ? こんなおもしろ……大変な案件見逃せるかい!!」

最悪のタイミングで最悪な奴らが意気投合しやがった

「てめえ、ロキ！ 今確実に面白いって言いやがったな!? てかお前らさっきまで険悪な雰囲気だったじゃねえか、なに結託してんだボケ共があ!!」

それから俺の周りをほっほーう、ほっほーうと言いながらウロチョロするアホ共

フクロウかてめーらは!?

ちなみにフィン達は呆れて部屋を出て行った

アスファイに至っては部屋の隅で体育座りでうずくまり、耳を塞いで自閉・・・というか現実逃避に走ってるし

「ほっほほーうカイトほっほほーう?」

「うぜええええええええええ!!」

こうして俺の久々の目覚めは最悪のまま終了し（結局この後、全部がバレた）

一連の事件は騒がしいままで終了した。

様々な出会い編

19：昇格×降格 前編

《side：フィン》

今日は10日に一度のロキ・ファミリア幹部会——と仰々しく言ってはみたけれど、要はただのお互いの情報交換と既知情報の確認といった報告会だ

今回のメインの情報は大きく分けて四つ

最初は閩派閥^{イヴイルス}への討伐作戦の計画に関して、まずはこれがメインだろう

二つ目は新人団員及び下級団員の育成状況

三つ目は遠征に関してだが、現状では難しいので愚痴や雑談だけで終わるだろう

そして

最後の四つ目が、カイトに付随して着いてきたイシュタル・ファミリアとヘルメス・ファミリアに関することになるだろう

そう思案しつつ、もはや自室と言っても差し支えない団長室に入ると、既にリヴェリアとガレスが待っているところだった

「おや、やつぱり僕が最後かな?」

「いや、ロキがまだだな」

リヴェリアに言われて部屋を見渡すと確かにロキだけが見当たらなかった、けっこうギリギリだったので自分が最後だと思っていたがどうやらロキはまだ来ていないようだ

「まあ、あやつのことじゃその内来るじやろ」

主神抜きで報告会はできないのでしばらく待つこと数分、雑談をしつつ時間をつぶしてはいたものの、姿を見せないロキにリヴェリアが愚痴を流し始めそうになったとき

バン!!

「いや〜・スマン!!遅れてもうたわ、堪忍してや〜!」

ロキが扉を勢いよく開けつつ駆け込みように入室してきた

「・・・遅いぞロキ」

リヴェリアが不機嫌そうに言ってくる

「いや、ホンマすまんて、カイトに療養所まで呼ばれてステイタスを更新したんやけど・・・そこでちよつとなー？」

またか、と 思うのは早計だろうか、それともやはり、と言うべきか

ちなみにリヴェリアは前者の様に考えたのかため息を

ガレスは腕を組んだまま面白そうに笑っている

「もしかして、また何かあった？」

こと、ここに至る少し前から僕は、カイトを常識や普通といった枠組みに当てはめるのを諦めている、逆に次はどんな面白いことをしたのかと興味深く思うようになった、我ながらそれは団長としてどうなのかと思うがカイトに関しては何好奇心の方が勝ったようだ

「まあ、これは会議の最後に話すとするわ」

僕の質問に対して楽しそうにニツシツシと笑いながらロキがはぐらかしてきた

ふむ、・・・どうやらメインの議題に五つ目が追加されたようだ

議題のタイトルは何だろうか 『今日のカイト』とかだろうか？

いや、彼はそんな可愛い感じは似合わないか・・・

「じゃ、はじめよか〜」

そんなどうでもいい戯れ言を考えつつ会議は始まった。

.....

「では、ヘルメス・ファミリアとは同盟では無く良好な取引相手ということでは今後対応していくことでいいな？」
「それがええやろな、あいつは癖もの多い神々の仲でも指折りや、さすがにカイトのためとはいえ同盟を組むのはちよつとなあ・・・幸いあっちもそれを望んだるようやし、よほどの大問題でも抱えん限り同盟はしようないな」

同盟というのは言ってしまうえば一蓮托生、いくらカイトのためとはいえ、たつた一人の団員のために他派閥のファミリアと同盟を結ぶことはできない

「・・・ま、そんな所じやろうな」

決定した内容にガレスも賛同する

「とりあえず予定通りの議題はこれで大体は話おわつたね」

閻派閥、団員の育成状況、次回の遠征、そしてイシユタルとヘルメスのファミリアとの今後の付き合い方についての意見も全員の賛同を得てとりあえずではあるがファミリアの行動方針がとりあえず決定した

「・・・じゃあロキ、君が先程から話したがっている内容を聞いてもいいかい？」

ロキが会議の最中もどろどろとソワソワしていたのはここにいらる全員が気付いていた、他の団員なら気付かないささいな違いだが、付き合いの長い僕たちにはわかりやすすぎる違和感だ。

「ありや、やっぱばれてもうた？」

ロキが笑いながら舌を出して茶目つ気たつぷりにあつけらかんと答える

「バレバレだよ、僕たちに隠し事をするならもつと上手くやらなきや・・・それで？」

「ニヒヒヒヒ！ いやなくカイトが面白すぎてな？・・・言う前に聞いところか？ カイトに関して、めちやくちやええ話が1個、そこそこ悪

い話も1個、面倒くさそうな話が2個・・・いや、やっぱり待って・・・面倒くさそうな話が1個におもろそうな話が1個や、さてどれから聞きたい?」

面倒くさいという話が途中で2個から面白い話とやらに分かれたのが気になったが

(結局は全部聞くことになるからどれからでも良いかな、他のメンバーの意見に合わせるとしよう)

「別にどれでもいいが・・・僕は良い話とやらから聞きたいのう」

「・・・僕も良い話からがいいかな」

「私はどれからでも・・・いや、やはり他の二人と同じで良い話とやらが良いな、悪い話から聞いた場合その場で私の胃に穴が空きかねん」

「あれ、僕の胃の心配は?」

「お前は既に奴のすることを「面白い」ですませて、事前の問題解決を諦めているだろう・・・」

「あいかわらず心配性だのう」

「小言を言う者が一人くらい居らねば、このファミリアはとつくの昔に混沌と化しているぞ・・・」

三者三様の反応をロキが確認して口を開く

「ほな、決まったな! でな? でな? 良い話つてのは・・・カイトのランクアップや!! 所要期間半年! 最年少とはいかんけどアイズの最速記録を抜いて新たな世界記録保持者の誕生や!!」

ロキの発言に全員が絶句する、だが、最初からそれなりに覚悟を決めていたのですぐに我を取り戻して嘆息する

「ふう・・・さすがは僕が選んだ次期団長候補、とでも言うべきかな?」

さすがの僕でも乾いた笑いしか出てこない

「信じられん・・・あのアイズでさえ一年、それすら異常すぎる速さだったというのに」

リヴェリアに至っては未だ半信半疑のようだ

「ガツハハハハハハ、彼奴ほどの男が死の淵に立たされる程の死闘をしたんじゃ、通常の経験とはわけがちがったんじやろう、むしろ今回

のランクアップに儂はむしろ納得じゃぞ!!」

カイトを推しているガレスはむしろ自慢げな様子だ、一番期待しているカイトが期待していた以上の成果を出したことが嬉しいのだから

それにしても、確かにこれはビッグニュースだ、限りなく低い可能性の一つとして考えてはいたが本当にランクアップを果たすとは……「じゃあ、サクサク次いこか、悪いニュースはカイトのステイタス値がおかしなことになっててなあ……」

「……例のスキルか?」

この場に居る全員が心当たりのある原因を思い出す

目が覚めたカイトから後日に聞いていたが、やはりカイトは僕たちが使用を禁じていたスキルを使用していた、だが今回は使わなければ死んでいたであろう状況なのでさすがに不問としていた

「本当にスキルの影響でステイタス値が下がるのか……ロキ、ステイタスの写しは持っているか?」

「あるでー」

そういつてポケットから折りたたんだ紙をリヴェリアに渡す、それを見たリヴェリアの顔が曇る

「なんだ……これは……さすがに初めてみるぞこんなステイタスは……色々な意味で意味がわからん」

「儂にも見せてくれ」

リヴェリアからガレスに渡ったステイタス紙を横から僕も一緒に見せてもらう

カイト・クラネル Lv. 1

力：C⇒D 6 1 2⇒5 1 4 (―9 8)

耐久：D⇒C 5 4 5⇒6 3 4 (+8 9)

器用：C⇒C 6 7 1⇒6 6 0 (―1 1)

俊敏：C⇒C 6 8 0⇒6 5 8 (―2 2)

魔力：A⇒S 8 9 0⇒9 8 2 (+9 2)

「………ロキ？」

ナニコレ

上昇しているステイタスの上昇具合も異常だがプラスとマイナスがぐちゃまぜになっていた

「やから言うたやろー？わけがわからんことになつとるつてー」

カイトのスキルは出た目に従い何らかの能力が発現する、そしてそれをキャンセルするには出た目の数×100のステイタス値が下がるといふのは初期の段階でここに居る全員が知っていたが、この紙を見る限り上がっている物もあれば下がっている物もある

「これはいつたい………あ」

そういうことか

「ガレス、ちよつとその紙を貸してくれ」

あまりに異質なステイタス紙の内容に当たり前のことを忘れていた

「さつすがフィンやで！もう何か気付いたんか？」

「ああ、たぶん本当の………というか、わかりやく書き直すところ言うことだと思うよ」

気付いたことを、ステイタス紙に訂正して書き込んでいく

カイト・クラネル Lv. 1

力：C⇒D 6 1 2⇒5 1 4 (―200) (+102)
耐久：D⇒C 5 4 5⇒6 3 4 (―100) (+189)
器用：C⇒C 6 7 1⇒6 6 0 (―100) (+89)
俊敏：C⇒C 6 8 0⇒6 5 8 (―100) (+78)
魔力：A⇒S 8 9 0⇒9 8 2 (―100) (+192)

「割り当ては適当だけど、たぶんこういうことだと思うよ」

当たり前のこと

ランクアップするほどの戦闘をしたのならそれに見合うほどのステータスの上昇もあつて当然のことだ、おそらく最初の数値はカイトの上昇値からスキルの影響で下がったステータスを合算した数値なのだろう

「あゝゝゝ、あかんボケてたわ、確かにステータスも上昇するわなあ、スキルにばっか目がいつてそんな当たり前のことも忘れてたわ・・・」

ロキが灯台もと暗しの様な状態に天を仰ぐ

「まあ、ステータスが下がるなんて現象は彼奴だけじゃろうからなあ、ロキ、お主も、物珍しくてはしやぎすぎたんじゃないか？」

確かに、ガレスの言うとおり初見では僕もこのステータスには面食らつてしまい、すぐには意味がわからず混乱してしまつたのでロキを馬鹿にはできない、だが これよりもさらに見落としていることがあるのを皆は気付いていない

「ここでの問題はステータスが下がつたことよりも、何故下がつたのかだ」

「・・・どういう意味だ？ カイトはスキルをキャンセルしたからこそステータスが下がつたのだろうか？」

リヴェリアですらこれには気付いていないようだ

「いや、カイトからそんな事・・・スキルをキャンセルしたとは聞いていない、というよりそんなことに意識を割く余裕は無かつたはずだよ」

「確かに、彼奴から聞いた話では最後の技を出してからの記憶が無いと言つておつたな」

「つまり、自動でスキルがキャンセルされたつちゅーことか？」

「たぶんね・・・しかも、だ カイトがあんな状態になつてまで放つた技を使用してもカイトのスキルはそれでは「使用していない」と判断

したということになる」

「強力な分、やっかいなスキルじやのう」

まったくだ、「使用した」ということになるのにも何か条件があるのかもしれない・・・明日、もしくは近い内にでもカイトに使用する際の条件に何か心当たりが無いか呼び出してでも聞かねばならないだろう・・・まあ、今の彼はかなりヒマを持って余しているだろうから、こっちから出向けば喜んで答えてくれるかもしれないが

「そういえば、そのカイト自身の容態はどうなのだ？ もちろん怪我の方ではないぞ・・・」

リヴェリアが眉間にシワを作りながらあきれ声でロキに質問しているが・・・無理もない

そもそも、カイトが目覚めてから既に一週間、本来ならとつくに退院している頃合いなのだが、カイトは未だにディアンケヒト・ファミリアの療養所に入院している

原因はカイトが目覚めたその日の晩に起こった、あろうことかカイトは絶対安静の身であるにも関わらず夜中に療養所を脱走、着の身着のまま、ロキ・ファミリアがひいきにして飲み会や祝い事での食事会を行う「豊穰の女主人」に突撃、顔見知りで店主でもあるミアを説得しツケで大量の料理を注文し、さらにそれを完食

当然のことながらカイトは目覚める10日間は意識不明の昏睡状態、食事は点滴のみであった、そんな状態の人間が起きたその日に大量の食事を取ればどうなるか・・・

店主のミア曰く、全てを食べ終わって数秒後、とてつもない笑顔で「ごちそうさま、生き返った気分だぜ!!」と言うと、白目を剥きながら泡を吹いてぶっ倒れたそうだ、ちなみにこのときのカイトの状態は割と本気でヤバかったらしく、現在カイトにはまた脱走しないように24時間体勢でディアンケヒト・ファミリアの団員が監視についている「生き返った気分の瞬間に死ぬとはのう・・・」

ガレスが髭を撫でながらシミジミとつぶやく

「いや、生きてるから」

ちなみに、次の日の昼には驚異的な回復力でカイトは目を覚ました

「でも、マジでぶっ倒れた後に心肺停止してたみたいやで〜」

ケラケラと面白そうに語るロキ

「カイトは頭が良い奴だと思っていたのだがなあ……」

至極残念そうにため息を吐くりヴェリア

「……とりあえず話を戻そうか、残りは面倒と面白そうな話だったよね?」

内容が脱線しかけたので話を戻すように誘導する

「ん〜、まあここまでできたら順番に話そか……面倒つてのはカイトに発現した発展アビリティなんやけど」

「ほう、やはり何かを発現させたか、それで? 何が出てきた?」

発展アビリティというのは、レベルへのランクアップ時のみに発現する専門職の能力だ

例えば鍛冶師なら鍛冶に関するアビリティが、魔法使いなら魔法に関するアビリティ等々、それまで本人が何に関わりどのような経験をしてきたかによって発現する特殊な能力、ランクアップするまで本人がどれだけ頑張ったのかという特典ボーナスみたいなものだ

これは複数のアビリティを発現する者もいれば1つも出てこない者もいる上にその種類は千差万別、だが凡庸性の高い人気のアビリティや希少なレアアビリティを発現できれば、それからの冒険者としての活動が飛躍的に楽になるので慎重に決めねばならない、何しろ一定のランクから上がるときにしか手に入らないアビリティも存在するからだ。

「とりあえず、3つも出てきててなあ……」

3つ、1つも発現できない者からすれば羨ましいことこの上ないだろう

「多いな……それで?」

「1個目は【狩人】や」

ロキが指を一本立てつつ話す

【狩人】一度でも勝利したモンスターと戦闘する際にステータスが上昇するというレアの人気アビリティだ、このアビリティは取得条件が

判明しているにも関わらず発現させる者は少ない、なぜなら取得条件がへ短期間の内に大量のモンスターを倒すへという達成するのが困難なものとなっているからだ、カイトは見事にこのアビリティを発現させることに成功したようだ

「まあ、あれだけモンスターの群れに突っ込まれば当然かな？」

「お主、笑顔でえげつないことをするのう・・・」

間。

「2個目は【対人】やで」

【対人】は文字通り人間を相手にした際、ステータスに上昇補正がかかるアビリティだ、これも取得条件がわかっており、へ激しく人同士で闘争を行うへというものだ、ただしこの闘争は生半可なものでなくそれこそ生きるか死ぬかくらいの戦いをほぼ毎日行わなければ発現しない、これを発現する者が一番多いのはコロシウムで闘う剣奴であったりする

「ガレス？・・・お前は一体どれだけカイトを・・・」

このアビリティを発現したことに對して、カイトの訓練のほぼ全てを担っているガレスにさすがのリヴェリアもドン引きしていた

「フツウノクンレンヲシタダケジャ」

何でカタコト？

「いや、だってこれかなりの殴り合いとかしないと・・・」

さすがの僕も一言出てしまう

「フツウノクンレンヲシタダケジャ」

「・・・」

今度からカイトの訓練には僕かりヴェリアも参加（監視）することになった

「・・・チツ」

僕は何も聞かなかった、うん

間。

「最後の三つ目は【奇運】や、ちなみに文字は〈奇妙〉な方の〈奇〉や」

「なるほど【奇運】か・・・」

リヴェリアが頷き

「【奇運】・・・のう？」

ガレスが髭を撫で

「【奇運】かあ・・・」

僕は天を見上げた

「二・・・ナニソレ？」

奇しくも長年の付き合いである三人の口調が消え去り、言葉が重なる
貴重な一瞬だった。

20：昇格×降格 後編

《side：ロキ》

「——で？ 結局、この三つ目のアビリティについての情報は全くなしってことかー・・・どうすつかねえ」

場所はデイアンケヒト・ファミリアの療養所、その中のカイトが監禁・・・もとい入院しとる病室

うちの前にはベットから上半身を起こした状態のカイトが頭を悩ませとる

カイトのステイタスの更新とファミリアの会議から二日

あれからフィン達とカイトについて話した後、ギルドで珍しい発展アビリティについて聞いてはみたがやはり【奇運】という名のアビリティどころか〈運〉という字が付くものすら見つからなかった。

あまりしつこく聞いても逆にこちらの情報を探られる可能性があるためそこまで深くは聞けなかったが、少なくともギルドではあまり聞かない・・・というより聞いたことのない新アビリティである可能性が高いということが判明した。

(それにしても【奇運】てなんやねん、これが【幸運】とか【不幸】とかならわかりやすいんやけどなあ・・・)

「ロキ的にはこのアビリティ、当たりだと思っつか？」

「んー・・・どやろなあ、でも字から考えて間違いなくクセの・・・それも相当尖り方が強いアビリティやないかなあ・・・〈奇〉と付くものにまともなもの期待せーへん方がええ、なにせ自分、天界じゃ異名でトリックスター奇術師って呼ばれててな？ 自分で言うのもなんやけどろくでもないかったで？」

「なるほどお、つまりこのアビリティはロキ並に駄目でクズでダメダメダメダメダメ——」

「そこまで言っとらんわ!？」

「この子はもうあれやな!?!うちのことなめきつとるな!？」

「カイト、うち主神な？偉い神様な？忘れとらんよね？」

親しき仲にも礼儀ありやで？

「Sh^ッeテルよ？」

「……………」

嘘や無いとわかるけど……何やらかこの騙された感じは

「はあく……とりあえずや、このアビリティイを選ばなくても【狩人】なんてレアアビリティイも発現しとるんや、わけのわからんもん選ぶより、こつちを選ぶのも全然アリやで？むしろ普通ならそうするやろな」

実際、この【狩人】のアビリティイは手っ取り早く強くなるのに最適なアビリティイという理由だけで人気なのではない、このレアアビリティイはLv. 2にランクアップするときにはか発現しない限定アビリティイでもあるからだ、故にいくら未知のアビリティイといえどこれから先のことを考えると【狩人】を選択しないという判断は非常に難しい

堅実に【狩人】か、それとも大博打に出て効果のわからない【奇運】という謎のアビリティイにするのか、こればかりはカイト自身が決めねばならないことだ

（幸い、考える時間はあるからなあ……カイトには言うてないけどな、ニヒヒヒ）

悪戯心から珍しくカイトが悩む姿を楽しもうかと思っっていると

「じゃあ【奇運】でいいや」

カイトがあっけらかんと言うてきた

「は？……いやいやいやいや！もちよつと考えた方がええやろ!?なに今日のお昼を決めるみたいなのりで決めとんねん!」

うちの話聞いてたんかこの子は!?

何も考えてないのではななろうかと、さすがに口を出してしまう

「ロキがさつき言ってたじゃん、普通なら……俺の目標は普通じゃたどり着けないからこそこの選択だ、俺の夢は時間制限も付いてんだぜ？アスファイはいつまでも待つって言うてくれるけど俺はあ

いつをいき遅れにするつもりはねーんだよ」

こちらを見返すカイトの決意とその目があまりに真摯すぎて一瞬気圧される

「そ、そやな……いや、そやったな」

先日のアスファイちゃんとの告白からこの子がどれだけ途方もない夢に向かって走っているのかを思い出す

文字通りのお伽話の様な夢

ただの村人が冒険者になり、そしてそこから成り上がって一国の姫を娶るといふ、聞く者が聞けばどこの作り話だと馬鹿にされるような夢だ

「んじゃ、さっそくランクアップの更新よろしく」

うちがこの子の目指すものの難しさに複雑な思いをしているというのに、カイトは軽そうに言ってお上着を脱ぐために着ている服のボタンに手をかける

(この子はホンマにもう、いきなり真面目モードかと思うたらこれもんなあ、調子が狂うわあ……あ)

おちよくろうと思つてカイトにわざと言わなかった内容を思い出す

「あ!?! ちよつ、まち、カイト!」

「ん?」

「あ……実はこの前の会議でフィン達とカイトのランクアップについても話したんやけど……後二ヶ月くらいランクアップ待たへん?」

「え……なんで」

カイトが疑問に思うのももつともやけど、これにはちゃんと理由がある

器を昇華させれば人の子は格段に強くなれる、だがLv. 1時のステータス平均がAとCの冒険者が同時にランクアップした場合、ステータス平均がAだったの方が強い、うちら神々はこれを〈貯金〉言うとする、この貯金の差が大きければ大きいほど同じレベルの者でも差が出てくる、そのためランクアップをするのはステータスが上昇しにくくなる時こそが最もベストなタイミングとなるわけやな

ちなみに弱小の零細ファミリアなどはこういうことを知らずに即ランクアップをさせたせいで後になってから泣きを見るが多かったりする

「——ってなわけや、ちょうどカイトがぐっすり寝ている間に神会デナトウスも済んだばかりやねん、ランクアップは次の神会に合わせで行った方がええ、て話になつてな？」

「それは初耳だったな……うん、まあ、それなら仕方が無いかあ……」
たぶんランクアップを楽しみにしていたのか、カイトがあからさまに意気消沈していく

「そんな訳で明日から三日くらいは鈍った身体を鍛え直すために訓練、その後の二ヶ月間はほぼダンジョンでステータスを上げるのに集中するのがこれからの予定やな　まあ、カイトなら二ヶ月もステータスの上昇に集中すればステータス平均をBくらいまでは持つて行けると思うで？」

なにせカイトはまだLv. 1、あまりのはちやめちやさに忘れそうになってまうけど一番ステータスを上げるのが楽な初期レベルや、これまでダンジョンに関する勉強会にも他の団員との交流という目的で参加させてはいたがしばらくはお休みや、既にうちのファミリアでカイトを知らん者はおらんからこそステータスを上昇させるためにダンジョンに集中させることができる、これも今まで入団してから無理して二足の草鞋履いてでもカイトが頑張ってきたからこそできることや

「それってつまり、今まで以上にお嬢と一緒にモンスターの群れに突っ込まれるってことだよなあ……うわあ」

数日後からの地獄を想像しみるうちにカイトがしぼんでいく……フィンも結構な無茶させとるって聞いとるからなあ……まあ頑張りー、と他人事のように考えていると

コンコン

と、控えめにドアをノックする音

どうぞー、とカイトが入室を許可すると、めっちゃかわええ娘が入ってくる

「げっ！アミッド!？」

「こんにちはカイトさん、お昼の時間になります・・・神ロキもいらしてたんですね」

この娘はオラリオ最高の治療師「アミッド・テアサナーレ」Lv.2のデイアンケヒト・ファミリアの構成員・・・なんやけど、先日フィン達との会議で最後に話した〈面白い話〉いうんがこの子に関してだったりする、というのも――

「はい♡カイトさん、あゝん♡」

「いや、自分で食べれるし・・・」

「何を言ってるんですか？カイトさんは病人ですよ？食べさせてあげるのは普通じゃないですか、はいあゝん♡」

「明日には退院なんだけど・・・んぐ!？」

問答無用とでも言うようにしゃべるために開いた口に料理を突っ込むアミッド、ただそのせいで食べた物が喉に詰まったのかカイトが咳き込む

「げっふお!?!いきなり食べ物を突っ込む奴がいるかあ!？」

「ご、ごめんなさいやはりまだ固形物は早かったみたいですね・・・では失礼して・・・」

何を思ったのか、何故かアミッドがカイトの料理を口に含み咀嚼し始める

「お、おい・・・お前 何を・・・」

「ふあい、口移しで食べさせてあげまふ」

「ロキイ！ヘルプミイイイイイ!!・・・っ!?! ぬぐああああおおおおおお!？」

Lv.2のアミッドがLv.1であるカイトの顔面をホールドして今まさに親鳥が子にエサを与えるように微笑ましい・・・とは明らかにかけ離れた光景が展開される

見て分かるように・・・いやこれ見て分かる奴おるかなあ?・・・まあとりあえず、何があつたのかよーわからんけど、この一週間で

『ディア・セイント戦場の聖女』と名高い彼女はカイトにべた惚れになってもうたらしい

い
．．．ちなみにカイトはこの娘の激しいアタックをつい昨日まで異常な看護愛と勘違いしとったが、それも先日カイトに恋人がいるということを知ってアミッドが暴走、なんでも夜這いに来たらしいがカイトはこれを全力拒否し一悶着あったとかなかったとか

カイト曰くアミッドはどこぞの狂戦士の看護師くらいヤバイとか、てか誰やねん狂戦士で看護師で存在が矛盾しすぎやろそれ

(それにしても．．．こんなところアスファイちゃんに見られたら修羅場待ったなしやなあ．．．ん、ありや? なんや急に寒気が．．．)

「．．．．．カイト?」

ロキがゆつくりと振り返ると手には花束、しかしバックには絶対零度の吹雪ブリザードを連想させる程の鬼気をまとったアスファイがいた

(あかあ——ん!!?!)

「あ、あんな? これは、違うで、カイトは——あり?」

固まったワイソつちのけでツカツカとカイトに歩み寄るアスファイちゃんとアミッドの目が合う

「んのにぬままぬすか」

「しゃべるならせめて口の中のもん飲み込んでからしゃべれ! あと、いいかげん 離せえええ!!」

「んぐ．．．どちら様でしょうか?」

「ゼエ、ゼエ．．．た、助かった．．．」

つい先程までのカイトとの攻防を感じさせぬ顔でアミッドがカイトのベット越しにアスファイちゃんと対峙する

「初めまして、『ディア・セイント戦場の聖女』カイトの恋人のアスファイ・アル・アンドロメダと言います、どうやら体調のよろしくない私の彼氏のために余計な世話をさせてしまったようで、でも御安心下さい、ここからは私が代わりに面倒を看ますので」

アスファイちゃん、こわあ．．．所々でカイトとの関係を強調したい

のか声のトーンが一部強めで言われとる、しかも最後は逆読みしようなとびきりの笑顔付きやった

ピキリ

あ アミツドのこめかみに青筋が・・・

「カイトさんに恋人が居るといいうのは知っていましたが、あなたでしたか『全能者』^{ペルセウス}・・・患者の面倒を見るのは看護師の務めですのでお気になさらずに、それに既にカイトさんのあーんなどこやこーんなどこまで面倒を見ているのでお気になさらずに」

「アミツド誤解を生みかねない言い方はやめてくれ!？」

「意識のないカイトさんの下の世話をしたのは本当ですよ?・・・立派でした♡」

頬に手を当てててモジモジし始めるアミツド、それに対して絶句するアスファイちゃん

「私ですらまだ見ていないというのにつ・・・!!」

アスファイちゃん、突っ込み方がおかしいて、つかあんなもん見たいんか・・・思春期やなあ

何故か勝ち誇った風のアミツドがアスファイちゃんを見ながらお返しの様に満面の笑みで言い返す

「まあ、今は付き合っていてこれから何が起こるかわかりませんし・・・そういえば先日他の神々からNTRという言葉を教えて頂きましたってね?・・・ふふふよろしくお願ひしますねアスファイさん?」

そういつて握手を求めるアミツド

「何がよろしくなのかわかりませんが、ええ、こちらこそ」

そう言つてアミツドの手を取る

ミシミシギシミシ

そして部屋に響くのは手を握つてから二人の手首の骨が軋む音

「ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ」

(カイトオ!?!いいかげん止めてやれや!!・・・つていないー!?!)

一体いつのまに抜け出したのかベッドどころか部屋からもカイトの姿が消えていた

|||||

現在俺は全世界の男子がもつとも落ち着くであろう場所 個室トイレに立て籠もっていた、というのも俺をめぐってアスフィとアミツドが険悪な雰囲気になったからだ

『絶』が得意でよかった・・・)

不味い雰囲気を知ったので即『絶』を発動し全力で離脱、見事に気付かれることなく脱出に成功、このときほど己の才能に感謝した日はないかもしれない・・・部屋から出る際に俺の監視を命じられていたであろうデイアンケヒト・ファミリアの団員が簞巻きにされていたのは何かの見間違いだと思いたい

(あいつ強行突破してきたのかよ・・・)

俺の何がアミツドをあそこまで狂行に走らせるのかわからないが応じるわけにはいかない、俺はピュアな男、アスフィ一筋だ。

なら、もつと強めに拒絶すればいいのではないか、と思う者もいるだろうがさすがに命の恩人を無下に扱うことはできない

なにせ俺がここに運び込まれた際に輸血用の血を貧血寸前まで提供してくれたのがアミツドなのだ、なぜアミツドがそれほどに大量の血液を提供することになったのかというと、どうやら俺の血液型は相当珍しかったらしく適合する血液保持者がアミツドしかいなかったというのが理由だ

この事実はこれから、もしも俺が今回と同じような怪我で運び込まれたとき、アミツドが血液を提供してくれなければ死んでしまうことを意味する

つまり、あまり拒否しすぎてプラスの感情が反転してマイナスの感情になってしまった場合、アミツドが俺への輸血を拒否してくるかもしれないという思惑もあるために最低限の否定しかできないというわけだ

(つていうか、何で振られたのに翌日には再アタックしてくるんだ・・・)

メンタル強すぎ。女って皆こんなに凶太いのだろうか……ん?)

気付けば何故か共同トイレの個室の中が少し薄暗くなっていた
(ランプの魔石が切れたのか?)

——そう思い上を見上げると——

「カイトさん見iiiiiiiiつけたああA A A A a a a a a a a a a a!!」

「ほぎやああああああ!!」

アミツドがいた

入り口の上から這い上がり、男の聖域に嬉々として侵入しようとしてくるその姿は軽くホラーである。

俺氏、前世を含めて恐怖感からここまでの絶叫を上げたのは初めてであった。

「つてアミツド何やってんだあこらあ!!」

「何って、逃げたカイトさんの臭いを追いかけただけですけど?」

「獣か何かお前は!!」

それが何か? とでも言いたげなアミツドと問答をしていると

「ここか、この泥棒猫!!つて何やってんですか!! 下りなさい!!」

「痛だだだだ!! ちょ!!足を引つ張らないで下さい!!」

どうやら救援^{アスファイ}がきたようだ、ずるずるとアミツドの姿が見えなくなり、ホツと息をつく

『戦場の聖女』^{ディア・セイント}を確保——!!」

アスファイの掛け声と共に複数の足音が近づいてくるのが聞こえてくる

「なあ!?!あなたたちまで何故私の方を捕らえるのですか!?!捕らえるのはそっち! 『全能者』^{ペルセウス}の方ですよ!!裏切り!?!裏切りですか!?!」

個室のドアを少し開けて覗いてみたら、どうやらディアアンケヒト・ファミリアの団員も駆け付けてアミツドの捕縛を手伝っているよう

だ

「いやアミッド、お前さんディアンケヒト様から彼の部屋への入室は禁止されていたのに破つただろう？ しかも見張りをしてくれていた団員の意識を奪ってまで・・・さすがにやりすぎだ」

「・・・な、なんのことでしょう か」

同僚であろう男性からの質問に対して、ここからでも分かるくらいアミッドの目が泳ぎまくっているのが見えた

「アミッド、お前さんこんなことする奴じゃなかっただろう、一体どうしたんだ・・・」

「カイトさんへの愛が私を変えたのです!!」

(俺のせいみたいに関こえるからその言い方は止める!!)

「はあ・・・とりあえず彼が正式に退院するまで謹慎と神命が下つた・・・連れて行け」

「え? うそ? うそですよね!? ちよ、運ばないで下さい!? カイトさん助けてええええつええええええー・・・」

ビチビチとはねる巨大魚の様な必死の抵抗も空しくアミッドはどこかに運ばれていった

「脅威は去りましたか・・・カイト、もうそこから出てきても大丈夫ですよ」

アスファイがこの場が安全になったことを教えてくれるが忘れる事なかれ、ここは男子トイレ、女人禁制の男の聖域である

「お、おう・・・マジで助かったサンキューなアスファイ・・・つかここ男子トイレなんだが・・・」

「そ、そうでした・・・すみません外で待ってますね」

ここがどこか忘れていたのかアスファイがそさくさとトイレから出て行く、その後ようやく個室から出て手を洗いアスファイと無事に合流、部屋まで一緒に帰ることにした

「すまん、改めて助かった・・・マジで」

「もう少し強めに、彼女を拒否すればいいだけなのでは？　そうすればこのようなこと・・・」

「まあ、カイトにも色々事情があるんやで？」

ちなみにロキの奴は部屋で見舞品である果物を騒動そっちのけでムシヤムシヤと食べながら俺のベッドでだらけてやがった

「あんな女を許容する程の事情があるのですか？」

「一応あるんだよ、しかもこれがまた死活問題でな・・・」

場所は俺が入院している個室、アミッドのことに対して強く出られない理由を説明するとアスフィの眉間にみるみるうちにシワが出来ていく・・・これはこれでかわいい

「——と、まあこういう理由でなあ・・・機嫌を損ねすぎると今後のことが恐くてなあ」

「むぐう、カイトの命には代えられません・・・理解はしても納得したくないですね・・・あの変態の血がカイトに入っているのかと思うと、なんでしようね・・・言葉に出来ない腹立たし感情が、こう・・・沸々と湧いてきます」

「だからって俺の血を抜こうとしないでくれよ？・・・ま、どっちにしても明日には退院だし、今後あいつと関わり合いになることも激減するだろ、さらば退屈な入院生活！さらばアミッドってな!!」

「そうだといいのですが・・・」

——余談ではあるが、数日後からギルド経由でディアンケヒト・ファミリからロキ・ファミアのとある団員へ名指しの指名依頼（依頼の品は直接ディアンケヒト・ファミアの本拠に届けるのが絶対条件）が連日舞い込むことになることを俺はまだ知らなかった。

その後はアスフィとお互いのファミリアの話や久しぶりにベルやじいちゃんのあまり変わっていないらしい近況を教えてもらった

「・・・そっか、ベルもじいちゃんも変わらず元気か」

「ええ、お爺さまもこちらは気にせず頑張れと言っていましたし、ベルの方に至っては心配する必要も無いくらい元気な様子でした」

「また今度、村の近くまで行くときは教えてくれ、手紙と一緒に仕送りとなにか日持ちするお菓子でも贈りたい」

「ふふ、任せてください・・・あ、もう時間ですね、カイトと話しているとあつという間に時間が過ぎ去ってしまうのが難点です」

「まったくだ、楽しい時間ってのはどしてこんなに過ぎ去るのが早いかな」

「我慢した分だけ楽しい時間は濃密に感じる物ですよ・・・またお互い頑張って時間を作ったらどこかで食事でもするとしましょう」

「喜んで・・・ん」

最後に一時の別れを惜しむ軽いキスをする

「ん・・・では、また」

「ああ、またな」

精一杯伸ばして繋いでいた手が離れる

お互い名残惜しいがそれぞれやることがあるため仕方が無い、まあ今の俺は休むのが仕事で働いているアスファイには少し申し訳ないが・・・あれ？俺ってばヒモみたいじゃね？

そんな俺の葛藤に気付くことなくアスファイが退室

しばらくしてから入れ代わるようにしてロキが入ってきた、ただしニヤニヤと形容しがたい表情で。

「ロキ、盗み聞きとは趣味が悪いぞ」

「ちよつとくらいええやくん、いやあしつかしアツアツやなく、最後の方は聞いているこつちが恥ずかしゆうなったわ」

ちなみにロキは先程から気を利かせて席を外してくれたのだが、どうやら外で聞き耳を立てていたようだ・・・というか悪戯が大好きなこいつはおそらく最初からそのつもりで席を立ったのだろう、くそ、予想して『円』を張っておくべきだったか・・・己の迂闊さを悔やむ「それで？ まだ明日以降の予定で何か言っていないことでもあるのか」

「んにや、一応それは全部伝えたで、戻ってきたのはアスファイちゃんにも聞かせられない身内の話があるからや」

「・・・【ジャンプの海賊印】の〈使用した〉ことになる条件についてか？」

「そーや、なんやうちが聞いてくるの予想できとつたんかい」

ロキの質問は予想はしていたがやはり俺のスキルに関してだった、俺としてもこれは気になることなので一応ではあるが俺の予想を話しておきたかった

「まだ、『3』と『6』しか出てないが大まかな予想はできてる、『3』の方はたぶん出したものを誰かの体内に・・・とにかく何でもいいから体内に取り込むこと・・・だと思う。」

「ああ、ガレスの言ってたくつそやばい卵焼きやつたつけ？・・・うーん今でも信じられへんなあLv. 6のガレスの耐久や耐状態異常をぶち抜いてくるような卵焼きで・・・いや絶対それ食べ物ちゃうやろ」
ロキよ、もしその台詞、卵焼きを生み出した原作の張本人に聞かれたらその卵焼きのフルコースが待ってるぞ

「まあ、ある意味チートだよなこれ」

食わせてよし、投げてよし、ぶつけてよし、三拍子がそろっている、ある意味これが一番万能かもしれない

「で、今回こんななつた原因の『6』・・・『八門遁甲の陣』やつたつけ？　この条件の予想もできてるんか？」

「予想としては2つくらい思い浮かんだな、一つ目は単純に俺の練度不足で使いこなせなかったからって理由だ、これだったら今まで通り修行でもすればいいから気が楽なんだが・・・」

「なんや、もう一つの予想はやばいんか？」

「ああ、『八門遁甲の陣』ってのは身体にある一般的には常に閉じてる八つの門を順番にこじ開けてリミッターを徐々に開けてから最大解放するんだ、そんでもって最後の八門目の〈死門〉を開けるとさらに爆発的な力を一時的に得られるって術なんだけど・・・〈死門〉って名の通り、開けちゃうと死ぬんだよねこれが」

「んなあつ!？」

「へ死門へまで開けるのが条件だとやっべーよなこれ」

さすがに予想した二つ目の条件にロキの顔が真っ青になる

「ヤバイどころやないわあ!?!カイトおまつ!?!なんちゅー技使てんねん!?!」

「いや、前も言ったけど使わなきゃ死んでたぞ」

「それでもやーええか!?!以後この数字が出たら即キャンセルや!!」

「えー…もつたいないからちよつと使つてからキャンセルした方が良くないか?」

「だーめーやー!?!カイトのことやからそのまま勢いとノリで最後の門まで開けかねんやろうが!!」

確かに、ガレスのおっさんとの模擬戦や今回の襲撃でも追い詰められると頭のネジがかなり緩くなってることが多い気がする

「んー…仕方が無いか…わかった、今後この数字が出たらキャンセルするよ」

「ホンマか!?! その場しのぎのウソやないやろな!?!」

「誓う、誓う。『6』の数字を引いたら即キャンセルする…これでいいか?」

神々にウソは通じない、ロキには俺の言ったことが本当だとわかったはずだ

「うう、まあ分かったならええねん、一応このことはフィン達にも伝えとくで」

「頼むわ」

俺が『6』の能力を使わないと誓ったことでロキも落ち着きを取り戻してくれたようだ

「あ、そやカイト、もう一個、伝えなあかんことがあったわ」

「まだ、あんのかよ」

ロキがポケットから何やら紙を取り出してこちらに渡してくる

ざわ

ざわ

ざわ

ざわ

ざわ

ざわ

紙にはたくさんの「0」が並んでいた、何故だろう心が　ざわざわする

「・・・ロキサマ・・・コレハ・・・ナンデシヨウカ」

「カイトの入院費に加えて怪我に使うた高級回復薬ハイポーションや万能薬エリクサーだけやのうて万能薬入り点滴とか諸々の諸経費やな」

「・・・自費？」

「自費や、これでも結構な額をファミリアが負担しての額やで？」

ファミリアでも負担してもらってコレ？

「慈悲は？」

「ないなあ」

「・・・」

この後にロキは頑張りくと軽く言つて帰つて行つた

当然ながらロキが帰つたあと俺の気は決して休まることなく、ぐぐにやくという音と共に世界がねじ曲がっていく感覚に朝まで襲われ続けた

オラリオに来て半年

借金返済生活スタートのようです。

21：神会×称号

オラリオの中心にそびえ建つバベル

今から千年前に「暇なので」と言うしようもない理由で神々が降臨した最初の地でもあり、世界の暗黒期を終わらせた始まりの地でもある

その塔の高さは世界最高峰を誇り今でもダンジョンからモンスターが地上に溢れないようにするための蓋という重要な役割を持つ

そのバベルでは一定の階層からは神々しか立ち入ることが許されない、そのとある階層のフロアを丸ごとぶち抜き行われるのが神会デナトウズである。

開催は基本的に三ヶ月に一度、参加は自由であるがその神会の内容に自分の眷属が関わっていた場合は必ず参加しなければ自分の子供が確実にイタイことになってしまうので要参加となる

ちなみに例外的に延期されることもままあるので開催は絶対ではない。

今宵はその神会が行われていた

「最近あいつらウザくねー?」「それよりラキアでまーた何か動きがあるってよ」「闇派閥イツイルスどもめ…」「今日はフレイヤ様いないのー?」「イシユタル様もいないじゃん俺帰るー」「私がガネーシャだあ!!」「はいはい」「ガネーシャガネーシャ」「怠慢ですね」「まっじめ〜」

だが神会とは言ってもその実は、ただの神々の井戸端会議に近い情報交換会であった

これを知らない人の子は神々同士による厳かな会議が開かれていると勝手に思っている。

・
・
・
・
・

そこそこの時間が経ち情報の交換が終わり喧騒が落ち着いてきたところで今回の司会役の神が宣言する

「では・情報交換はここまでとする、闇派閥に対してはこれまで通り厳粛に対処するという事でいいな!!」

「「「異議なーーーーーし!!」」」

一旦、司会役の神が周りを見渡し宣言する

「では、これより命名式を始める!!」

「「「ヒヤッハアアアーーーーー!!!」」」

命名式

ランクアップし、己の器を昇華させた者に神々が贈る称号を決める儀式、もとい遊びである。

神々から贈られる称号は様々なものがあるが、そのほとんどが悪ふざけによって付けられた痛恨の名がほとんどであった

しかしまだまだ神々のセンスに追いつけない地上の子供たちはその痛恨の二つ名を誇らしげに名乗るのである

これが愉快型の神ならば共に笑い転げるであろうが、神格者であれば嘆き悲しみ、己の眷属がその痛恨の二つ名を誇らしげに名乗るたびに胸を引き裂かれそうな苦しみを味わうことになる

ただしこの呪縛から逃れる方法は存在する、その方法は三つ

一つ目は自らのファミリアをオラリオでも有数のファミリアに育て上げ影響力、要は発言力を得ることだ

二つ目は強力なファミリアの傘下として保護してもらえた場合

三つ目はその容姿や達成した偉業から神々に好感を得られた場合だ

そしてロキは都市に二つ存在する二大派閥、その片割れ

この女神の眷属に面白おかしい称号付ける命知らずの神はいない、故にロキは他の古参の神々と同様に全力で真面目にふざけていた

「うっひょーこの子、名前がバルムンクとかめっちゃかっこいいやんけー!よっしや二つ名は『漆黒の風』ダーク・ファキナウエイで決定や!!」

「二」いてええええええええええ W W W W W W!!」「二」
「いやあああー！ー！！やめてええええええええええ!!」「
バルムンク、もとい『漆黒の風』ダイク・ファイナウエイの親である女神が顔を覆いつつ
絶望の声を上げる

次々とランクアップした子供達の称号が決まり、その中には泣き崩れる者、安堵する者、泰然としている者と様々であるがロキの眷族の順番となり、そのランクアップした子供の資料に目を通した神々全員の表情が一変する

「おいおい、ランクアップの所要期間が8ヶ月って・・・」

「またロキの所かよ」

「つかこれ世界記録じゃん」ワールドレコード

「・・・だよな？」

「最年少記録こそ破れないが、最速の世界記録ワールドレコードなのは間違いあるまい」
「ロキよ、これ程の逸材をどこで見つけてきたのだ？」

その場の神々が親であるロキに問いただがロキの表情は変わらない、いつものニヤケ面である

「ニツヒツヒツヒ、すごいやろ〜？つい最近見つけたうちの秘蔵ツ子やねん、将来的にはうちの懐刀になるかもしれん、せやからや・・・
なめた称号もん付けたらぶち殺す☆」

「二」イエス・マム!!」「二」

ロキに脅された神々が手元にある資料と似顔絵を元に比較的眞面目に称号を考え始める

(ま、一応脅しといたから下手なもんは出てこんやろ・・・最悪でも、
うちが考えたもんを押し通してもええしな)

そう考えつつ話し合っている神々を眺めていると

「——ロキ」

「んあ？ おお、ファイたんやないか、どないしたん？」

声の掛かった方を見ると灼髮隻眼のヘファイストスが隣まで来ていた

「さすがにちよつとロキの子に興味が湧いてね？ それにしてもこの子のランクアップの所要期間が8ヶ月って本当なの？」

「マジもマジやで、まあランクアップの原因は今日はここにおらんアホの子の第二級に襲われたせいなんやけどな」

「もしかして・・・それを倒しちゃった？」

「せやで、もちろん一人じゃ無くて複数で相手してやけどな」

「それでもとんでもない逸材ね、巡り合わせの多いロキが少し羨ましいわ」

「いくらファイたんでもカイトはやらんで？」

「そんなことしないわよ・・・まあでもうちの子と専属鍛冶氏の契約を結んでくれたりとかは狙ってるかもだけど・・・ね？」

「お、それええなあ、実は最近カイトが刀とか使いたがってるみたいだな？ 詳しい子とか紹介してくれると助かるわあ」

「あら、そうなの？ じゃあこつちもそれなりの子を紹介しようかしら・・・刀だったら・・・椿がお勧めだけど」

「その子、確かガレスと契約結んでたんとちゃうん？ あ、ちなみにカイトはガレスの弟子みたいな関係やで」

「エルガラム重傑の弟子？ んー・・・師弟そろって椿と契約つてのも面白いかしら？」

神友との実りのある話に花を咲かせているところで

「「「決まったあああー！！！！！！！！！！」」」

カイトの称号を考えていた神々から歓声が上がる

「じゃあ、この話はまたあとでねロキ」

「せやな、詳しい話は後で煮詰めよか」

ヘファイストスが空気を読んでロキの隣から退席する

一方、ロキの方はズカズカと神々の喧噪の中に入り込んでいき決まったカイトの称号を確認する

「おらあ見せてみい、お前らのセンスこのロキが見定めたるわ！」

「どーよロキ俺たちのこのハイセンス&クオリティの称号！」

「ふう・・・難産だったZE!!」

「いや、お前の考えたの全部却下されたけどな」

「ロキーこいつ巫山戯た名前言ってますたー」

「やめてえチクらないで!? 出来心だったんですう!!」

「とりあえず後でその奴は締めるとして、いいから決まったのを見せろや」

一柱の神が悲鳴を上げる中、ロキの手の中に話し合いで決定した称号の書かれた紙が渡される

そこに書かれた称号名に目を通すと、いつもは細く閉じられ気味なロキの目が薄く見開かれる

ゴクリ

それを見た神々が緊張の余り喉を鳴らす

最大派閥の片割れ、ロキが本気になればそこら辺のファミリア等、冗談抜きで消される

故にロキの反応に短い静寂が生まれたのだが――

「・・・ほお、ええやんけ、見直したでお前ら!!」

どうやら予想以上に気に入られたらしく、かなり上機嫌な反応が返ってきた

「っしやあああ合格出たぞー!!」

「じゃあこの子の二つ名は――」

|||||

「くそっ!?!引け!引けー!!」

屈強そうな男と女性の入り乱れたパーティが脇目も振らずに一目散に逃げ出していた

「「GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
!!」」

それを追いかけるのは子牛程の大きさをもつ超大型犬ヘルハウンド 人程度であれば骨まで焼き尽くす炎を口から吐き『放火魔』^{バスカビル}とも呼ばれる、中層でもパーティ全滅の原因のトップをひた走る厄介なモンスターである

ここは中層の始まりにして最初^{ファーストライン}の死線とも呼ばれる13階層とあるパーティが運悪く怪物^{モンスター}の宴に巻き込まれ、逃げ出している最中である

「よりにもよってヘルハウンドの集団かよ……つて危ねえ!!」

盾持ちの前衛である男がヘルハウンドの吐いた炎を持っている盾で防ぎ仲間を庇う、しかし

「どわっちやー!?!」

ヘルハウンドの炎が瞬く間に盾を赤熱させ、男に盾を捨てさせるせめてもの抵抗にと、盾をヘルハウンドに向けて投げつけるがあまりと避けられる

「ちくしょう!予備の盾は後何枚ある!?!」

「んなもんとつくに捨てたわ!!」

「はあ!?!」

「あんな重い物を持ってこの速度を維持できるわけないだろうが!!」

「こんな時にケンカをしてる場合か!急げ!!」

このパーティのリーダーであろう女性のエルフが叱咤し改めて全力での逃走が再会する

ダンジョン内だからこそその理不尽に皆が齒噛みしていると前方に人影が見えてきた

「しめた！フィルヴィスあいつらに押しつけるぞ！いいな!?」
「なっ!? 待てそのようなことっ」

「馬鹿野郎！仲間と身知らずの他人！てめえが優先しなきゃならんのはどっちかわかってんだろうが！」

言い合っている間にも、逃げる先に居る冒険者との距離が縮んでいく

「っ……わかった、皆あの者達には悪いが怪物進呈パスパレードを行う！私に続け！」

目先にいる冒険者は三人しかも

（まだ、少年少女と言ってもいい子供ではないか……こんな子供に私は……）

己の行う行為に嫌悪を感じつつ二人の横を駆け抜ける
「すまないっ……！」

このとき通常なら聡明なこのエルフ

このパーティのリーダーにしてデュオオニソス・ファミリア団長「フィルヴィス・シャリア」は気付いていなかった

ここは中層の入り口13階層、

そもそも付き添いが居たとしても少年や少女程度では簡単に足を踏み入れることすらできない階層であること

そして三人がこちらに気付いているにも関わらずそこから動かず、視線は自分たちではなくヘルハウンドの群れに向けられていることに

（都合の良い考えかもしれない……でもどうか無事でい——
そんな風にせめて彼らの無事を祈っていると

「おっしやあああー!!魔石置いてけ犬っころー!!」

「ギャウン!?!」「ギャン!?!」

「経験値置いてけ……」

「キャイン!?!」「ギャウ!?!」

「アイズさん、またカイトの真似してたらリヴェリアさんに怒られ

るっすよー?」

その有り得ない声とモンスターの悲鳴を聞き、全員が振り返ると10匹以上いたヘルハウンドの群れの半数が頭を砕かれ、もしくは真つ二つにされて息絶えていた

こちらが呆然としている間にも年端もいかない少年と少女二人によつて瞬く間に血袋の塊にされていくヘルハウンド

「あ、あの金髪に金眼、見たことがある、ありや『剣姫』だ・・・」
パーティーメンバーの一人が二人の戦闘に畏怖をもつて呟く

(あれが例の『人形姫』か・・・凄まじいな)

自分と同じLv. 2だというのにその実力は明らかに向こうの方が上だとわかる、目にも止まらぬスピードで自分たちを死に追いやりかけたモンスターが次々となます切りされて文字通りバラバラになつていく光景を遙かに年下の少女が作り出していることに驚きを禁じえない

(凄まじいのは、こっちも一緒か・・・)

そしてそれ以上の苛烈さをもつて少年が繰り出す拳と蹴りがヘルハウンドの頭を爆散させ、また吹き飛ばし壁に叩き付け血の芸術^{アート}へと変えていく、だが真に驚くべきはこの攻撃を間合いの調整などと言つた『剣姫』へのサポートをしながら行っていることだろう、まるでこの場の全てを把握しているかのような立ち振る舞いは既に熟練の冒険者の動きを連想させる

「た、助かった・・・で、でもよあれって」

「ああ、世界最年少記録の『剣姫』と一緒にいるということは・・・あの少年が最近噂のランクアップの世界最速記録保持者、ロキ・ファミリアの——」

『ジョーカー切札』

大派閥の新人冒険者に付けられたその大それた称号が決して誇張では無いということ、戦闘を目撃した全員が己の眼を持って証明した。

・ ・ ・ ・ ・

「つていうか、これヤバくね？」

パーティメンバーの内一人が焦り出す

「何がだ？」

「いや、だって俺たちロキ・ファミリアに怪物進呈しちやっただよね・ ・ ・」

「「「あ」」」」

戦闘の終了した方を見ると『剣姫』は無反応

サポーターであろう地味な少年はこちらを哀れむような目で

そして『切札』^{ジョーカー}の方は何か企んでいそうな笑みを浮かべつつこちらに向かってきていた

「わ、私に対応する・ ・ ・皆、余計なことは言うな」

この時、フィルヴィスは先程の逃走時とはまた別の意味で死を覚悟した

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

22：巫女×外道

|||||

《side：ラウル》

どうも・・・ラウルっす・・・。

え、元気がない？

そうっすねえ・・・なんかもう最近疲れるとか何というか

『むしゃむしゃむしゃむしゃむしゃむしゃむしゃむしゃむしゃむしゃ』

「むお？ ラウル、ブーツとしてどうした、早く食べないとスープが冷めるぞ?」

「お腹でも痛い?」

いや、原因は朝から目の前で山盛りの御飯を掻き込んでいるカイトと、カイトの食べる食分量には遠く及ばないっすけど、それでも負けじと年齢と体格に見合わない量の朝飯に齧り付いてるアイズさんのせいなんすけどね・・・

最近、同期のカイトがアイズさんの記録すら抜いてランクアップの世界記録保持者になったんすよ

それ自体は非常に喜ばしいことで、カイトのランクアップの時には普段は閨派閥イザイルスのせいで忙しそうな先輩や団長達まで参加してファミリア全員で行きつけの酒場『豊穰の女主人』で盛大にお祝いを行たっすよ、いやああれは楽しかったっす!

ただ、問題があるとすればランクアップしたことでカイトが本格的にアイズさんのパートナーとして扱われることになったこと・・・いや別に寂しいとか嫉妬とかではなくて、自分が言いたいのは――

「ふうく・・・ごちそうさまでした! よっしやあ!! ラウル!お嬢!

今日もダンジョンで稼ぎまくるぞ!!」

「お〜!」

「おー・・・っす」

なくぜか自分までカイトとアイズさんの死デスマーチの行軍に付き合わされて
いるということなんすよね？

2人にサポーターとして指名されたのは最初は嬉しかったし、付いて
行くだけでガンガンステイタスが上がるんすけど、この2人の規格
外っぷりに自分の身体が保たないっすよお・・・

ああ・・・今日もまたモンスターの群れに特攻するんすねえ・・・

あ、アキ、もし自分に何かあつたら故郷の家族に・・・え、面倒く
さい？

優しい同期が欲しいっす・・・。

《side out：ラウル》

|||||

早いものでランクアップから既に一月

あまりの怒濤の日々に過ごしている日常が加速するような感覚に
襲われている

ランクアップが可能になってからステイタスを上昇させるための
二ヶ月はマジでキツかった・・・

中層の入り口とも言える13階層でフィン達、そしてフィン達が忙
しい時は他の上級団員の監視下の中で延々とアルミラージや他のモ
ンスターを狩り続けた

当初はベルに似ていて狩りづらかった兎型モンスターのアルミ
ラージもいまや作業の様に狩れるようになった・・・なってしまう
た・・・慣れとは恐ろしいものだ。

その血がにじむ・・・いや、もうあれは血が吹き出す程の努力と根
性だったな、と我ながら思う・・・そのアホみたいなダンジョン漬け
のおかげでランクアップ前のステイタスがこれだ

カイト・クラネル L V. 1

力：A 856
耐久：B 702
器用：B 780
俊敏：A 801
魔力：S 999

【念】の修練は部屋でも毎日やってるので魔力とかは早々にカンストしてしまった、逆に耐久の方は俺の戦闘スタイルが回避中心なのであまり上がらなかった、器用もかなり上がるには上がったが他のステータス程は伸びなかったのが残念だ

ロキから言わせれば後半のステータスがこれ程伸びるのはそれでもとんでもないことらしい

どうせなら全ステータスをカンストとかさせてみたかったが、そんなことは現実的ではないので事実上不可能だろう

ちなみに発展アビリティは当初の予定通り『奇運』にした

まあ、アビリティとして出るくらいだ、自分にとって不利になりすぎる様な能力ではないと思うが、

「カ、カイトーーーーー!? また怪物の宴つすよーーーー!?」

と、まあこのようにランクアップしてからモンスターとの遭遇率が倍以上になってるんだよなあ・・・

(ま、今の俺にとっては都合が大変よろしいから良いんだけどさ)

「うっし、行くぞお嬢! ラウルは下がっていつも通り弓で牽制を頼む!」

「ん!」

「りよ、了解つす!」

普通の冒険者であれば一日で数回も怪物の宴モンスターパーティに会うこと等なく、

もしそのようなことになれば己の不運を呪うだろうが、そこはモンスターを斬るのが大好きなお嬢と借金返済のために金が入用な俺
これ幸いにとバツタバツタと来るもの拒まず去るもの殺すのスタ
ンスでモンスターを滅殺

おかげで魔石がガツポガツポ！ 俺の借金もドドドドンと減って
グヘヘヘヘ

さらに経験値エクセリアもいつもの倍ゲツトできて、お嬢もホックホクでエヘ
ヘヘヘ

ラウルは巻きこまれてトホホホホ・・・なのはマジですまん

・
・
・
・
・

戦闘がサクツと終了し三人がかりでモンスターから魔石を取り出
していく

「カイト、そろそろバックバックが魔石とドロップアイテムで一杯に
なりそうっすよー?」

「もうか・・・仕方が無い、一旦上に戻るか」

こればかりは持つ量に限界があるので仕方が無い

「魔石よりも経験値・・・」

金にあまり興味の無いお嬢が愚図りだす

「勘弁してくれ・・・帰りのモンスターは全部お嬢に譲るからさ」

「むう・・・なら、いい・・・カイトと居るとモンスターが向こうから
たくさん来るから楽」

ちなみにお嬢が俺と積極的にパーティを組んでくれるのはランク
アップしてからの、この異常なモンスターとの遭遇率のおかげであつ
たりする

(これってやっぱり『奇運』のせいなんかねえ?)

そんな事を考えながら三人で荷物をまとめて撤退の準備を始める。

そこから、えつちらおつちらと地上に向かって急ぎめで移動していると

「「GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
!!」」

と、どこからか複数の同種モンスターの雄叫びが聞こえてきた

「ひい!? なんすか!? また怪物の宴モンスターパーティすか!?」

ラウルが焦り出すが聞こえてきた声はそこそこ距離がある、おそらく別の冒険者が襲われているのだろう

「落ち着け、ラウル、こいつはたぶん別の冒険者が相手にしているモンスターの声だ」

「・・・助けに行く?」

お嬢が一応聞いてくるが目的は救助よりモンスターを殲滅するのとだろう

「いらんだろ」

「冷たいっすね・・・」

ラウルが少し意外そうな顔をしているが別に俺は聖人君子じゃないんだ、面倒くさけりや見て見ぬ振りくらいすることはある、だが今回の場合は――

「いや、だってよー・・・あいつら俺たちに怪物バスパレード進呈する気満々だし・・・」

「え」

お嬢とラウルが振り返って見た先の道からは、こちらに向かって一直線に逃走してくるパーティの一団の姿が見えてくる

(ん? あの後ろのモンスターは・・・おっほ! ラッキー!!)

「お嬢、運が良いぞ、後ろから来てる集団、ありやヘルハウンドの群れだ」

「!?・・・狩る!!」

「応よー!」

「うへえ・・・勘弁して欲しいっすよ・・・」

ヘルハウンドは中層の中でも魔石的にも經驗値的にも非常におい

しいモンスターだ、相手が進呈してくれると言うのなら見逃す道理はない

「……すまないっ」

怪物進呈をされる時にすれ違った女性のエルフが申し訳なさそうにしていたのが少し気になったが、すぐに頭を切り換え、お嬢と二人でヘルハウンドの群れに突っ込み蹂躪を開始する

「おっしやあああー!!魔石置いてけ犬っころー!!」

「ギャウン!?!」「ギャン!?!」

「経験値置いてけ……」

「キヤイン!?!」「ギャウ!?!」

「アイズさん、またカイトの真似してたらリヴェリアさんに怒られるっすよー?」

そういや何故か最近お嬢が俺の真似をする事が多くなった、俺は別にかまわないのだが、それを見たリヴェリアからお嬢の前で教育に悪そうな言葉遣いを止めるように言われていたりする、本人はママとか言われると激怒するけど傍から見れば教育に厳しい母親にしか見えないとは俺を含めたファミリア全員の意見である

(っっていうかお嬢先走りすぎだっの!)

ヘルハウンドは灼熱の炎を吐くやつかいなモンスターではあるものの、炎を吐く際の予備動作状態の時に邪魔をすればただなのでかい犬の魔物にすぎない

そのため炎を吐く動作に入った瞬間に初動を邪魔してさえやれば楽に狩ることができる

(まあ、それも周囲の全てを把握できる『円』が使えるからなんだけどねっ!!)

「ギャン!?!」

お嬢に死角が出来ないように、もしくは死角が出来たらそれを埋めるように立ち回る

最優先はお嬢とラウルの安全だ、特にLv.1のラウルに注意が向かないようにせねばならない

「お嬢!かがめ!?!」

「っ!!」

間髪入れず、お嬢の上半身があつた所を死体となつたヘルハウンドが猛スピードで吹き飛んでいき、今まさに炎を吐こうとしていた個体にブチ当て、死体諸共爆散させる

「ラウルの方だ」

「ん」

入れ替わるようにして立ち位置を代わり、ラウルを襲うために横を抜けこちらに背後を見せたヘルハウンドがお嬢に切り刻まれる

逆に引いたお嬢を追って飛びかかってきた個体を入れ代わつた勢いでそのまま拳で潰していく、空中で出来上がった死体がもつたいないのでそのまま投擲武器のように他の個体に投げつけて数をさらに減らしていく

ラウルの方も地味に弓矢で応戦して囷とサポート役を全うしてくれる

これがこの三人の中層での連携だ、一月以上も三人でダンジョンに潜り続けたおかげでそこそこの連携が出来つつある

そして、それを繰り返しているうちに10匹以上居たヘルハウンドの群れがあつという間に全滅

だがここで油断はしない、戦闘が終わつたと思つたらすぐに『円』を限界まで拡げ、周囲に隠れている個体などがいないかを確認

(・・・よし、OKだ)

安全であることを二人に伝えようやく一息つけた

「ふう、毎回の戦闘が心臓に悪いっすよお・・・ってあれ？ さっきのパーティまだ居るっすね？」

ラウルの言う通り彼らは俺たちが戦闘を始めてから足を止めてこちらの戦闘を見ていた、一応モンスターを横取りされないように『円』で感知し続けていたが、こちらに害を為す様子は見受けられない、だが彼らがここから去らない、いや去れない理由なら何となくわかる

「俺たちがロキ・ファミリアって気付いたんだろ・・・都市最強と言ってもいい派閥に助けを求めるならまだしも、怪物進呈をしたんだ、ここで逃げても後々バレれば報復が恐いことになるとか考えて動けな

いんだろ」

「あー・・・確かに」

「つてことでラウル、これから荷物持ちのお手伝いさんが5人も増える予定なんで上に帰るのはキャンセルでこのまま探索続行な」

「え!?!」

「彼らには俺たちに怪物進呈パスバレードをした罰として一日荷物持ちをしてもらう」

さすがに、ここで相手に何もしない、もしくは要求しなければ「あそここのファミリアは怪物進呈パスバレードしても何もしてこない」等と言われてしままいロキ・ファミリア全体がなめられることになる、そうなってしまえば俺達以外のダンジョンに潜っている他の団員にも結果的に迷惑を掛けることになってしまうので必要な処置だ

向こうからすればモンスターに襲われ、それをようやく押し付けたと思っただけが都市最強派閥の片割れとか災難すぎるが、こちらとしては魔石と経験値をゲット、ついでに荷物持ち用の人手もゲットで一石三鳥だ

「交渉は——」

お嬢 ↑ 基本無口

ラウル ↑ 逆に言い負かされそう

「・・・俺だな」

「ん」

「なはは、お願いするっす」

「まあ、仕方が無いか・・・その分ラウルにはこの後の探索で気張ってもらおうとするけどな」

「うえ!?!」

「安心しろ、彼らをラウル以上に扱き使うから少しは楽になる・・・はず」

「うわぁ・・・どっちにしる碌でもないっすよそれ」

「ぷっ・・・つくつくつく・・・かもな? そんなじゃまあ、行ってくるわ」

というわけで先のパーティの所まで来たわけだが

『ガタガタブルブルガタガタブルブルガタガタブルブル』

「モウオシマイダア」「ファミリアオワタ」「ミンナゲンキデナ：」「ウウ、フコウダナア」

めっちゃ怯えられてて草

「先程はすまない！ 謝って済む事ではないがまずは謝罪を受け取って欲しい」

ただ、パーティのリーダーであろうエルフの女性だけは頭を下げつつも毅然とした態度だった、無闇矢鱈に怯えられるよりかは好感が持てる

「謝罪は受け取ろう、だが、俺たちロキ・ファミリアに怪物進呈バスパレードをしておいて謝罪だけで許されるなんて思っていないだろうな？」

俺の言葉に後ろのメンバーと目の前のエルフの顔が苦渋に変わる、ファミリアの威厳のために仕方が無いとはいえ心苦しいなあ・・・
「おっと、そういや自己紹介がまだだったな、俺はカイト、ロキ・ファミリアの団員で一応 Lv. 2だ」

このままじゃ交渉しにくいので、とりあえず自己紹介から始める
「知っているとも、後ろにいる『劍姫』と・・・もう一人は知らないが、君の二つ名である『切札』ジョーカーの名を知らぬ者は今のオラリオには存在しない」

まあ、分かっちゃいたがやはり俺のことを知ってたか

「噂をされる本人には自覚しにくんだが、それでもあんたの様な綺麗な人にまで知っていてももらえるのは光栄だな、まあ実際には名前負けしないようにこっちは必死なんだがね」

「それは謙遜だろう、先程の戦闘を見させてもらったが君の動きはその名に恥じぬ、いやそれどころか噂以上のものだった」

なんていうか、ここまで真っ直ぐな感じで言われたのは初めてだ

「あー・・・あんま褒められるのに慣れてないからちよつと照れる、そっちは、えつと——」

「フィルヴィス、『フィルヴィス・シヤリア』だ、レベルは2、未熟ながら『デュオニユロス・ファミリア』の団長を務めさせてもらっている」

団長さんかー、ただデュオニユロス・ファミリアねえ？

デュオニユロス・・・デュオニユロス？ ダメだ、聞いたことがないファミリア名だ、Lv. 2のフィルヴィスが団長を務めていることからおそらく下級の零細ファミリア、派閥の等級はおそらくF、どんなに良くてもE、ギルドからフィン達みたいに強制任務が言い渡されることもない、まだ小さいファミリアなのだろう

「後ろのメンバーは全員Lv. 1か？」

「いや、Lv. 2は私以外にもう一人だ」

Lv. 2が二人にLv. 1が三人か

「Lv. 2が二人も居ればヘルハウンドの群れくらいどうにかできたらんじゃないか？」

「馬鹿を言うな！ 普通はLv. 2が二人いてもあれ程の数は捌ききれない、その上Lv. 1の団員をフォローしながら等々でも・・・君たちの戦闘力が異常なのだ」

「そうか？」

モンスターの群れの相手とか日常茶飯事なんだが・・・腹黒いうちの団長のせいだな・・・

しかし、そうだとすると困った、荷物持ちだけをさせたとしてもその程度の実力だと強敵に出会ってもギリギリ突破できるかどうかのバランスになる

っていうかぶつちやけ足手まといにしかならない

とは言っても何もさせないわけにもいかない

うーん、どうしたもんかね？

（比較的安全な上層で荷物持ちをしてもらうか？ いや、でもそれだと中層より大分、魔石も経験値もおいしくない、何より時間の無駄だ、ならどうするか――）

そんな風にこれからのことについて長考していると何かを勘違いしたのかフィルヴィスが焦ったように話しかけてきた

「『ジョーカー切札』、今回の怪物進呈はパスバレード団長である私の判断で行ったことだ、故に団員に責任はない、あいつらは私の命令に従っただけだ、全ての責は……私に有る」

「なっ……フィルヴィス!?」

「『ジョーカー団長!?』」

他のデュオニユソス・ファミリアの団員がフィルヴィスの言に驚きを顕わにするが

「お前たちは黙っている!!」

フィルヴィスの一喝で押し黙ってしまふ

「これも団長の務めだ……任せてくれ」

何だろ、なんか声を挟みにくい雰囲気なんだが……

何かを決意したかのような顔でフィルヴィスがこちらに向き直る……いやさすがにちよつと大袈裟すぎないか?

こっちはきちんとそれなりの罰を与えたという体裁が取れば良いから、そこまで大それた事をやらせるつもりじゃないんだぞ?

ちよ、やめて!?

そんな目でこっち見んといて!

ナニその今から生け贄になるみたいなの決意を秘めた乙女の顔は!?

魔王や竜王にクラスチェンジした覚えはねえよ!?

「『ジョーカー切札』、取引だ」

内心で戸惑うこちらにお構いなく勝手にそれっぽい話を勧めてきた

「今回の事を不問とする代わりに」

いや、さすがに無かつたことには――

「私にできることなら 何でもしよう!!」

………ん?

23：巫女×秘密 前編

バンバンバンバン

肉がぶつかる音が辺りに響き渡る

「ジ、『切札』^{ジョーカー}これ以上は、もう・・・無理・・・だ・・・壊れ・・・る」
『デュオニユロス・ファミア』の団長であるフィルヴィスが汗だくになりながら息も絶え絶えに己の限界を訴えてくる

バンバンバンバン

だが、その間にも肉がぶつかる音は決して止まらない！

「アアツっんん・・・これ以上はほんとにつ・・・もうダメ——

——」

・ ・ ・ ・ ・

|||||

《side：フィルヴィス》

拝啓・デュオニユロス様

ご機嫌いかがでしょうか？

私は今——

「「ウヴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

「ホギヤアアア無理っす死ぬっすマジっすよこれ!？」

「さすがにこの数のミノタウロスは無理iiiiiii! 全力で退くぞ

お嬢—————!!」

「ん!」

「いや、退くんだってば!なに突っ込もうとしてんだあ!？」

地獄にいます。

早いものでロキ・ファミリアの『切札』^{ジョーカー}、カイト達と出会ってから一週間経ちました

あの時、まるで何かの誘惑を断ち切るような表情をしたカイトが、苦渋の末に搾り出すような声で私に出した条件は『自らのパーティに一ヶ月だけ参入する』という意外にも軽く感じる条件でした

私はその時、軽率にも飲んでしまったその条件を正直後悔しています。

何しろ彼ら、というか『切札』^{ジョーカー}『剣姫』が規格外すぎます

何なんですか『剣姫』のあの付与魔法は？ 効果もさることながら魔法の詠唱が私よりも短いですし・・・

そして『切札』、彼も色々おかしいです、後ろに目でも付いていなければ説明がつけられないような動きです、何故見えてない攻撃や相手の位置を完全に把握できてるんですか・・・

・・・自分は本当に彼らと同じレベルなのか自身がなくなりそうです。

同じLv. 2でも前衛と後衛では直接的な近接戦闘では実力に差が出やすいとはよく聞きますが、あの二人は明らかに通常の冒険者の常識や実力を逸脱していると断言します

本人達に異常性を説いても

「これくらい普通だよなあ？」

「ん・・・ふっー」

このように言葉が通じません

というか、そうそう巡り会うことのない怪物^{モンスターパーティ}の宴に1日で、それも連日ではほぼ絶え間なく何度も襲われるということ自体が異常すぎます、そのことについて詰問したら、

私の中で常識人カテゴリーのラウル・ノールドという人間^{ヒューマン}の少年にポンと肩を叩かれ

「いずれ・・・慣れるつすよ・・・ハハッ」

全てを諦めたかのような光のない目、もしくは東方に伝わる菩薩のごとく悟りを開いた目で諭されました

彼らと今まで一緒に居た彼の気苦労を思うと涙を禁じ得ません。

この四人の中で唯一のLv. 1である彼は『切札』や『剣姫』と違い本当に何もかもが普通です、むしろよくこの二人を相手にしていてそこまで普通を貫けることに一種の尊敬の念すら抱かせます。

少し話が逸れてしまいましたね、話を戻すとしましょう

あれからカイト達とパーティを組み、ダンジョン探索を行っているのですが、現在の階層は15階層

デユオニユソス様はご存じでしょうか？

15階層からは厄介な、とあるモンスターが出てくることを

その名を「ミノタウロス」

牛頭人体、身長は2mを超え、その力と速さはLv. 2であろうとも倒すのが困難、Lv. 1であれば死は免れず、階層主に次ぐ程に悪名が轟くモンスターです。

そして今現在、私達は

「ぬおおおおお!! さすがにミノタウロスの怪物の宴は洒落になんねえええー!!」
モンスターパーティ

30を超えるミノタウロスの群れに追われています

さすがの『切札』と『剣姫』でも数に圧倒され撤退を余儀なくされてしまいました

デユオニユソス様・・・私の冒険はここまでかもしれません

《side out:ファイルヴイス》

|||||

(逃げるとか、久しぶりだな!!?)

L.V. 2に恩恵をランクアップさせてからというものの負け無しだったせいかちよつと自惚れていた

ミノタウロスでも4体から5体くらいなら一人でも対処できるが、さすがに30体以上を同時に相手をするのは無理だ。

(……っ！……むう)

というか普通にヤバイ

『円』を限界まで拡げて分かったが、今走っている曲がりくねった一本道をこのまま行くと広間^{ルーム}に出る、しかもそこは行き止まりの袋小路

(使うしかないか……)

最後に『ジャンプ^{ジャンプ}の海賊印』使用したのが4ヶ月前、久々の使用に少し不安が残るが背に腹は代えられない

ちなみにこのスキルは【念】と違い、動きを止めて集中しないと出せなかったりする、移動しながら使うには魔道師で言うところの『並行詠唱』クラスの鍛錬がいるだろう

「全員聞いてくれ！もうすぐでかなり広い広間^{ルーム}に出る、そこでこいつらを殲滅するための奥の手を使う！ちつとばつかし準備に時間が掛かるんだが広間の入り口で時間稼ぎを頼めるか!?!」

広間^{ルーム}の広さに対して入り口はミノタウロスが精々2体並んで通れるかどうかだ

「俺には無理っすよー！?!」

「私も難しい……相手の勢いと重さで突破されると思う」

L.V. 1のラウルは当然としてお嬢でもやっぱキツイかー

「どれくらいで、その奥の手とやらは使えるのだ!?!」

意外にもフィルヴィスから質問が飛んできた

「10秒あれば十分だ!!それでも上手くいくかどうかはわからんがな!!何か打つ手でも持ってるのか!?!」

「私の魔法に超短文型の魔法障壁がある！それなら十数秒だけだがミノタウロスの猛攻を止められる!!」

マジかよ、フィルヴィスと出会えてマジでよかったと心の底からそう思った。

「素晴らしい！サイコーだ!!俺に恋人がいなけりや惚れてたな!!」

「冗談はこの危機を乗り越えてからにしてくれ! それと『劍姫』!ほんの少しで良い、風でミノタウロスの勢いを削いでくれ!」

「ん・・・わかった」

話しながらもドンドン広間^{ルーム}への入り口が近づいていく

「全員、タイミングを合わせろ!!」

そしてゴールである広間^{ルーム}に突入と同時に反転

「あだあ!?」

ラウルだけは息が切れたのか突入と同時にハデにすっ転んでいたが、むしろよくこの行軍に遅れずに付いてきてくれたと褒めるべきだろう

後は俺たちの仕事だ

『『劍姫』!今た!!』

『『目覚めよ』!!』

この広間唯一の入り国から通路の奥へ物理的な圧力を持った風が吹き荒れる

『『ブモオオオオオオオ!?』!!』

逃げていた獲物からの突然の反撃に先頭部分を走っていたミノタウロス数匹が意表を突かれて転ぶと、運が良いことに後続がそれに足を取られてもつれるように一緒に転んでくれた

おかげでほぼ完全にミノタウロスの特攻の様な行軍が止まってくれた

「後は私に任せろ! 入り口に蓋をする! 『———盾となれ

破邪の聖杯』」

詠唱と同時に強力な魔導師たる証しである、魔法円がフィルヴィスの足下に展開される

この1週間、一緒に探索をしていて知ったがフィルヴィスは魔法種族であるエルフに多いように魔法を所持している、しかも魔法の威力を増幅させる魔法円を展開できるようになるアビリティ『魔

導』も習得している優秀な冒険者だ、さすがに二つも魔法を所持しているのは知らなかったがここに来て嬉しい誤算だ

(ミノタウロスもフィルヴィスとの出会いも『奇運』のせい・・・おかげなんかな?)

混乱から復活したミノタウロスの群れが再度こちらにむかって行軍を開始する

「ひいひいひい来たつすよ!」

「【^{魔法障壁}ディオ・グレイル】!!」

「ブオオオオオオ!」

透明な壁が入り口を塞ぎ、間一髪でミノタウロス達が入ってこれないように防いでくれた

バンバンバンバンバンバンバン!!!

それでも目の前の獲物を狩るためにミノタウロス達はその膂力に任せて障壁を叩き始める

「『^{ジョーカー}切札』 急げ! 長くは保たんぞ!」

「了解! 出る! 【^{ジャンプバイレリッ}ジャンプの海賊印】!!」

目の前に久々のロゴマークの様な不思議生物? が現れる

「な!」

「ん?」

「お、久しぶりつすね」

初めて見る不思議生物にフィルヴィスだけでなく、お嬢まで驚く(そーいや、お嬢はこいつを見るの初めてだっけか)

ちなみにラウルには一度見られて以来、何回か部屋でこいつを召喚して話し相手になってもらっていたりするので驚きはない

「いきなりで悪いが、早速頼む! スロットを回してくれ!!」

『.....』

「おい、急いでくれ!!」

『四ヶ月も放置シトイテソレカヨ、アア、オレノマスターハ薄情ダナー』

なんかイジケテル!?

「今はマジでピンチなんだ、文句は後で聞くからさっさとスロットを

「回してくれ！」

『・・・プイ』

おいしいおいしいいいいい今はマジで時間ないんだって!?

バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！

そんな問答をしている間にもミノタウロスの障壁を破ろうとする
攻撃の勢いがが増していく

「ジ、『切札』^{ジョーカー}これ以上は、もう・・・無理・・・だ・・・壊れ・・・る」
障壁への魔力を込めたフィルヴィスの腕がふるふるし始めてるう
うろうう!?

「わ、わかった！じゃあ、後で酒を飲ませてやるから、ついでにつまみ
もつける！俺渾身のじゃが丸くんだぞ！」

「カイト渾身のじゃが丸くんっ・・・」ジュルリ

お嬢の方が釣れてしまった

「お嬢には帰ったら作ってやるからそっちに集中な!？」

バン！バン！バン！バン！バン！

ついに障壁に亀裂が入り始める

「アアツっんんん・・・これ以上はほんとなっ・・・もうダメ——

——」

(ヤバイヤバイヤバイ!?!これは洒落にならん!?)

『・・・チツ、アトマッサージもツケロ、ソレデカンベンシテヤル、ク
クク肩デモ揉んでモラオウカネエ?』

空気を読んでくれたかはわからないが、ようやく
【ジャンプ^{ジャンプ}の海賊印^{バイレィツ}】が折れてくれた・・・ってか、おめーの肩どこに
あんだよ!?

「わかったから、マジで急ぎで頼むって!？」

『ワーツタヨ、・・・ったくオラア！ 久々のスロットダア！ イイ目
がデロヨ!! ドウルルルル!!』

なんとか説得が上手くいきスロットを回してもらうことに成功す
る、にしてもこいつ放置しとくと俺の言うこと聞かなくなるのか・・・
今後はこまめに召喚してやらねば

そうしてスロットに表示された数字は『11』だった、当然ながら初の数字だ

（『11』かぁー・・・キャンセルしたら、かなりキツイなあ・・・ん？）

『11』が表示されると【ジャンプの海賊印】の姿が前世で見たジツポライターの形に変化した

（何だ？ こいつが何かに変化するなんてパターンは初めてだな、武器・・・なのか？・・・ライターが？）

空中から落ちてくるそれを掴んだ瞬間に『11』の能力がすぐさまに俺の脳内にインストールされる

「こいつは・・・」

「くうううう!？」

「フィルヴィスさん!？」

その瞬間、ついにフィルヴィスに限界が来たのか障壁が完全に破碎する、倒れるフィルヴィスをラウルが抱き止める

だが俺は焦らない、何故なら今回のこの能力は――

「・・・当たりだな」

「「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」」

なだれ込むように次々と広間ルームに入ってくるミノタウロス、入り口に一番近い所にいたフィルヴィスとラウルに襲いかかろうとしているが

「焼き肉にしてやらあ、畜産物共が」

もはやこちらは獲物ではない

お前らは今この瞬間、狩る方から狩られる側に回ってしまったことを教えてやる

ミノタウロスに向かって走り出すと同時にジツポライターに付いている針を自らに突き刺す

「行くぞ」

針を突き刺した部分から俺の血が吹き出す

刃身の式

チツグカ・法血流斗

糸斬空

赫かく縮わん

縛ぼく

!!

意思を持った糸が全てのミノタウロスに絡みつき一纏めにして拘束した

「炙りチャーシューの準備完了ってな!!」

24：巫女×秘密 中編

|||||

「ぬぎゃぎゃぎゃ」

かつこよく決めて拘束したはいいが、さすがにミノタウロス30体以上を一気に拘束するのは骨が折れる作業だ

上手く絡めて力が分散する様に拘束しているというのに、あまりの力に操っているいるこっちの腕の方が持っていかれそうになる

(さすがにこの数だと、力の差はざっと見ても人とトラックつてどこかねえ・・・)

しかも、およその目算ではあるが拘束したこいつらを一気に倒すには俺だけでは少し火力が足りないときた、俺だけだと良くて半数と行ったところか

こいつらを一気に倒せないと少々面倒くさいことになる

なにせこっちにはミノタウロスの相手が出来ない人員が二人、辛うじて戦闘可能の人員も二人、そんな状態で庇いながら残った10体以上のミノタウロスの相手は正直キツイ

ならどうするか？

今回限定ではあるが――

お嬢の力を借りる

俺のこの『11』の技の特性上、あの子の『風』は俺の火力を倍加させてくれるはずだ

「お嬢！まだ『風』は使えるな!？」

「ん、いける!」

頼りになる小さな相棒の力強い返事が返ってくる

「ハッ上等！ 今から馬鹿でかい技をぶっ放すからタイミングを合わせて威力が分散しないように『風』で囲んでくれ!!」

それなら間違いなく奴らを殲滅できるはずだ、そう思っていたのだが・・・

「え・・・私の風は離れた場所に発生させることはできない・・・」
「ぐつはあ!?マジか!?」

さすがにお嬢の風もそこまで万能では無いか・・・
どうしたものかと迷っている間にも血糸がギシギシと嫌な音を出し始める

(だー!?!?どうするどうする!?! 奥義をぶつ放した後にお嬢を火に投げ込んで——ってんなことできるかあ!?!・・・ん? 投げ込む?)

そこで思い出すのはこの技の元となった作品、そして斗ひきつばしりゆうけつぼう流りゆう血けつ法ぽう
・火のカグツチと風のシナトベ

俺が今使っているのはカグツチ、風のシナトベは同じ流派でも使うことはできない

だが、風のシナトベがどのようなにして使われていたかは覚えていた(たしか、風のシナトベを使うあの魚類は武器をぶん投げてから風を発生させたりしていなかったか? だとしたら——)

「・・・だったらその剣にありつただけの魔力を込めた風を付与してから中心に投擲するとかじゃダメなのか!?!」

「!!・・・それなら多分いけると思うー!」

「うっしー・・・じゃあそれで行く! お嬢は急いで風を貯めてくれ!」
時間が無い、今見えている紅い糸は全て俺の血液で出来ている、そのため血糸をこれ以上巻き直したら俺が貧血で倒れて動けなくなる
その前に何としても決着を付けねばならない

「お嬢、景気づけど、俺が」 ■ ■ ■ 「って技名言ったら」 ■ ■ ■
■ 「って叫んでみな、威力が上がるからさ」

「威力が上がるの?」

「おう、気合いも出るし威力も上がる一石二鳥だ」

「わかった・・・んー・・・そろそろ貯まる・・・ん、いっつでもいけるよ」

「んじゃいくぞ! 炎があいつらを包んだ瞬間中心に向かってありつたけの風を込めたその剣をぶん投げろ!!」

「ん、まかせて!」

獲物を決して逃さない煉獄の檻はミノタウロス達の最後の悲鳴すらも飲み込んでいく

まあ、この威力も当然だ

なにしろ通常は一つの属性でしか攻撃できないところを二つの属性を合わせて威力に相乗効果を生む超が付く必殺技だ。

俺が今回、『11』で宿した能力は発火性の血液を操る斗流血法ひきつばしりゆうけつぽうのカグツチと言う能力だ。そして目の前に広がる地獄のような光景を作り出した技、本来の名を「七獄 天羽韃」と言う

前世での漫画に出てくる吸血鬼退治のスペシャリスト、その超人達の中の技でも一際派手な技が斗流血法ひきつばしりゆうけつぽうのカグツチだ、しかし、実はこれ一つでは十全な威力を放つことが出来ない

カグツチの炎の威力を最高にするには同じ斗流血法ひきつばしりゆうけつぽうの風を操るシナトベの使い手が必要となる

本来 「七獄 天羽韃」はカグツチとシナトベの合体技だが、シナトベまではさすがの【ジャンプの海賊印ジャンプバイレーツ】でも使わせてはくれないらしい・・・まあ、無理もないか、二つを同時に使う場合は二種類の血液を体内で混ぜられないように循環させねばならないとか言ってた気がする、さすがにそんなアホみたいなき当はできん

今回はシナトベの代用としてお嬢の風を使用し、なんちやつて斗流血法ひきつばしりゆうけつぽう

「七獄 偽・天羽韃」として使用してみたが思いの外威力が出た

まあ、こいつは本来なら不死身の化け物に使う技だ、エセ奥義であつたとして、不死でも何でも無いミノタウロスにはほんのわずかな抵抗が関の山といったところだろう

ただ、少し誤算があるとすれば――

（あ、あぶね、お嬢の風で囲って範囲を限定してなかったら自分の炎で焼け死んでたかも・・・）

と自らの技の威力を甘く見ていたことだろうか

そんな風に反省している間によくやく風と炎が止む

数秒前までミノタウロス達が居たその場に残ったのは地面に突き

刺さったお嬢の剣のみだった

「ふー．．．何とかなったかあ．．．お嬢」

「．．．なに？」

隣に居る相棒に拳を突き出すのが、拳を見たお嬢に不思議そうな顔をされた

(女の子じゃ、こういうのはわからんかな．．．)

「こういう時は拳を合わせるんだよ」

「?．．．?．．．ん」

軽く尽きだしたお嬢のグーとコツンと触れる

「お疲れさん、だ」

「!!．．．フフ、うんお疲れさん!」

うむ、どうやらお嬢にもこの何となくの良さが伝わったようだ

(さてと、ゆっくりもしていられんな．．．まずは休憩、その後はまだ消えないこの『1』の能力をどうにかして解除だな．．．)

俺の手の中には未だに消せないジツポライターがあつた、つまりスキルは俺が使用済み条件を満たしていないと判断しているようだ

しばらくは危機を乗り越えた余韻に浸っていたいが、そうもいかないらしい

「お嬢、とりあえずしばらく休憩したいから広間の壁を壊そう．．．ラウル!ピッケルを持ってきてくれ!!」

フィルヴィスの介抱をしていたラウルに声を掛ける

「了解つす! 休憩のために壁を壊すんですね?」

リヴェリアの勉強会で学んだことだが、ダンジョンにはモンスターを産むことよりも自らの修復を優先するという特性があるらしい

その特性を利用して休憩する際にはモンスターが生まれないように壁を壊してから休むというのが冒険者達の常識となっている

「ああ、それとフィルヴィスの容態はどうだ?」

「ちよつと精神疲弊と、その．．．」

「ん?どっか怪我でもしちまったのか」

こっから見た限りではそこまで大それた怪我をしているようには見えないが

「いや、カイト達の魔法?を見てから放心状態になってるっすね・・・まあ仕方がないと思うっすけど」

「なんじゃそりゃ」

「まあ、常識人カテゴリーの自分たちには色々あるんすよ、いろいろ・・・」

「ハハッ、それだと、俺とお嬢に常識がないみたいじゃねーか」

「え?」

「ん?」

「・・・」

「おい、さて——」 「そ、それじゃあ、壁を壊すのはフィルヴィスさん以外の全員でいいっすかね!」

誤魔化された

(・・・まあいいか)

「・・・お嬢とフィルヴィスは先に休ませる、ここは男手の俺たちが踏ん張る——

『No. 11ノ完全習得ノ報酬トシテ ■■■■■ヨリ
識別番号No. 11ノ情報ガ開示サレマス』・・・ぞ?」

ラウルと会話している最中に突然、無機質な音声が届いてきた

(・・・は? え? 何だ今の声は・・・報酬?情報開示? 何のこ・・・痛だだだ!?)

疑問に思った直後、脳内に『11』能力、そのより詳しい情報、それも最悪と言っている【使用済み条件】までもが激しい頭痛と共に無理矢理流れ込んでくる

(おいおいおいおい!! って、な・・・なんじゃこりゃああああ!!)

|||||

人というものは理解できないものを目の前にしたとき
空っぽになるということを今、初めて知った。

私は後衛の魔導師だ、故に近接は最低限の自衛程度しか習得して
ない

それでいいと思っていた

前衛が崩しきれない敵を必殺の魔法で屠り、時には防ぐ

それを誇りに思っていた、魔法を使えることで前衛に出来ないこと
ができるのだと、そう思っていた。

だが

そんなちっぽけな誇りもこの1週間で・・・特に、今日をもって崩
れ去った

本来は前衛であるはずの者達が魔導師の私より強力な魔法を使う、
当然ながら近接攻撃など私が比肩することすらおこがましい程に差
があるというのに

これが私よりもレベルが上の者ならば自分を誤魔化すこともでき
ただろう

だが、あの二人は私と同じレベル、しかも遙か年下で片方に至って
は幼女といっても差し支えない年齢で、だ。

呆けた私の目に入るのは『劍姫』と『切札』と談笑する彼の姿だ
(すごいな・・・彼は・・・何故あんなもの見た後に普通に接すること
が出来るのだ・・・)

彼・・・『切札』のことではない、

ラウル・ノールド

化け物のような同期と年下の少女とパーティを組む平凡すぎる少
年

もしかしたらあの三人の中で最も異常なのは下手をすれば彼なの
かもしれない

実力は並だとしても、その精神力だけは恐らくそこらの上級冒険者

よりも遙かに上であろう、並の神経では彼らと共に居るのには耐えられまい

(はは・・・何だ、この中で一番弱いのは私じゃないか・・・いや) 先程の魔法を見たせいかな、それとも精神疲弊マインドダウンのせいなのか、悲観的な考えしか出てこない

そんな、私らしくもないことを考えていると

少し離れたところに居る『切札』ジョーカーが急に頭を抱えたかと思うと

ツカツカと足早に私の方まで歩いてきた

「・・・？ 急にどうしたのだ『切札』？」ジョーカー

休憩のために壁を崩すという話はこちらまで聞こえていたが・・・ 『フィルヴィス・・・最初に会ったときの『できることならば何でもする』というのはまだ有効だろうか・・・もしそうならた、頼みが・・・あるっ・・・」

「な、なんだ藪から棒に・・・」
かなり深刻な話なのか、まるでこの世の終わりのような顔で言ってきた

急にどうしたのか疑問に思っていると、いきなり『切札』ジョーカーが私に向かい正座した上で、手のひらを地に付け、額が地に付くまで伏せそのまま地面に亀裂が入るほど額を叩き付けた

(こ、これは・・・東方に伝わるという、交渉における最も相手に敬意と深い謝罪や請願の意を表す時にのみ使われるという DOGEZ A!?)

そのあまりに見事な DOGEZ A に呆気にとられてたが肝心の内容を聞かないことには返事のしようがない

「ジ、『切札』ジョーカーまずは事情を説明してくれ、そうでないと、一体何が何だが・・・」

地に額を着けたままの状態ではこちらが困ってしまう、というか彼と『劍姫』の視線が痛い、一体何事かとこちらを見ている

「事情はあまり詳しくは言えない、だが俺の命に関わることなんだ」

「なっ!?! 命!?!」

「ああ、そしてそれから俺を救えるのは、この中ではお前だけなん

だ……だから頼むっ……俺を……助けて下さいっ……」

搾り出すような心の底からの嘆願

この『切札』の口調と声の真剣さは嘘や冗談ではないとはつきりわかる……どうやら私が思っていた以上に自体は深刻のようだ

「それは私が命をかけなければならぬほど難しいものだったりするのか？」

「いや、そこまでではない、だが……お前の誇りを傷つけることになる」

エルフの多くはプライドが高く誇り高い一族だ、

だが、それでも命の恩人を無下にするほど私は薄情では無いつもりだ

「もし、私が断つたらお前は確実に死ぬのか？」

「今回は死ぬ確率の方が圧倒的に……高い……っ」

「……」

（今回は、か……理由はわからないが私達をミノタウロスの群れから救うために何かしたのだろうか？……先程の強力な魔法は何か代償がいるものという可能性も……はあ、展開が急すぎで頭がついていかん）

私が先程まで恐れていた少年がどういった経緯か、今は私に助けを求めているという光景に戸惑しか感じない

だが、『切札』が、カイトがいなければ私達は全滅していたのは間違いない

（ならば、迷う必要など最初からないではないか……）

「カイト、顔を上げてくれ」

「……」

そういつてようやく顔を上げたカイトの顔は何かに迷い、そして苦しみに耐える、苦渋に満ちた顔だった

「私は……私は何をすれば良い？ お前にはいくつも借りができてしまったからな……出来ることなら何でもしよう、『我が友』よ」

それを聞いたカイトの顔がようやく少し明るさを取り戻してくれた

「ああ、やってほしい……というか、正確には、やらせてほしいことは実際には簡単なんだが……難しいというか……」

「……やらせてほしいこと?」

その言葉に一抹の不安と嫌な予感、私の第六感が今すぐに逃げろと継承を鳴らし始めた

「ああ、お前の……」

「私の?」

「おっぱいを揉ませてくれ!!」

奴は決め顔でそう言った。

ふむ……さて、切れ味の良さそうな私のナイフはどこいったかな?
?

目の前のクズを処分せねば

《side out:ファイルヴイス》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

【ジャンプの海賊印】

No.『Ill』↑new

《斗流血法・カグツチ》

使用すると全身の血液が一時的に発火性の血液となる

さらにその血を糸・剣・刀等の武器に固めて使用することが可能

※備考

『風』の属性を使用できる術者と技を複合させることで火力が増幅する

【以下、第三級機密情報】

〈使用済み条件〉

戦闘終了から30分以内にセクハラを行う
条件失敗で強制キャンセル

※警告

サクリフアイズ生贄エクスセラに使用するステータス値が足りません。

至急、エクスセラ経験値を溜めるか条件の執行を行って下さい。

25：巫女×秘密 後編

|||||

《side：ラウル》

「アイズさん・・・あの二人何かあったんすかね？」

「ん？」

「いや、カイトとフィルヴィスさんつすよ」

場所はダンジョンの中層 16階層

自分とアイズさんは見張り、逆にカイトとフィルヴィスさん達は自分たちと交代して休憩をとってるつす

ミノタウロスの怪物の宴^{モンスターパーティ}

あれから既に三日が経ったつすよ

あの災厄の後は早めにダンジョン探索を切り上げて、翌日は丸一日休みにして昨日からまた探索を再開したんすけど・・・

昨日の探索時から二人の、特にフィルヴィスさんの様子がおかしいどれくらいおかしいのかと言うと

「カイト、その・・・クッキーでもどうだ？」

「おお、サンキュー・・・んぐ・・・へえ美味しいなこれ、クルミか何か混ぜてて香りも良いな、どこで売ってる奴だ？」

「いや、それは私の手作りなんだ、私の故郷でよく作る奴でな、その、そうか・・・美味しいか、ンフフ」

なんかあからさまにカイトへの熱烈アタックが始まったんすよ、しかしカイトの方は普通な対応

（あれってフィルヴィスさんの好意に全然気付いてないつすよねえ・・・それにしてもこの変貌ぶり、やっぱあの時に何かあったんすかねえ、カイトに聞いても何も答えてくれないんすよねえ・・・）

こんなキャピキャピした雰囲気醸し出す男女を見ると、いつもな

ら負の感情がメラメラ無限に湧いてくるんすけど、今回はどちらかというどハラハラして心臓に悪いというか・・・

「・・・2人の仲が悪いの?」

「いや、むしろその逆なんすけど・・・」

「んー? 仲が良いのは良いことだよ?」

「そーなんすけど・・・何か後々まずいことになりそうな気がするっていうか後が恐いというか・・・」

アイズさんにはまだこういった男女の機微とかは早かったみたいす

そんなこっちの心配をよそに向こうは益々雰囲気が良い感じに

「お、お茶もどうだ? 故郷の森で飲んでいたのと似たような茶葉を最近見つけてな」

「助かるわー、ダンジョンだつてのに贅沢だなあく、おおこれも美味しいー!」

「そ、そうか美味しいか、よかった・・・フフ」

「いやー、将来フィルヴィスは良い嫁さんになるなあ」

「んなあ!?!・・・そ、そういうのはまだ早いとかかなんとか」

「ん? 何か言った?」

「いや! 何でも無いぞ!! うん、平和だなあ、と言っただけだ!」

「はっはっは! ダンジョンに平和も何も無いだろうに、フィルヴィスも面白いことを言うなあ」

「そ、そうか?・・・そうだな、まったく自分は何をいつてるんだかは、ハハハハ」

(こ、これは一体何がおきてるっすか・・・?)

カイトとフィルヴィスさんの間で会話が噛み合っているようで噛み合っていないようなもどかしい声が聞こえてくるっす

「ラウル、見張りにしゅうちゅう!」

「す、すんませんっす!」

(こ、こんな気になる会話を聞きながら見張りに集中できるわけがないっすよ・・・)

《side out：ラウル》

|||||

ラウルが2人の雰囲気を訝かしみ始めるころより、時を遡ること三日

つまりはミノタウロスの怪物の宴モンスターパーティーに遭遇した事件当日
災厄を凌ぎきつてから数十分後の出来事になる

|||||

《side：フィルヴィス》

「フィルヴィス、だ、大丈夫か・・・？」

「ら、らいじょうぶらあ」

「その、なんか・・・すまん・・・」

ビクビクと微かに痙攣し、息も絶え、顔を恥辱と悦楽で混ぜた表情で横に倒れ伏すエルフの姿があった・・・というか私だ

(しゅ、しゅごかった・・・)

このような状態になってしまったのは、カイトによるセクハラが原因である。

カイトに『胸を揉ませてくれ!』と言われたときは、即座に切って捨てようと思ったが、この1週間共にダンジョンを駆け巡って多少はこの男の性格は分かっていたつもりだ、そしてこいつはいきなりそんなア

ホなことを言う奴では無かったはずだと、なけなしの理性を掻き集めて斬りつけるのを我慢した

何故そのようなことをする必要があるのでかカイトを問い詰めると、数秒ほど沈黙と共に葛藤したかと思うと絶対に他言無用ということ でカイトから掻い摘まんで説明された内容はかなり荒唐無稽な話 だった

要約するところだ

- ・ 先程の魔法に見えた炎はスキルによるものであるということ
- ・ スキルはランダムで何が出るかわからないということ
- ・ スキルには代償が必要で、ステイタス値を最大で1000以上失 わなければいけないこと又、代償を支払えない場合は死が待っている ということ

- ・ ステイタス値を捧げる以外でスキルを消すには特殊な条件をクリ アしなければならぬということ

- ・ そして今回の条件はセクハラを行うという信じがたい条件、しか も30分以内・・・この時点で既に10分経っているので実質20分 以内にセクハラを行わなければ死ぬということだ

はつきし言おう・・・信じられん!!

なんだそのスキルは？

見たことはもちろんだが聞いたことすらない

セクハラなら『剣姫』にでも・・・と思ったが

『8歳』『幼女』『セクハラ』

この三つの単語が並ぶだけで犯罪臭が凄まじい

仮にそんなことを強要しようものなら私は自責の念で首を吊る そんなことを悩んでいると

(いや・・・待てよう?)

ふと天啓が降りてきた

・・・別にセクハラをするなら女に限らないのでは？

ルになら同性の友同士の悪ふざけですむ！

(フハハハハハ！この『11』の能力大当たりじゃん！)

同性の胸や尻を揉んだり撫でるくらいなら、気分は非常によろしくないが破格の能力だ！無闇矢鱈に異性にセクハラを行うよりは大分ましと言えるだろう、事情を説明しておけば異性に頼むより抵抗感も少なくて済む！

問題があるとすれば同性でもアツチの気がある奴には気をつけなければならぬって事ぐらいか、誤解から俺の貞操が奪われる事態になつたら目も当てられない

(残りの時間は・・・)

00:16:36

00:16:35

00:16:34

(16分半！これだけあれば間に合う!!)

ちなみに先程から意識を少し集中させると残り時間がタイマーの様に頭に思い浮かぶようになった、地味に助かる。

ちなみにラウルはお嬢と一緒に壁を壊すためにこちらを向いていない

つまり後ろから不意打ちで胸の部分を鷲掴みにすればいける!!

「ラウル~~~~!!」

「どうわあああ!?何すかあ!？」

ぐわし!!

モミモミモミと後ろからラウルの胸部を鷲掴みにして揉みし
だく

(これで条件クリアのはずだ！タイマーは・・・)

00:16:01

00:16:00

00:08:00

なんか半分になった。

「なんでだああー………!?!」

「ちよ、いったどうしたっすかカイト!?!」

(なんでだ!?!…まさか同性だとダメなのか!?!)

ラウルが困惑しているがそれどころではない、リアルに俺の命のタイムリミットが10分を切ったのだ

アホみたいな理由だが今世で一番の命の危機かもしれない、もはや手段がどうのこうの言うような状態ではなくなった

わかってはいたつもりだったが、自分のスキルのアホさとヤバさを改めて思い知らされる

「ラウル、お嬢、リーダー命令だ!今すぐ作業を中断、広間の入り口の警戒に入ってくれ」

「はい?なんなんすかさつきから?」

「ん…説明」

「スキルの後遺症で後8分足らずで俺が死ぬ!それを確実に回避できるのはこの中じゃフィルヴィスだけ!」

「!?!…わかった」

「え?死ぬ?は?——いてて!?!」

かなり端折って説明したが、お嬢は即座に理解はしなくとも状況をわかってはくれたようだ、今だ混乱しているラウルを引きずりながら入り口に向かつてくれた

(ほんと頼りになるわ…)

入り口に向かうラウルとお嬢を確認したので急いでフィルヴィスの元にダッシュ

「フィルヴィスウー!?! まじでやばい!」

ラウルにセクハラっぽいことを行った瞬間に制限時間が半分に

なつたことを説明

「はあ!?なんだその男にとって都合が良すぎる展開は!?」

「俺が知るかあ!?ってか時間が7分を切ってるんだ、頼む!!胸でも尻でも何でもいいからセクハラと判断できる何かをさせてくれ!!このままじゃ死ぬう!」

「.....っ」

フィルヴィスが数瞬だけ迷った顔を見せた後、覚悟を決めた顔をしたら

「カイト、私も覚悟を決めて、その、なんだ...お前のセ、セクハラを受けてやる!　だがその前に答えろ、今回のことが全て嘘ではないと我が主神デュオニユソス様の前で釈明することはできるか!」

「やる! 釈明でも説明でもプレゼンでもやってやるから、だから...頼む!!」

それくらいなら喜んで説明してやるわ!

それにそれなら俺の無罪とまではいかないが仕方のない行動であつたことの釈明もできる一石二鳥!

「ならば.....こい! さつさと揉め!!」

そう言つて後ろを向いた、さすがに正面から揉まれるのは恥ずかしいのだろう

「恩に着る!」

フィルヴィスの脇から手を伸ばし胸に触れる

「.....いくぞー!」

「いいからさつさとやれ!」

モミングモミングモミング

「.....あ.....く.....」

できるだけ痛くしないよう円を描くように優しく揉み込む

(ふむ...手の平サイズ...)

自ら身体を差し出してくれたフィルヴィスには申し訳ないが俺も男、さすがに女性の胸を揉んで何も思うなという方が無理だ

(いや、それよりも時間は!?)

00:06:21

00:06:22

00:06:23

(時間が増えてる!?.....まさか!?)

ためしに揉むのを一旦止めてみる

「ん.....あ.....?」

00:06:26

00:06:25

00:06:24

揉むのを止めた途端に制限時間が減り始めた

(ウソだろおい!?)

即座に揉むのを再開

「んん.....く.....」

そうすると時間がまた増え始めた、っていうかファイルヴィス、その色っぽい声止めて!

胸の小さい者は他よりも感度が高いと聞いたことがある、ファイルヴィスもそうなのだろうか?

「あの、ファイルヴィスさん.....ちよつと問題が発生しまして」

「こ、今度は.....あ.....何だ?.....というか.....あ.....説明.....するなら.....んあ.....一旦手を止めて.....あ」

「そうすると後々、二度手間になるからこのまま話すな」

揉みながらファイルヴィスに今判明したことを話す

「な.....んく.....では.....一体いつまで.....あ.....これは.....続くんだ?」

「.....たぶん、元のタイムリミットまでだと思おう」

「.....ん.....元の?」

「ああ、元が30分だから、後23分くらい?」

「~~~~~!?!?!?!」

.
. .
. . .
. . . .

「フィルヴィス、だ、大丈夫か……？」

「ら、らいじょうぶらあ……あ……う……」

「その、なんか……すまん……」

思った通り、タイマーが30分になった途端、スキルによって出たライターが消え、タイマーも表示されなくなったが

犠牲は大きかった……具体的に言うとならぬがフィルヴィスの尊厳とか……

それにしても胸を揉んでいる最中に何故か所々で記憶が飛んでいるのが気がかりだ

(なんか途中でじいちゃんの声が聞こえてきたような……『北〇珍拳』がどーとかこーとか……)

それからさらに数分

「よ、ようやく落ち着いた……」

いつも通りのフィルヴィスが再起動した

「改めて助かった、ありがとうフィルヴィス」

「ふん、気にするな……まあ私の貧相な胸を揉んだところで悦ぶ者は少ないだろうがな」

かなり不機嫌でいらつしやるようだ、まあ俺がやったことを思えば当然だが……

確かにフィルヴィスの胸はひん……慎ましやかな大きさの胸だったが、そこまで卑下するものではあるまい……代わりに感度は抜群のようだし

「んなことねえよ、男つてのは惚れた女の胸なら……大ききなんて関係ねえよ」

とりあえず、少しでも機嫌を良くしてもらうためにもよいしよして

おこう

「うえ!?・・・そ、そそそそそ、それはいったいどういう!?」

「とりあえず、そちらの主神に挨拶に行かないとな」

先程フィルヴィスが出した、今回のことを神の前で釈明するという約束を果たさなければ

「あ、挨拶!?あわわわわわ、いやそれはちよつと早すぎる! 私達は別のファミリアだしもつとお互いのことを知ってから」

「何言ってるんだ?俺はきちんと約束や責任を果たす男だぞ?」

「しえ責任!?あわわわわ」

・
・
・
・

この後フィルヴィスから神への挨拶と釈明には来なくていいと言われた

俺の言っていたことを信頼してくれたのだろう、神の前で証明する必要はないと判断したようだ

ありがたい、俺はこの人生で一生の内でも中々得がたい友に巡り会えたようだ。

|||||

正妻：アスファイ

変態：アミツド

妹：アイズ

愛人（勘違い）：フィルヴィス ↑New

26：日常×風呂

|||||

《side：ラウル》

場所はロキ・ファミアの^{ホーム}本拠 黄昏の館、その中にある浴室です
「ふいふ、今日の探索もキツかったです」

近頃はカイトとアイズさんの探索に連れ回されて毎日へとへとになつて帰ってくるのが日常になつてしまつたつすよ

シャワーを浴びて汗を流してから湯船に浸かると一日の疲れが抜け出て行く

「ああ……この感覚は何度味わつてもたまんねえつすねえ極楽極楽」

もし、一念発起せずに今も村にいたら、自分はこの湯船の存在すら知らずに一生をあのへんぴな村で過ごしていたんすかねえ？

そんなどうでもいいことを考えながら天井を見上げる

微妙な時間帯なおかげか風呂場には自分一人だけ、——ピ
チヨンと天井から雫の落ちる音が響くことすら心地良い

(……今日も何とか付いて行けたつすねえ)

あの2人の戦闘はサポートするだけでも一苦労させられるつすよ

先日、団長達に自分以外にもサポートを増やして欲しいと言つたら

『あいつらはちよつとアレじゃからな……頑張れ』

『既に他の団員はあいつらの異常性に気付いてしまつたからな……まあ、その、なんだ……頑張れ』

『うくん、彼らのデスマーチについていける人員は^{ミッション}任務で出払つてるからちよつと難しいかな？ ハハでも君なら大丈夫だよ！うん！根拠はないけど大丈夫！大丈夫!!』

ありがたい激励のお言葉だけをいただいたつす……いや言葉じゃ

なくて人をよこせと言ってるんすよ

(でも、確かに今のオラリオの状況じゃ、無理は言えねえ……すか……ね……ZZZZZZ)

と考えても仕方がないことを延々と頭の中でグルグルと思考している
と疲れから眠気が襲って寝入ってしまったつす

・
・
・
・

「う……次は……」

「んー」

(あれ?……自分、寝ちゃってたつすか?)

誰かの話す声で飛んでいた意識が徐々に覚醒する

「お、ラウル起きたか? 風呂に入りながら寝るとのぼせるぞー?」

「風邪ひく……よ?」

「あれ? カイトにアイズさん?いつのまに……」

いつの間にか湯船の中で寝落ちしてしまったみたいつす

声を掛けられた方を見ると洗い場の方でカイトとアイズさんが……

「うーし!じゃあ髪の毛を洗い落とすから目をつむれ」

「ん!」

「ほくれジャバ」

「ん~~~~!」

全裸のカイトがスツポンポンのアイズさんの髪に付いた泡を桶に溜めたお湯で洗い流していた

まるで本当に仲の良い兄妹の様な光景をのぼせた頭でボーッと眺める

「……あれ?」

その光景をのぼせた脳が認識するのに時間が掛かる

『ラウル^{ブレイン}脳……再起動中……Now Loading……No

w Loading・・・Now Loading・・・自分男 カイト男 アイズさん女↑超重要!警告警告警告警告警告警告警告警告警告警告警告!穢れたバベルの塔 自分所持 カイト所持 アイズさんNo所持!浴室男女共同 されど 時間によって男女別危険危険危険危険危険危険危険危険危険危険危険危険危険危険危険!女性陣にバレたら? 処刑!リヴェリアさんにバレたら? 消し炭!ロキにバレたら?・・・それは割とどうでもいい!」

思考に掛かった時間は僅か0.1秒・・・一気に目が覚めたつす。

「な、ななななな!!」

絶句とはまさにこの事

「ん?」

「何やってんすかあ~~~~~!!!!!!」

驚きの余り浴槽の隅っこまで全力で後退しつつも、叫ばずにはいられなかったつす

「ちよ!? ラウル風呂場で大声あげんなよ!? 響くだろうが!」

「ん・・・うるさい」

「いやいやいやいやいや!!何で自分の方が非常識みたいに言われてるんすか!」

自分の驚きは至極全うだというのに二人から非常識な人間を見る目で見られたつす

「アイズさんは女の子つすよ! 何で男の入浴時間に、のほほんと一緒に風呂に入ってるんすか!」

「いや、女の子って・・・お嬢はまだ8歳の幼子だぞ? 別に一緒に入ったところで問題なくね?」

「いや、それでも一応男女の」

「カイト、もっかいジャバーやって、泡が落ちてない」

「ん? おおすまんすまん、ほれ念入りに後二回ジャバーするぞく目をつむれー、ほくれジャバ」

ね・・・」

・・・なんかもう色々諦めたっす

「おう、湯冷めしないように気をつけるよ」

「よ」

「わかつたっすよ・・・」

まあ本人達は全然気にしてないみたいだしこれでもいいんすかね？

それとも自分が気にしすぎなのか

やはり、あの二人は色々な意味で規格外だなと再認識した日だったっす。

・・・

それから数ヶ月後、突然予定していたカイト達との探索が中止になった日があつたっす

その日に庭を見ると

(ああ・・・やっぱり・・・)

リヴェリアさんにボコボコにされ簀巻き状態で木に吊るされたカイトと、隣で正座に加え頭に巨大なコブを作って貞操観念や常識について怒鳴られているアイズさんの姿があつたっす。

「やっぱ、普通が一番ってことっすかね？」

鬼のようなリヴェリアさんに折檻を受けている二人を見てそう思ったっす。

《side out：ラウル》



27：大神×武神

時はカイトがミノタウロスの怪物の宴に遭遇する少し前に遡る。モンスターパーティー

オラリオから北の山間部にある名前もないような村

馬車に乗って数日もかかるような辺鄙な村に二柱の神が対面していた

一人はゼウス

かつてのオラリオでは最大最強の名を欲しいままにしたゼウス・ファミリアの主神

しかしそれも過去の話、世界三大クエスト『隻眼の黒竜』討伐失敗により落ちぶれ、今ではベルとカイトの祖父として振る舞うただの好爺だ

もう一人はヘルメス

ゼウスの手となり、時には足となってオラリオ中を駆け回った腹心の部下でもある

そして現在、ゼウスは開いた口が塞がらぬ程驚いていた

「8ヶ月でLv. 2になったじゃと!？」

「ええ、実際には半年でランクアップできたようですがステイタスを限界まで上げるために二ヶ月遅れたそうです」

「~~~~~」

（さすがにこの方でもすぐには信じられな——）

「さすがが儂の孫!!」

「信じるの早いですね!？」

あまりのジジ馬鹿っぷりにずっとこけそうになった

だが、よくよく考えればとある事情で身を隠していなければならぬのに、危険を顧みずに自分を呼び寄せる程にこの大神は孫を溺愛していたことを思い出す

「はく……まあいいか……それよりもこれをどうぞ、その自慢のお

孫さんからの手紙ですよ」

「おお！それを待つとつたんじゃよー！」

渡された手紙を嬉々として開け、手紙に目を通す

それなりに長い内容なのか何度も頷きながら手紙を読んでいる、そして全てを読み終わったと思っただら

ニッコリ

いきなりの笑顔

(嫌な予感しかない……)

「よくし！ヘルメス……イシユタルぶつ殺そう☆」

いきなり物騒なことを言ってきた

「できないし、しませんよそんなこと」

自分のファミリアにはイシユタルと争えるほどの子はいないし、その前に間違いなく数で圧倒される

ファミリアが壊滅してもはや存在しないゼウスに至っては何を言わんやといった話である

「カイトを瀕死に追い込んだんじゃぞ?!カイトに直接手を下したメス豚共々万死に値する!!」

どうやら手紙にはランクアップの経緯も書かれていたらしい

「落ち着いて下さいよ、一応そのおかげでランクアップもできたんですし、おあいこで良いじゃないですか、それにそんなことしたら身を隠してる意味がないじゃないですか……あなたの命をどれだけのイサイルス闇派閥が狙っていると思ってるんですか」

「ぐぬぬぬぬ」

「ぐぬぬぬぬ、じゃないですよ」

その後、何とかなだめて落ち着きを取り戻してくれた

ちなみに、一緒に来たアスファイにはゼウスとの話し合いが終わるまでベルの話相手をしてもらっている

大方、カイトのオラリオでの活躍を話してあげているのだろう、先

程も外から

『やつぱり兄さんすごい!!』

と無邪気な声が聞こえてきた

問。

「うーむ．．．それにしても困ったのう」

「今度は何ですか．．．」

ようやく落ち着いたかと思っただら今度は手紙を見ながら唸りだした

「それがのう、将来オラリオが平和になったら、金を貯めて儂とベルがオラリオに住めるようにすると書いてあつてのう」

「それは．．．．．確かに困りましたね」

カイトとしては親孝行のつもりなのだろうが、本当にそんなことをしたらゼウスに恨みを持つ者達に間違いなく殺される、大神ゼウスには元々の権能として神威を消し、市井の者に紛れる能力があるが、それでもゼウスを直接知っている神々に姿を見られれば速攻でバレル「断るしかないのでは？」

「そうじゃなあさすがに死ぬのは．．．ん？．．．死ぬ？．．．そうじゃな．．．ふむ」

何かを思いついたのか一人で何かブツブツと呟きだした

「よし．．．決めたぞヘルメス」

「碌でもない事じゃないでしょうね」

「なに、大したことではない、後数年したら儂は死んだことにするっただけだ」

「はあ？ 何のためにそんな．．．ああいや、成る程．．．確かにそれならベル君もオラリオに行くかもしれませぬね」

また突然何を言い出したのかと思ったがすぐに大神の思惑を看破する、伊達にゼウスの部下を長年やつているわけではない

「うむ、ベルには常々、儂のことは気にせずにおラリオに行ってもかまわないと行つとるんじゃが、あの子は優しすぎるからな、儂だけを置いて行くことはできんじやろう・・儂は二人の枷になるつもりはないからの」

「二人を騙すのは気が引けますねえ」

「ウソをつけ、お主はこういった悪戯は昔から好きじやつたろうに」

こうして人知れず、二人の孫のために数年後にゼウスが死を偽装することが決定した。

——後に、この判断が歴史に名を残す英雄と大英雄になる兄弟を生み出すことになるとは

大神ですら予想だにしなかった。

|||||

極東のとある社で一人の男神が手紙を読んでいた

「・・・うーむ」

周りには幼子達がドタドタと元気に走り回っているが騒がしいのに慣れているのか気にせずみずらに手紙の内容に目を走らせている

男神の名はタケミカツチ
角髪みずらの美丈夫であり、天界では武神と呼ばれ戦いを得意とする神々の中でも並ぶ物なしとまで呼ばれた豪傑である。

だがそんな武神も

「タケミカツチ様」

「ん？どうした命？」

「あやめがおしっこ漏れそうって」

「どわあああああ！？待て待て待て待て！？今連れて行くから我慢だぞあやめー！？」

今では孤児達の優しき父として社やしろを経営していた。

・

・

・

・

・

「ふー・・・あぶなかったな、命、よく教えてくれた」

「はい！」

「あやめも今度からもっと早く言うんだぞ？」

「はーい！！」

「うむ！良い返事だ！では怪我しないように遊んでおいで」

「はーい！！」

いつもの一騒動が無事に解決し二人の娘が庭に一緒に走って行くのを見送り一息つく、その目線の先には先程まで目を通していた手紙「あら、タケ？どうしたの？いつもの貧乏臭いため息とはちよつと違ったアンニユイなため息なんてついちゃって」

「誰が、貧乏臭いだ」

「実際私たち貧乏よ？」

「そうでした・・・」

話しかけてきたのは共にこの社で孤児達の面倒を見ている女神、ツクヨミ月読

「それで？悩みの種はその手紙？」

「ああ、ヘルメスのアホ経由の手紙でな・・・」

「燃やしちゃう？」

「待て待て！？ ヘルメスを経由しただけで手紙を書いた本人はあいつとはあまり関係ない奴だ！」

「そうなの？ でもタケが難しい顔してるのはその手紙のせいなんですよ？」

ヘルメスは天界にいた頃からタケミカツチをおちよくることが多かったため仲の良かった月読や他の女神の心象はあまり良くはない「難しい顔をしていたのは、この手紙にどう答えたものかと考えていただけだ・・・読んでみるか？」

「え・・・いいの？」

「別に読まれても困る内容ではないからな」

そう言つて渡された手紙には共通語コイネーで、しかもわざわざこちらに合わせたのか文字が筆で書かれていた

~~~~~

拝啓、タケミカツチ様

まずは突然の手紙を差し上げたことをお許し下さい

私はロキ・ファミア所属のカイトと申します。

今回はタケミカツチ様に折り入つてお願いがあり筆を執つた次第です

私は最近まで徒手空拳でダンジョンに挑んでいたのですが、ダンジョンに深く潜るにつれて打撃だけでは通用しないモンスターが出現し始め、苦戦をしている次第でございます、

そこで本格的に武器を扱うことにしたのですが、私が選んだ武器は『刀』

最初の内は剣と同じように扱っていたのですが鍛冶氏曰く『剣』と『刀』では鉈とカミソリくらい扱い方が異なると聞き『刀』を教わる師をオラリオにて探していたのですが、その最中にアホ 神ヘルメスから『刀』を教えることに掛けては世界一というタケミカツチ様の話を聞きこうして手紙を嗜めた次第でございます。

私はタケミカツチ様の眷族ではございませんが、どうか刀の扱い方とは言いません、どのような訓練を行えば良いのかだけでも伝聞でもかまいませんので御教授頂けないでしょうか



改めて、突然の手紙と不躰なお願い、申し訳ありません。

追伸

神ヘルメスからタケミカツチ様は孤児を養う社を経営していると聞きました

自分も物心が付いた頃には両親は既に亡く、自分と弟を祖父が男手一つで育ててくれなければ孤児として育てていたと思うと他人事とは思えません

微力ながら私も社に役に立ちそうな品等をこれからも贈らせていただきます。

ロキ・ファミリア所属

カイトより

~~~~~

手紙を読み合えた月読がタケミカツチに向き直る

「ん〜つまりタケに武器について教わりたかってこと？」

「まあ、そういうことだな」

「でも、眷族でもない子にそういつたのを教えるのは——」

「ちなみにかかなりの額の金も一緒に送られてきてな」ズシヤリ

「——いいんじゃない？」

「……おい」

熱い手の平返しであった。

「だってこれだけあれば味噌と米が買えるわよ！あの子たちが採ってきた山菜も嬉しいけど！それでも！育ち盛りの子達にひもじい思いをさせずに済むなら良いじゃない！」

実際、この社の家計は常に火の車・・・どころではなく燃える車輪すらないような状態なのだ、慈愛に溢れるこの女神と男神は常に自らの無力さと闘いながらも子供達を飢えさせぬように各方面の知り合いなどに援助を頼みに行っている、そのような状況の中でも孤児を見つければ拾わずには居られない性分もあつて援助に対して資金が常

に足りていない

ギリギリのギリギリのギリギリのギリの生活という限界のギリギリという言葉がゲシュタルト崩壊するような生活を余儀なくされていた

「タケが武術教室でも開ければいいんだけど、そんなことさせるわけにもいかないし・・・」

もしも武神であるタケミカツチが有料で武術を教えるとなれば、それこそ極東中から人を集めることが出来る

だが、それは国の戦を激化させる事へと繋がりがねない、そもそも孤児達が生まれるのは戦事で親を失ってしまった子という場合が多いのにそれでは本末転倒であるという理由からタケミカツチは己の眷族以外には武術を教えるつもりはなかった。

だが

現在、この社はとある子供達の行動によって経済的危機にさらされていた

具体的には、とある貴族からの援助が打ち切られてしまったのだ

原因は年長組である桜花、命、千草達を筆頭に、そのとある貴族の箱入り娘、春姫という少女をこっそりと連れだし一緒に遊んでいたことが春姫の親にバレたためだ

本来なら桜花達を怒らなければいけないところだが、タケミカツチと一緒に自分もその娘、春姫のあまりにも自由を知らなさすぎる境遇の不憫さを思い、むしろ率先して煽ったため怒ることはできなかったし、それを後悔してはいない

しかしながら現状は先立つものがなければこのまま飢えてしまう、といった状況なのだ

子供達のためにもどうにかしてこの武神を説得しなければと月読が決意していると

「誰が断ると言った」

「え、いいの？」

「この手紙の主・・・カイトはダンジョン探索のために刀の訓練方法を聞いているからな、全くないとは言えないが、人に対して使うことは

早々あるまい、それに春姫の件で桜花や命が責任を感じるようなことがあつては事だからな……」

「タケ……ありがとう」

「なに、これぐらいの手間はかまわんさ、それに……」

「それに？」

「手紙をよく見ると訂正してはあるが……ヘルメスのことをアホ呼ばわりする奴は信用できる」

「確かに」

・
・
・
・
・

こうして武神タケミカツチは手紙による伝聞のみではあるがカイトの刀の扱いにおける師となった。

|||||

「あれ？カイトまた手紙を書いてるんすか？」

本日はダンジョン探索の休日

二人部屋でもある自室にラウルが入ると机に向かってカイトが何やら手紙を書いていた

「また例のタケミカ何とかっていう神様に？」

「タケミカツチ様だ、いやタケミカツチ様への手紙は少し前に書いたばかりだ、今は祖父への手紙を書いている最中でな」

ちなみにタケミカツチとの文通による刀術指南が始まって既に数ヶ月の時間が過ぎている

毎回手紙には訓練方法やこれができたら次の訓練といった風にステップアップ式の指示が書かれていたのだが、この前の手紙には孤児

の何人かが支援金のお礼を書いた手紙が同封されていて自然に頬が緩んでしまった。

こそばゆいが孤児達が飢えなくて済んでいるのならそれにこしたことはない、ちなみに入院やらで数百万あった借金はデスマーチの様なダンジョン探索のおかげで既に完済している。

「あれ？カイトっておじいさんと弟にこの町で暮らせるように家を買うとか言ってたような気がするんですけど、孤児院に支援とかしてる余裕ないんじゃないっすか？」

「いや、それなあ……じいさんが都会暮らしよりも田舎でのんびりしたいから別にいいって断られてさ……」

「へー、まあでも確かに年寄りには騒がしいオラリオよりも、のんびりできる田舎の方が好ましく思うのかもしれないっすねえ」

「ラウルは家族に手紙書かないのか？せっかくヘルメス・ファミリアが優先して届けてくれるって言うんだ、利用しないと勿体ないぞ？」

「えー自分っすか？ 家出同然で村を飛び出したっすからねえ……返事が恐くってちよつと」

そんな事を神々の事情を知らずに、雑談しつつのほほんと過ごす二人だった。

悪夢の英雄編!!

28：悪夢×前夜

オラリオの冒険者、魔石の流通や都市の治安を管理するために全てのファミリアから独立し絶対中立を謳うギルド、その特性上からギルドは24時間その門を開いている。

「怪我人を移送する場所の確保は!?」「住人への説明への報告書作成にかかれ!!」「各ファミリアへと協力を要請しろ!急げ!」「確認がとれました!ソーマファミリアが場所を用意するそうです!」「今回犠牲になったファミリアの主神に生存の確認の要請はどうした!?」「回復薬^{ポーション}を買い占めてもかまわん怪我人へ回すよう手配だ!」「ディアスケヒト・ファミリアから薬と材料の催促がきてますがどうしますか!?」「かまわん回してやれ今は緊急事態だ!」

時間は夜間、草木も眠る丑三つ時、通常なら、24時間開いているギルドでもこの時間帯は半休状態であるにも関わらず、今は全ての職員が総出で出勤し慌ただしく今回の事件の対応に追われていた

今回の事件

後に『27階層の悪夢』と呼ばれ、闇^{イヴァイルス}派閥が今までに起こした事件の中でも最も凄惨な事件とも言われることになる、オラリオ史上でも凄惨極まる事件である。

さらに事件はダンジョン内だけに限らず、それに連動するように同時に地上でも起きていた

そのせいで現在ギルドはダンジョン内での事件、地上で起こった事件、しかも、どちらもこれからのオラリオの運命を左右しかねない案件に忙殺されていた

「部長、とりあず簡潔にですが上への報告書になります、確認をお願いします!」

「わかった!すぐに目を通す!」

ギルド部長が部下の作成した、簡潔にだが要所をまとめた今回の事

件のあらましに目を通す

そこには今回の事件のおおよその経緯、犠牲者数と生き残った人数及び人名、壊滅したファミリア名だけでなく天界に送還された神々の名前までもが記載されていた

オラリオ史上でも類を見ないほどの大事件、それが二つも同時に、しかも僅か一日で起こったというのだからギルドからすればたまったものではない

「とりあえずこれを現状の簡易報告書として上に通す、その間にさらに詳しい調書を作成していてくれ！」

「わかりました！」

「頼む、私ははこれから直接現場に向かう、その君！こいつをロイマン氏に持つて行ってくれ！」

「は、はい！」

いつもなら愚痴の一つでもこぼすであろう部下が何も言わずに指示に従うことが事態の緊急性を表していた

（それでも、今回の事件はこの都市にとって決して悪い方向に向かうものではないっ……ここが踏ん張り時だ！）

この都市に住みこの都市を愛する一人の住人として中間管理職なギルド部長が事態の究明と解決のため奔走していた。

——同時刻

場所は変わり、ダンジョンの入り口であるバベル、その地下

本来ならダンジョンへと大勢が行き来するために広く取つてあるはずの広場が今は怪我人と救護士であふれかえっていた

その中にロキ・ファミリアの主神ロキ、そしてフィン達幹部だけじゃなくアイズやラウル、アキといった姿も確認できる

全員が顔を心配に染めて1人の男に駆け寄っていた

そこには、

服や髪を赤黒く染め
涙を流す男

左腕を失ったカイトの姿があつた。

『27階層の悪夢』数日前

事の起こりはギルドがとある情報を手に入れたことから始まつた。

《side：フィルヴィス》

「下層への調査・・・ですか？」

「ああ、派閥の等級ランクがDに上がったことによるギルドからの
強制任務ミッションという奴らしい」

ギルドは一定の等級に達したファミリアに任務を課す、それは本来

なら到達階層の記録更新など何かしらギルドに取って有益な情報や成果を求められるものだ、だが今回は異なるらしい

場所はデュオニユロス・ファミリアの本拠、その一室

そこで団長である私と主神であるデュオニユロス様は明日からの団員達とのファミリアとしての今後の行動について話していた

「強制任務ミッションの事については知っていましたが……何か訳ありですか？」
「実は先日ギルドが闇派閥イヴァイルスが下層で怪しい動きをしているとの情報を得たらしい、そしてそのために多数のギルド傘下のファミリアが投入されるそうだ」

「それに私達も加われ、ということですか……私を含めてもLv. 2以上の団員は5名しかいませんが」

「それでも、ということらしい……なにせ調査する場所が場所だ、大方付いてこれるサポーターが欲しいのだろう、それに今回その調査を主導するのはあのアストレア・ファミリアの全団員だそうだからね、直接的な危険は彼女たちが振り払ってくれるだろう」

「アストレア・ファミリアが……確かに彼女たちとなら戦力はそれだけでも十分ですね」

「アストレア・ファミリア」

団員の全てが女性によって構成されており、構成団員は僅か11名のみという少数のファミリアだ

しかし全団員11名の内9名がLv. 4、残りの2名もLv. 3といった、ただの少数のファミリアではなくそこに精鋭という言葉が付く、オラリオでも名の知らぬ者はいないとされる程の上位派閥ファミリアである

正義を司るアストレアの神意に沿って、団員達は率先してオラリオの安寧と秩序を守るために奔走する、まさに闇派閥イヴァイルスの真逆を行く者達である。

そのため闇派閥イヴァイルスの中には闇派閥殲滅を主導しているロキ・フレイヤ・ガネーシャ・ファミリアよりも敵対視している者達もいるほどだ。

「ふう、ギルドもやっかないな任務を押しつけてきたものだ」
「す、すみません」

「?・・・なぜフィルヴィスが・・・いや勘違いしないでくれ、別に私はそういう意味で言ったのではないよ」

「・・・はい、ですが」

「むしろ私の眷族こどもから初の第二級冒険者が誕生したことはとても誇らしいことなのだからね?」

今回の強制任務ミッションが言い渡された原因は間接的にだが私にある、派閥の等級ランクが上がったのは私のレベルがつい最近になってLv.3にランクアップしたためだ

「ふふふ、それにしても・・・」

「っ・・・な、何でしょうか?」

何だろうかディオニユス様がニヤニヤと意地の悪い笑みを向けてくる

「いや、なに・・・愛しの彼と揃ってランクアップ、運命を感じてるんじゃないかな?と思ってるね」

「~~~~っ?! デュオニユス様!!」

「ははははははは! 顔が真っ赤のフィルヴィスも可愛いなあ、その表情で彼に詰め寄ればすぐに落とせると思うぞ? ほくらフィルヴィスNTRについて教えてあげるぞ?」

「なあ!? なななな何を言っておられるのですかー!?」

からかわれていると分かっているも恥ずかしさから来る顔の熱りが止められない

時の流れは早いものだ

カイト達と出会ってからもう少しで一年と半が経つ

・ ・ ・ ・ ・

あのミノタウロスとの事件の後、カイトの告白染みた台詞は私の勘違いだったことに気付いた

・ ・ ・ 半年くらいしてからな

めつちや落ち込んだ、凹んだ、1週間部屋から出なかつた程だ

だがそんな私を見かねたデュオニユロス様が私の部屋に来て言ったのだ

「フィルヴィス！相手に婚約者がいるから何だ！君は美しい私の眷族ことどもなのだ！ならば君自身の魅力で相手を振り向かせて見せろ！！フィルヴィスいいかい？愛とはな！奪い取るものなのだ！！それとも君の愛はその程度だったのか！？ならばそれこそ相手に失礼だろう！！愛して愛して究極まで愛し！突撃して砕けて砂になるまで決して諦めるんじゃない！！君は私の美しく誇り高い眷族ことどもなのだから！！」

その言葉に雷が落ちたような衝撃を受けた

愛とは奪い取るもの

私は誇り高いエルフだ、恋した者に相手がいるのなら身を退くのが潔い、そう思っていた

だが、今のデュオニユロス様の言葉で目が覚めた気がした

恋した者に相手がいるのなら身を退くのが潔い・ ・ ・ 本当にそうだろうか・ ・ ・ いやそんなことはない！！

諦められない程、既にカイトに惹かれているのだ、そうでなければこうして1週間も落ち込みはしない！！

このままあきらめるのはそれこそ闘わずして敗北を認める様なものだ！そんなことわたしのプライドが認めはしない！！

死んでいた心に今まで感じたことがない活力が漲ってくる!!

「フィルヴィス！私に続けて叫べ!!」

「!?——はいっ!!」

「恋人がなんだああああ!!」

「恋人がなんだ——!!」

「婚約者がなんだああああ!!」

「婚約者がなんだ——!!」

これが一時間も続いた

最後の方ではデュオニユロス様の喉はガラガラに枯れてしまった

眷族である私のためにここまで身体を張ってくれたこの方に私は改めて忠誠を誓った。

その翌日からディオニユロス様の助言の元、カイトへのアタックがさりげなく始まったのだが中々上手くいかなかった

デュオニユロス様の誤算は思ってた以上に正気に戻った私が奥手であったということだろうか

あの時の私は1週間も部屋に引きこもり、その上食事も碌に取っていなかった、そのため脳がフワフワのポワポワ状態、そこに尊敬するディオニユロス様登場と同時に熱い激励

言ってしまうえばハイな状態だったのだ、私が正気に戻ってしまえば積極的なアタックなど出来るわけがなかった

その上、カイトとのダンジョン探索は危険もあったが非常に楽しく、今の関係を壊すのを恐れて決定的な一線を越えることが出来なくなってしまう

そしてそれがズルズル続いて気付けば2人そろってLv. 3にランクアップ

ちなみに『剣姫』は私達の半年前には既にLv. 3、所要期間はなんと2年!・・・ちなみにわたしは5年かかっている

サポーターのラウルはその少し後にLv. 2にランクアップしている、そしてこれも所要期間2年と少し!

2人に比べれば倍近く掛かっているが普通はもつとかかる、そもそも

も一生をLv. 1で終える者がいる中ではこれでも凄まじい速度だ
そして私とほぼ同時にランクアップしたカイトの所要期間は驚きの1年半!!

改めて思う、このパーティにいると感覚が狂いそうだ

「・・・色々な常識が通じないなあここは」

「突然なんだ?」

「カイトおかわり」

「おう、ちよつと待つとけ」

目の前にはモキユモキユとじゃが丸くんなる揚げ物を衰えることなく食す『剣姫』と、じゃが丸くんを残像を残しながら素早く作るカイトがいた

デュオニユソス様と下層への調査に関して話した翌日、私はロキ・ファミリアの本拠の中に招かれていた

しばらくの間は下層への調査で共にダンジョンに潜れないことを伝えるに、ロキ・ファミリアの本拠まで来たのだが、ちょうどカイト達もダンジョン探索が休日ということであれよあれよ建物の中に連れ込まれ今に至る

他のファミリアの食堂という慣れぬ状況に少々落ち着かない

「それでしばらく探索に行けないって?」

「ああ、実はな・・・」

昨夜デュオニユソス様と話した内容を掻い摘まんで説明する

「あく、それフィルヴィスの所が参加することになったんか、一応調査の話だけはチラツツと聞いたな」

「らいじょうぶ?」

「お嬢、口に物をいれたまま喋ると、まうたりヴェリアに怒られるぞ?」

「むぐむぐ!」

戦闘中では決して見せない『剣姫』のあどけない姿に少しホツコリする、カイトと一緒だと本当の兄妹みたいだ

「一応、アストレア・ファミリアの全団員が主導で指揮を執ることに

なっているからな、滅多なことにはならないだろう」

「まあ、あそこは全員が第二級以上しかいない精鋭オンリーの特殊なファミリアだからなあ、下層までなら問題ない・・・か?」

「ああ、帰ってきてからすぐは勘弁してほしいが、休息を数日取ったらまた探索に呼んでくれ、喜んで付き合おう」

「応、そんな時は頼む、・・・ちなみに今揚げてるじゃが丸くんはリヴェリアも絶賛のじゃが丸くん、エルフでも食べやすい『柚風味じゃが丸くん』一個食ってみ」

「あのリヴェリア様が!?!・・・ご相伴に預かろう」

「私は小豆クリーム味」モキュモキュ

「・・・何だそれは」

明らかに胸焼けするであろう揚げ物を食す『剣姫』に戦慄しつつ、カイトの作ったじゃが丸くんを食べた、リヴェリア様が絶賛するだけであって非常に美味しかった

「・・・くっ・・・旨いっ・・・」

「何で悔しそうに食ってた・・・」

・・・前々から思っていたがカイトは女子力が高すぎないか?

女性としての私のアイデンティティががががが

う・・・だん・・・

「・・・ん?」

「団長? 出発みたいですよ?」

「む?すまない少しボーツとしていた」

「なっはっはっは、珍しいな!?!お前が上の空とか!」

「お前らうるさい、置いて行くぞ」

「おいおいそりゃあないぜ!？」

今は下層への調査へ向けてアストレア・ファミリア主導でダンジョンに向かう直前だ

考えにふけっていた私に気の弱そうな団員が声を掛け、付き合いの長い同僚達が茶化してくる

(数日前のカイトとの夢を見るとは・・・気持ちを切り替えねばな)

色ボケモードはここまでにしておかねば、なにせ今回の調査に参加するファミリアはアストレア・ファミリアを除けば総勢8、人数は50を超えている

これだけの大規模な人数でダンジョンに挑むのは初めてで無意識に緊張していたのかもしれない

なにせ数だけならばロキ・ファミリアやフレイヤ・ファミリアといった大派閥の遠征する際の数とほぼ同等だ、意識するなと言う方が無理な話だ

ちなみに人数が多いので部隊を二つに分けて18階層で合流する手筈になっている

他の冒険者の迷惑にならないように、少しずつダンジョンの入り口に進んでいく他のファミリア

「では、次のパーティも進んで下さい」

後続部隊の指揮を任されているアストレア・ファミリアのエルフから声が掛かり私達の順番になる

(・・・彼女が『疾風』か)

素顔の下半分を覆面で隠しさらにフードまで被って人相がわからないようにしているにも関わらず同じ同胞のエルフとわかるのは、そのあまりに素顔を晒さないことが有名になりそれが逆に目印になっているからだ

「名高き同胞と共に出来ること光栄に思う」

「いえ、こちらこそ今回は協力感謝します」

すれ違う前に一声掛けてみると思っていた以上の柔らかい声が

帰ってきたことに驚いた

(どんな偏屈者かと思っただが・・・綺麗な声だ)

「それよりも後ろが詰まりますのでお急ぎを・・・」

「あ、ああ、すまない・・・」

『疾風』に急かされてから眺めるダンジョンの入り口はいつも通りだ
後ろに控えていた団員達に目を配ればやる気に満ちた顔で全員が
頷く

「・・・よし！デュオニユソス・ファミリア！出陣するぞ！！」

「！！応！！！！」

パーティの志気は上々、これなら予定通り進めそうだ

《side out：フィルヴィス》

|||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||
|||

フィルヴィスは知らない

この先には悪夢が待っていることを

他の者達は知らない

二度とこの地を踏むことがないことを

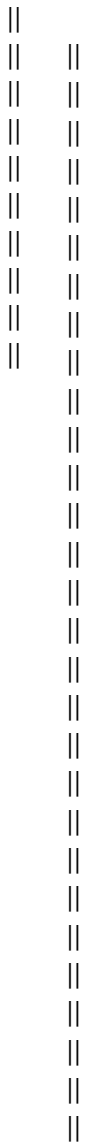
女神アストレアは知らない

眷族から最凶の復讐鬼が生まれることを

そして、とあるエルフは知る

己が身に巣くう暗き激情を

29：悪夢×進呈



《Side：フィルヴィス》

18階層での合流は特に問題なく予定通りに行われた

この階層はダンジョンでも極めて珍しい、モンスターが生まれにくい
セーフティポイント
安全階層だ

別名『迷宮の楽園』
アンダーリゾート

水晶と大自然に満たされた地下世界の中でも一際美しいとされる場所だ

天井は全て結晶クリスタルで出来ており時間に合わせて結晶の光がなくなり夜になる

そして驚くべき事にこの階層には街があるのだ

街と言っても冒険者達が勝手に寄せ集まって作った集落に近い

それでもダンジョンでは補給できない貴重な食糧や飲み水、装備や回復薬といったアイテムが手に入るこの場所はどれほど法外な値段であろうと需要がなくなることはない

だが大規模集団による遠征の場合は人数に任せて持ってきた荷物で付近の森で簡易テントを建ててキャンプを行うのが主流だ

そして例に漏れず、私達もそれに倣ってキャンプを行った。

キャンプ中は団長として今回参加したいくつかのファミリアと軽く交流しつつ談笑を行う

正直面倒だが今回の下層への調査は好き嫌いでこなせるものではない、何かあつた際に少しでも生存確率を上げるために他のパーティの実力や構成を頭にたたき込んでおくことは必要なことだ。

そして翌日

中層19～24階層『大樹の迷宮』をアストレア・ファミリアの指

揮の下進んでいた

「弓兵は斉射！とにかく足を止めろ!!」

「了解!!」

10名以上による弓の斉射がモンスターの襲撃の勢いを削っている

「壁役は弓への前へ出て護衛を、打ち終わりにそのままモンスターにシールドバツシュを喰らわせてやれ!!」

「応!!」

さすがは上位派閥といったところか、最終到達階層が41階層と言っただけはある

他のファミアリアであつても物怖じせずには冒険者に指示を出している、おかげで指示された者もその自信に満ちた声に応えるように的確にモンスターを討伐していく

(ふむ…指示の出し方一つとっても色々勉強になるな…だが…) 後衛の魔道師部隊に組み込まれたため少々暇を持て余す、これがカイト達となら逆に一瞬の油断もできないのだが、これだけの人数がそろつてもどうしても気が緩みかける

「今回も私の出番はなさそうだな…」

「魔法は文字通りの切札だからね、使える人はできるだけ温存しときたいの」

ポツリと呟いた私の言葉に後ろから声が帰ってきた

「アリーゼ殿…」

「殿なんてやめてよー、あたし堅っ苦しいの苦手だから、アリーゼでいいって、はい、リピートアフタミー?」

振り返ると、アストレア・ファミアリア団長アリーゼ・ローヴェルが立っていた、

赤髪を後ろで一本にまとめ、眩しく輝く太陽を彷彿とさせるようなイメージを持たせる女性だ、実際に今回の調査の件で昨日、何度か話をしたがイメージ通りの明るい女性のような感じだ。

「…アリーゼ」

「オツケー！」

カイトとは異なる距離の詰め方だ、あつちは気付けばといった感じだが、彼女ははつきりとグイグイくる、そしてそれが不快に感じない不思議な雰囲気を持った人物だ

「あなたのこのことは『切札』からチラツツと話しただけ聞いてたのよ〜?」
「!?・・・か、彼と知り合いだったのか?」

「ん〜まあ、都市の治安を守るために一緒に駆けづり回ってるファミリア同士だもの、ちよつとした交流くらいあるの、そこで世界記録保持者の彼と何回か話す事があつてねー」

成る程と納得した、確かにロキ・ファミリアとアストレア・ファミリアは闇派閥と明確に敵対している、おそらくこれまで何度となく共同戦線を張ったことがあるのだろう

(そういえばカイトがL.V. 3になつてから強制任務に連れ出されることが増えたとぼやいて――)

「でねー?彼と話してるときにあなたのことを彼が話すことがあつてねー?」

「!?」

(カイトが私のことを?!あわわわわわ!?)

「・・・」

心中で大混乱しつつもなんとか表情を崩さないことに成功したが

「あなた『切札』こと好きでしょ?ラブってやつ?」

「ぶうー~~~~~!!??」

・・・続くアリーゼの言葉で無意味になった

「な、なななななにやに言ってるんだ!?!」

「ぷっ、あつはつはつはつは! だって彼の話を聞いたらバレバレよ?」

「なんだとお!?!」

「ねえねえ彼のどこに惚れたの?顔?性格?それとも全部?」

「い、いや、そ、それはちが・・・」

「ねえねえ教え アダア!?!」

「!?!」

凄まじい勢いでこちらに詰め寄ってくるアリーゼの脳天に重そうな拳骨が降ってきた

「とつくにこちらの戦闘は終わっているのに、なにを乙女トークしてるのだ・・・」

「か、かぐや輝夜、いきなり拳骨はやめて・・・これぜつたいコブができてる」
(た、助かった・・・)

涙目で訴えるアリーゼを無視してかぐや輝夜と呼ばれた女性がこちらに近づくと

「うちの馬鹿が迷惑を掛けてしまったな」

「誰が馬鹿よく誰が」

「い、いやあまり気にしていないでくれ」

東方の格好をしたアストレア・ファミリアの団員が頭を下げてくる
「助かる、うちの団長は子供っぽい所が玉に傷、とか傷だらけでな・・・ほらアリーゼさっさと進むぞ、今日中に27階層まで行けないと食料の割り振りが面倒になる」

「わかってるって・・・じゃ。そういうことだから、またね！」

「あ、ああ・・・」

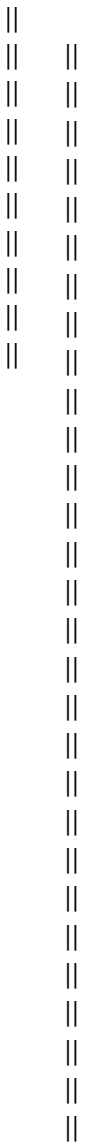
(できれば今回のような詰問は勘弁して欲しいが・・・)

そんなちよつとしたトラブルもあったが二日目の昼には特に何もなく下層領域である27階層まで到着した・・・いや

言い直そう

——到着してしまった、と。

《side out：フィルヴィス》



《side：アリーゼ》

27階層は深層まで到達している上位派閥であつても油断するこ
とは決してできない

なぜならここは階層主が生まれるエリアでもあるからだ

27階層階層主『アンフィス・バエナ』、堅い竜鱗に加え前後に首の
長い二頭白龍のモンスター

ギルドが設定した強さは推定でLv. 5、得意な水辺であればL
v. 6に届くのではないかと揶揄される程の強さを誇る化け物だ

もし奴を討伐しなければならぬとしたら、他のファミリアの指揮
を捨ててアストレア・ファミリアの総力を結集して相手をしなければ
ならない

だが今回はその心配はいらない

事前にギルドから私達がダンジョンに潜る数日前に階層主の討伐
が確認されたという報告を受けたからだ

階層主を気にしなくてもいいということもあつて、これだけの人数
でありながら二日という短時間で同行軍ができた

だが、ここにきて明らかな違和感を感じずにはいられなかった

「アリーゼ気付いとるか？」

「ええ、おかしいわね、これ」

私達アストレア・ファミリアと他派閥の混成集団は何事もなく27
階層まで到着した

だが、そもそもその状況がおかしいのだ

私達は閻派閥イヴァイルスが下層で何かを企んでいるという情報を得てここま
でやってきた、だというのに向こうから何も反応がない

「途中で閻派閥イヴァイルスの妨害が必ずあると思っていたのだけど・・・それがな
いとする・・・」

「・・・情報に間違いがあつたか、それとも」

—— 畏か。

お互いの頭に最悪の可能性が浮かび上がる

「どうする・・・今すぐ撤退をするか？ワシとしては面倒事は勘弁だからせひそうしたいが」

「輝夜はどっちがいいと思う」

「そうだな・・・」

うちのファミリアでも輝夜の実力はリオンと1、2を争うほどの腕前だ、そしてそれ以上に彼女はこういったキナ臭いことには勘がよく働く

「畏だとしても食い破ってみせよう・・・と言いたいところだが、今回は預かっている他のファミリアもおるからなあ・・・撤退を提案させてもらうか」

「これだけの数を揃えて撤退かあ、ギルドから何かしらの小言でも言われそうね」

「はあ・・・小言ではすまんじやろうよ、下手をすれば何かしらの罰則もあり——・・・アリーゼ」

会話が途切れて剣呑な雰囲気を書き付けた声で名を呼ばれる、もちろん彼女とはファミリア創設以来の付き合いだ、この状況でいきなり名前を呼ばただけなどとは思わないし、数舜遅れて私もそれに気づいた

「ええ、・・・空気が変わった、これは・・・かなりまずいわね」

長年の冒険をしていると、何かが起こる前というのは何かしらのサインがある、それは音、臭い、湿度、気温、地面の震動から風の流れまで様々な物が今までに経験した危機と総合的に合わさり第六感として警告してくる

そして今の状況と直感が告げている

即ち “逃げろ” と

「アリーゼ!!」

その直感を証明するかのように後方部隊で指揮を任せているリオ

ンの声が響いた、声色からただのモンスターの襲撃ではないと即座に察する

「後方を要警戒！他も——」

「アリーゼー！こつちからもだ！！9時方向！！距離500！！」

「3時方向！敵襲！！距離300！！」

次々と上がる敵襲の報告

前方は下層の中心でもある滝壺の最終地点である巨大湖

後方からの奇襲かと思われた敵の動きはこちらを包囲するかのよう
に展開してきたらしい

(・・・まずい!?)

反転しても後方以外は敵、そしてその後ろも水場で逃げ場がない、
まさに背水の陣とはこのこと

泳いで逃げようにもこの階層、正確には25階層からこの27階層
は大瀑布『グレートフォール巨蒼の滝』で繋がる水の楽園、当然モンスターは水棲系が多
く、この階層で水の中を泳ぐのは自殺するのとそう変わりがない

「最悪のタイミングでおいでなすったわね、東方だと噂をすれば何と
やらって奴かしら？」

こういった緊急事態のときこそ余裕を忘れてはならない、それが虚
勢であっても現場の指揮官が自信を失う姿を見せればこんな寄せ集
めの即興大部隊等すぐに瓦解する

「噂をすれば影、だ。それよりも・・・それぞれの部隊の指揮者は敵
の人数の報告をせい!!」

輝夜がこつちの掛け合いに軽く乗ってきてくれる、これだけでも私
の心にいくばしかの余裕が生まれる

だが、他ファミリアからの続く報告で一気に余裕が吹き飛ばされた
「敵襲は人だけじゃない！あいつら自滅覚悟で大量のモンスターを
引き連れたままこつちに向かって突っ込んできてる!!」

「なっ!?! 自滅覚悟の怪物進呈!?!あいつらなんてこと考えてんのよ
!?!」

狂信者の理解できない行動にパニックになりかけたが

「アリーゼどうする!？」

「・・・っ!!」

仲間の声、そしてこの部隊の総責任者としての立場が私に瞬時に我に返させた

(驚くのは後!まずはこの状況から生き残ることだけを考える!!)

「湖の方に後退しつつ弓を使えるものと魔法を所持している人は少しでもいい、敵の数を減らして!!」

「抜けたモンスターはどうする!？」

「そこは私たちに任せなさい!・・・全員傾聴!抜けたモンスター及び闇派閥イヴァイルスは私たちアストレア・ファミリアで対処する!その間はあなたたちの護衛はできない!無責任かもしれないが各自奮闘し生き残れ!!敵の第一陣を凌ぎ切った後に一転突破で敵の包囲を抜ける!・・・いいな?!

「おう、まかせろ!」

「やってやらあ!!」

「行くぞおめーら!!」

「了解した」

予断を許さない状況もあってかすぐに各自のファミリアから承諾の旺盛が上がる

「リオン!あなたの魔法を最後の突破に使う!魔力は使用しないように肉弾戦のみで戦って!」

「了解しました!輝夜!敵陣の中に私たちだけでも突っ込んで掻き回します!」

「ふふふ、いいのう、うち好みの展開じゃな。アストレア・ファミリアのツートップの実力を披露するのでしょうかのう!」

(全員準備はいいみたいね・・・)

今回引き連れてきた全ての冒険者がそれぞれの武器をを手にし戦闘態勢に入る

「・・・総員!行くぞおー!」

「!」

・ ・ ・ ・

そこから先は乱戦に次ぐ乱戦だった

自分も参戦し、少なくとも20を超えるモンスターを切り捨てたが、そこから先は無我夢中で数えるのを止めてしまった

(な、なんとか耐えきったか・・・)

闇派閥達が連れてきたモンスターはどうやって連れてきたのかはわからないが、中層のモンスターまで混じっていた

私達も奮戦したがそれでも撃ち漏らしというのはどうしても出てくる、敵の第一陣を防ぎはしたものの、少なくとも怪我人を出してしまった、だがその無茶のおかげで敵の波のほとんどを一旦ではあるが退けることに成功した、だが安心はできない、既に第二陣と思われる者達の姿が遠目にも確認できる

「リオン!!魔法をお願い!ここから一気に安全圏まで突っ走るわよ!」

「了解しました!」——今は遠き森の空。無窮の夜天に」

「な!?!並行詠唱!?!」

「あれほどの高速戦闘を行いながらだと!?!」

「マジかよ・・・」

味方がリオンの絶技とも呼べる並行詠唱に驚く

オラリオ、広しと言えどこれほど高速で動き回りながら詠唱を行える者はそうはいない、さらにリオンは魔法の威力が全種族の中でもずば抜けているエルフ、加えてリオンは動くだけでなく攻撃や回避、反撃を目にも止まらぬ俊敏で動いているにも関わらずその剣の技にも

この女は一度でも根に持った相手は地の果てまでも追いかけて殺すくらいは当然のようにやってのける

「はあ!!」

「ちっ!?アリーゼでめえ!?正義の味方が不意打ちしてんじやねえ…よ!!」

「くっ!?!」

輝夜に参戦するため不意打ちで後ろから斬りかかったというのにあつさりと対処されてしまう

(腐つてもLv. 5か…でも)

「輝夜、アリーゼ、助かりました」

「気にしない気にしない☒」

「ふふん、まだまだ隙だらけじゃのうりオン」

「ぐっ、うるさいですよ輝夜」

こちらが軽い小競り合いをしている隙にリオンは魔力を拡散させてこちらの戦線に加わってくれた

(この人数ならなんとか抑えられる…けどこれじゃ他の戦線が維持できなくなるわね…こうなったら)

「あなた【勇者】^{フレイバー}の追っかけだったんじゃないの?それともこちらに鞍替えしたのかしら?全然嬉しくないんだけど、浮気するならフレイヤ・ファミリアとかにしないさいよ。ここは女しかいないわよ?それともそっちの道にでも目覚めちゃったのかしら?あらヤダ怖い」

わざと罵詈雑言に近い挑発を行う、これでヴァレットは私に対して特に敵意が向くはずだ、回避と防御に専念すれば私一人でも時間くらいなら稼げるはず———そう思っていたのだが

「………ククク」

(………何?)

「ぶっ……あはははははははははは! おいおいアリーゼどうしたでしょう?良い子ちゃんのせいやお前の罵詈雑言には切れがねえんだよ、それともあまりに余裕がなくてあせちやつてるのかあ?ギャハハハハハハハハ!!」

いつもこれくらい言われたら間違いないとキラッとこちらに向かってきたであろう言葉を言ったというのに軽いなされてしまった・・・
ヴァレッタのこの余裕に薄ら寒いものを感じる

「・・・でもまあ、ちよつとカチンとくるものもあつたからなあ、ちつとばかり早いのがためえらにさらに絶望をくれたやるぜえええー！！！！！！オリヴァス！！あいつを抑えている魔法を解除しろお！！」

ヴァレッタから出てくる他の幹部の名前に身構える

ヴァンデッタ

【白髪鬼】オリヴァス・アクト　ヴァレッタと同じく闇派閥の幹部　実力はLv. 3

個体としての脅威度ではヴァレッタには劣るもの、爆破テロや殺人などで都市に混乱を巻き起こす最上位の賞金首にもなっている

『ふつ、よかろう、少々早いがこいつらの絶望に染まつた顔は私も早く見たいのでな』

どこかに潜んでいるのか、それともマジックアイテムでも使っているのか声が辺りに反響するように発せられているため居場所が特定できない

周囲に気を配るも、近づいてくる怪物進呈パスパレードの第二陣の地響き音で気配を探ることすらできない

ドン

だが、その地響きすら細音に感じるほどの衝撃に近い音と共に25階層からこの27階層までを貫く巨大な滝壺でもある中央の湖が爆ぜた

「Guaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa
aaaaaaaa!!」

(な!?! あれは討伐されたはずでしょう!?! 何でいるのよ!?!)

中から姿を現したのは階層主「アンフィス・バエナ」だった

「馬鹿な!?!」

「これは・・・さすがに予想外じゃなあ」

「絶句したのは私達だけではない、奮戦していた周りの冒険者たちにもこの状況に対するさらなる追い打ちに呆然となる

ズンズンという地響きを響かせながらこちらに向かってくるアンフィス・バエナ、安全なはずだった後方の湖からまさかの階層主の登場に全員が絶望に顔を染める

「ギャハハハハハハ!! そうだよ! それだよ!! アタシが見たかったのはア!! 苦労したんだぜえ? あいつの偽情報をギルドに流させるのも、あいつをバレないように他の冒険者の目に止まらないように誘導したりすんのはよお?」

(どうするどうするどうするどうするどうするどうするどうするどうする!!?)

立て続けに襲ってくる不測の事態に対処するために、頭が湯立ちそうなほど回転するも全て空回りに終わり同じ言葉が脳内で堂々巡りする

「ヒヤハハハハ!! いいぜいいぜ!! アリーゼ! その顔最高だあ!! もっとその顔を・・・ああ?・・・なんだあいつは?」

こちらを見て嬌笑を上げていたヴァレッタの笑いが止まる

(・・・今度は何!?)

ヴァレッタの見ていた方向に目を向けると誰かが25階層から飛び降りてきている所だった

百メートル以上もある高さからの飛び降り、第二級以上なら下が水なら耐えられないこともないが、それでもモンスターが無数にうごめく巨大湖に飛び込むなど正気の沙汰ではない

一体誰だ? という疑問には他の冒険者、今朝話したばかりのフィルヴィスが答えてくれた

「カイト!」

(ジョーカー切札!? 何故ここに、いやその前にいくら彼でもあんな所から飛び降りたらタダじゃすまな――)

そう思った瞬間

距離はかなり離れているはずのこちらにまで聞こえてくるほどにカイトが叫んだ

「市・解!!」

それはまるで最初からそこにいたかのように姿を見せた

「「「なあああああ?!!?!!」」」

驚声は闇派閥を含めたその場にいる全員

切札ジョーカーのいた場所にいきなり巨人が現れたのだ

それもただの巨人ではない、頑強な東方風の鎧に身を包んだ身の丈五十メドルはあるのではなからうかと思われるほどの巨大な鎧武者だ

「『黒縄こくじょう天譴てんげん明王』!!」

ズドン

という先程以上の衝撃音と水しぶきを上げて鎧武者が滝壺に着地し、そのまま階層主と対峙した

大きさの対比で言えば大型犬と大の大人ほどだろうか

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

あまりの事態にヴァレッタ々までもが口を開けて呆然としている

そんな中でたった一人、この状況を作り出した彼が鎧武者の肩に乗ったまま声を上げた

「皆無事か!? 助けに来たぞ!!」

それは援軍という言葉では足りぬ、あまりに眩しすぎる希望だった。

《side out：アリーゼ》

30：双頭×明王

|||||||

《side：フィン》

「・・・これは罨だな」

ギルドの最奥にある作戦室に僕の呟いた言葉が響く

「あの・・・この作戦に何か？」

ギルドの職員が僕の呟いた言葉に疑問を投げかける

僕とリヴェリアの他にもギルドの上級職員でこれからの対闇派閥への攻勢について考えるために今現在分かっている闇派閥に関する全ての情報をまとめている際に、最近の闇派閥の動きからアストレア・ファミリアが今行っている下層の調査が罨だと気付いた
そのことを伝えると全員が一斉に狼狽え始めた

「早く救援にー」

「・・・ダメだ、おそらく今から救護隊を組んでいたら間に合わない」
既にアストレア・ファミリアが下層に出発してから一日、とてもではないが間に合わないし誰かを単独で向かわせるにはあまりにも危険すぎる

だが、これは同時にチャンスでもある
下手をすればこのオラリオ暗黒期と呼ばれる今に終演の幕を下ろすことが出来るほどの千載一遇の機会

「全員聞いてくれ・・・救護隊を組むのは今から話す作戦が成功してからだ」

「なっ!?!調査隊を見捨てるのですか!?!」

これは大のために小を切り捨てると見られても仕方がない、冷酷な判断と思われるかもしれない、だがそれでもこのオラリオの未来がこれからも闇に飲まれ続けるか、それとも少しでも早く光を迎えること

が出来るか分水嶺だ

「元から間に合わないかもしれない可能性に兵を割くくらいなら、僕は確実に勝てる方を執らせてもらう……今から作戦を伝える」

そして僕が話した作戦は単純明快だ、現状でオラリオにいるロキ、フレイヤ、ガネーシヤ、それ以外の地上に残っている全てのギルド傘下のファミリアの人員を投入しての一大攻勢作戦

狙いは闇派閥の首魁である神々の強制送還

資料から察せられるのは敵の人員・資材・物資の動きアストレア・ファミリアを罠に嵌めるためかなりの戦力を投入しているであろうということ、そしてそれは同時に奴らの防御がこれまでにないくらい手薄になっているということだ、この機会を逃せば次はいつになるかわからない

「カイト、大至急でフレイヤとガネーシヤ・ファミリアのホームまで行って今の話の内容をそのまま伝えてきてくれ、機密情報ランクは『SSS』って言うのも忘れずにね、こう言えば否が応でも幹部クラスが出てきてくれるはずだ」

今回のような伝達事項があったときのために会議室の壁際で待機していたカイトに言伝を頼む

「……了解……伝達が終わった後はうちのLv. 3以上の団員に戦闘準備とLv. 2以下には半々でサポートもしくはホームで待機つてことでいいのか」

話が早くて助かる、指令が終わった後に関することを言う前に伝えたいことを先読みして確認してきてくれる、おかげで支持が出しやすい

「いや、下級団員は全員ホームで待機、現場にはアイズと数名のLv. 2の団員を除いた全戦力を投入する、それ以外は君が言った通りでいい、本当なら全ての戦力を投入したいところだけど、さすがにホームを本当の意味で空にするわけにはいかないからね」

大人しく聞いていたカイトの表情が『アイズを除く』と言った部分で眉間に皺がよった

「ちよつとお嬢を甘やかしすぎじゃないか、お嬢はあれでそこそこ度胸はあるし、戦力で言うならかなりのもんだぞ?」

「そうかもしれない・・・でもさすがに今回はちよつとね・・・なにせ」

今回は過去類を見ないほどの殺し合い

正義と言う名を借りた一方的な

虐殺だ

幼子に見せるのはあまりに惨いだろう?

そう言うのと、嘆息しつつ一応納得はしてくれた

「・・・俺もギリギリ純朴な少年って言っていていい年齢なんだが」

「ははははは、うん、それおもしろいね、ウィットの効いたナイスジョークだ」

特に純朴というところが笑いのポイントが高いね、ここがホームの食堂なら座布団でもあげていたかもしれない

「えー傷つくわー・・・はあ・・・んー・・・じゃまあ、行ってくるわー・・・」

そう言うのと仕方がないでもため息をつき、やる気のないような言葉とは裏腹に急いで会議室を飛び出していった

・
・
・
・
・

一時間もしない内にカイトに呼び出しを頼んだ人物が会議室に集結した

フレイヤ・ファミリア団長：オラリオ唯一のLv. 7 【おうじゃ猛者】オツタル

ガネーシャ・ファミリア団長：L.V. 5にして都市最多の構成員を誇るファミリアを束ねる女傑【象神の杖】アンクルーシャシヤクテイ・ヴァルマ
さらに僕ことロキ・ファミリア団長：【勇者】ブレイバーフィン・デイルムナ

言わずもがな、構成員の質と量はこのオラリオで五指に入る大派閥の団長三名が一同に会することになった

「・・・それで？」

腕を組んだままの状態のシヤクテイが口を開く

時間がないこともあって二人とも既にここに着くまでに事情はあらかた案内役の者に聞いたそうだ

「・・・フィン、単刀直入に聞くぞ、作戦は？」

シヤクテイに続くように武人氣質の強い、都市最強の戦士が言葉少なく聞いてくる

オツタルやシヤクテイ、特にオツタルとはライバル関係にあるファミリアの団長ではあるが、これも腐れ縁というのだろうか、10年以上も競い合っているとファミリアの家族とはまた別の奇妙な信頼関係できていたりする、おかげで遠慮なく伝えたいことだけを端的に伝えることができる

「それぞれのファミリアの投入できる最大戦力を一気に集めて、敵の拠点と思われる場所を全て叩く」

「隊はいくつまで分けるつもりだ？ お前らの所と違って私のファミリアの最大戦力はほとんどがL.V. 4だ、できればどちらかに混ぜる形で編成してほしいのだが」

ガネーシャ・ファミリアは団員の数も多く実力者もそろってはいるが、それでも団長であるL.V. 5のシヤクテイが最高レベルだ、L.V. 6を複数所持しているフレイヤ、ロキ・ファミリアには質という点で一步劣るためこの要望は妥当な意見ではあるが、今回の作戦ではそんな心配はする必要がない

「いや、隊は分けない、全ての戦力で持って一気に敵の拠点を叩きつぶす、潰した後は最低限の人員を後始末に回して次の拠点潰しに向かう、これを5回繰り返し返して、さらにキナ臭い所も潰す」

「・・・電撃戦か」

「うん、ここで一気に僕たちと闇派閥の天秤の趨勢を一気に傾ける」
「そのための私達、ということか・・・わかった、「群衆の主」としても、ガネーシャ・ファミリアとしても今回の作戦に全力で参加させてもらう」

「協力感謝するよ・・・オツタル、君の所はどうする？」

「・・・ここに俺自身が出向いたこと事態がフレイヤ様の神意だ、『目障りな羽虫を駆除せよ』とお言葉を頂いている」

「それはフレイヤ・ファミリアも全面的に協力してくれるということでいいのかな？」

「・・・ああ、それでかまわん」

(・・・よし！)

これで戦力は十分に揃った、戦力過剰とも言われるかもしれないが、犠牲なしで圧倒するにはこれくらいがちょうどいい、たとえ生き残りがいたとしても復讐心など芽生えぬくらい心も身体も叩き潰す

「じゃあ、さっそく——」

これからの作戦のための命令系統に関する話をしようとしたときだ

「団長、入ってもいいですか!?ちよつと問題が発生してしまいました・・・」

カイトの同期 キャットピーパー 猫 人のアキがノックとほぼ同時に入室を求めてきたので、許可する

入ってきたアキは会議室にいるオツタルやシャクティを気にすることなくまっすぐに僕の元にやってくる、だが、そのときの表情は非常に申し訳なさそうな顔をしているのが気になった

「団長・・・カイトがこの手紙を残して消えました」

「・・・え？」

差し出されたのは二つに折りたたまれた紙

とりあえず内容に目を通してみた

「・・・おっふ」

見なければ良かった・・・おかげで変な声が出てしまった

「・・・フィン？」

「ちよつ、【勇者】^{フレイバー} 顔がえらいことになってるぞ・・・」

「いや、すまないちよつと眼球を潰されてから頭を叩き割られたような衝撃に襲われただけだよ、うん・・・大丈夫だ」

「一般的にそれは大丈夫とは呼ばないと思うけど・・・」

急に眼精疲労に襲われると同時に頭痛がし始めたが、目頭を押さえてから天井を見上げることで何とか耐える

「何があつた？」

オツタルが困惑顔で聞いてきた、彼が表情を崩すとは珍しいこともあるものだ・・・いやそれだけ手紙に目を通した際の僕の表情が不味かつたのだろう

僕は黙って手元にある紙を二人に見えるように広げる、そこには

ちよつとお嬢と散歩に行つて来ます。

PS：晩御飯は外で食べてくるのでいりません

と端的な事が書いてあつた

「・・・なんだこれは」

まあ、カイトのことをよく知らないところの突飛な手紙の内容はわからないのも当然か・・・理解してしまえる自分が恨めしい

「たぶんだけど、カイトがアイズを連れて27階層に向かつたつてことだよ、目的はおそらくアストレア・ファミリアの救援なんだろうけど・・・んー・・・？」

「なんだ？」

「いや、カイトがあそこのファミリアのために指示を無視してまで助けに行くとは考えづらいんだよねえ、確かにそこそこの交流はあつただけだ」

カイトも今回の作戦の重要性はわかっているはずだ、それでも独断で救援に向かったとすると考えられる可能性の中で一番ありそうなのは――

「アキ、ちよつと聞きたいんだけどいいかな？」

「え、はい」

「今回の下層の調査に参加しているファミリアの中にカイトと仲がよい人物とかがいたりするかい？」

「えつと…あ、そういうえばラウルが何か言ってたような…あ！…」

アキに質問すると、どうやら心当たりがあつたようだ

「昨日の夕食のときにラウルが『カイトとよくダンジョン探索で組むことがあるフィルヴィスっていうエルフの女性が今回の調査に参加するからいつもよりカイトとアイズのサポートが大変つすよ』ってぼやいてたような…」

これで確定だ、間違いなくカイトとアイズは下層に向かったのだらう

「アキ、急いでリヴェリアかガレスにこのことを報告、今すぐにカイトとアイズを連れ戻して――」

「待ってくれ」

貴重な戦力を抜けさせるわけにはいかない、そう思いアキに指示をだそうとした所に待ったの声がかかった

「フィン、^{ジョーカー}【切札】と【剣姫】を向かわせてやって欲しい」

待ったを掛けたのはシャクテイだった

ガネーシャ・ファミリアとアストレア・ファミリアは幾度となく共に闇派閥と闘ってきたことは知っているが、理由もなく個人的な感情で貴重な戦力をわざわざ危険な場所に送り込むことは承諾できない

「…二人を向かわせる理由でもあるのかい？」

「二人を向かわせるのは…若干であるが私事も入ってはいる…だが、ここで本当に一切の救援を送らなければ後々難癖を付けてくる者たちがいるかもしれん、今ここで二人を送り込むことで最低限の戦

唐突だが階層主について話をしよう。

階層主とはその名の通り、先へと進もうとするダンジョンの敵を排除する一定階層の主である

その強さはギルドが定めた階層レベルからプラス1をしても足りないとも言われる真正銘の化け物であり、階層適正レベルの冒険者が数十人以上で挑むのは当たり前前、適正レベル以上の冒険者でも単独で相手取るのは危険とされている

ましてや適正レベル以下の者が単独で相手をするなど自殺以外のなんでもないと言言できる

そして、その数少ない階層主の中でも、その能力と唯一の習性、そして特にその周りの環境によって適正レベルが跳ね上がる階層主がいる

その階層主こそが下層27階層の主

「双頭竜」アンフィス・バエナ

その名が指すように2対の首が生えている階層主であり、モンスターの中でも強力な竜種型という凶悪な化け物である

このモンスターの厄介なところは確認されている階層主の中でも唯一の移動型階層主ということだろう

この巨体のままで移動できる所なら下層の陸と海中どこにでも現れる

この階層主を攻略するにはいくつかの条件をクリアしなければ戦闘にすらならず、一方的に蹂躪されることになる

一つ目は闘う場所

アンフィス・バエナとの戦闘は水上で行われる、そのため水上にできるだけ多くの足場があるルームに誘導しなければならない

二つ目 物理的な攻撃

アンフィス・バエナの首の片方は魔法を大幅に減衰させる霧を吐い

てくる、そのため基本的にこの階層主への攻撃は水上の足場からの飛び移りつつの近接攻撃か、遠距離から弓などによる攻撃しか通じない、首を切り落とせば魔法も使えるようになるが、それまでの攻撃手段の確保は必須である

三つ目 消化剤の準備

魔法減衰の霧を吐いてこない方の首からは可燃性の液体と共に灼熱のプレスが放たれる、この液体と炎は水でも消えることはなく、専用の消化剤を使用しなければ鎮火させることはできない、そのためこの炎をまともに喰らってしまった場合は消化剤がなければ死ぬまでその身を炎に焼かれることになってしまう

地に足を付けてできない不慣れた戦闘環境

ダンジョンで切札であるはずの魔法の無効化

巨体から放たれるその身を使用した攻撃と燃え続ける灼熱のプレス

まさしく『凶悪』

今までこの理不尽な状況と化物自身の力によって多くの冒険者がその身を骸に変えてきた

だが

だだだだだ！もしも！もしもである！！

水辺であろうとも地に足を付けることができ、尚且つ、近接攻撃で有りながら遠距離にも匹敵するリーチを持ち、プレスなど吹き飛ばすほどの脅力を持つ様な存在がいたらどうなるだろうか!?

この世には！

ただただ、それだけなのだから

だがこの竜にとっては今はそれこそが何よりも脅威であった

武者の攻撃は首を切り裂いただけでは止まらない、胴体の方にも無視できぬ程の裂傷が次々と刻まれていく

「Goooooaaaaaaa!!!」

ダンジョンに生み出されてから初めて感じる恐怖、アンフィス・バエナは後先を考えぬほどの最大量・最大威力の炎を吐き出す

だが――。

「ぶっ飛ばせ！明王!!」

その手に持つ巨大すぎる刀を内輪の如く振り抜き、豪風によって敵の攻撃を文字通り吹き飛ばし、跳ね返された炎と液体がそのままアンフィス・バエナに襲いかかる!!

「Piggyaaaaaaa!?!?」

あまりの理不尽に階層主の思考は困惑一色に塗りつぶされた

ナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン
ダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン
ダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン
ダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン
ダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン
ダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナンダナン
ダナンダ

――ナンダコイツハ!?

ダンジョンに生み出されるようになってから幾千年、初めて体験する類いの恐怖に、今や片首となってしまった双頭竜は萎縮した

母に仇為す害虫、それはどれも葉クズの如き小さきゴミでしかなかったはずだった
それがどうだ!?

自らよりも巨大な体躯

そうであるにも関わらず速さは我と変わららず

あまつさえ我の炎すら吹き飛ばしてきた

——アツイ

アツイアツイアツイアツイアツイアツイ!!

本来なら自らの炎すら通じないはずの龍鱗が、目の前の理不尽な存在によって剥がされたせいでその身を焦がしてくる

——ユルサヌ

生まれ出でてからは、わけのわからぬもので動きを制限され、解放されたと思えば理不尽に襲われる

「GRAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA
!!」

モンスターレックス
迷宮の孤王とまで呼ばれる竜王は痛みも熱さも感じなくなるほどの憤怒にかられ忌々しい敵に向き直った
——だが

——イナイ!?

辺りを見回すが先程までいた場所にその巨軀が見当たらない。

双頭竜は一瞬でもその巨軀から目を離すべきではなかったのだ、相手は自らの炎に苦しむ隙だらけの姿を見逃すほど決して甘い存在で

はないのだから

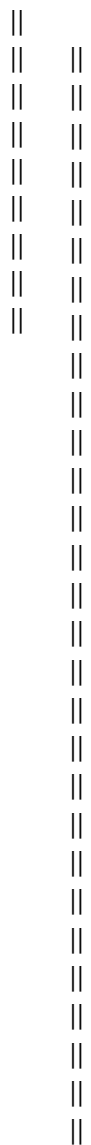
—————カゲ!?

双頭竜がようやく気付いて見上げた空には

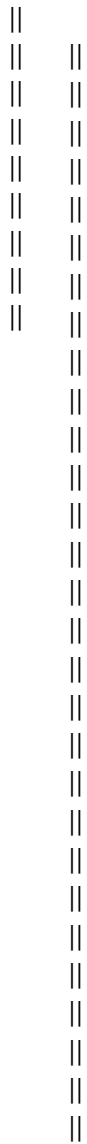
宙に身を躍らせ、太刀を上段で振り上げた鎧武者が全身を使って今

まさに振り下している

その瞬間だった。



31：殺帝×明王



《side：冒険者》

目の前で双頭竜が三頭竜になった

正確に言うならば巨大な鎧武者によって残っていた首が縦から真つ二つに切り裂かれたのだ

・・・誰も

・・・誰も動けない

神話、もしくはそれに準ずる闘いというのがあるのならこれがそう
だ

今、自分たちが見たのはおそらくその一旦

双方が動くだけで嵐のような豪風

攻撃を放てばその影響で湖の水が間欠泉の様に舞い上がり自分たちを叩き付ける豪雨となる

地形、いや階層そのものが崩壊しかねない、文字通り格の違う闘争その圧倒的な光景に敵も味方も動きを止めてしまっていた

何よりも驚くのはその光景を作り出していた片翼はLv. 3の冒険者だと言うのだから驚きを禁じ得ない

戦闘が終わわり先程までの轟音しかなかった喧噪から落ちるような静寂の中、誰かがポツリと呟いた

「・・・あれが『ジョーカー』・・・ハハ・・・化け物じゃねえか」

その言葉に同意するかのように自分を含めた数人の冒険者が畏怖からか喉をならして唾を飲み込む

(あれが最大派閥の片割れ、ロキ・ファミリアに所属する期待の新人……新人? ……あれが?)

どこの世界にLv・3でLv・5相当以上の階層主を単独で撃破する新人冒険者がいるというのか、こんなこと、第一級冒険者であっても出来る奴はそうはいない、いたとしてもできるのは『猛者』くらいだろう

鎧武者が階層主を叩き切った体勢からこちらに向き直る

——その肩に一人の男を乗せて

トレードマークになっている藍色のキャスケット帽

竜尾の様に長い白髪

そしてその目

階層主を倒したばかりだと言うのにその目には一切の油断は無く、遠目からも感じる圧倒的強者のオーラには微塵の隙も感じられない

「ひゅ?」

「こ、こつちを向いたぞ!」

「……Gryuuu」

「Pigiii……」

その姿に気圧されたのか闇派閥だけでなくモンスターまでもが気圧されている

(味方……なんだよな?)

現れた時にジョーカーは『助けに来た』と言っていたがその後のあまりの暴れっぷりに味方とわかつているこつちまでブルってしまう

——二つ名に偽り無し

ランクアップの記録を塗り替えた世界記録保持者、そしてそれを祝福するかのようにつけられた彼の二つ名

当時、熟練の冒険者達はその新人の冒険者につけられた二つ名を大げさすぎると鼻で笑っていた

だが

ここにいる者達はそれがこれ以上ないほど彼に相應しい名であると目の前で見せられ、魅せられた。

あれぞまさにロキ・ファミリアの秘蔵っ子

戦況を引つ繰り返すワイルドカード！

まさしく『切札』!!

神々はその身に相應しすぎる名を知ってか知らずか与えたようだが、その場にいたほぼ全ての冒険者がこの一人の冒険者同じ思いを抱き、彼に対して尊敬と畏怖、そしてほんの少しの嫉妬を感じていた。

《side out・冒険者》

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

|| || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || || ||

——階層主をぶった切った直後

(あぶあああぶ!?ビビッたああああゝゝゝゝゝゝ!?)

実は心中ではビビりまくり、心臓バクバクな状態だった

目の前の脅威を一旦退けたことでようやく周りを見る余裕と自らが行ったハチャメチャさに

『やつちまつたぜ キリッ』

というような心境が戻ってきた。

なにせ下層までの強行軍を敢行して、何とか間に合ったか、ふーやれやれ、と思つた途端にまさかの階層主登場

無我夢中になって数十メドルもあるにも関わらずアーイキャンフラアアゝイとヒモ無しバンジー

というか端から見たらただの飛び降り自殺だぞこれ
下が水だから大丈夫?

ノンノン、一定の速度で水に飛び込んだ場合水はコンクリートと同じ硬度になると、昔、大地っぽい名前の自衛隊員が言っていた

よしんば助かったとしても水の中には肉食の水棲型モンスターがわんさかで助かる確率は限りなくゼロ

そりや焦るつての

おかげでいきなり奥の手まで発動してしまった

ただあそこで無茶をしなければかなりの人的被害が出ていたのは間違いないのでギリギリ及第点だろうと自らを納得させる

それに奥の手といってもこの某死神バトルオサレ漫画の『No1

0』の能力

『黒縄天譴明王』
こくじょうてんげんみょうおう

これにはさらに奥の手があるのでただの正解までなら見せても問題はないだろうと自分を納得させる

(うむ、大丈夫大丈夫！セーフだセーフ!!)

ちなみに、このような自分にとって不都合な事実などを、一見すると少し論理的であるようにも見えるが実際は不合理な説明によって覆い隠そうとする心の働きを合理化と言う・・・

閑話休題

・・・先ほどから姿の見えないお嬢に関してだが、実は途中で分断された

別にダンジョンの罠とかではなく、あの一年前に襲ってきたイシユタル・ファミリアのガマ蛙女ことフリユネ・ジャミールとダンジョンの中でバツタリ遭遇、そこから無茶苦茶理由のイチャモンをつけられて襲われたのだが

「ここは私に任せて先に行つて！」

時間がない事もあってお嬢がガマ蛙とバトルことになった

でもお嬢、そのセリフは死亡フラグだからやめれ

「私もすぐに追いつく！」

さらにフラグを建てていく!?

いや、最近はフラグを建てまくれば逆に安全とか言われてたし大丈夫だろう・・・大丈夫かなあ・・・

なんてことを考えている間にもカエル女がこちらにも攻撃を仕掛けてくる

「ゲゲゲゲゲ！行かせるわけねえだろうがああああ!!」

『目覚めよ』!!」

「くそがあ!?!」

相変わらずお嬢の風の付与魔法は俺から見てもかなりチートな威力と燃費の良さだ

情報通りならこのフリユネは既にL.v. 4にランクアップしたはずだというのにそれと互角にやり合えている

(これならばマジで大丈夫そうだな)

「カイト！早く!!」

「・・・うっし！じゃあ任せたぞお嬢！キツくなったら全力で引けよ!!」
「ん!!」

お嬢がフリユネを吹き飛ばした合間に駆け抜ける

「待ちやがれえええええクソがああああ—————!!」
(待てと言われて待つ馬鹿がいるかアホウ)

そういつて武器同士の激突する戦闘音を背にして『念』も全開のフルブーストで戦線を離脱した。

—————
なんてことがあったのが半日前

そこから中層の街で軽く補給と最低限の休息を取ってここまで駆けつけたわけだが、間に合いはしたがぶっちゃけコンディションは全快時の七割ってところだ、この状態で階層主相手にほぼ無傷で勝利はかなり運が良い

「・・・さーて、と・・・そいじゃいっちょよ運が良い勢いに乗ってこのまま派手に雑魚掃除と行きますかねえ?」

—————
などと調子に乗ったのがいけなかったのだ

ろうか

「つつづあ!？」

俺の腕から突然血が噴き出した

俺が直接攻撃を受けたのではない、攻撃を受けたのは『黒繩天譴明王』だ

この能力、というか刀は大きく分けて二段階の変化がある

まずは始解と呼ばれる第一段階『天譴』

こいつは俺と動きがリンクする巨大な腕と刀を一時的に出現させるという単純明快な能力だ

そして第二段階の卍解『黒繩天譴明王』

これは始解で出現する部分を全身状態にしたものだ、始解時に比べその力は数倍というところでも能力なのだが、結びつきが強力になりすぎて顕現した明王が傷つくとそれとリンクしている自分もダメージを負ってしまうというデメリットも存在する

そしてその明王に傷を付けたのは――

「ひひひ」

その口に怒りと狂気を孕ませつつ歪な笑みを浮かべるのは闇派閥筆頭

「ひはははははは!!なんだあ!?!こいつはあ!?!ただの木偶の坊じゃねえか!?!さっきの階層主との戦闘はマグレか何かだったか!?!」

【殺帝】ヴァレッタ・グレーデ

人でありながら直接的な戦闘力なら先のアンフィス・バエナと同等とされるLv. 5

それが次々と明王の身に傷を付けていく

「つつうう!?!あいつまさかヴァレッタかよ!?!」

明王の弱点は簡単である、その巨大さに任せた力を活かすことができないう自らよりも遙かに小さい相手だ

それが単騎であれば人がハエ相手に包丁を振り回すようなものだ
加えてその相手がLv. 5となればハエではなく猛毒を所持して
いる蜂といったところだろう

しかもその蜂は頭が回り常にこちらの動きを読んで回避と攻撃を
仕掛けてくるときたら、もはや一方的なりんちだ

(よりもよってこいつか!明王と相性悪すぎるっ!?)

まさか、襲撃にこいつが参加していたとは予想していた中でも最悪
のパターンだ

ただし、このままならという条件でならだが

「ぬうつ・・・づうう!?!」

「ひやははははははオラオラオラアアアどうしたアタシはこつちだ
ギャハハハハ!!」

身体中に決して浅くはない傷が次々と生まれていくが何とか根性
で耐える

(タイミングが大事だ・・・耐えろ俺!)

「おらあああああア!」

横腹から鮮血が舞う

(ぐっ!?!・・・まだだ!)

太股の後ろに突き刺すような痛みが突き抜ける

「っづうう!?!」

(まだ、だめだ!)

そして背中からも血が飛び散る

(もう少し!!)

何とか耐えて身体中が血に染まるのではと思ったとき

攻撃の癖とタイミングをようやく掴んだことで好機が訪れた

(っ今だ!!)

「始解・『天譴』！」

肩口に下から上に走る傷が生まれた瞬間を狙って卍解状態を解除する、

そうするとどうなるのか？

「っなんだと!？」

答えは簡単だ、今まで明王を足場にしつつ斬りかかっていた所でその足場の消失、

しかも最も高い場所での足場の消失のため滞空時間は他の部位にいた時よりも長い

その結果、比較的長い時間、空中にヴァレッタだけが取り残されることになった

そしてギルドやフィンから聞いた情報が確かならヴァレッタには空中で素早く動けるようなスキルや魔法は持っていない

つまり

「断ち切れええええええ『天譴』—————!!」

「てめゲア!？」

無防備な背中からチョッキンということだ。

《side:リユール・リオン》

それを見て

故郷にある森でよく見かけた光景を思い出した

二股に分かれた見た目が特徴の珍しい気に生える葉っぱだ

根元に近い部分が二股に分かれているせいで木から散る際にクル

クルと回転しながらゆっくり落ちる

そういった光景が特徴の見る者を飽きさせない木だ

散った葉は風が吹けば回りながらかなりの距離まで飛んでいくおもしろい木だった

ただし

今自分が見た光景はそんな幼少の頃の可愛げのあるものでは決してない。

人の上半身が先ほど語った木の葉のようにクルクルと回って遠くまで吹き飛ばされる陰惨なものだ。

(・・・あつけない)

「長年、と言ってもいい怨敵であつても死ぬときはあつさり逝くもんじゃなあ」

全員が息を止めるような光景の中、輝夜のあつけらかなとした声が響く

「リユー、ボケツとするな、今だ戦闘中であるぞ」

「む・・・わかっていきます」

その声に周りの閨派閥達に対して改めて警戒するがあまり意味がない

「ヴァレッタ様が死んだ!?!」

「馬鹿な!?!」

「すぐに指示を仰ぎに・・・」

「馬鹿者このまま奴らを皆殺しにするのが先だ!!」

「待て!?!うかつに動くな!!」

なにせ既に向こうの最大戦力であつたであろう、階層主とヴァレッタが消えたのだ

この戦いの趨勢はこちらに大きく傾いたのは誰の目にも明らか、そ

の証拠に闇派閥の下級団員は見るからにうろたえ始めていた

「っ!?待てお前ら!なんかくるぞ!」

そんな混乱の最中、私の隣に『彼』がどこから跳躍してきたのか音もなく着地した

「よつと、・・・おまたせ」

「あ、ジョーカー、おひさ〜!」

「おひさ〜」

「「ぎゃあああああああああ!?!」」

闇派閥の団員が一斉に後ずさる中、アリーゼとジョーカーがのほほんとした会話を繰り返していく

「アリーゼ、死者と怪我人はどんくらい出た?」

「あなたのおかげで幸い死者はゼロ、ただし怪我人は多数つてとこねー」

「仏さんが出てないなら僥倖だろ・・・ちなみにフィルヴィスは?」

「あら?あらあら?やっぱそういうこと?え、そういうこと〜?」

口を手を当ててウフフフフとでも言うかのようにジョーカーに詰め寄るアリーゼ

(ああ・・・アリーゼの悪い癖がこんなときに・・・)

人の恋路に口を出すのが大好きなアリーゼが極上のネタに食いつく

(というか、先ほどまでの緊張感はどこへ行ったのか・・・)

ついさつきまで自分たちは死闘を繰り返していたはずなのに今のこののほほんとした空気は何なのだろうか

「何を勘違いしているのか知らんがあんたの考えているようなことはない」と断言しておくぞ、普通に大事な仲間が心配で助けにきたってだけだ」

「え〜〜?ほんとに〜〜?」

「ほんとに〜〜」

(なんででしょうかこれ、なんでジョーカーはこんなにもアリーゼと打ち解けているのでしょうか・・・)

そんなキヤツキヤツウフフな空気が辺りに蔓延しそうになったとき――

『同士達よ!!撤退せよ!!その後予定通りに例の物を起動させるのだ!!』

声が響く

ヴァンデッタ

「ちっ、白髪鬼か!!」

「え、なに?あいつまでいんの?こりやマジで上の方はハチャメチャになってんな・・・」

(・・・上の方?)

「どういうことじゃ?」

闇派閥の構成員が撤退する中、残った大量のモンスターを掃討しながら会話は続く

「あー・・・今回の襲撃にかなりの規模の人数が割かれるって気づいたうちの団長がさ、フレイヤとガネーシャ、その他複数のファミリア共同で大規模な電撃掃討戦を展開中だな、たぶん今回の騒動で闇派閥の連中かなり痛手を被るぞ」

日常的な会話のように話しているがそれと同時に聞こえてくるのはモンスターによる断末魔の重奏

ジョーカーのスキルなのか魔法なのかはわからないが、先ほどの巨人の腕と剣が現れ瞬く間に大量のモンスターが両断されていく

「ふん・・・儂らは囷といったところか、気にくわんのう!」

輝夜を囷おうとしたモンスターが飛びかかってくるが居合いによって細切れになる

「まあまあそう言わない、一応こうやってジョーカーが救援に来てくれたんだから」

アリーゼの剣がそこからさらに襲いかかってきた敵を切りつけ

「ふっ!!」

入れ替わるように私が隙間なく攻撃の手を加える

「そう言ってくれるとこっちとしても精神的に助かる」

そう言ったときのジョーカーの顔は非常に複雑な表情だった

そうやって残ったモンスターを掃討しきるにはジョーカーという戦力を持つてしても数分を要した

「ようやく終わったかー」

「なに、お主のおかげでこれでもずいぶん早く終わった方じゃ」

（確かに・・・彼がいなければ危なかったかもしれない）

「あちやく、今から追ってもさすがに追いつけないかー・・・って!」

既にかなり遠くまで退却している闇派閥の者たちを追撃できずに傍観していると突如の爆音が連続で辺りに鳴り響いた

（入り口が!?!・・・いや、それだけじゃない、これはかなりの広範囲で爆発が起きている）

「うっわくやるのがみみつちなあ・・・あいつら作戦失敗したからって最後の嫌がらせに入り口や通路を爆破していきやがった」

「あのまま追いかけてたら巻き込まれてたわね」

「モンスターに足止めされたおかげで逆に助かるとは、いやはや素直に喜べんのう」

「それにしてもこの爆発どんだけの火炎石仕込んでたんだよ、まだ連爆してん・・・ぞ?」

ジョーカーがそう言った後すぐにようやく爆発音が病んだ

「ようやく火炎石が尽きたみたい——」

ね、とアリーシャが言おうとした瞬間

ダンジョンが哭いた。

32：最後×正義

ようやく一息つけるかと思つた矢先の異常

イレギュラー異常事態の前に起きる地震ではない

黒板に爪を突き立てたかのような不快な高周波は下層全体を巻き込んで発せられていた。

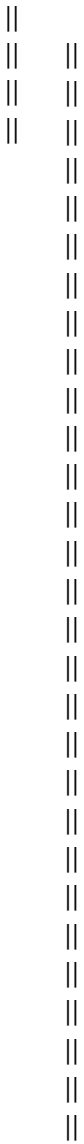
その場の全ての生きとし生けるものがその音から感じるのは『悲鳴』『慟哭』そして最も強い感情

『憤怒』

どうしようもない自然から一定の個人に対してにのみ向けられる殺意は全ての生き物を恐怖で動けなくしてしまう。

これから起こるのはただの狩猟 殺戮 虐殺 蹂躞
対して希望は一つのみ

これにハッピーエンドなどあり得ない。



それは下層でも中層に近い、しかし、誰もいない広大なルームの壁から染み出るように産まれた

産声はない

その代わりに発するのは全てに対する殺意のみ

身体を動かす

まるで油を差していなかった鉄細工の引き絞る様な音が鳴り響く
それはまるで睡眠から目覚めたばかりの獣がする伸びにも見える

光景だった

「.....」

後に静寂になったかと思われた瞬間

「■ ■ ■ ■ ■!!!!」

砲口

爆発

強大な水柱を上げてその場から姿を消す。

向かうは上ではなく下

踏み荒らすかのような進軍が開始した

「やめろくるなぶえあ?!」

その最初の獲物になったのは闇派閥の構成員、それもただの構成員ではない

地上でフィン達の作戦によって自らの主神が天界に送還されたためにステイタスが一般人と変わらなくなってしまった哀れな者達だ、彼らは逃げる同胞の中でもその脆弱さから脱出の際に取り残され、それから逃げることを優先した『白髪鬼』^{ヴァンデッタ}によって脱出口を閉じられたせいで真っ先に殺されていった

「助けてく開けあアピユ!？」

「くそgゲア!？」

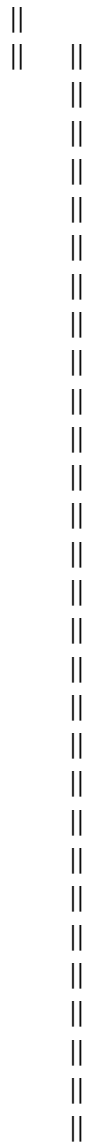
「おわりだおわrpい!？」

「ああアアアアハハハハハハハハハハハハプひ!？」

助けを求める者、抵抗する者、諦める者、狂う者
碎かれる者、裂かれる者、食われる者、弄ばれる者
皆一様に最終的に同じ結末を迎えていく

そして絶望はついに下層の最下層

『巨蒼の滝』^{グレート・フォール}の壺の底へ



それに気付けたのは偶然ではない

ダンジョンの異常鳴動

そして先ほどから『巨蒼の滝』^{グレート・フォール}の底であるこの滝壺の水が流れてく

る血肉

それにより真つ赤に染まる巨大湖

全員が感じさせられた

まるでキツイ香水の原液を頭から被せられたかのような感覚だ

香りは当然『死臭』というあの激臭だ

ただそこにいるだけで不意に身体がブルリと震える

——今にも迫り来る死の香り

「アリーゼ、こいつは……」

「ええ……かなりヤバイ、すぐにここから脱出するわよ」

アリーゼ達と短い協議の末、早急に下層から脱出することを決めても誰からも反対意見が出なかつたのは不幸中の幸いだつたのだろうか

「アストレア・ファミリアは前衛と中衛を頼む、俺はフィルヴィス達と殿を勤める」

「大丈夫なの？」

「ああ、幸い俺は索敵系のスキルがあるんでな半径150から200メドルくらいからの奇襲なら知覚できる、一緒に殿を勤めるなら俺の動きを知ってるフィルヴィスがいた方が他の奴らも守りやすい」

それを聞いて驚く者もいれば呆れる者もいる

「先ほどの攻撃手段に加えてそんなことまでできるのか……お主が『切札』と呼ばれるわけだ」

「それでもさすがに一人じゃキツイでしょ、……リオン、カイトと一緒に殿をお願い、輝夜は殿寄りの中衛で二人をサポートしてあげて」

「……了解しました、『切札』よろしくお願いします。」

『疾風』がペコリと頭を下げてきたので、こちらも軽く挨拶する

「おう、こっこそよろしく頼む」

(そーういや『疾風』の声、初めて聞いた気がすんな．．．つーか本名はリオンって名前なのか．．．知らなかった)

「くくく、『切札』^{ジョーカー}そやつは無愛想だがよろしくしてやってくれ」

「うるさいですよ、輝夜」

ギロリとリオンが輝夜を睨むと、おあこわ!と言って輝夜は中衛パーティに混じっていった

「．．．カイト」

輝夜とすれ違うように近くに待機していたフィルヴィスがこちらに向かってくる

「フィルヴィス、話は聞いていたな？」

「ああ、私たちとお前、そして『疾風』とで殿を勤める」

「そういうことだ．．．すまん、勝手に損な役回りを回しちゃって」
「かまわんさ、どうせ誰かがやらねばならないことだ、それなら最も索敵能力の高いお前、そしてそれを熟知している私がサポートに回るのは最も無駄のない編成だ」

「助かる」

「それと．．．」

「ん？」

「．．．た、助けに来てくれて．．．あ、ありがとう」

「!!!!」

そんな素直すぎる言葉を聞いたデュオニユソス・ファミリアの面々が固まる

(おいおいおいうちの団長顔が真つ赤だぞおい)(うわ団長かわいい)

(え?まじで?あれ団長?)(うわあ団長やべええええ)(どsふいあそ

いdjf;あs;!)(団長、頑張りましたね ホロリ)

「フィルヴィス」

「な、何だ．．．ん!」

ポフンとかるく頭に手を乗せる

「お前さんと俺は所属するファミリは違えども大事な仲間^ダで親友^チだと思ってる、助けに行く理由は無数にあっても助けに行かない理由なんてありやしねーよ」

「アハハ！」

気にすんな、とでも言うかのように軽く笑っただけなのだが

何かがフィルヴィスにクリーンヒットしたらしく

ボボボンとフィルヴィスの顔からなんか出た

「ちよ、フィルヴィス!?大丈夫か!?まさかさっきの戦闘でどつか怪我を——」

「ひやわあ!?大丈夫!大丈夫だからあ!」

そんな光景を見ながらアリーゼが呆れる

「うっわ、大変ねえフィルヴィスちゃんも」

「・・・何のことですかアリーゼ? 美しい友情ではないですか」

「リオンあなたもカイトと同じ側か・・・」

「?・・・それよりも急ぎましょう」

「そーね、空気もいいかんじになったし・・・急ぎましょうか」

そんな危機的状況で短いながらも少し和やかな会話が交わされた

彼ら彼女達はこのときの会話は忘れるだろう

彼らはこの後のことは永遠に忘れられないだろう

彼女はこのときのことを忘れたいだろう

——下層の調査団は『最期の日常』を楽しんでいたの
だから

・
・
・
・
・
・

そこからはとんとん拍子で事が進んだ
メインに爆破された通路とは逆の通路なら生きているかもしれない
と考え移動を開始
運の良いことにその考えがドンピシャ当たり、かなり遠回りではあ
るが上に行く道を見つけることができた

なんとか通れる通路を見つけて脱出している最中

「カイト、これを飲んでおけ」

「お、サンキュー」

フィルヴィスから手渡された試験官には精神回復役が入っていた
手持ちのポーションは先ほどの階層主とヴァレッタとの戦闘で全
て使い切ってしまったのでかなり助かる

「精神力マインドの消費はどんな感じだ？」

「常時張ってるからな、ちときつい感じだな」

「?・・・なんの話ですか」

気心の知れたフィルヴィスとの会話の内容がわからないのか

『疾風』ことリオンが質問をしてきた

「俺の索敵スキルは精神力マインドを結構な量消費するからな、いつもは距離
や時間を基準に一定間隔で使ってるんだよ」

「なるほど、つまり今はそのスキルを」

「ああ、範囲を全開にして常時使用して——っフィルヴィス！」

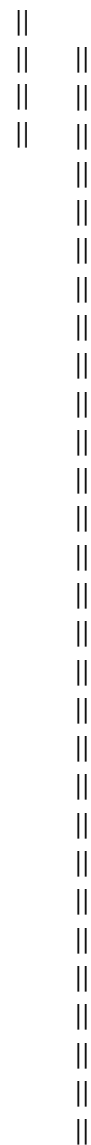
「ぐ!?!」

「な!?!」

近くまで来ていたフィルヴィスとリオンをまとめて突き飛ばす

何かガバイという雰囲気は異常な高周波を聞いてから感じては
いた、だからこそ普段はやらないオーラの消費を無視した全開の『円』
で警戒していた

《 side out : 『疾風』リオン 》



333：絶望×切札 前編

クルクルと切断面から血をまき散らしながら宙を舞う腕が一本

まあ、俺の何だが

「つつづうううう!？」

(知覚してからあれだけあった距離を一瞬で詰められるとかどんな速度だ!?)

それを『円』で知覚した瞬間、尋常ではない気配とその速度に一気に身体の中のスイッチが強制的に切り替わった、そのおかげで咄嗟にフィルヴィスとリオンを突き飛ばす・・・というか吹っ飛ばしたが正解だった、そうしなければ今頃二人はこいつに三分割にされていただろう

その代償に俺の肘から先を持っていかれたが。

(腕一本で二人の女の命、お釣りがくらあな・・・とりあえず切り落とされた方の腕は『念』のオーラで止血——)

正直、未知の痛みに先程は叫んでしまったが頭の芯の方は自分でもドン引きする程キンキンに冷えていた

「うわあああああぶ g y s!？」

「た、たすk」

「ぎゃ!？」

「ぐえあああえ!？」

俺の腕が宙に舞っている数秒の間だけでも後続組の冒険者が次々と八つ裂きにされ阿鼻叫喚の地獄絵図が広がっていく

皮肉にもこの何かは俺の腕をぶった切ったことで、いつでも殺せると判断したのかとどめを刺すことなく他の冒険者を殺すことを優先したようだ

おかげで助かりはしたものの、決して気分の良い話ではない

(くっそー相手の速度は自分以上、近接は不利、だったら距離を取りつつ中距離か遠距離攻撃!)

た

(うおおお!!)

俺の身体がその勢いでルームの壁に向かって吹っ飛ばされる
足で地面を削り取るようにして無理矢理ブレーキを掛けることで
何とか静止しようとするがそれに気付く

(・・・ウソだろおい!?)

止まりきる前にオーラを瞬時に集められるだけ脚に集中

(・・・ぐうう!!)

慣性を見殺した動きをしようとするせいで身体が悲鳴を上げるが
全てを見殺す

足裏を爆発させるようにして体勢も着地も何も考えず、とにかくな
りふり構わず全力で前へと突っ込んだ

「ぐあっ!?!」

前に跳んだ瞬間、背中の薄皮一枚が裂けた

なりふりかまわない回避のせいで前に向かって前転するような体
勢になってしまったが、その体勢のせいで自分の居た場所が視界に入
る

(あ、あっぶねえ!?)

一瞬前までいた場所に鋭利な爪が振り下ろされていた

「!!」

天地を逆にした俺とその目の目が会う、何となくだが殺戮を邪魔され
たことに苛立っているような気がした。

(速い!?!・・・でもー)

その化け物は振り下ろした体勢のまま、すぐさまこちらを追撃してきたが、それはこちらにとって絶好のチャンスであった

『天譴』!!』

こちらに飛び掛る化け物に対して股下から頭頂まで一刀両断するかのように下から上に向かって刀を振り上げる

俺の手にある刀と同調するようにして顕現した巨大刀が化け物の死角から斬りかかる

(今度こそもらった!)

回避不能の空中、しかも下からの奇襲に近い攻撃に必中を確認した
だが

「なっ!?!」

あろうことか、そいつは下から迫る刀を尻尾で打ち付け、こちらの斬線を乱してできた刀の側面を足場に回避

その場から少し離れた場所に何でもないかのように着地し改めてこちらと対峙した。

「……はは、冗談でもキツイぞ、おい」

確信した攻撃をこうもあっさり回避されたことに対して、もはや驚きを通り越して笑いしか起きない

(正直、こいつ相手に次はないかも……)

速さは圧倒的に向こうが上、パワーの方も速さよりましとはいえそれでもかなり上だとわかる

今と同じような対処をこいつ相手にもう一度やれと言われると無理ではないだろうかかなり分の悪い賭けになるだろう

パキ

パキン

(!?)

そんな中で唯一の成果は相手の爪と尻尾の表面がほんの僅かに欠けたことだろう、どうやら耐久の方はそこまでないらしい、何度も当てれば押し切れる、

しかし

たった十秒にも満たない攻防で見せ付けられた相手との単純なステータスの差に対してこちらが見出した希望のなんと儂いことか

(・・・嫌な予感の正体は間違いなくこいつだ・・・何なんだこいつは?)

見た目はまるで餓死寸前の骨と皮だけの翼を失った翼竜

高さはざっと見で3メートル、全長は尻尾まで含めて10メートル、紛れもなく大型級と呼ばれるタイプ

だというのにこいつはあろうことか、こちらがギリギリ知覚できる様な速度で攻撃をしてくる

想像してみてもほしい、大型トラックが狭い室内で跳ね回るスーパーボールの様な動きで襲いかかってくるという悪夢の様な光景を

(まいったな・・・ちよつと勝てない)

ましたや今の俺の状態は片腕

万全の状態でも絶望的な戦力差だと言うのにこんなのと対峙できている今の状況が奇跡に思える

幸運なことに先程の攻防で多少はこちらを脅威と認めたのか睨み合いが続いてくれていた

そこに声が響く

二人が空中で横から突撃、化け物が壁際まで吹っ飛ばされた

「カイト、無事!？」

「じゃないだろどー見ても、団長の目は節穴か？」

「団長!」「やべーなこれ・・・」「うひやあなにこれ!？」

アリーゼと輝夜以外のアストレア・ファミリアの団員も続々と集結してきてくれた

その中にはフィルヴィスとリオンも居た

「カイト、腕を出せ、気休めかもしれないが傷口を縛る・・・それとお前の腕は一応こちらで回収しておいた。」

ギリギリ間に合った救援への安堵と死を免れた現実に一気に疲労感が襲ってきた

「つ・・・はあはあ・・・すまん頼む・・・それと二人とも助かった、マジで死ぬところだったわ」

「助かるかどうかはまだわからないけどね・・・」

「そういうことだ・・・『ジョーカー切札』まだ闘えるか?というか、だ・・・あれはお前がおらねば私たちでも対処できんぞ」

「まかせろ、こちとらまだまだピンピンしてらあ・・・それにどのみち闘えなきや、ここにいる全員——」

「■■■■——!!!!」

化け物

後に『災厄』と呼ばれることになる『ジャガーノート』が大咆吼を上げる

「あれに殺されるだけだ。」

絶望との第二ラウンドが始まる。

誰かがそのときのその思いを、判断を、間違いだつたと言うだろう
だが当事人からすればそれは間違いだつたと言われたくはない、そ
の時はそれしか希望がなかったのだ
まさか希望に向かうカウントダウンが真逆の絶望へと向かってい
るなどと一体誰が想像できるのか

忘れてはいけない

ここはダンジョン

冒険者を気まぐれと悪意のみで食い殺す

怪物どもの坩堝なのだから言うことを。

||
||
||
||
||
||
||
||
||
||

《 side:『疾風』リオン 》

(急に何を!?)

私と同胞であるフィルヴィス吹き飛ばすという『切札』^{ジョーカー}による突然
の奇行

「けっほっけほ……っ」

「無事ですか?」

「ああ、すまない、それよりも一体なに……を……!?!」

「これは……」

その意味を理解したのは、見た事もないモンスターによって後続組
みがほぼ殺された後

(私たちは彼に助けられたということか……)

そう言って隣の彼女に目を目向けると、彼の隻腕の状態にかなり狼
狽していた。

(腕を犠牲にしてまで……いや、私は彼女のついでか)

「できれば私たちがあれの相手をしている間にフィルヴィスちゃんはこのにいるLv. 2以下をまとめあげて逃げてくれるとありがたいわ!」

「了解したアリーゼ・・・先に18階層で待っているぞ」

そう言つてフィルヴィスが生き残つた者達の方へ向かつていく

(奴は・・・動かないか・・・)

私たちの集団から抜けていくフィルヴィスを化け物が狙うことも考え構えていたが、どうやらこの化け物は完全に私たちに照準を合わせているらしい、先程からこちらを凝視して動かない

「ちなみに一応聞いておくけど魔剣のストックとかまだあったりする?」

フィルヴィスの介抱が終わつた『ジョーカー切札』が化け物が沈黙している隙に輝夜とアリーゼに聞いてくる、目線だけは微塵も奴から逸らさずにはあるが

「あるわけないだろそんなもん、先の戦いでとつくに使い果たしてるにきまつてるだろうが!」

「はは・・・ですよねー・・・」

おそらく最初から予想はしていたのだろう力のない抜けた笑いをあげる

輝夜の言うとおりに先程の戦いは今回の全戦力を投じても生き残れるかどうかの戦いだつたため、出し惜しみをしている余裕などなかった、魔剣どころか弓矢すらほとんど残っていない

「カイトってあれね!片腕なくなつてるのに軽いわね!!おかげで緊張感なくなつちやいそう!!」

(それは確かに・・・いや、そんなことよりも・・・)

「・・・『ジョーカー切札』、魔剣はありませんが私の魔法があります、『ナイン・ヘル九魔姫』程の範囲はありませんが一点突破の威力は引けを取らぬ自信があります。」

「おお!そいつは結構、なら作戦は——」

「私たちはリオンが魔法を放つまで時間を稼ぐ!単純ね!!」

「お、俺の台詞う……」

アリーゼが『切札』^{ジョーカー}の台詞を奪う……そのせいなのか『切札』^{ジョーカー}が少ししよげている

「魔力を込めるために今回は威力を一点突破に絞ります、援護をお願いしますね」

「ま、そういうことだな」「まあよくある作戦だ」「だねー」「じゃあ、いつも通りちやっちゃと済ませましょう」「やるぜーあたしやかなりやるぜー!」

皆が私を援護するという内容に意気を吐く

(相も変わらず頼もしいですね)

そんな中で一人肩身の狭そうな者が一人

「……なんか女所帯に男一人で疎外感を感じるんだが」

なんか隣に並び立つ輝夜に愚痴を垂れていた

「くつくつく、まあ気にするな……それよりも『切札』^{ジョーカー}」

輝夜の身に纏う雰囲気が一変し周りの者達もそれを皮切り一気に意識を警戒からさらに深く意識を落としていく

「貴様のその攻撃が奴と渡り合うための突破口だ、こちらも先程の動きを見るにあれの相手に余裕はない、怪我を気遣ってもらえると思うなよ……行くぞ」

「へいへい、精々気張らせてもらおうとしましょうかねえ——

——『堅』!!」

「!?!」

『切札』^{ジョーカー}の身に纏う気配が一気に数十倍にまで膨れあがった

(っ?!……この殺気、彼は本当にL.V. 3なのでしょうか?)

私だけではなく他の団員も彼の発する気に見張っている、

その中で最も知覚で彼の殺気を感じ取っている輝夜とアリーゼだけは笑っていた

「ふん、中々の気合いだ、やれ!!」

「開幕はど派手にいくわよ!!」

「任せろ!」

『天譴』!!』

そして戦闘が『切札』の声で再開された

.....

そこからは順調だった

「させるかあ!!」

「切札」が顕現する巨大な太刀でモンスターの進路や攻撃を妨害し

「はあ!!」

「りやあああ!!」

そこにさらにアリーゼ達による間髪入れぬ攻撃が相手に何もさせない

「いいいいいい!? あつぶない!?」

「ライラ!?」

『天譴』!!』

たとえ反撃されてもすぐさま『切札』の攻撃が妨害だけでなく盾となり相手の思惑を外していく

「つた、助かったぜ! 『切札』あたしの婿候補にならねえか!」

今日、一番の魔力の圧を感じた

「切札ジョーカー」、アリーゼ！撃てます!!」

リオンの詠唱が終わり、いつでも打てる準備が整った後は外れないようにこつちが相手を誘導する必要がある

「総員、伏せろおおお——!!」

今あるオーラのほとんどを注ぎ込んで最速最大の太刀を顕現させそれを横風に振り払う

「■ ■ —!?!」

「ちよ!?!」「あつぶな!?!」

「ぬいおお!?!」「ひいひい!?!」

「いいいい!?!」

リオンを除いたアストレアファミリア全員がその言葉に咄嗟に伏せる

だが言葉のわからぬイレギュラーは回避が遅れ、ギリギリで空中に跳ぶことで難を逃れる、咄嗟の事だったためか身体は空中に留まることになる

(どんな強者であっても空中は必ず隙が生まれる瞬間———今だリオン!!)

「[ルミノス・ウィンド]!!」

大小、30は超える数の光団が相手を逃さぬように四方八方から魔物に襲いかかる

その一つ一つにかなりの魔力が込められているのが感じられる

(これで、終わ———!?!)

その瞬間に俺は見た

(嗤った?)

誰が

この魔物に決まっている

表情など作り様のない顔の構造で口角から無数の牙を覗かせて
まるで嘲り嗤うかのように

獲物が罠に嵌まったことをほくそ笑む猟師の様に

何がヤバいのかはわからなかった

何をすれば良いのかもわからなかった

だが俺の中にあるちっぽけな生存本能なのか

気づけば俺は

『黒縄天譴明王』!!」

明王を召喚していた

(何かわからないがやべえ!?)

その直感を証明するかのよう^{マジックリフレクション}に魔物に当たったはずの光弾がこちらに向かつて跳ね返ってきた

(魔法反射だ!?)

先ほど言ったようにリオンの魔法の光弾はその込められた魔力から一発一発が必殺の威力を秘めている

その半数がこちらに向かつて跳ね返ってきていた

「うおおおおおおおおあああああああああ!?!」

刀で弾けた光弾が壁を抉り周囲の景観を変えていく

だが、弾ききれなかった光弾はそのまま俺達を襲ってくる

「ぐうううううううそおおがああああああ!?!」

『切札』!?!」

『黒縄天譴明王』は俺とリンクしているためか俺と同様に左腕が肘

から先がない

(せめて反撃のために右は残さねえとっ……!!)

明王は巨大だ、その体表面積で盾となるだけでここにいる全員を庇う事が可能だが、んなことをすればさすがに死ぬ、俺は自殺するつもりもない

故に、もはや肘から先のない左腕を切り捨てるつもりで文字通り肉盾として使用することで光弾を防ぐ

(いっっ痛うううあだだだだだだ!?)

致命傷になりそうな光弾は残っている肘から上の部分を肉盾として防いでいくが、これがまためっちゃ痛い

とにかく無我夢中で光弾を捌いていく

激しい破壊音が止み、土煙が晴れる

すると向こうにはぼぼ無傷のモンスター姿があった

「くっそ……やっぱ無傷……ん?」

最初に俺の攻撃で亀裂を入れた爪と尻尾の部分のみが抉れていた
どうやら魔法を反射するのは表面の装甲のおかげのようだ

(つまり、あの表面の装甲を引きはが……しさえすれ……ば……あり?)

思考にもやががかかり目がかすむ

足下を見ればおびただしい量の血が広がっていた

(あ……やば……これ全部俺の血か?)

「さすがに……血を流しすぎ……た……」

(やば……意識が……だめだ……今は——……)

俺は倒れた。

・
・
・
・
・

「炎華!!」
アルヴェリア

身体に直接響き渡る爆発音で意識が戻った

「空を渡り」

「……ん……俺……は?」

目が覚めて先ほどまでの状況が一気にフラッシュバックする

「!?!?」

(気絶してたのか!?!この事態に!?!いや、それよりもあいつらは——
!?)

俺のスキルの力でようやく拮抗状態だったのだ、俺が抜けてしまえばどうなってしまうのか、最悪の予想が頭をよぎる

そしてそれはすぐに現実として突きつけられた

「荒野を 駆け」

「……あ……あああ……ああ……」

目の前が血肉の海だった

誰かの血肉が辺りに広がっていた

さらに最悪なのは今まさにこの瞬間

アリーゼが奴に身体を貫かれたことだろう

明らかに致命傷だ

そのアリーゼと目が合った

震える唇でこちらに向かって口を動かす

読唇術なんて心得はないが、それでも何を言っているのか不思議と伝わった

リオンを　お願い　ね

流した血を涙で流すかのような綺麗で
それでいて晴れやかな表情で言ってきた

待て

待ってくれ

【何者　より　も　】

今、俺の意識が戻ったんだ
諦めないでくれ

ここから俺がどうにかするから

【疾く　走れ】

だから

頼むから

リオンを

【星屑の光を　宿し】

その詠唱を　止めてくれ

【敵を　討て】

そんな願いもむなしく最後の詩が紡がれる

【ルミノス　ウインド】

爆発

閃光

そして

「ああ……あああああ……あああああああああああ
あああ——————————————————————
!!!」

慟哭

俺のではない

自らの手で仲間を

友を

ライバルを

家族を手に掛けてしまった

妖精の泣き声

そこに含まれるのは悲しみと絶望のみ

だというのに

それだけの代償を払ったにも関わらず

「なっ!?!」

奴は生きていた

片腕片足を失った半死半生の様な状態でそしてそのまま奴は

(……!?!?おい!!おいおいおいおいおい……)

「つぶつぎけんなああああ————————————!!」

奴は、あろうことかこの広間の外へ向かって脱出するために逃走を始めた

怒りで頭がどうにかなりそうだった

これだけのことをしでかしておいて逃げる？

俺の左腕

参加した冒険者

そしてアストレア・ファミリアの命

そしてリオンの絶望

何もかもを全部引き起こしておいて

ニゲルダト？

煮えたぎるマグマが頭の中に現出したかのように怒髪に駆られる

目の前が紅い

耳も何も聞こえない

だが、聞こえないはずの音が聞こえた

昔、ベルと一緒にじいさんかに抱き上げられながら聞いた

今でも俺の中に芯としてある言葉だ

『英雄とは』

『何かを成し遂げた者を指すのではない』

『己を賭した者こそが英雄なのだ』

懐かしい

とても懐かしい記憶だ

『仲間を守れ』

ごめん、じいちゃん、俺、守れなかったよ

目の前にいたのに守れなかった

『女を救え』

——— そうだ

まだ救えるかもしれない女が残ってる

——— アストレア・ファミリアはまだ死んじやいない

『己を賭けろ』

ああ、そうだ、まだ俺は全てを賭けていない

まだ切り札はあるんだ

なら——— それを賭けよう

アストレア・ファミリアは命を賭けてくれた

自分の死の間際になってまで友を心配する極上に良い女

アスフィに出会わなければきっと惚れていたかもしれないくらい
のいい女

きっと他の団員達もそれに負けなくらいいい女だったのだろう
それを殺したこいつを逃す？

ア リ エ ナ イ

ケジメはつけなければならぬ

「逃がすかこのポケがああああああ
あ—————！！！！」

『黒繩天譴明王』!!』

瞬時に巨大な鎧武者が顕現する
だが奴のスピードをこの明王では捉えることはできない

だから、本当に最後の奥の手

「だんがいじょうえ断鎧繩衣』
!!!!」

明王の鎧が音を立てて崩れていく

そして残ったのは身体の中から黒き縄を生やした禍禍しい一匹
の巨大な鬼

「■ ■ ■
———!?」

「■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■
———!!」

もはや俺の声なのか奴の声なのか、それとも明王の叫びなのかわからない

とにかく斬った

「ああああああああああああああ!!」

一閃

「がああああああああ!!」

二閃

「ああ亜ア—————」

三閃

「渦あああつつつつかああああああ」

四閃五閃六閃七閃八閃九閃

……

巨大な腕と太刀を数秒間だけ顕現させることができる
その破壊力は言うに及ばず。

◇ 『黒繩天譴明王』

『天譴』の第二段階、通称「卍解」

巨大な鎧武者を顕現させる、その力は『天譴』の数倍
身体の大きさをある程度までなら調整できる。

◇ 『黒繩天譴明王・断鎧繩衣』

通常卍解の亜種解放とも言える形態

明王が鎧を脱いだ姿、俊敏性だけでなく力も爆発的に上昇する
しかし、その代償としてその身に受ける攻撃全てが致命傷になって
しまうほど防御力が下がる

(下がるというかゼロになる)

というか、ぶっちゃけ攻撃を受けたら死ぬ

元の持ち主は不死身になることでこの弱点を克服したが

カイトはそんなの無理なので普通に一撃受けたらガチで死ぬ

普通に死ぬ

ハイリスクロウリターンな形態

□ 解除条件 □

短時間内に敵を1000体以上撃破

or

『断鎧繩衣』の解放

35：失意×再起

闇派閥への大粛正、並びに27階層への調査隊への襲撃事件

どちらもオラリオの正と負の歴史に刻まれることになった

片や『光への一步』

片や『27階層の悪夢』

全くの真逆性な出来事がほぼ同日のうちに起こったことで忘れることのできない事件としてこのように称されことになる

そんな大事件から三日

場所はギルドの地下

ここは祭殿と呼ばれ、オラリオ創設神の1柱である、とある神がその強力な神威を常に祈祷によってダンジョンに捧げることによってモンスター¹の地上進出を防いでいる最重要防衛箇所である

そこにある石造りの椅子に鎮座する者が1柱、言わずもがな今述べた創設神の1柱 神ウラノスである

ニメートルある巨体に彫りの深い荘厳な表情は微動だにしない

そのせいで老人のように見える姿からは年相応の雰囲気は微塵も感じられない

そんな神が誰も居ないはずの広間へ向かって口を開く

「・・・フェルズか」

「ああ、とりあえず報告だ、今回の事件の後始末はできる範囲で済ましてきたよ、ウラノス」

「・・・そうか」

誰もいなかったはずの暗闇から突如、影が現れる

全身を覆うローブは黒一色

それ以外で唯一見えるのは両手のガントレットのみ

怪しさ満点の人物ではあるがウラノスは気にせず会話を続けていることから二人？が知己であることが窺い知れる

「ロイマンの提出した今回の報告書は細かい部分を除けば概ねその通りのようだったよ」

「そうか」

「ただ・・・やはりアストレア・ファミリアが壊滅したのは痛い損失だね」

「ああ、アストレアの眷属達ことどもならあるいはと思っていたが」

「正義を司る彼女たちならば彼らを受け入れてくれる可能性があったかもしれないというのにな・・・」

「既がない可能性の話をしてもし方あるまい・・・フェルズ、それで細かい部分とは何だ」

「ああ、今回のダンジョンで起こった異変の原因に、おおよその予測ができたかもしれない」

「!?」

「これは生き残った『切札』と『勇者』の会話を盗み聞きをして手に入れた情報になる、どうやら闇派閥が大量の火炎鉱石を使用して下層を超広範囲にわたって爆破したらしい、そしてその直後に――

「ダンジョンで何かしら異常が起こった」

「ああその通りだよ、何でもまるで悲鳴のような音が下層全域にわたって鳴り響いたようだ」

「・・・なるほど、このような事は初めてだが私の祈祷が届かなくなった理由がわかった、・・・ダンジョンは生きている、おそらく許容範囲内のダメージに修復よりも原因の排除を優先したのだろう、そして――

「異常種個体イレギュラー・・・『災厄』の獣、ジャガーノートの誕生、いや出現と
なってしまうたということなのだろうね」

「このことは機密扱いにせねならないだろう」

「それがいいと私も思うよ、下手に知れ渡ってしまえば誰が悪用するかわからないからね・・・それと話は変わるんだが――」

「何だ？」

「いや、今回の功労者である『切札』が義手を作ることになったそう

なんだが・・・すこし面白いことになっていたよ」

「ほう」

「私も少し興味が湧く内容でね、先達として影ながら少しだけ手伝うことにしたよ、かまわないかな？」

「かまわん、お前のプライベートにまで口出しする権利は私にはない」

「ありがとう、ウラノス」

「礼を言われるようなことではない、それに『切札』^{ジョーカー}には何か報いねばならないとも考えていた」

「そうだね・・・それにしても彼の新たな通り名が『悲劇の英雄』か・・・どうか今回の事件が最後の悲劇になることを祈るばかりだよ・・・」

「・・・ああ」

そう言うと黒衣のローブを纏った人物の姿が消え、残った老神はいつものように目をつぶり祈祷に集中する

微動だにしないその姿はまさしくオラリオが世界の中心であるという地位を不動であると表わすかのようだった。

|||||

ウラノスとフェルズの怪しい会話の二日前

つまりは事件の翌日

場所はダンジョンの入り口の大広間

そこでは今回の下層調査隊で生き残った者達が駆けつけた救護員達によって治療を受けていた

全員が憔悴し疲弊している

怪我も大小様々であまりの怪我人の多さに怪我を治すための高級^{ハイ}ポーションが足りず応急処置として包帯を巻いている者が多数見受けられる

主神は己の『神の恩恵』^{ファルナ}を刻んだ眷属の生死を感覚で掴むことができる

そのロキが自分の隣にいるのに何も言っていないはずがない

だが、このラウルの焦りよう、嫌な予感をぬぐうことができない

「えっと、その・・・」

少し落ち着いてようやく周りに気づいたのかラウルがしどろもどろになった

なにせ今ここには各ファミリアの団長

さらにその主神までもが一同に介している

バベルから滅多に姿を現さない、あの女神フレイヤまでもが参加しているのだ

先程までの醜態を思い出すと固まってしまふのは無理もない

「・・・すまないシヤクテイ、少し席を外してもかまわないかな？」

「問題ない、当面の問題や対処は今さっき話し終えたからな、今回の事件の影の功労者に何かあったのなら早く行ってやれ、たとえ何かあっても我々だけでもどうにかするさ・・・まあ都市最強のLv.7のいるここに殴り込みを掛ける命知らずはいないだろうがな」

そう言つてチラリとオツタルに視線を向けるが当の本人は女神フレイヤのそばに直立不動

女神フレイヤもどこ吹く風・・・というかあきらかに退屈そうにしている

だが、ここに何かあればそれはすなわち女神フレイヤへの危険でもある

なにも言わずとも彼は己が女神のために動いてくれるだろう

「ふふ、確かにそうだね・・・それじゃあラウル、事情を聞きながら移動しようか、ロキは——」

「うちも、もちろん行くでー？当ったり前やろー！」

「はは、だよね」

駄々をこねる子供のようにつけてくるロキに苦笑しつつ共に天幕を出て行った

・ ・ ・ ・ ・

道中でラウルから事情を聞いてからは急いでダンジョンの入り口に向かう

そして長い螺旋階段を降りて目的地に到着した

そこで目に入るのは大勢の負傷者とそれを看護する救命士達

「彼はその最奥に居た

全身を自身の血なのかそれともモンスターなのかわからないほどに真っ赤に染め

左腕を失ってしまったカイトの姿があった。

そばには既に僕たちを除いたロキ・ファミリアの主要メンバーがそろっていた

全員が心配そうにカイトを看ている

「・・・カイト大丈夫かい？」

「ん・・・ああ・・・フィンか・・・」

声を掛けるが、カイトの顔色は良くない

怪我が原因ではあるだろうがそれだけではないのだろう、恐らく精神的なもの

腕を失ったショックか

それとも

それ以外か

「・・・とりあえず、それなりに集まったみたいだし、アイズと分かれた後にダンジョンで何が起こったか聞いてもいいかい？」

「ああ、まあ大変だったよ・・・色々と――」

.....

「.....ふー・・・これは・・・また」

「まあ、その後に意識を無くして気付けば18階層のリヴィラの街でな、フィルヴィスが18階層まで来ていたギルドの救援隊を連れてきてくれなきゃ今頃モンスターの中だ、まあその中に椿がいたおかげで地上まで戻ってくるのは楽だったな・・・まああいつにはちよつとだけ俺の秘密がばれたがな」

「まさか、スキルのことを話したのかい？」

「少しだけな・・・安心しろ、椿に教えたのは全部じゃない、一つだけだ」

ちなみに今カイトの口から出た椿という名前はカイトと専属契約している上級鍛冶師の名前だ

世界にその名を轟かせる武器・防具メーカーの鍛冶ファミリア

そのヘファイストス・ファミリア次期団長筆頭候補

椿・コルブランド

隻眼のハーフトワーフの少女でガレスとカイトの二人と契約している

今回迅速に救助が出来たのも彼女の力に寄る所が大きいと聞いている

それにしても

言葉が出ないとはこのことだ

カイトから聞いた話はむちゃくちゃだ

(双頭竜とヴィレッタの単独撃破、そしてアストレア・ファミリアを壊滅させるほどの

異常種個体を犠牲を出しつつも討伐……か……今

回地上の方でヴィレッタの姿を見かけなかったのはダンジョンの方にいたからか……あいかかわらずとんでもないカイトは……)

常識と己の耳を疑う

周りの表情も僕の心中と似たり寄ったりだ

僕はなんとか団長としての矜持もあるので気合で冷静を装ってはいるが、それもいつ剥げてしまうかわからない

そんな中で例外があるとすればアイズと……ラウルくらいだ

二人とも驚くには驚いてはいるが、絶句して空気を求める魚類のように口をパクパク動かしている他の者達と違い

「へー……すごいなー……」程度にしか驚いていない

カイトと最も行動を共にしていたのはこの二人なのだが、この二年間で一体何があったというのか

むしろ何があったらその程度の驚きで済むようになるのだろうか

というかラウル、君は先ほどまでかなりうろたえまくっていたはずなのに、何でそんなに落ち着いているんだい？

今の話よりカイトが左腕を失った話のほうが君にとってはインパクトがあったということなのか

もしかしたら聞きそびれているだけで三人でとんでもない冒険を経験していたりするのだろうか

(いや、今はそんなことより彼を労う方が先だな……)

彼に声を掛けようとした矢先

「……すまない、フィン」

急な謝罪に意表を突かれた

「んー．．．それは何に対する謝罪だい？」

パツと思いつくのは待機命令を無視してアイズと共に下層に向かったことだ、結果オーライとなったがそれでも命令無視はそれなりの罰がいるだろう

だがカイトからはそれ以外の答えが返ってきた

「命令無視と救助の失敗だ」

「．．．．．」

パーン

僕はあえて怪我人であるカイトの頬をここにいる全ての者達に見えるように張った

それはこの場では決して口にしてはいけない答えだったからだ

「どうして僕に叩かれたか．．．わかるかな？」

「．．．命令無視と救助の」

「違う」

今、カイトの周りにはこのオラリオでも名の売れている者達が一同に終結している、そのため看護する者や救助された者達、そして救助された者達の主神や同じ眷属かぞくの者達の視線が自然と集まっていた

そんな中で今回の最大の功労者であるカイトの口から発せられた

「救助の失敗」

これはダメだ

その言葉は今回助かった被救助者達の命を軽んじる言葉だ

「カイト、周りをもっとよく見ろ」

そう言つてカイトに改めて周りに目を向けさせる

「怪我人だらけだな．．．俺がもつと——」

「そうだ、怪我人だらけだ、でも———君が救った命だ」

「っ!!」

「．．．その君、そう、腕を吊った君だ」

僕はこちらのことを遠巻きに見ている、おそらく腕を折ったのであろう一人の冒険者に声をかける

「は、はい!!な、なんででしょうか!」

「今から言う質問に正直に答えてくれ、たとえその答えが酷い侮辱的なものでもかまわない、ただ正直に答えてくれるだけでいい」

「え?・・・う・・・は、はい・・・」

「・・・カイトが君たちの救援に向かったのは無駄だったかい?」

「ええ!?!そ、そんなわけ——」

「そんなわけがあるか!!」

声を上げたのは一人の女性エルフ

「カイトが居なければここにいる我々全員が27階層の時点で全滅している!彼のおかげで今生きていらられる!感謝はすれど彼を非難する者も侮辱する者もここには誰一人としていない!!もし居るなら私がそいつを切り殺してやる!!」

「フィルヴィス・・・」

涙を我慢するかのような叫びにカイトがエルフの女性の名前をつぶやいていた

(もしかして、助けに言った仲間って彼女のことかな?)

そんな彼女の魂からの叫びに呼応するかのように他の者達も次々と声を上げる

『^{ジョーカー}切札』、お前さんがそんな顔をすんじゃねえ!」「お前さんがそれならほとんど何も出来なかった俺はどうなるんだ!誇れよ!!」「お前のおかげで俺と仲間は生きてんだ!!」「そうだぜ!失敗なんかじゃねえ!!」「あなたのおかげでこの程度で済んだ・・・感謝しかない」「あなたに助けられた恩は一生忘れない」「殺された奴らだって覚悟の上で潜つてんだ、気にすんな!」「誰が何と言おうと俺はてめえに感謝すんぜ『^{ジョーカー}切札』!!」

皆が口々に彼への感謝を述べる、その中には主神達による言葉も混ぜられている

「お前ら・・・」

(そういえば、カイトの周りでここまで明確に死者が出たのは初めて

か・・・)

今までカイトは様々な案件に関わらせてきたが、それをすべてうまく解決してきた

死者が出たとしてもそれはカイトではどうしようもない状況やもしくはその事後のことだった

そのため今回が初めての挫折となるのだろう

おそらくそれがカイトへの精神的なショックにも繋がっている

まあ、初めての挫折がこれだけのインパクトのある事件だとその衝撃もすさまじかったのだろう

なまじカイトが優秀すぎたことによる弊害だった

「カイト・・・確かに救えなかった者達もいるだろう・・・だがな、こうして救えた命もあるんだ、それをまずは誇れ、お前はまだまだ若いんだ、何もかもを完璧にできなくて当然なんだ、だからこれを糧に前に進むんだ、次はもっと犠牲を少なく、そしてやがてゼロにするためにな」

めずらしくリヴェリアがカイトの頭を撫でながら優しい言葉を紡いでいた

「ああ・・・そうだな・・・そうだよな、救えた・・・救えた命だつてあるんだよな・・・」

下を向いたカイトから震えながらも搾り出すような声が返ってくる

「失ったものを嘆くよりも、今だけは救えた命を喜ぶほうが建設的じゃろうが馬鹿者」

「ああ・・・その通りだ・・・おっさんの言うとおり馬鹿だなあ俺は・・・」
ガレスもぶつきらぼうながらも激を飛ばしてくる

「——っふー・・・下ばっか見てちや気も滅入るわなあ・・・
うっし!!」

下を向いていたカイトが天を仰ぎ見るように顔を上げた

そう言って笑うカイトの目からは止まることなく涙が溢れていた

けどそれは決して悲しみだけではなく、喜びも含まれた憂いの涙だ
前に進もうと決意するために流れる涙だ

きつと彼はこのことも糧としてもつと強くなれるだろう

どうやら狙い通り、皆の鼓舞のおかげでカイトの精神も持ち直したようだ

そんなカイトの横にアイズが近づくとカイトに向かって拳を突き出した……何をしているのか僕にもわからない

「ん！」

「……お嬢？」

無意識にだろうかカイトも同じように拳を突き出し軽く合わせる

「カイト……おつかれさん」

「っ!!……ああ、お疲れさんだ、お嬢も無事でよかったよ」

「ん!!」

何かわからないが二人にしかわからない何かなのだろう、二人ともとても晴れやかな顔をしていた

「はは、女の子ってのは成長が早いなあ、ラウルもそう思わねえ？」

「カイトはおっさん臭いつすねー……」

「悪かったなじじ臭くて、あれだ、ガレスのおっさん臭が移ったんだよ」

「移るかそんなもん！少し元気になったとたんこれかお前は!」

「まあまあ、ガレス、今日は勘弁してあげようよ……カイト、色々気になることはあるんだろうけど今はゆっくり休むんだ……いいね？」

実は今回の騒動でほぼ中心に居た人物が地上に帰還した後に主神と共に行方不明になっている

カイトとしても気になるそうだが今は彼の身体を縄で縛ってでも休めることが何よりも優先される

「……ああ、悔しいがそうさせてもらう、それに——ぶ
たれた頬も痛むしなフィン？」

「ぶぶすまないね、でもまた僕の名前が変な語尾みたいになってるよ」

「ぶ、すまんすまんふいん」

ちよつとイラツときた、僕は救助のことはまだしも、待機命令違反

×9年○月あの日

昨夜、とりあえず再会をお互い喜び夕餉を済ました後

カイトから腕を失ってしまうことになった経緯について聞いた
女を守るために腕を犠牲にしたのだ、と

全てを守ることは叶わなかったが、それでも救えた命があったと
とても真っ直ぐな瞳を宿して言ってきた

儂は褒めた

さすがは我が孫じゃ、と

女子おなごのために腕を犠牲にできる男子おのこがこの世界にどれだけの数いる
だろうか

少なくとも儂の孫は仲間のために腕も命も張って闘える勇敢な男
になっておった

なんと誇らしいことか

カイトが腕を失ってしまったのは悲しい、見た瞬間に目の前が真っ
暗になるほどじやった

だがそれでも何度でも言おう

何度でも褒めよう

立派になったと

話している内にカイトは泣きながら笑っておった

気づけば儂も泣いておった

ああ、カイトは立派な一人の男になったのじゃなあ・・・

孫が完全に独り立ちできたことを実感した

一抹の寂しさを感じるが今日は秘蔵の酒を出して共にグラスを打
ち鳴らそう

きつと話すことはもつとあるはずなのだから

×9年○月あの日

マジか

・・・カイトはつい最近Lv. 4になったららしい
マジか

昨夜、孫と初めて酒を飲んだ際に聞いたことが今でも信じられん
だが、それが嘘ではないことが儂にはわかってしまう
一応、儂ってば神じゃし

いや、儂の孫すげえわ

カイトが旅立った当初はきつとオラリオでも活躍するじやろう
なあ、

するといいなあ、くらしいの感覚で送り出したんじゃけど儂の予想
以上というか予想異常な感じで大活躍していた

っていうかカイトの煎れてくれる茶がめっちゃ美味い

何でも、将来、冒険者を引退してアスフィと一緒になれたら店を出
したいそうじゃ

そのためにも結構前から料理や経営等に関して勉強中らしい

ただ・・・

・・・料理や経営に関して教えてくれる者の名が『ミア・グラント』
と言うらしい

・・・え？

マジで？

もしかして、あの『小巨人^{デミ・ユミル}』？

フレイヤのところでスコップ振り回してたあの、おっかさん？

・・・マジなのか

すげえな儂の孫。

×9年○月あの場所日

今日はカイトとベルが久方ぶりということで手合わせとって模擬戦の様な事をしていた

まあ、当たり前だがカイトの圧勝じゃった

片腕しかないとはいえ、それでもLv.4

『^{フェアルナ}神の恩恵』を刻んでいないベルでは手も足も・・・

いや・・・結構食らいついてなかったか？

いや、気のせいじやろ・・・気のせいだよね？

・・・まあええか

模擬戦の後はカイトがベルに色々教えておった

「こう、オーラをな、一部以外を閉じてギユギューつとする感じで」

「ギューっ?」

「いやいや、ギユギユギューツって感じだ」

「んー・・・ギユギユギューツ?・・・あ、できた」

「天才じゃああー!?!」

・・・あれは何を教えとるんじや？

何故かカイトの口調が濃みたいになっておった。

その後、カイトとベルが軽い運動をしてくると言っ大猪を複数狩ってきた

「殺りすぎちやった☆」

「ちやった☆」

テへ☆・・・じゃないわい

どうすんじやこの肉の山は・・・

食べきれなので村を挙げてのぼたん鍋祭りを開催した

村全員がそれぞれ育てている作物を持ち寄つての鍋は料理人としても修行をしているカイトの味付けもあつてか大変美味じゃった

「はい、兄さんあくん」

「あくん、・・・うむうむ・・・ベルのおかげで美味しい飯がさらに美味しい！」

「はは、兄さんの味付けのおかげだと思うよ？」

片腕で食べにくそうにしているカイトにベルが適宜看護するかのように食べさせてやっていた

相も変わらず仲がええのう

ん？

そういえば仲が良いで思い出したのだがアスフィちゃんはどうかんじや？

「あー・・・アスフィならオラリオで俺の義腕を作ってるよ、何でも作るのに時間が結構かかるらしくて『どうせならたまには帰郷でもしたらどうですか？』って言われてさ、そりゃちよーうどいいやと思って帰ってきたんだよ」

ちよーうどいい？

「え？ あ、ほら片腕だとダンジョンに潜るのは危ないじゃん？」

・・・嘘じやな

全てが嘘ではないが何か隠しておるのう

×9年○月君に日

カイトから本当のことを聞き出した

何でも闇派閥イヴイルスに手痛いダメージを与えたが、負傷したということ
で闇派閥イヴイルスに狙われやすくなったため、義腕が出来るまでは姿を隠す方が都合がよかったそうだ

ギルドにはロキからの説明でカイトは都市内のどこかに身を隠していることになってるらしい

なるほどのう

確かにそれなら確かにこの村に帰ってくるのはちようどええじやろな

なにせこの村、ほとんどの地図にも載っていないしそれにしてもよく都市の警備網を抜けられたのう？

・
・
・
・

・・・なにい!?

アスファイから透明になれる魔道具マジックアイテムを借りたじやおおお!

なんじやそれ儂も欲しい!!

それがあれば女湯も覗き放題じゃないか!?

ああ、当時それがあればあの殺意満点の警戒網を出し抜いて悠々と覗けたものを・・・ぐぬぬぬう・・・

あ・・・

ちよ、やめて、カイト

そんな目で見んといて、儂が悪かったから

・・・でも、ちよこーつとだけ貸してくれたりとか

「ダメ」

ダメじゃった

いや、そんな楽な方法で覗いても達成感など得られまい

苦労して覗くからこそその 男の浪漫 なんじや!!

×9年○月出会えた日

連日爆弾発言をかましてくれる我が孫

今日もスパイシーな爆弾を炸裂させおった

何でも未来嫁がアスフィを含めて3人になったらしい

しかも2人目と3人目を連れてきたのがアスフィとのこと

ナンダソレ

え？

なんなのそれ

嫁の方から他の女性を連れてくんの？

なにそれ

羨ましすぎるんですけど

儂とかなあ!!

浮気しただけで頭を斧でかち割られそうになったり!!

貼り付けにされて弓的にされたり!!

水車にくくりつけられて水責めされたりとかあああああ!!

・・・どうやったら嫁公認で女ができんねん

・・・なに？ 嫁が増えたのは不本意？

もしかして新しい嫁がすごい不細工とか・・・え、めっちゃ美人で

かわいい？

ちよつと孫に殺意が湧いてきたぞ☆

「・・・まあ、でもやれ」

ん？

×9年○月◇日

兄さんが帰ってきてから一ヶ月経ったある日

ヘルメス様が訪ねてきた

何でも、もうそろそろ義腕が完成するそうなので呼びに来たそうだ

「そんじゃまあ、オラリオに帰りますかね」

その言葉を聞いて少し寂しくなる

兄さんにとってこの村は故郷に違いない
だけど

今の兄さんにとってはオラリオも故郷となっている

『^{ファルナ}神の恩恵』を刻むというのは家族になるということと同義だとヘルメス様から聞いている

兄さんと同じ『^{ファルナ}神の恩恵』を刻んだ家族

その人達に少し嫉妬してしまう

そんな事を考えていると別れるのを嫌がっていると思ったのか（実際にまた会えなくなるのは寂しい）

兄さんが僕の頭に軽く手を乗せて頭の毛がクシャクシャになるような手つきで撫でながら言ってきた

「ベル、じいさんがその気になったらお前もオラリオに来てみると良い、あー・・・ただし来るときは手紙をくれ、まだオラリオは物騒だからな、危なくないように迎えに行くからさ」

行くことがあるのだろうか

確かに行ってみたい気持ちはすごくある

でも、それと同時に恐怖感も生まれた

この一ヶ月間、結局僕は片腕というハンデの中、兄さんに一撃も入れることが出来なかった

そんな兄さんが腕を失うようなことが起こるオラリオの魔境つぶ

りに腰が引けてしまった

思ったことをそのまま兄さんに伝えると

「ぷっ、あっはっはっはははは!!」

兄さんの横で聞いていたヘルメス様が大笑いしていた

「大丈夫!そこは心配しなくてもいいぜベル、カイトのトラブル体質は折り紙付きさ!人が一生お目にかかれるか遭遇するかの事態に何故か頻繁に巻き込まれてるだけだからね!」

「うるせえぞーアホメス」

え?

兄さん大丈夫なのそれ

「なーに、多少の障害は俺にとっちゃちょうどいいんよ、それとヘルメスの言う通り、もしベルがオラリオに来てもそんなことは早々起こらないさ」

そ、そうなんだ よかったく・・・じゃあ、ちよつとだけ前向きに考えておこうかな

「おう、そうしろそうしろ!そうすりやじいちゃんも気が変わるかもしれないしな!」

・
・
・
・

そこからは多少の雑談を交えてから兄さんはヘルメス様を荷物のように肩に担いでオラリオに発っていった

あまりの荷物扱いっぷりに見送りに来た僕とおじいちゃんもさすがにヘルメス様を哀れんだ

次会えるのいつになるのだろうか?

兄さんが見えるか見えないかの距離までになったとき

「ベル・・・お主もオラリオに行きたいなら行ってもええんじやぞ?」
急にじいちゃんが僕に言ってきた

ううん、僕はおじいちゃんとのんびりするの嫌いじゃないし

おじいちゃんを1人残しては行かないよ

「・・・そうか」

ヤハリアノサクセンデイクシカナイカノ

最後の方は上手く聞き取れなかった

おじいちゃんは改めて何かを決意したかのような表情で家の中に入っていた。

さて

運動がてらに畑を耕すとしましょう!

某日未明

とある場所とある人物達が非っ常くくくにハイテンションになっっていた

「にひひひひ、じゃあここをこうしてー!」

「いいですねえ！、ついでにこんな機能とか」

「うふふふふふ、いつそのことこんな機能も・・・」

「それいいねえ!!」

「アハハハハハハハハハハ!!」

異様なテンションになっている者達がいじくっているのは銀の色をした義腕のパーツ

そして周りに散乱するのは中身が空っぽの酒瓶が数本

意味もなく笑う者たちの手にはまだ酒瓶があり、それをそのままグビグビと飲んでいる

そんな者達を影から見守るのは全身を黒いローブで覆った人物

神ウラノスの腹心、フェルズである。

(・・・どうしてこうなった)

『^{ジョーカー}切札』の腕を最高に仕上げるためにこの者達は連日連夜、素材を仲間や部下に集めさせ、手に入らない素材は巨額の金貨で購入しさらにそれを分解・研究

もはや何日徹夜したのかわからない程、義腕作りに没頭していた。

そんな者達の情熱にあてられ、かつて「賢者」と呼ばれてもいたフェルズは影ながら手伝うことにした

時にはこつそりと自分のアイデアを凶面に混ぜてみたり

時には手に入らない素材を破格のクエストの報酬として用意したり

そんな影からの援助の甲斐もあって、できたのは現在出来る最高の出来の義腕・・・だった

(何故こんなことに・・・あ、ちよ、せっかく錬金できた白銀の板金にい変な物が混ざあ!?!・・・ああー・・・)

フェルズが犯した過ちはただ一つ

何日も徹夜を続ける彼女たちの身を労うために最高級酒「ソーマ」と呼ばれる酒を複数差し入れという命題で贈ったことだろう

疲労困憊に加え、頭も曇りまくっていた彼女たちはこれを飲むやいなやこれまでのストレスと疲労からか

ひやつはあー！ー！ー！ー！！な状態になってしまった

正常な意識は楽しい別世界へとフアーラウエイ！！

その代わりに芽生えたのは愉快型のアツパラパーでアハハハくな精神状態

そんな精神状態の彼女たちが偶々思いついただけのアイデアや素材をせっかく創ったパーツに組み合わせ混ぜ込んでいく

なまじ、一流の腕の者達であるためにそれが出来てしまうのが事態を悪化させていた

常識という概念を脱ぎ捨てた一流達が究極の魔改造を行っていく

「おい！ここに火炎鉱石とか仕組んでみたらどうじゃあ?！」

「いいですねえ!! ついでに振動できるようにしてみますか! アハハハハハハ!!」

「キヤー！ーナニに使うんですかそれー！ー!!」

「・・・ナニですよ」

「・・・ナニですか」

「・・・キヤー！ー！ー！ー!!」

「キヤハハハハハハ!!」

もはや深夜の女子会のノリである

(ああせつかく私も手伝ったのに・・・ちよ、今度は生体部分に何を!! それはちよつと、いやかなり洒落になら、あああああああ!!)

本来なら素材一つ、仕組み一つ使うにしても、入念な実験と検証がいるにも関わらず

頭がお花畑のマッド共によって次々とめちやくちやな魔改造が加

速していった。

「アハハハハハハハハハハハハハハハ!!」

(ああ・・・どうして・・・どうして私は酒など差し入れたのだ・・・あああやめてくれえええええ、そこは私がアイデアを出した部ぶ・・・あああああああ!!?)

「あひやひやひやひや！なんか生えたああああ!!?」

「ぶっはっはっはあひやひやナニソレ!? おもろおおお!!」

「もっさりモツサリ!!」

「あひやーきやつきや!!」

真の酔っ払いにブレーキなど存在しない、というか使う気がない

「ごごご繋げてみましょおお!!」

「いいねーあははははははは」

(もう止めてくれえええええ!!?)

魔改造は止まらない

・
・
・
・
・
・

フェルズは後に語る

あのとき——もしも私に胃があつたなら極大の穴が空いていた、と

最高の作品が別の何かに変えられていく

そしてそれを見ていることしかできないという絶望は「賢者の石」を割られたときに勝るとも劣らないものだったと

だが、

まさか、そんなものが

現代どころではない

過去・現在・未来において史上最高のものになるとは夢にも思わなかったと

「はあ・・・メモしとけばよかった」

息の出来ぬはずの賢者がため息を付いていた。

37：復活×銀腕

|||||

27階層の悪夢と呼ばれることになった事件から一週間

未だに精神力が回復しきらないことに加え怪我也酷いためディアンケヒト・ファミリアの療養所に入院していた

ただ、以前と違い今回の俺は意識がしっかりしているため俺は結構暇を持て余していた

なにせこの世界、スマホもなければ漫画もない

本ならあるにはあるが専門書のような小難しいことしか書いていない本がほとんどだ

そして、そういった本は既に大抵読んでしまっている

(まあ、『絶』の練習でもしてりやいかとも思ったが・・・)

《※ちなみに『絶』は気配を消すだけでなく治癒力を高める効果があるので怪我を早く治したい場合には最適な修行でもある》

あまりに暇すぎるので『絶』ばかりやっていたが、それにも飽きたので遊び心で『・・・燃え尽きたよ・・・真っ白に』と迫真の演技で

「明日のジョー」ごっこをしつつ『絶』をやっていたら

「きゃあああああああ!?!死んでるうううううううううう!!?!」

「え、ちょ・・・ちが・・・」

昼食をもってきた看護師に死んだと勘違いされて大騒ぎになった

「じじじじじ人口!人工呼吸うううううううううう!!急いで早く!!カイトさん死なないでー!!」

「いや、生きてる!!生きてるから!」

その際にアミッドが人工呼吸をしようとしてきたのだが、この時はかなり真面目モードで悪意もなく切羽詰ったような表情でやろうとしてきたためこっちの方が戸惑ったくらいだ

「二度としないで下さい!!」プンスカ!

すぐに事情を説明すると涙ながらに紛らわしいことをするなと怒られた

まあ、普通にこっちが悪いので謝った

ただ、その後

「では、念のための人工呼吸を——アダダダダダ!」

「念のための人工呼吸なんてねーよ!!」ミシミシ

・・・これは悪意しかなかったのでアイアンクローで黙らせた

ちなみにアミッドに関しての奇行はまだある

昨日も

(左腕がないせいで不便極まりないな、小便一つ済ますのも一苦労だ)

そんなことを男子トイレで思っていたら

「手伝いましょうか?」

とか、アミッドが言ってきた

繰り返すが、女人禁制の男子トイレでだ

もう一度言おう、ここは聖域である男子トイレだ!

「なにしとんじゃあああああ!?!」

「ほほう、この二年間でこっちのサイズのレベルもランクアップベシ!?!」

「くたばれえええええその記憶も消えろおおおおお!!」

「アババババババ!」

女だろうと容赦なく脳天を連打で殴りつけた

・・・男女平等って素晴らしい考えだよね!

話が逸れた・・・っていうかこの話は忘れたい

まあ俺の左腕に関してなんだが

一応ファイルヴィスが俺の肘から先はきちんと地上まで持ち帰ってくれた

だが、

肝心の左腕の接合部分である本体の肘から上が闘いの最中にグツチヤグチャになったせいでのままくっ付けたら左右で腕の長さが違う面白人間になってしまう

そんなわけで現在、接合のための施術は延長してある

ちなみに、切られた腕は腐らないように処置して冷凍保存してあるらしい

で、だ

今日は俺の腕が治るのか治らないのかの割と真面目なお話があるとのことだ

結構大事な話なので関係者が集まっているのだが

フィンやリヴェリア、ガレスのおっさんにロキ、それにアスファイ、ついでにヘルメス

まあ、この面子がいるのはわかる

いやヘルメスは超いらん、帰れ

問題は何故か、鍛冶の女神ヘファイストスに俺とガレスのおっさんの専属契約鍛冶師の「椿」^{つばき}まで居ることだ

「・・・椿」

「ん、どうした？」

「いや・・・お前さん何でいんの？」

「なんだ、命の恩人である手前がいては悪いのか？」

「いや、悪くねえけどさ・・・普通に疑問なんだよ、命の恩人つつつてもわざわざ来るようなことでもないだろ」

ギルドの救援隊の一人として意識を失った俺を担いで地上まで運んでくれたのがこの椿だ

現在はLv. 4でLv. 5へのランクアップは間近、さらにヘファイストス・ファミリアの次期団長候補筆頭でもある

さらに言えば何を隠そう、俺がLv. 1の頃に使っていた武器型の籠手は元々はガレスのおっさん用に椿がお試しに打ったものだそう
だ

だが、ガレスのおっさん的にはあまり合わなかったらしくそのまま武器倉庫にお蔵入り

それを偶々、俺が見つけ出してそのまま使っていたというわけだ
知らずに使っていた武具の製作者と後に専属契約を結ぶことになるとは

いやはや人の縁とはわからないものだ

これも俺の妙なアビリティ『奇運』のせいなんかね？

そんなことを思っていると

「ま、疑問に思うのも当然よね、別に口止めもされていないから言うけど、私たちは呼ばれたから来ただけよ、『重要な話があるから』ってね？」

隻眼の女神、ヘファイストスがあつけらかんと言ってきた

「ヘファイストス様も呼ばれた？」

「ええ」

「ロキに？」

「いえ、私と椿を呼んだのは『戦場の聖女』ディア・セイントよ」

「え・・・アミッドが？」

治療師であるアミッドが鍛冶師を呼ぶ？

意味が分からん

理由がわからず疑問に思っているとヘルメスが会話に割り込んできた

「ちなみに、元々来るつもりではあったんだけど、俺とアスファイも彼女から声を掛けられた、この日この時刻に必ず来るようになってね」

「はあ、嘘だろ!？」

アミッドがアスファイを呼ぶ？

ナニソレコワイ

どういうことかと、アスファイに目を向けるが何故かアスファイは黙しただけ

え、マジでどういうこと？

知る人は知っている

先程の話からもわかるようにアミッドはアスファイから俺を奪うために猛烈なアプローチをあの手この手でかけてきている

そのせいで二人の仲はとでもではないが良好とはほど遠い

一人のヒロインを巡って争う二人（ガチファイト）

やめてえ！私のために争わないでえ！という状況だ

ただしヒロインは男である俺。

女の子ってもっとフワフワでポワポワないイメージがあっただけ

どなあ

・・・もつと女の子に夢をみていたかったよ

話を戻そう

そんなアミッドが俺についての話でわざわざアスファイに声を掛ける？

大事件ですよ奥さん！

俺史上最大の事件の香りに戦慄していると椿が見かねて口を出してきた

「まあ、大したことではないぞ？ 手前と『全能者』^{ベルセウス}それに『戦場の聖女』^{ディア・セント}の三人でお主が地上に運び込まれた後に少し話し合う機会があつてな」

「話し合う？」

疑問を感じていると椿が俺の左腕を指差してきた

「お主の腕に関してだ」

場に不思議と沈黙が降り、アスファイが痛々しい表情になっていることに気づく

「・・・ああ、なるほど・・・そっか・・・そういうことか」

それで合点がいった

その時点で治癒士のアミッドが鍛治氏の椿に加えて魔道具製作者のアスファイと話し合わなければならぬ事態

つまり、その時点で俺の腕が治らないことは決定的だったってことだ

ここに椿が居るのは義腕の制作に関してこいつが関わるからだろう

確かに戦闘にも使える義腕を造るとするなら、椿も交えて話さなきゃいけないわな

そんな風に俺が一人で納得していると

「衰弱している患者の精神状態を気遣うのも治療する際には重要な処置ですので」

俺の入院している部屋のドアを開けてペコリと頭を下げてからアミッドが入ってきた

「そいつはどーも、でもよー、別にあのとき言ってくれても別にかまわなかったぞ?」

「あのときのカイトさんは精神的にも不安定に見えたので・・・あれ以上精神的ショックを与えるのは身体にも影響が出ると判断しました」

「そーでも・・・あったな」

そういえば確かにフィン達に活を入れられるまでネガティブ思考になってた気がする・・・っていうかなってたわ

そのせいでフィンにビンタされたんだった

「・・・皆様との話し合い前に念のため熱と脈を計ります、腕を」

「あいよ」

テキパキと慣れた手つきで脈や熱を測っていく

俺もこのときばかりは素直にアミツドの言うことに従う

「ま、その気遣いには感謝しとくわ・・・っーかさ、できれば普段からそんな感じに粛々とした態度でいてほしいんだが」

ちなみに先ほどの話からもわかるように治癒士モードのアミツドは割と真面目モードが多い、こいつとは色々あるが治療という行為に關してだけは真摯に行うのでそこだけは信賴している

ただ、そうでない場合は

「それは今すぐに獣の様に押し倒され襲われたいということでしょうか？ハアハア」

こんな感じ

「ちげえよー俺の言葉のどこからそんな意味を読み取れるんだよ!? ちよつ、息を荒げるな! そのワキワキ動かす手つきをヤメロオ!?!」

真面目モードが終わるのはえーよ・・・もうちよい頑張れよ、ちよとでも見直した俺が馬鹿みたいじゃねーか

「ごほん・・・アミツド、いい加減にきなさい、話を始めますよ」

「むう・・・わかってますよ」

アミツドを止めたのは俺の唯一神にして女神で恋人のアスフィのだが

(え・・・なにこれ・・・え、ウソでしょ? アミツドがアスフィの言うことを大人しく聞いた?・・・これ・・・現実か? 夢なんじゃ・・・アテテテテ)

目の前の現実に俺は心の底からビビリ、夢かと思いい頬をつねるが普通に痛い・・・つまりは目の前の光景は現実だ

「え、なんやこれ?・・・うちらが知らん間に何かあったんか? いつの間にも仲良うなったんや?」

あのロキですら口を開けて驚き、椿以外の全員が似たような感じになっっている

言うことを素直に聞いただけと侮るなかれ、

口を利けばお互いに罵詈雑言

目を合わせれば互いに唾を吐き

肩がぶつかれば無制限ファイト

そのくらい仲の悪かった二人なのだ

犬猿の仲などという表現すら生ぬるい、そんな関係だったのだ

どちらかが相手の言葉に従うとか有り得ないんですけど・・・俺が知らない間に何があったんだ

全く把握しきれしていない状況が色んな意味で怖くて仕方がない

そんな風に微妙な沈黙を破ったのはアミッドだった

「では、いつまでもだらけるのも時間の無駄ですので、僭越ではありますが私の方から説明をさせていただきます・・・既にわかっているとありますが率直に申しましてカイトさん、あなたの腕を接合することは不可能です」

リリースしかけた頭に告げられる話の衝撃で頭が切り替わる

まあ、わかつてはいても改めて言われるとちよつとショックだな

「一応、細かい理由とか聞いても良いかい？」

フィンが口を挟んできた

「はい、簡単に言いますと、カイトさんの切り落とされた腕の方は保存状態もよかったので問題ありません、問題はカイトさんの身体の方の腕の接合部分です」

「こつちの方？」

「そうです、カイトさんの腕に刻まれた傷が酷すぎて万能薬や回復薬を使用してしまうと傷の接合よりも傷口を塞ぐことを優先してしまうというのが理由です、これでは接合などできません。」

（あちゃー・・・肉盾として使ったのはやっぱまずかったか）

だが、そうしなければ死んでいたので反省はしても後悔はない

仕方がないかとあきらめていると

「はあく・・・万能薬なのに万能じゃないとはこれいかに」

椅子の上で器用に胡座をかいたロキがぼやいていた

「ロキ、いくら万能といっても薬は薬だ、限界はあるに決まっている」
呆れたようにリヴェリアが言う

「せやなー……でも天界に行けばマジモンの万能薬みたいなリングとかはあるんやで？ 確か……デメテルが管理しとったな」

(ああ、あのボインボインか……)

脳裏に一部の身体的特徴がロキと比べるとかわいそうになってしまってくるのワールドクラスな女神が思い浮かんだ瞬間

(殺気!?)

なんかアスフィとアミッドに加えロキからも一瞬だけ殺気が

……気のせいだよね？

いや、じいちゃんも女の勘は侮れないと常日頃から言っていた

今はボインを頭から消し去って話しに集中しよう

間。

「地上にないものを言っても仕方ないじゃろ」

ロキの話にガレスのおっさんまで呆れていた

そんな空気の中、アミッドがとんでもないことを口に出した

「……実を言えば今回の話で皆さんを集めた理由は神ロキが口にしたその、天界について関係があります」

その台詞にこの場に居る二柱の女神の表情が変わる

「へえ……どういうことかしら『戦場の聖女』？」

鍛冶の女神は興味を引かれたのかアミッドの言葉に反応した

「私は職業柄、数多くの冒険者の怪我を相手にしてきました、ですが……欠損だけは治しようがありません、私は常日頃からそれをどうにかできないかと思案していました」

それを語るアミッドの表情は己の無力を悔やむ表情だ

「そんな時に、ディアンケヒト様から天界でのお話を聞きました、かつて天界で生身と変わらぬ、もしくはそれ以上の義腕を創ったことがあ

る——と」

それを聞いた神へファイストスの残った片目が見開き驚愕の表情に変わる、ロキの細目もフルオープンになって瞳孔が開いてる、っていうかロキの目え怖っ!」

「それってまさか、あれを地上で再現しようと言うの!？」

「・・・まじかいな」

「私は本気です・・・そして、それを再現するために神ロキ、神へファイストス、そしてカイトさん自身の許可を取らなければならぬ案件があるのです」

「許可? いや、何かわからんけどすげえ義腕造ってくれるっていうのなら俺は別に全然かまわないし、むしろ有り難いんだが」

「・・・使用する素材に問題があります」

「素材?」

「はい、今回の義腕の素材には生体素材、つまり・・・カイトさん、あなたのちぎれた腕そのものを使用します」

「!？」

もちろん驚いているのは俺だけではない

他のメンバーも顔を嫌悪や驚愕の入り交じった表情をしている

ただ、俺の場合はすぐに冷静になって思い返す

(確かに、俺の腕を素材にするっていう考えはなんか、こう、禁忌感はあるけど、どうせくっ付きもしない腕を捨てるくらいなら俺の義腕に再利用するのは全然アリアリだな)

リサイクル精神は大事だ

さすがに自分の腕をリサイクルは想像もせんかったが、いやまてよ・・・そういえば転生した俺って魂のリサイクルっていう究極の工程的な存在?

そう考えれば腕のリサイクルぐらいどうってことないように思えてきた

「・・・俺は別にいいぞ、ロキも・・・って何その顔?」

ロキを見ると、そりやもうすごい顔をしていた

具体的に言うとか口がへの字

顔中にシワが寄り梅干でも食べたのかと言いたくなる顔だ

さらに、めっちゃ嫌だということが察せられる程に黒いオーラがみよんみよんとにじみ出てきている

・・・なんか臭そうだし、ばつちい

「え、ロキ反対なのか・・・何で？」

マジでわからん

「アホか！自分とこの子の腕を素材にしますー言われてええ顔する親がおるわけないやろ!!」

(あー・・・まあ言われてみればそうだな)

『親の心子知らず』とはまさにこのことか

自分のことしか考えていなかったがロキはちやらんぼらんに見えて身内には激甘だ

そんな女神が子供の腕を利用して何かしますと言われて、はいそうですか、となるわけがなかった

「でもよー、どうせ治らないなら新しい腕のために使うってのは全然ありなのはわかってるだろ」

そう言うとかロキの隣のフィンが、やれやれといった風に言ってくる
「カイト、ロキも馬鹿じゃない、それはわかってる、でもね・・・頭ではわかってはいても心が納得しないっていうのはこの場合仕方がないんじゃないかな、僕でも君の腕を素材にするって聞いて良い心地はしない」

フィンがアミッドに視線を向けるが当の本人は涼しげな表情で飄々としている

「反感は重々承知の上ですので」

「・・・なるほどね、それで椿だけじゃなくて私も呼んだのね」

素材の話聞いてからは沈黙を保っていたヘファイストス様が嘆息しつつ呆れた声で言う

まあ、主神に黙って人を素材にして義腕を造りましたー、と言って

しまうのはかなり問題有だろう

「主様よ、手前は了承している、後は主様の許可がもらえれば今すぐにも打てる」

「・・・いいでしょう、どちらにせよ鍛冶神の私が子に何かを打つなどは言えないしね、ただし助言はしないわよ、一応私も他のファミリアの子とはいってもそれを素材にするのには良い感情を持ってはいないんだから、それでもいいならかまわないわ」

「おお！さすが主様じゃ！話がわかる！」

どうやらあつちの方は大丈夫のようだ

「ディアンケヒト様の方は何て言ってたんだ？」

「人の怪我を癒やし、営みを守ることに繋がるのであればかまわない、と」

「・・・へえ」

本気で感心した

(偏屈に見えて結構良いこと言うな、あの老神)

さて、残るは

「・・・ロキ」

「うううく・・・」

こつちだけだ

まだロキはぐずっていた

「はあく・・・片腕での冒険は大変だろうなあ」

「ぐう!? や、やったら普通の義腕を・・・」

「中途半端な義腕だと死んじゃうかもなあ」

「ぬいう!？」

ロキのくちがさらに急カーブを描くへの字になっていく

「・・・神ロキ」

そんな風にロキを追い込んでいる最中に割って入ってきたのはアスファイだった

「どうか許可を！この命に代えても彼の腕を以前と同じように、いえ、

それ以上の物を削ってみせます、ですからどうかっ!!」

跪き頭を垂れ懇願するようにロキに嘆願していた

「私からもどうかお願いいたします、神ロキ」

「手前も同じ気持ちだ、これほどの使い手を死なすのは惜しい、ロキよ頼む」

そしてそれに並ぶように、アミッドと椿が膝をつき頭を垂れる

「~~~~~はあ~~~~~わかった~~~~~許可したるわ」

ロキもようやく折れてくれた

「ただ、そやな、一個だけ教えてくれ、アスファイとアミッド2人とも仲悪いんちゃうん?なんかあったんか?なんやそれが引つかかって不安なんやけど」

ロキの疑問はもつともだし、それは俺も若干不安に思っていることだった

ただ、それも彼女達の言葉を聞いて杞憂に終わる

「心配ありません、私たちは」

「カイトさんを危機から守るためであれば」

「一つになれる」

「・・・らしいぞロキ?まあ、手前はここまでではないが近い思いは持っている」

真摯な目でロキを見つめ返す2人プラスαによろやくロキも納得できたかのような表情になってくれた

「・・・さよか、なら・・・ええわ、とびきりのもんをこの子にあげたつてくれ」

「御意」

「椿もよろしゅう頼むで」

「おう、任された！おもしろい素材も手に入ったのでな、大船に乗ったつもりで居るが良い!!」

(・・・とりあえず、これで一件落着かな)

話がまとまり、部屋に弛緩した空気になる

「では、ここに宣言させていただきます、私、デアンケヒト・ファミリア所属『戦場の聖女』デア・セイントアミッド・テアサナーレ、ヘルメス・ファミリア所属『全能者』ベルセウスアスファイ・アル・アンドロメダ、そしてヘファイストス・ファミリア所属の『単眼の巨師』キョクロープス椿・コルブランド、以上の三名により義腕——『銀の腕』アガートラムの制作に着工いたします」

~~~~~

とりあえず、腕の制作は最低でも三ヶ月は掛かるらしいとのことだ

腕の回路や仕組みについてはアスファイ

生体部品についてはアミッド

腕そのものの金属関係やギミックについては椿

オラリオでも名の知れた者達による共同制作になるためかなりのものが出来上がりそうだ

完成が楽しみだなー、などと気楽に考えていると

「あ、そういえば言い忘れてました、カイト」

「んあ？何だ？」

「アミッドと椿をあなたの第二、第三の妻にすることになったのでよろしく願いますね」

アスファイがふと何かを思い出したかのように、超が付く爆弾発言を

放ってきた

「……………は？」

「え？」

「んん？」

「はい？」

場が凍った

文字通り

38：奮闘×号泣 前編

|||||  
|||||  
|||||

《side：ディオニユソス》

「ですからね〜：なく〜んで『単眼キユクケロプスの巨師』なんですかね〜ヒック：私の方がもつとず〜と〜と．．．」

目の前で私の愛しい子の一人、フィルヴィスが泥酔しつつ絡んでくる。

「う、うむ．．．そ、そうだな、ところでフィルヴィス、もうそろそろ酒を控え——」

「アッ あッ アン!？」

「な、なんでもないですう．．．」

「．．．でね〜．．．『全能者ベルセウス』は前々かりや聞いてたかりやわかりゆんですよ〜?でも、なくんで．．．」

「ああ．．．うん．．．そうだね．．．」

先程から同じ話が延々とループを始めている

(まさか、フィルヴィスが酔うとここまでの絡み酒になるとは．．．) 本当に普段はこんな感じの子ではないのだ

この子がここまで酒に溺れてしまっている原因は一つ

フィルヴィスが懸想している人物に新たな未来嫁が増えたという情報が入ったからだ

情報源は偶々部屋の外でその話を聞いた名も知らぬ神らしい

そいつはその話を面白おかしく他の神々に吹聴したそうだ

そうなればもはやその噂は止まらない

なにせ、今オラリオでは『切札ジョーカー』は時の人だ

本来なら全滅必至であった部隊の半数以上を己の腕を犠牲にしても救出したロキ・ファミリアの新たな英雄として囃し立てられている、その中には悪意もあってかどうあかはわからないが彼のことを



『悲劇の英雄』等といって茶化す者もいる

そんな彼のスキヤンダル

相手はいずれも美女ばかり、しかも求めてきたのは彼からではなく女性の方からときた

そんな面白そうなネタに神々が食いつかないわけがなかった

三日と経たずにその話はオラリオ中に広まってしまった

そして当然ながらすぐにその話はフィルヴィスの知るところとなり

「・・・ンツグンツグ・・・プハア~~~~・・・ヒック、でねく・・・ん~~~~聞いておりやれましゆかゞデロロレスさま~~~~」

「ああ、うん、はい・・・聞いている聞いている・・・」

こうなった

できればこのような事態になる前にどうかしたかったが、私は可憐な乙女達とイチャ・・・戯れ・・・情報交換に忙しく、その噂を耳にしたのは少し遅くなってしまった

噂を聞いた私はすぐにフィルヴィスのことを心配して本拠ホームに帰つたのだが、扉を開けて中に入った瞬間に猛烈な酒気に襲われた

臭いの発生源を辿っていくと食堂には酔いつぶれた、というよりも酔い潰されたであろう我が団員の死屍累々・・・

そしてその中心で黙々とラツパ飲みでワインを煽る酒の化身と化したフィルヴィスがいた、肩には同じエルフで同期のアウラの姿

肩を組み仲良く飲んでいるようにも見えるが明らかにフィルヴィスが一方的にアウラを締め上げるように抱きついていた

アウラの方は傍目から見てもかなりグツタリとしているのがわかる、そんなアウラと目が合った

「グディ、グディオニユソス様・・・お、お逃げくだ——————キユツ!？」

アウラが落とされた

酔ってはいてもL v. 3 見事な絞め技だ・・・できればこのよう  
な状況で見たくはなかったが

「あ~~~~~」デリオニユソス様だ~~~~!!アハハハハ  
ハハ!!一緒に飲みましょうよ~~~~?」

ゆっくりと歩み寄ってくるフィルヴィス

だが、その姿からは『逃げたらわかってんだろ?』的な雰囲気  
が感じられない

神としての直感が言っている「それでも逃げろ」と

だが、私もこのファミリアの主神としての矜持くらいは持っている  
自分の子が恋路で悲しみ、そのせいで酒に溺れこのような姿になっ  
てしまっているのだ、それを受け止めきれなくて何が親だ、何が主神  
だ

「・・・そ、そうだな、今日は一緒に飲むとしようか」

まあ・・・手の掛かる子ほどかわいい、という奴だ、偶にはいいだ  
ろう。

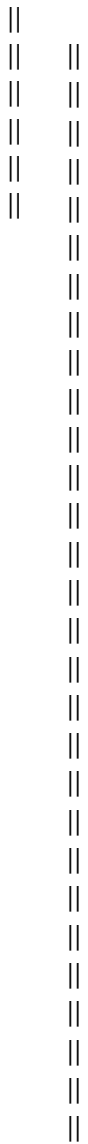
・・・いや、別にフィルヴィスが怖いとかそんなんじゃないから

「ん・・・酒、おきやわり」

「あ、はい、どうぞ」

ほんと違うからね!?

こうして話は冒頭に戻る



「ですからね〜．．．『全能者』<sup>ペルセウス</sup>はわかるんれすよ〜百歩譲って『戦場の聖女』<sup>ディア・セイント</sup>も〜．．．わかりたくれしゆるけどわかるりゆ!!．．．でもくなく〜で『単眼の巨師』<sup>キユク・ロボス</sup>なんですかね〜ヒツク．．．私の方がもつとず〜と前から．．．」

「そ、そうだな．．．うん、わかるぞー．．．」

先ほどからもはや何回目になるかわからない話だ  
要するにフィルヴィスは『戦場の聖女』と『単眼の巨師』、特に後者の方までも未来嫁として認められたことが納得いかないらしい

まあ、わからない話ではない

フィルヴィスが彼を想う事、数年

それまで恋人である『全能者』<sup>ペルセウス</sup>以外浮いた話一つなかった彼に突然のスキャンダル

しかも同時に二人

『戦場の聖女』<sup>ディア・セイント</sup>については、彼の愚痴をフィルヴィス経由で聞いていたその強烈すぎるアタック．．．いやもうあれは奇行・狂行の類だ  
だが、まさかそれが成就するとは夢にも思わなかった

彼女が彼に行った行動を知った上で今回の話を聞いたら、全ての神が彼の懐の大きさには感服するのではなからうか

そして突然出てきた『単眼の巨師』<sup>キユク・ロボス</sup>

彼女に関しては優秀な鍛冶師として神会<sup>デウミナス</sup>でたびたび取り上げられていたが、それ以外、特に異性との関係については言及されたことはない

だというのに今回のスキャンダルだ

『戦場の聖女』<sup>ディア・セイント</sup>だけでなく、ひよっこり出てきた『単眼の巨師』<sup>キユク・ロボス</sup>に出し抜かれたフィルヴィスの心中は察するに余りある

だが、私が思うに彼に対してフィルヴィスに未来嫁になれるチャンスがあるかどうかと問われれば．．．

間違いなくある!!

なにせ今回、『切札』<sup>ジョーカー</sup>が救援に向かった切っ掛けは、共にダンジョンに潜ることが多く、親交も深かったフィルヴィスを助けるためだ。たとえ仲間として大事に思っけていても、それだけで下層までほぼ単独で救出に向かうだろうか。

そこに特別な思いがなかったとしても、それが男女としての感情に変わるのには難しくないはずだ。

ではどうやってその切っ掛けを作れば良いのか。

これが冒険者同士となると意外と中々難しい。

普通の男女であれば色々思いつくのだが……

そんなフィルヴィスのこれからの恋路について考えを巡らせていると

「おじゃましてま〜す……って、なんだこれ……今日は宴会か何かあったのか？」

扉の外に見知らぬ人物……というかローブで身体を隠し、顔もマスクで隠している怪しさ大爆発な者が立っていた。

「誰だ!？」

「ああ、いや、すんません、人が居る気配はあるのに外から呼びかけても誰も応えてくれなかつたもので」

そう言つてその人物が顔のマスクをとる

「君は——」

「はは、どうも、お久しぶりです」

晒した素顔は少し意外な人物だった。

「あ〜〜カイトだー! あははははは」

「おうフィルヴィス久しぶつ……て酒臭つ!？」

「カイト〜カイト〜」

フィルヴィスがよろよろと彼に近づきそのまま抱きつく顔と顔をグリグリと押し付ける

「ちよ、フィルヴィスなんかキャラが違いすぎませんかねえ!」

「いやあ、少し飲み過ぎたみたいだね」

「ディオニユス様、あんたどれだけ飲ませたんですか!」

「それは、私も知りたいくらいいさ、なにせ私が帰ってきたら既にこの有様だったからね」

「ええ・・・マジですか?」

彼が少し呆れていると

「うわーん、なんでええー私の方がーうわーん」

彼に抱きついていたフィルヴィスが今度は幼子のように泣き出した

「ええ、ちよっ!」

「ほら、フィルヴィス、彼にあまり迷惑をかけては――」

「しゅびくくZZZZZ」

「寝てるう!」

大量の酒を飲んでいる最中に泣くことで疲れてしまったのか、彼の腕の中でスヤスヤと寝てしまっていた

「・・・」

互いに顔を見合わせてなんとも言えない微妙な空気になってしまった

「えーと・・・とりあえず聞きたいんですけど、何でフィルヴィスがこんなことに?」

いや、原因は君だぞ君

まあここだけ見て全ての情報を把握しろというのは無理があるか

「まあ、乙女には色々あるらしいよ?」

「はあ、そうなんですか・・・」

「すまないが、この子を部屋まで運ぶのを手伝ってくれないか? 私の細腕だと一人運ぶのは骨が折れる」

「それぐらいは別にいいですよ、ついでに他の方々も運ぶんで部屋の場所とか教えて下さい、こつちもちよいと頼み事があつて来たんでその代金代わりつてことで、あ、ディオニユロス様、俺片腕なんでお姫様抱つことか洒落てるのは無理なんでフィルヴィスを背中に乗せて下さい」

「それくらいなら、私でも手伝えそうだ」

この後フィルヴィスや他の団員を部屋まで運んでくれた彼と少し話をした

そのおかげでフィルヴィスにとって有益な情報を手に入れることが出来た

多少の見苦しい姿を彼に見られてしまったがこの情報は彼女にとってお釣りが来るものだろう

明日、彼女にこの情報を教えてあげるのが楽しみだ。

翌日。

私は『切札』<sup>ジョーカー</sup>本人から聞いた情報をフィルヴィスに伝えるためルン気分で彼女の部屋に向かっていた

この情報を聞いたときのあの子の反応が楽しみだ

『切札』<sup>ジョーカー</sup>から聞いた、『切札』と言える情報・・・フッフ、おっと自分で言つて自分で笑うのはいかんぞ私、これではおっさんだフッフッフ

あの子のために手に入れた情報を伝えられる嬉しさに、らしくもない親父ギャグまで呟いてしまう

テンションが上がっているのか、あの子の部屋を通り過ぎてしまう

所だった

コンコン

「フィルヴィス私だ、部屋に入ってもいいだろうか？」

淑女の部屋に入る当然の礼儀として部屋のドアをノックする

だが

「・・・？」

物音はすれど返事がない

(・・・考えてみればあの子は昨夜はかなりの量の酒を飲んだのだ、二日酔いで苦しんでいるのかもしれないな)

怪訝に思ったが昨夜の惨状を思い出し、失礼ながら勝手に部屋のドアを開ける

「すまないフィルヴィス、入るぞ——・・・!?!」

そうして部屋に入った私の目に飛び込んできたのは自らの喉元に短刀を突きつけ様としている姿だった

「どわああああああああ!?!何をしているフィルヴィス—————!?!」

咄嗟に飛びつき刃部分をあえて握る、もし無理にでも引き抜けば私をの手のひらはサククリと切れてしまうだろう

だが、心優しいこの子は私を傷つけないようにそんなことはしないという計算もあつての行動だ

「お離し下さい、ディオニユス様!!」

「お、落ち着くんだフィルヴィス!」

私がナイフをなんとか手放すように器用に暴れるフィルヴィス  
「私はあるような失態を犯してまで生きては・・・」

その最中に動きがピタリと止まる

「え?嘘?ちよ!」

何故ならフィルヴィスの顔がみるみる内に青白くなり

「オロロロロロロロ~~~~」

「ぎやああああああああああああああああ!?!」

## 大惨事

まあ、おかげでフィルヴィスの狂行がとりあえず止まったのでよし  
としよう

《side out:ディオニユス》

|||||  
|||||  
|||||



39：奮闘×号泣 中編

|||||  
|||||  
|||||

《side：フィルヴィス》

目が覚めると見慣れた自室の天井だった

（あれ？私は昨日何を——つぐうううう!?）

目覚めは最悪だった、身を起こした瞬間に激しい頭痛と嘔吐感に襲われる、完全に二日酔いの症状だ。

「確か昨日・・・ぐう!？」

思いだそうとすると激しい頭痛に襲われる

痛みに耐えながら昨夜のことを臆気に思い出してきた

（確か、カイトの嫁の話聞いて、自棄になって酒を——）

そう、私は昨夜、彼の話聞いて自棄酒をした

問題は途中からの記憶が穴あきチーズの様な状態になっている、この部屋のベッドに自ら身を沈めた記憶もない

自分で無意識に戻ってきたのか、それとも誰かが部屋まで運んでくれたのか

「・・・ん?」

枕元を見ると、見知らぬ手紙が置かれていた

宛名を確認すると

「?????カイト?」

彼の名を呟いた瞬間、思い出される自らが行った狂行

「?!?!?!あああああああああー!?!」

昨夜の記憶が一気にフラッシュバックしてきた

自分が彼やディオニユス様だけでなく仲間達にも晒してしまっ

た醜態に頭を抱える

(酒に酔っていたとはいえ、私は何ということをつ?)

仲間にはかなり強引なアルハラ

尊敬する主神には偉そうに上から目線で絡み酒

さらにはカイトに自身を擦り付ける様に抱きつき、あまつさえ子供のように泣きじやくる姿まで見られた

エルフとしての誇りが普通もしくはそれ以上である私は当然の帰結としてある答えにたどり着く

「……死のう」

冗談抜きでそう思った。

———そう思ったのが十数分前

「フィルヴィス、落ち着いたか?」

「むー!?むむー!!」

私は他の団員達に猿ぐつわを噛まされ、拘束されていた

あの後、口から出す物を出してからグツタリした私はディオニユソスが呼んだ他の団員に念のためにと拘束されていた

実際、拘束されていなければ間違いなく自害していただろう

「フィルヴィス、私は気にしていない、だから私の話をとりあえず聞いて見ないかい?」

「むむむー!!!」

返事をしようにもしゃべることが出来ない

「えっと……外しますね」

見かねたアウラが私の猿ぐつわを外してくれた

「くっ……殺せ!!」

「まさか、自分の子の『くつ殺』を聞くことになるとは……」

何故かディオニュソスが感慨深そうな感じで驚嘆していた

「昨夜の失態に続き、ディオニュソス様にあのようなこと……もはや死んで償うしか……」

自分の主神に私の……ア、アレを吐き掛けたとか

……死にたい

思い出すだけで、羞恥と後悔、その他もろもろの感情だけであああああああああ——となる

そんな風に塞ぎ込んでいると

「ふむ、フィルヴィス……私は本当に気にしていないし他の者達も同様だ、どのような神であろうと人であろうとこういったことはある、だから君も気にするな、これは主命だ。君の命をこんなことで散らすことを私は決して許可しない——いいね?」

「!!」

神威と一緒に私の身を案じる優しい言葉に拒否などできるわけがない

これほどの狼藉を働いた私にこれだけの言葉を掛けてもらえる、この方の眷属となれたことを誇りに思う

改めて己が主神の慈悲深さに感銘を覚えた

「——はい、この罪、償うためにもこれからより一層の献身を尽くすことを誓います。」

「ああ、期待している、私のかわいい子よ」

「はっ!」

私が改めてディオニュソスに忠誠を誓っていると

「——それよりも、だ」

「……?」

「実は昨日、『ジョーカー切札』が訪ねてきたんだが……覚えているかい?」

雰囲気を変えてディオニュソス様が確認してくる、その表情からは話したくたしようがない噂好きの神々と同じ気配を感じる

ちなみに他の団員は先程のやりとりの後退出している。

「は、はい……ですが途中から記憶が」

かなり記憶が朧気だが彼がここを訪ねに来たのは覚えている

(・・・いや、待て)

なぜ今ここを訪ねたのだ？

少し冷静になれたことで今の時期に彼がここに現れたことに疑問が生じた

今や『ジョーカー切札』という存在はイヴィルス闇派閥達にとって仇敵認定、抹殺候補の

第一位

さらに情報や噂好きの神々にも注目され、オラリオで最も注目を集めている人物の一人となってしまうている

そんな彼が何故？

「彼がここを訪ねた理由はフィルヴィスに頼みたいことがあったからだそうだ」

「私に・・・ですか？」

「ああ、私は教えてもらえなかったが、頼み事の詳細は手紙に書いてあるそうだ」

「手紙・・・あ、そういえば枕元に！」

色々あつてすっかりその存在を忘れていた

「おそらくそれだ、中を確認してもらってもいいかな？おそらく他言無用系の内容のはずだ、君だけが確認するの方がいいだろう」

その言葉に従い、蠟で固めてある封を開けて手紙の中に目を通す

『 拝啓 フィルヴィス・シヤリア様

かなり泥酔していたみたいなんで手紙に頼み事を書いておく

少し身を隠すついでに里帰りすることにしたんだが、イヴィルス闇派閥に俺がオラリオに居らず里帰りしているとわかるのは故郷の家族の身の安全的にヤバイ

それを誤魔化すためにラウルに普段の俺と同じ格好をしてもらって影武者みたいなことをやってもらうことになった

そこでダラウルが偽物とばれないようにフィルヴィスにサポートを頼みたい、同じファミリアの連中ばかりだけだと偽物とバレる可能性

があるからな 頻度は週に1回位だ  
ぶつちやけ他のファミリアで頼れるのはお前だけだ

報酬は別途に請求してもらってかまわないからどうにか頼む！

PS

フィルヴィスがあんなに酒好きとは知らなかったぞ

故郷から帰ったら、偶にはラウルも交えて三人で飲もうぜ。

あ、お嬢はジューズな、あいつ酒乱だから絶対飲ますなよ！

カイト』

「なるほど、確かにこれは私が適任だな・・・ふふ」

「・・・フィルヴィス？」

他のファミリア所属の私がカイトに扮したラウル・ノールドと接触する所を誰かに目撃させることで影武者が本物であると信憑性を持たせる、少し心配しすぎないでもないが念には念を入れてということなのだろう

だが、そんなことよりも私の心をくすぐるのはとある一文

『頼れるのはお前だけだ』

「くふふ」

「あの・・・フィルヴィスさん？」

い、いかん、けっこう重要な頼み事なのに顔の口角が勝手にせり上がっていく

『頼れるのはお前だけだ、フィルヴィス』

妄想で勝手に言葉が付け足されていく

『頼れるのはお前だけだ、俺の愛するフィルヴィス』

(ほあああああああ!?)

いかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかん  
いかんいかん

これ以上はいかあああーーーーー

!!

「ちよっフィルヴィス!? 顔がすごいことになってるぞ!? 正気に戻れ！」

「はっ!?!」

ディオニユス様の声で何とか現実に帰還できた

あ、危なかった、もう少しで妄想の彼方に旅立つところだった

「手紙の内容はそんなに驚く内容だったのかい?」

「・・・えっと、そのく」

まさか手紙の一文から妄想が大爆発したとは口が裂けても言えない

かといって嘘を言えば冗談抜きで神にはすぐにわかってしまう

「詳細は言えませんが・・・大まかに言うとな今回の事件で動きにくくなったので、身を隠す際には協力して欲しい、とのことですよ」

嘘はいつていないし、そもそも私のテンションがおかしくなったのは依頼内容とはほぼ無関係な部分だ

「なるほど・・・色々疑問もあるが何かしらの事情があるのだろうか、だがあんなことがあってもフィルヴィスは彼の頼みを聞くのかい?」

ディオニユス様の疑問も最もだ

惚れた男が他の女を次々と嫁にしているのだ、普通なら幻滅してあきらめるだろう

だが、私はカイトという男がそのようなことを易々とする人物ではないことを知っている

きつと何かしらの事情があったのだろう

まあ、昨夜はそれでも幾ばくかのショックを受けてヤケ酒をしてみたのだが時間が経ち冷静になってみれば自然とそのような思えてきた

「はい、彼に何があるかと私の中にある気持ちに変わりはありません、どうやら私は自分が思っている以上に恋愛事についてはあきらめが

悪いようです」

「まったく『切札』<sup>ジョーカー</sup>も中々罪な男だな、こんなに可愛いフィルヴィスを知らずに振り回すとは」

「まったくです・・・ふふふ」

私も自分の気持ちを再認識したことで何故か笑いがこみ上げてきた

「だが、それが聞きたかった、やはり昨夜手に入れた情報は君に伝えなくてはならないようだ」

「・・・情報？」

「なくに、昨夜は彼と共同作業したおかげで色々話す機会に恵まれてね、その際に―――手に入れたんだよ」

「何をですか？」

「フィルヴィス！」

「は、はい！」

いきなり正面から肩を掴まれ真剣な顔でディオニユス様がこちらを見てくる

「君が『切札』<sup>ジョーカー</sup>の第四の嫁になれるかもしれない情報をだ!!」

・・・え。

|||||

あれから二日

「・・・ここが彼女達の研究工房か」

場所はオラリオ北東の工業区、その中のある場所に私は訪れていた。

ディオニュソス様がカイトから聞いた話によると今回の嫁騒動はカイトの身を守るため遂に恋人である『全能者』<sup>ペルセウス</sup>がぶち切れて、一線を越えたことから始まったらしい。

カイトと『全能者』<sup>ペルセウス</sup>には共通の夢がある

それについてはカイトから共に行く冒険の道すがら、将来は『全能者』<sup>ペルセウス</sup>と共に魔道具の売買もできる飲食店を開きたいと聞いていたので知ってはいいた

他にも色々ありそうだったがそれ以上はいつも誤魔化されて聞けたことはない

冒険者として富を求め、それを足がかりに夢を叶える

よくある夢を叶えたいだけの者が酒の席で語るような話だ、まあカイトほど実力があり稼げる冒険者であれば夢物語ではなく相応に現実味を帯びた話になる

だがダンジョンというのは何が起こるかわからない

オラリオ最大派閥のロキ・ファミリアに入団できたとはいえ探索がメインのファミリア

『全能者』<sup>ペルセウス</sup>は決してカイトの前で表に出すことはなかったが日々カイトの身が心配で心配で堪らなかつたらしい

そんな時に今回の事件

左腕を失ったカイトを見て彼女は思ったそうだ

やはり、自分が養ってでも冒険者にはさせるべきではなかった

探索がメインではなくても自分と同じファミリアに入れて常に監視・・・監視しておくべきだったとか

もつとサポートできる何かしらの魔道具を創って渡しておくべきだったとか

そんなことがグルングルン頭の中で何度も反芻したとのことだ

普通の者ならそんなことをいつまでも考え続けるのだろうか  
『全能者』<sup>ペルセウス</sup>は優秀な人物だ

落ち込んだ後、即座に行動を開始した

目的はカイトの身を今よりもさらに支えること

ロキ・ファミリアと自分ではできないことをサポートできる人材を



求めた

そして都合の良いことに彼には彼自身を慕う女性、しかも先程言ったファミリアと自分だけではサポートできない部分を請け負うことのできる人材が偶々その場に揃っていた

魔法薬や回復・治療で彼を支えることの出来る人材

『戦場の聖女』ディア・セイント アミッド・テアサナーレ

武器や防具で彼の装備を支えることの出来る人材

『単眼の巨師』キユククロブス 椿・コルブランド

前者は言わずもがな、後者もカイトの専属鍛冶氏ということによって彼に悪い気は持っていない、それどころか話してみたらどうやらカイトにかなり興味があるようだった

即座に彼女はこの二人を勧誘した

現状自分が思っていること、考えていることを吐露しながら

それに対して『戦場の聖女』ディア・セイント が求めたのは彼自身

以外にも『単眼の巨師』キユククロブス までもが同じ様な条件を出してきたらしい

『全能者』ベルセウス はいくつかの条件を逆に飲ませることで彼女達の要望を飲み込んだ

そして『全能者』ベルセウス が彼女達に飲ませた条件

- 1：彼を全力で支えること
- 2：男女としての関係では正妻である自分を立てること
- 3：将来、カイトが経営するであろう店内でそれぞれ得意分野の商品を売ること

この三つだ

これを飲ませることで『戦場の聖女』ディア・セイント と『単眼の巨師』キユククロブス をカイトの未来嫁として認めたそうだ

端的に言おう



## 40：奮闘×号泣 後編

|||||

《side：フィルヴィス》

『ペルセウス全能者』ことアスファイに認められた

なぜこんな速攻で、と思ったが

「あなたのことは彼からよく聞いていましたから」

どうやら向こうは私のことをカイトから聞いて知っていたそうだ

そりやそうだ

私の方もカイトからアスファイのことを惚気話の一つとしてよく聞いていたので初対面ながら相手のことをお互いによく知っているという奇妙な出会いだった。

それに認められたと言っても、もちろんタダではない、先ほどの条件に加えて私には他の条件も加えられた。

その条件は今回のカイトの義手に使う素材集めを手伝うことだった

そりやあもう、私は馬車馬の如く働いた、というか働かされた

西に貴重な素材があれば交渉し

東に必要な素材がクエストの報酬としてあればダンジョンに奔走し

北に南にと駆けずり回った。

さらに私にはカイトから頼まれたカイトに扮した影武者のラウルと定期的に会うという任務もあったので日々をかなりの激務に追われた

(だあああああ!?!い、忙しすぎるうーうー!?!)

だが、アスファイは割りと容赦がなかった。

素材を手に入れたらすぐに次の素材のために奔走させられる  
ホームに帰れば疲労困憊でベットにすぐに倒れこむ日々が数日続  
いた

—————ああ・・・私の身体がせめてもう一つあれば・・・

なーんて思っていたら『分身魔法』とかいうとんでもない魔法が発  
現してた

魔法は自信の心の底からの願望や願いから影響を受け発現するの  
だが・・・私はどれだけこき使われているのだ

ちなみに、この魔法は実態を持った私をもう一人生み出すという希  
少魔法だ

分身も魔法が使えるのでどんどん人数を増やすことが出来る

デメリットは分裂すればするほど弱くなることだろう10体を超  
えたところでそこらへんに居るバツタとかセミが身体にぶつかった  
だけで消滅するくらいに弱くなる

バツタ相手に長年のライバルとの決闘みたいに善戦する自分を見  
るのは情けなかった

・・・あれは見て悲しくなる、自分の姿なので尚悲しい

私は4人以上は増やさないと硬く誓った。

そんな情けないこともあったが、この魔法のお陰でかなりの貴重な  
素材を次々と手に入れることが出来た。魔法があつたとはいえ自分  
でもよくこれだけ都合良く必要な素材を集められたものだと感心す  
る。まるで見知らぬ親切な精霊が導いてくれている様だ。

そんな風に日々を過ごしている時にふと思った

アスフィは何故こんなにも簡単にカイトの女を増やすのだろうか

いや、カイトを支えるための人材集めということは知っている

知ってはいるが私であれば感情のほうに納得しないであろう出来

事だ

そんな事を他の二人——椿とアミッドに言ってみたと

「ふくむ・・・確かに、手前はあいつの身体目当てで嫁になったようなものだからなあ、あまりそういういった男女の機微には疎い」

「ええええ、かかかか身体!？」

突然放たれた言葉に動揺しつつ椿の体に目を向ける

(・・・で、でかい)

健康的な身体にサラシをしていても動くたびにプルンプルンと揺れる胸

おそらくカイトの女性関係者では最も大きい・・・それに比べて自分は

戦力差はざっと見てもイチゴとメロン

いや、どっちもおいしい果物だ差別 yokunai

カイトならばどっちもおおいしく頂いてくれる

エルフはスレンダーな体型が多いためどうしても胸の大きさといったことでは他の種族に劣ってしまう

ぐぬう・・・やはりカイトも男だ、こんな貧相な胸ではなくこういつた出る所が出ている異性の方が好きなのだろうか

もしも初夜で

「ちつき・・・あくやっぱ椿みたいな巨乳がいい」

『ガーーーーーン!』

等となった日には首を吊れる自信がある

勝手に一人で被害妄想の囚われているところにアミッドが待ったを掛けてきた

「あー・・・フィルヴィスさん、彼女のセリフで何を想像してるのか知りませんがたぶんご想像してるのとは大分違いますよ」

「そ、そうなのか?」

「あつはつはつは、すまんすまん!手前の言い方が悪かったな、手前の

言う身体というのは語弊でな、目的はあいつのスキルだ」

落ちて聞いて聞いてみたら椿はカイトのスキルで顕現する武器に非常に興味があるとのことだ

「これを見てみる」

そういつて突き出してきたのは刀身がボロボロで一部は何故か炭のように真っ黒、柄と唾の部分を残して崩れて砂にでなりそうな状態だった

「随分と使い古された刀・・・なのか？」

「ふふふ、おもしろいものを見せてやろう」

「なにを・・・」

そう言っている間に椿がその刀身を地面に向かって振り下ろす

一体何をするつもりなのか、そんな状態の刀を地面に向かって振り下ろせばLv.4の椿の力でなくとも粉々になってしまいうだろうに、そう思っていた

だが

ガキーン

という硬質音とともにボロボロの刀身が地面に埋まった

(・・・壊れないだと)

地面は石だ、こんな様相の武器が耐えられる硬度ではない

「ふふ、驚いたか？」

得意満面といった風な顔でドヤる椿

「こいつは先の事件でカイトが使用した刀だ、なんでもスキルでこの刀に力を憑依させたんだそうだ」

「あの、巨大な鎧武者を顕現させたやつか」

「そうだ、ちなみにこいつは『不壊属性』付だ」

「馬鹿な!？」

『不壊属性』、攻撃力は第一級武器には及ばぬ代わりに、その名の通り決して壊れることのない武器がもつ属性だ

その武器は切れ味や攻撃力が落ちはするものの、決して壊れること

のない武器として数多くの冒険者に好まれて使用される

だというのに目の前の刀の様相はどうだ

これ程の状態で地面に叩き付けても壊れないことからこの武器が『不壊属性』<sup>デュランダル</sup>であることは疑いようがない

「元からこの様な状態の武器であった訳ではないのだな？」

「当たり前だ、手前が打ってやったときは綺麗な波紋付きの立派な刀だった、かなりの自信作だったのだが・・・それがこの有様よ、笑うしかあるまい」

「その、なんだ・・・鍛治氏というのは自分が打った武器を壊した者を好きになるのか？」

「んなわけがあるか！まったく・・・儂が気に入ったのは彼奴のスキルで強化された刀を見たのが切っ掛けだな・・・あれはすごい、今の手前では決して打てん刀だ、入団の際に魅せられた主様の武器よりも魅せられた、手前はもう一度あれが見たい、触りたい、この手で確かめたい、そして彼奴のスキルに耐えうる武器を打ち、さらにそれを超える武器を打つ!!・・・そのためにも他派閥のファミリアでも彼奴のそばに居ることの出来る状況や立場が欲しかった」

それを聞いてなんとというか

・・・椿にとつてどうやら嫁という立場は利用するだけのものらしいと感じた

彼という人間を愛する者にとつてあまり面白く感じることできかない話だ

そう思っていたのだが

「まあ、手前は男女の蜜事には興味がないわけではないが・・・お主たちより大分薄い、とは言ってもだ、一応親に孫の顔ぐらい見せてやりたいという孝行心くらいはあるのでな、それに――」

「それに？」

「何というかな・・・『もしも旦那にするなら誰か？』と、らしくもないことを考えたときにカイト以外の顔が思い浮かばなくてなあ・・・こりや今を逃したら一生武器を打つだけで終わりがねんと僅かに残っていた乙女心が焦ってな・・・まあなんだ・・・嫁になった」

快活に笑うのが印象の椿が恥じらいながらも放った言葉を聞いてその考えを思い直した

「どうやらしっかりと彼を想う心を持っているようだ」

「というか、手前は何でこんな小つ恥ずかしいことを暴露することになっているのだ？」

「そういえば何でだっけ、私も椿の発言で最初の部分がすっ飛んでしまった」

「確か、アスファイが何でカイトさんの嫁を増やすことを我慢できるのか？・・・とかが最初じゃなかったですか」

「あ、そうだった」

「おお、そうだったそうだった！ うむむ・・・手前はわからんがアミツドなら心当たりがあるのではないか？」

「私がアミツドに視線を向けると何故かすごく嫌そうな顔をされた」

「知ってますけど・・・これってアスファイのすくすくすくすくすくすく・・・傲慢な考えですよ」

「傲慢？」

「単純ですよ・・・彼女は今回の件で自らが死んでしまった場合のことを想定して動いたんです・・・自分が死んでしまってもカイトさん支えられる人材、代わりが居ればカイトさんを身体的にも精神的にも支えられるって思ったんでしょね」

なるほど、死後のことまで考えてまで彼を支えようとするその姿はまさに良妻賢母の鏡と言って良いのかもしれない

「ふむ・・・そのどこが傲慢なのだ？手前にはただの良い女にしか聞こえないが」

確かに

「何を言ってるんですか・・・まだアスファイがカイトの嫁を増やす気なのだとしたら今の私達だけでもカイトさんにとってアスファイ一人に釣り合わないって言ってるようなものですよ？・・・これが傲慢じゃなくて何なんですか、まったく！」

言われて私も椿もようやくそのことに気付く



「くかかかか！確かにそれは傲慢だな！」

「ふふ・・・だが、おかげでこうしてカイトと共に居られることになったのだからその傲慢に感謝しなくてはな」

「まあ、そうなんですけどねー・・・あ、フィルヴィスさん次の素材はこれをお願いします」

雑談が一区切りした所で急に話が変わりアミッドから追加素材の要求がきた

「了解し・・・ん？」

渡されたリストには素材の名前がいくつも書いてあるが・・・

「おいどういことだ・・・ここにかいてある素材は三日前に持ってきてやっただろう!？」

「実験に失敗しちゃいました」テヘペロ

アミッドが手に持つのはどろりとした何かが入った小瓶、あきらかに実験で失敗してできた廃棄物だ

(頑張って集めた素材がゴミに・・・)

「なら手前も鉄鉱石と火炎鉱石を追加で頼む」

椿からも追加発注が・・・いや待て

「そっちは昨日持ってきてやったばかりだろうが!!」

「打ち損じてしまったな」テヘペロ

椿が手に持つのは黒焦げてひしゃげた鉄のクズ

・・・おつふ

拷問の一つに穴を掘らせてからそれを埋めさせるといふ行為を何度も繰り返しさせるといったものがある

初めて聞いた当初はそこまでできつくないだろうと思っていた

だが、何度も貴重な素材を集めても延々とゴミにしてくるこいつらの相手をしてよくわかった

「んぬああああああああー！！？！？」

これはキツイ

《side out:フィルヴィス》

|||||  
|||||  
|||||

————— それから数ヶ月後

|||||  
|||||  
|||||

《side:カイト》

「こちらです」

アスファイ達に工房内を案内され、真ん中の台座に鎮座している義手を見せてもらった

「これが—————」

腕を失ったのは悲しいしショックではあった

だが、目の前の腕を見てそんな思いは吹き飛んだ

本物の腕と見間違えるくらいに精巧な造形

それが本物ではないと証明するかのよう<sup>に</sup>重厚に光り輝く銀の光

沢

何よりも自分を惹き付けるナニか

「・・・すごいな」

何がすごいのかはまだわからないのに、そんな言葉が自然とまろびでる

でも仕方が無いだろう、そんな言葉しか出てこない、気分はシヨウウインドウに張り付いてトランプペットを眺める少年だ

「さっそく付けてみましょう」

「お、おう」

アミッドが義手を持って俺の切断面を覆うように義手に埋める

「うおお!」

ハマった瞬間にビビった

「驚いたか?」

椿がこちらを見てイタズラが成功したとでも言いたげにニヤニヤと笑っていた

「そりゃ驚くだろ・・・これは」

腕を付けた瞬間に義手から触感が返ってきた、切断面と接触している部分からと言うわけではなくアミッドが触れている義手の部分からである

「義手で触れている部分の触感が・・・まじかこれ」

しかも自分の意思で自在に指や関節まで動かすことができる、それこそ腕を失う前と寸分変わらない精度でだ

感覚としては突然失ったはずの腕が生えてきたみたいだ、戸惑ってしまったのも仕方がないだろう

前世の最先端科学技術でもここまでのは出来ていなかったはずだ

まさにファンタジー万歳ってやつだ!

「なあ、魔道具の義手ってのは全部こんなにすごいのか?」

「二「そんなわけないでしょう」です」だろ」

「ありや、そうなの?」

3人曰く、何でも俺の腕そのものを素材として使用し、なおかつここに居るのが魔道具・生体・武具、それぞれのスペシャリストだから

こできた芸当・・・かもしれないとのことだ

かもつてなんだ、なんで最後の部分だけ自信なさげなんだ  
まあいいや

俺の嫁たちマジですげえつてことでいいのだろう

・・・ふむ

新しく俺の腕となった義手を改めて見る

手を握ったり開いたりして軽く動き、誤差がないかを確認する

んふ

んふふふふふふふ

一度言ってみたい台詞を言っちゃおう

パーーーフェクトだあああ!!

アスファイアミッドつばきいいいーなーなー!!

ひゃっほう!!!

機械っぽい腕!

色は輝くシルバー!

それでいて腕の部分はリアルすぎず、かといってゴツすぎず

男のロマンだなこれ!

コブラのサイコガンでも付けているような気分になれるぜ!!

ヒュー♪

・・・まあ強いて問題を挙げるとすれば身体の自重バランスだな

この数ヶ月ですっかり片腕のない状態に慣れてしまった、しかも義  
手は元の腕と重さが同じわけではない

(こりゃあ感覚取り戻すのに大分リハビリせんといかん)

こればかりは仕方がないと思っっていると

「カイト、裏に少し開けた場所がある、手前に付いて来い・・・慣らす

ためにちと軽く仕合うぞ」

「助かる・・・手加減はいるか？」

「あつははっははは!!手前相手にできるものならやってみるがいい!!」

「お、言うねえ〜」

すぐに椿と模擬戦形式で試運転がてら軽く義手を動かしてみることにになった

## 結果

一時間くらいで慣れた

思っていた以上に慣れるの早かったわ

まあ、これほど早く慣れたのもこの義手の性能によるところが大きい

なにせこの義手、俺の思い通り自在に動くだけでなく激しく動いてもまったく外れる様子はなかった

なんでも一定の動作をしつつ手順を踏まないとそれこそ腕が千切れない限りは外れないそうだ、戦闘面として見れば最高としか言いようがない

義手で一番の懸念は戦闘中に外れることだったからな、戦闘中の心配が無くなるだけでかなり精神的な負担が減る

強度の方は素材構成の7割がミスリルのためアダマンタイト程の強度はないが、俺の場合は【念】で強化できるのでむしろ魔力等を通しやすいミスリルの方が都合が良いので問題ない

試しに椿の打ったアダマンタイト製の武器と【念】で強化した義手の拳とで打ち合ってみたが、傷一つ付かない所か逆に向こうの方にヒビが入った

「手前の武器の方が負けるとか・・・ぬぐううううう〜!!」

そのことでめっちゃ椿が不機嫌になった

いや、どっちもお前が造つたものには変わりないんだから拗ねるな

や

強度や基本動作の確認の後はこの義手の戦闘以外での様々な機能の説明を受けつつ試運転を行った

こんな機能いるかあ？と思う様なものもあつたが概ね期待以上の義手であつたのは間違いない

つかぶつちやけメンテナンスを欠かさなければ元の腕よりも良いかもしれない

感心しながら、よくもまあこんなとんでもない義手を造れたものだと言つたら

「いや、まあ私たちにかかればこれくらいは・・・ねえ？」

アスファイよ、何故顔を背けるんだ

「そ、そうですねー・・・で、でも・・・スペアが二本くらいしかないので気をつけて使ってくださいねー・・・アハハ・・・」

とんでもなく胡散臭い笑顔でアミッドが笑う

「そ、そうだな、手前でも、もう一度同じのを作るのは・・・なあ？」

下を向きつつポリポリと頬を掻く椿

「・・・やつぱこれだけの物だとまた造るのは難しいのか？」

「二・・・えつとくく・・・」

何故か三人が目を逸らす

さつきから義手を褒めたりすると三人がととてもとても複雑そうな顔をするんだが・・・何故だ？

問

オラリオの大通り、そこを片腕が義手の冒険者が一人軽快な足取り

で歩く

というか俺だ

冒険者の多いこの街では義手を付けているの者は珍しくないため、  
大手を振って歩いても特に目を引くことはあまりない

久々のオラリオを両手を下げて歩くことのなんと清々しいことか

あ、ちなみに故郷の村からオラリオに帰ってからはフィン達に帰還  
の挨拶を手早く済ませてからアスファイ達の工房には向かった

さすがに自分の所属するファミリアよりも義手の受け取りを優先  
するほど薄情ではない

うーむ、この腕をあいつらに見せたときの反応が楽しみつか、  
ぶつちやけ自慢したい

気分は新しい家電を使って自慢したがる調子に乗った若者である  
「それで、俺に紹介したい人物って誰なんだ？」

隣を歩くアスファイに声を掛ける

俺とアスファイは二人でギルドに向かって歩いていたら、アスファイから  
今回の件で俺に紹介したい人がいると言われたからだ

聞けば、何でも今回の義手を造るために素材集めを主導してくれた  
人物らしい

うむ、そういうことならきちんと感謝の言葉を俺から伝えねばなる  
まい

「簡単に言うとなあなたの嫁ですね・・・四人目の」

「ふくん、俺の嫁なのか・・・そつか・・・うん・・・んー！？」  
今なんて言ったんだ、この嫁は？

四人目？

え？

は？

ナニソレ？ ナンデスカソレ？ ダレノ？ オレノ？

困惑の余り俺の思考がフリーズする、というか文字通り俺は固まる  
そんな俺を無視してツカツカと歩き去るアスファイ





も共にダンジョンに潜ったことでよく知っている、今思えば出会いの切っ掛けもこいつが仲間を庇って責任を取ろうとしたからだったな、ふふ・・・まだ一年前なのに妙に懐かしいな

そんな責任感の強いフィルヴィスが自分の救出のために来た仲間が腕を失うほどの負傷をしてしまったらどれほどの責任を感じてしまうのかは察するに余りある

そうきつとフィルヴィスは思い悩んだはずだ

腕を失った俺に借りを返すためにどうすばいいのか、何をすればいいのか

ああ・・・今思えば故郷の村に帰る前にべろんべろんに酔ったフィルヴィスに会ったが、もしかしたら飲まずにはいられないほど自分を追い詰めていたのかもしれない

くつ、仲間のそんな状態にすら気付かなかったとは・・・一生の不覚っ！

「フィルヴィス、今回の件で自分の身まで捧げようとするお前の責任感の強さはわかってるつもりだ」

「え、いや・・・たぶんお前、全然わかって——」「いいんだ!!俺はこれほどの義手を造るためにお前が奔走してくれたそれだけで十分なんだ!!」

「いやいやいや!?カイト貴様なにを勘違いして——」

「俺は仲間を助けたかった!それだけなんだ!!お前を嫁にしたいとかそういった下種な思いは一切ない!!」

少し強めに言った言葉が響いたのか、広大だというのにいつも賑やかでうるさいギルドのロビーが静まり返る

・・・青臭すぎる台詞を言ったからだろうか

「う・・・ううっうう~~~~」

フィルヴィスが俺の言葉に感激したのか涙をポロポロと流す



つ名だけでなく、パーティを組むと片思いの者は確実に振られるとい  
う噂までされることになる。

## 41：暗黒×卵焼

|||||  
|||||  
|||||

《side：シル・フローヴァ》

私の目の前で目を覆いたくなるような光景が繰り広げられていた  
ちなみに場所は「豊穰の女主人」の廊下、そのトイレの前だ

ドンドンドン

「早く出ろにやー！ー！！」

ドアに継り付いて叫ぶアーニヤ

「こ、こうにやったら庭で・・・」

「バカ、んなことしたら、今度こそ『小巨人』<sup>デミ・ユミル</sup>に殺されるぞ」

悲壮な最終手段に出ようとするクロエとそれを止めるルノア

(乙女の会話じゃないなあ・・・)

目の前で三人の乙女がお腹を押さえながら内股で震えている

「んにやー！ー！！早く出てくるにやー！ーじゃないと、じゃないと

みやーが・・・はう!?」ピーゴゴゴ

同僚のアーニヤがお腹を押さええてピタリと微動だにしない

・・・一応、念のため少し

いや大分アーニヤから距離を取る、他の二人も同様にアーニヤから  
距離を取っていた

「・・・一応行つとくけど次はにやーが入るにやー」

「あ？ふざけんな・・・こつちの方がやばいんだよ、譲れ」

「いやにや」

アーニヤから距離を取った二人がどちらも顔を青ざめながら目線  
だけで火花を散らす

ちなみに少し乱暴な言葉遣いの方がルノア・ファウスト、今度から

ここで働くことになった新たな同僚だ

そしてアーニヤと同じ言葉遣いの方がクロエ・ロロ こちらも今回の件で同じくここで働くことになった子だ

そんな二人が険悪な雰囲気醸し出す

「んだと、やんのかこらあ!!」

「やってやるにや!!」

(・・・二人とも喧嘩してる余裕なんてあるのかしら?)

『ピーゴロゴロ』

「ハアアアウ!」

(・・・いわんこつちやない)

「はあ・・・三人ともトイレはここだけじゃないんだから、別のところでしてくれればいいのに」

「「それだ!!」にや!!」にや!!」

私のつぶやいた言葉が聞こえたのか一目散に外に駆け出す3人  
「間に合うといいのだけれど・・・はあ」

三人が見えなくなってから今現在トイレの中に居る彼女に声を掛ける

「リユー・・・その・・・大丈夫?」

『ピーゴロ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■』(彼女の尊厳のため耳を塞いでいる)

「おうとうとうとううう・・・だ、だいじょうでぐおおああおお!!」

「・・・全然大丈夫じゃないみたいね・・・」

四人がこうなったのはとある人物——カイト

さんの超が付くほどの怒髪天に触れてしまったからだ

まあカイトさんが怒るのも無理はないと思ってしまうほどのことをしてかしてしまったのだから仕方がないといえば仕方がないのだけれども

とりあえず今回のことで収穫のあったことといえは

「カイトさんを怒らせたならミア母さんと同じくらい怖いって事ね、教訓教訓。」

《side out : シル・フローヴァ》

|||||

|||||

《side : リュー・リオン》

|||||

仲間を殺され

敬愛するアストレア様とも別れ

復讐を遂げ

堕ちた私は今――

「おらあ!!キリキリ働け!!」

酒屋でカイトの監視の元、強制労働をさせられてる。

ちなみに私だけではない

「くっそく、こっちが体調最悪なのに遠慮がねえぞこいつ」

「うく・・・絶対ここから逃げ出してやるニャー!!」

「にゃーに至っては完全にとぼっちりにゃー!!?」

私と同じようにミア母さんの下で働くことになったルノアとクロ



それを見たカイトからの無慈悲な一言

「さっさと片付けて働け」

「「鬼か!?!」」

カイトがここまで激怒しているのにはもちろん理由がある

事件は昨夜起こった『黒拳』『黒猫』と呼ばれる凄腕の殺し屋に私が狙われたことが発端だ

ちなみに『黒拳』はルノア、『黒猫』はクロエだ

少し前の私なら恐らく何の抵抗もなく殺されていただろう

なにせここに来た当初の私は生きる意味などなく、それこそ放っておけば勝手に死ぬ様な状態であった

だが、そんな私の心を救ってくれた人達が居た

シルやカイトに店長、ついでにアーニヤ

シルには私がこれまでやってきた意味

カイトにはこれからも私が生きなければならぬ理由

店長には生きるための活力を無理矢理ではあったが発破を掛けられた

アーニヤには・・・なんでしょうか、愉快的な心地？

これからも生きる目的ができた私はその恩に報いるためにも全力で『黒拳』『黒猫』に抗った、途中からはアーニヤも参戦し善戦できていたが『黒猫』の毒で弱っていた私は『黒拳』に押され始めた

そしてその状況を覆すために私は『黒拳』の猛攻を避けつつ全力で魔法を使用した

結果



店長が第二倉庫を建てようとしていた店の裏庭はグチャグチャ加えて食材や酒が保管してある第一倉庫も半壊  
本店の方も壁が穴だらけ

結果の結果

店長：普段から怒りっぽい店長がマジ切れ

カイト：怒りを通り越した何かに変貌

店長にボコボコにされた後に全員が拘束され、そのままの状態マジ切れカイトの強制ディナーに御招待

気づけば目の前には丸い食卓が一つ、天井には魔石灯のランプが一つ怪しく卓上を照らしている狭い室内

そして椅子ごと鎖でガチガチに拘束された卓上を囲む四人

私、ルノア、クロエ、アーニヤ

今から拷問でも始めるつもりかと思っ……いや拷問でしたねアレ  
四人が現在の状況を掴みかねていると

コツコツと足音を立てて暗闇からエプロン姿のカイトが姿を現した

そのまま部屋の隅に設置してある小さな台所に向かい何かの作業を始める、その作業をしたままカイトがポツリポツリと独り言のように話し始めた

何でも第一倉庫には店長自ら漬けてあったお手製の果実酒だけでなくカイトが婚約者達との結婚祝のためにと贅沢な食材や製法で漬けてあった果実酒もあったらしく、それが文字通り消滅していたそう  
だ

特に『万能』ことアスファイとの結婚祝い用の酒は最近できた婚約者達の者と違い、3年前もから漬けてあったものらしく

「コツっ!?!」

ゾツとした

・・・拘束された私たちの前でそれを語るカイト表情がヤバかった  
無表情ではなく、怒りでもない

笑っているのだニコニコと  
ただ笑顔からこぼれる瞳は第二級冒険者全員をゾツとさせるもの  
だった

話が終わるとカイトは先程から作業していた何かを卓上の上に置  
いた

端的に言つて 黒い何か だ

臭いはしない・・・ただ何というか禍禍しいオーラだけは感じ取れ  
る

それをカイトがフォークで突き刺す

サクつと小気味良い音がした

「ほれ、アーニヤ、腹減つてるだろ」

「んにや？なんにやそれ食べ物なのかにや？」

「ああ」

「おおお、カイトの作るご飯は全部おいしからたべるにやー！！！！：  
ちなみになんにやそれ？」

「暗黒物質」

「んにや？卵焼き？え・・・やつぱ食べるのやmゲニヤ!?!」

拘束されたアーニヤの口にカイトが無理矢理黒い何かを突っ込ん  
だ

「・・・よく噛んで食べるよ」

「んにや、変わった食感だにGGGGGガゲエアアアアアBO  
OOOOOOOOO!?!」

おおよそ乙女が・・・いや、人が発してはいけない声を白目を剥き  
つつ拘束されているため首だけを前後左右めちやくちやに振り回し  
ながら叫ぶアーニヤ

10秒以上それが続くとピタリとアーニヤが動かなくなった

あまりの光景に絶句していると

「んぎやあああああ!?!」





## 42：姉妹×舎弟 前編

|||||

俺の片腕が義手になってから三年

あれからお嬢ことアイズはL.V. 4

俺に至ってはランクアップしてL.V. 5になり、第一級冒険者と呼ばれる都市でも数えられるくらいしかいない上級冒険者の仲間入りを果たした

まあ問題があるとすれば、俺がランクアップしてからお嬢の機嫌が非常によろしくないことだろうか、頬を膨らませてプンスカしている  
・・・まあいいか

出会った当初に比べれば随分と感情豊かになったのは良いことなので暖かく見守ろう

まあ、ここまでお嬢が表情豊かになったのも数ヶ月前に入団してきた「テイオナ・ヒリュテ」という少女の影響による所が大きい

最近俺よりもテイオナ達とダンジョンに潜っていることが多い・・・なんというか端的に言っちゃつと寂しい、懐いていた気難しい子猫が独り立ちしてしまったような物悲しさを感じるがここはお嬢の人間としての成長や同年代でしかも同じ実力の友人ができたことを喜ぼう

・・・でもやっぱちよつと寂しいなあ

あ、そういえば他にもこの数年で変わったことがある

それが

「兄貴、訓練に付き合ってくれ」

「待ちなさい、カイトはこの後あたしに料理を教える予定があるわ」

「あ？ こっちが先だ」

「あ？ こっちが先に予定があるって言ってんだろぅが!!」

———これである。



「ハッ、兄貴こそ覚悟してやがれ」

そう言うのとベートは以外と素直に引き下がっていった  
(まあ、言うことを聞くだけ大分ましになった方だわな)

「さて、と・・・じゃあ調理場に行くか」

「おっしやあ!!やるわよ!!」

「ティオネ、『おっしやあ!』もあんまお淑やかな言葉じゃないぞ、『よしー』くらいにしとけ」

『よしー』やるわ!!・・・こんな感じ?」

「そんな感じそんな感じ」

ベートと対峙していたアマゾネスの少女、名前は『ティオネ・ヒリュテ』

先程、お嬢の話の時に話題に上げた『ティオナ・ヒリュテ』の双子の姉だ、双子の姉と言っても二卵性双生児なのでまったく顔が一緒というわけではない、まあ似てるっちゃあ似てるなあ、くらいだ。

つーか、親はどんな考えで双子にこんなややこしい名前をつけたんだ、当初は二人の名前を間違える奴が続出して慣れるまでが大変だったぞ

この姉妹、明らかな違いがあるとすると身・・・というか性格だな

どうしたらこれほど違うのかと思う程度にこの姉妹は氣質が異なる

妹のティオナの方は一言で言えば天真爛漫、笑顔が絶えず元気ハツラツ!オロ○ミンC!!

姉のティオネの方はぶっちゃけ粗暴といった感じだ、言葉遣いはチンピラ、トラブルは口よりも手が先に出るタイプだった

「そんじやまずは——」

「団長の好きな料理!」

「——は料理の基本ができるようになってからな?」  
「ぬう〜」

それが今やこれである

——恋は女を変える

アミッドという今や俺の嫁になった恋愛狩人<sup>モンスター</sup>を知ってはいたが、どうやらあいつが特別なわけではなかったようだ

目の前にいるティオネも恋をして激変した

あ、ちなみに惚れてる相手は笑顔の素敵な腹黒団長のフィンだ

何でもそのフィンに好みの女性を聞いた所、「お淑やかな女性」というティオネから大分かけ離れた答えを聞かされたらしい

当初はあまりに自分とかけ離れたフィンの好みに落ち込みはしたが恋する乙女は不死身のモンスター

すぐに復活し、言葉遣いから日常における所作までお淑やかな女の子とやらになるため鋭意努力中というわけだ

そして何故に俺がその面倒を見ることになったのか説明したい

何でもティオネがファミリア団員中に

「恋愛事の相談や花嫁修業をするなら誰か？」的な質問をしたらしい  
すると

「「「カイト」」」

満場一致で全員が俺と答えたそうだ

・・・いや、なんでやねん！

ワタシオトコ!!

一応他の奴らに文句を言ってみたら

「このファミリア内でカイト以上に料理が上手い奴がいるっすかね？」

「ふむ、私もカイト以上に紅茶を煎れるのが上手い者知らんな」

「婚約者が居てしかも複数、これで恋愛事が苦手って言ったらあんた誰かに刺されるわよ」

上からラウル、リヴェリア、アキの意見だ

ぐうの音も出なかった





妹の「この国を出たい」その一言だけで

そんなことが許されるわけがないと思っていた

でも実際は違った

女神カーリーはあっさりとは許可を出した

「出て行きたいなら出て行ってもいい、この門はいつでも開いているのだから、出るも入るもおぬし達次第だ」

仮面を被った女神は何でもないとでも言うように私たちを解放した。

突然だった、突然すぎた。

国を出た当初の私の心内はグチャグチャだ、それまでの自分の境遇に憤りと虚しさ、そして己のどうしようもない暴力性を見せ付けられたようだった

でも――

「ティオネ見て見て！すごいよここ!!」

それも能天気な妹と旅をする内にどうでもよくなってきた

外界の全てが美しかった

妹に感化されたかのように私の澱んでいた心は徐々に浄化されていった。

テルスキュラを出た時点で私たちのレベルは2

外界ではこの強さは破格なのだそうだ

そのおかげで旅先でのファミリアからは全て歓迎された

中には私たちのことを快く思わない連中や世間知らずなのをいいことに騙して来る奴らもいたが全て力でねじ伏せた

そんなこともあるせいかな、どこに行っても腰を落ち着かせようと思  
う場所はなかった



■■■■■させてもうツグツチャグチャにして■■■■■を  
してええええええ団長のカッコいいのは姿だけじゃない性格もち  
ろんだけどあの人の掲げる夢もすごいたった一人で種族の希望にな  
ろうとする覚悟もすごいけどそれを堂々と宣言するときの団長に私  
の雌が■■■■■してもう溢れてんはああああああああっつもく  
くううううかつこいいかカワイイに加えて大人の渋さまで合わ  
さってもうたまらああああああんんホホホオオオオオオオオオオオ  
オ

.....

団長は「お淑やかな女性」が好みらしいです☆  
お淑やか・・・よくガミガミ言ってくるあの副団長のエルフみたい  
なの？

私は少しお淑やかとは異なる  
・・・うん、少しだけお淑やかとは違う、そう少しだけだ。  
ちよつと野性味溢れているだけだ、個性だ。

むう・・・お淑やかとは・・・。

・ ・ ・

自分一人の考えでは無理だと判断し周りの者に助言を求めた  
少し前の私なら誰かに頼るなど絶対にしなかった

だが団長を射止めるためなら私は手段など選ばない、私の安いプラ  
イドなど犬に食わせてやる

その甲斐もあって、お淑やか女性、とやらになるために必要なもの  
が大体把握できた

一つ「言葉遣い」

二つ「所作」

三つ「料理などの家事スキル」

最低でもこの三つらしい

一つ目と二つ目はあのエルフを観察することで何とかかなりそう  
だ・・・だが・・・料理

肉を煮るか焼くかじゃダメなの？

ダメらしい

いいだろう

ならば習得するまでだ、戦闘と同じだ

出来ないのなら出来るようになるまでだ・・・だが独学では無理が  
ある

師がいるかいないかでは習得に大きな差があるのはテルスキュラ  
で学んだ

・・・ああクソ！嫌なことを思い出す

こういうときはあれだ、団長のことを考えて嫌なことを忘れよう

団長の笑顔団長の白い歯団長の声団長の臭い団長の髪団長の鎖骨  
団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の

団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の団長の

・・・ふう落ち着いた

さすがは団長、ただ思うだけでこんなにも嫌な気分が恍惚な気分へと変わっていく

とりあえず師が必要だとびきりの料理の師が。

・  
・  
・  
・

そんなわけで今度は「料理の上手い者は誰か」とファミリア内で聞いて回った

すると全員が一人残らず同じ名前を挙げた

「カイト・・・そいつって男じゃないの?」

「男だとかはあんまし関係ないわよ?あいつ将来は料理店を出したいらしくて、暇な時間ができたときはよく飲食店で働いたり調理場で料理の練習してたりするわよ」

「ふくん・・・まいつか」

男だろうが料理が上手いなら何でもい

「疑わしいなら、ちょうど今日がカイトの食事当番だから夕食はホームで食べてみたら?いや〜カイトの食事久しぶりだから楽しみだわ」アキという女の助言に従って夕食はホームで食べるためダンジョンに行くのを止めた

「あ、あとあいつ嫁が四人もいるから恋愛相談とかもできるんじゃない

いかしら?」

「え、嫁が四人もいるの!？」

なんとも都合の良い者がいたものだ

・  
・  
・  
・

「むぐむぐうまままま! ティオネ!! これすっごい美味しいね!!」

(・・・っ、確かに美味しい!!)

隣のティオナがガツガツと書き込むように食べる

出来れば自分もそんな風に食べたいがそれはお淑やかな女性がすべき行動ではない

ゆつくりと出来るだけ上品に――

「ティオネティオネ!! これもすごく美味――」「うるせえええええええ!!」

隣の馬鹿がうるさくて怒鳴ってしまった、反省。

・  
・  
・

「私おかわりしてくるねー!!」

「はいはい勝手に行ってきなさいよ、ったく・・・それにしても――」

この一月ほどで何回もホームの食堂で食べたが今日が一番人が多い

おそらく全員がカイトという男の作る料理が目的なのだろう  
確かに非常に美味しかった

何よりその証拠として団長も美味しそうに食事をしていたのが見えた

あの笑顔を自分以外の者が作った食事で発していると思うだけで

嫉妬してしまう

カイトが男で良かった・・・■サナクテスム

とりあえず目の前にある「ハツカツ」と「ミルフィーユカツ」という名の肉の揚げ物と千切りの野菜、そして飲んだことのないミソスープなるものを食すことに集中する

歯ごたえのあるハツカツ

とろけるような食感のミルフィーユカツ

口がくどくなりかけたところで千切りの野菜を挟むことで口の中がリセットされる

気まぐれにミソスープを口に含めば少しのつもりがその独特の味と暖かさに飲む手がとまらない

食事の前に教えてもらった米とおかずを同時に食べるという方法、最初は口の中で混ぜるとか気色が悪かったが一度試してみたら止まらなくなった

(・・・っうまい!!)

結局妹のようにお替わりを二回もしてしまった・・・お淑やかな女性だっておいしければおかわりくらいするはずだ、ギリギリセーフ・・・のはず

(ぬう・・・でもこんなおいしいのが作れるようになれば淑女へ近づける!)

改めてカイトという人物は料理を教わる上でまちがいなく最上の師になるとわかった

全員が食事を終え食堂の人口密度が減り始めた頃

私はカイトに料理を教えてくれるように直接頼みに行った  
ちなみに場所は食堂の隅っこだ

何でも食後とはある条件をクリアした者達にだけデザートが振舞われるらしく、これはカイトが食事を作るときの通例らしい

それで頼んでみたら――



「断る」

「何で!？」

速攻で断られた

副団長のエルフと数名に見たことのない色の紅茶とこれまた見たことのないデザート?を振る舞うのに忙しいのかこちらを見もせず  
に言つてきやがった

「俺にはそんな暇はあまりないんだよ、ただでさえ最近はずの奴  
が強くなつてきて相手するのが大変だしダンジョンに料理のバイト、  
ファミリアの会計も任されてるし、フィン達の書類整理と嫁達との  
デートとかで忙しい・・・っか何で俺なんだよ」

「だって・・・」

カイトの最後の方によくわからない用事もあつた気がするが、とり  
あえず他の者達が料理を学ぶならカイトが一番であるということ  
教えてもらったことを告げる

「いや・・・その評価は嬉しいが他にも料理が上手い奴いるだろ?」

「そこを何とかお願い!!」

「現実的に無理」

「ぐぬううううう」

どうやってカイトを説得すべきか悩んでいるところに助け船が来  
た

「このファミリア内でカイト以上に料理が上手い奴がいるつすかね  
?」

「ふむ、私もカイト以上に紅茶を煎れるのが上手い者知らんな」

よくカイトと共に居る地味な男と副団長のエルフだ

「おい」

その言葉にカイトが余計なことを言うなどでも言うかのように二  
人を咎める

「別にいいのではないか? この子はベートと同じで少し落ち着き  
がないようだからな、お前が料理を教えながら色々教えてやればこちら

としては手間が省ける」

「えー・・・そんな時間がねえんだけど」

「なら新人の情操教育ということで書類仕事は・・・ラウルお前がやれ」  
「うえええ!?俺っすか!?!・・・うわくやぶ蛇っすよこれ、余計なこと言うんじゃないかったっす・・・」

「安心しろ、言い出しっぺの私もできる限り手伝う」

「おい待てや、何でドンドン話が進んでんだよ・・・はあ」

それを聞いたカイトが仕方がないとも言うような長いため息をついた

「わーったよ降参だ・・・ティオネ、暇なときだけだからな」

「よっしやあ!!」

エルフの口ぞえも会って何とかカイトに料理を教えてもらえることになった

「えっと・・・リヴェリア・・・でいい?」

「ん? いいぞ どうした?」

「・・・その・・・あり がとう」

「ふふ・・・なに、良く変わろうとしている者を無碍にするのは勿体無いのでな、頑張るといい カイトの教えは厳しいぞ?」

感謝の言葉を言う等いつ以来だろうか、恥ずかしくてどもってしまった

だというのにこのエルフは何でもないというように言ってきた

上から目線の言葉に普段なら腹の一つでも立てていたかもしれないが、今の私にはどうでもいい

(これで、団長の言う「お淑やかな女性」に近づける!!・・・あ、そうだったそれともう一つの方もついでお願いできるかな?)

「カイト、ついで程度でいいんだけど恋愛相談もお願い」

「・・・ほへ。」

鳩が豆鉄砲でも受けたかのような顔をされた

「いや、それこそ何で俺だよ、そういうのは同姓に相談するもんじゃないのか? 恋愛事とかあんまし得意じゃないんだが・・・」

「ハア~~~~~」

「そう言うカイトの後ろで全員がクソでかいたため息をついていた  
「な、なんだよ」

「あのねえカイト?・・・婚約者が居てしかも複数、これで恋愛事が苦  
手って言ったらあんた誰かに刺されるわよ・・・ほら」

「うう・・・カイトさんには美人な女の子が四人」「俺、恋人出来たこ  
ともないのに嫁とか・・・」「カイトって結構無自覚で女を墮とすんす  
よねえ」「ああ・・・わかるわかる」「なんで私には相手がないの  
か」「くう!これが神々の言う所の『リア充爆発しろ!』という奴か」  
「・・・私も彼氏とか欲しい」「そうねえ・・・できれば冒険者以外でっ  
て条件だけどね」

「そう言ってアキが目線を向けた先には涙を流しながら肩を組む男  
どもと少数の女の姿

「いや、泣くくらいなら恋人作れよ」

そこにカイトが私でもわかるくらいの爆弾を投下

「G A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A  
A!!」

「ちよ?!いきなり何すんだお前ら!」

その後は大乱闘

狂戦士に変貌した独り身達によるリア充狩りが勃発  
だが全員がカイトに返り討ちに遭った

普通に強かった、

別に他の者達が弱いわけではない

カイトが強すぎるのだろう

だがそんなカイトも

「食堂で騒ぐとは何事だ!!」

———とりヴェリアに全員正座

をさせられた状態で二時間以上怒っていた

「せつかくの緑茶と私の白玉ぜんざいに埃が付くだろうが!!」

・・・怒った理由がこのエルフにしてはしょぼかった

今更だが大丈夫かこのファミアリア・・・団長の気苦労が忍ばれる。

・・・うん、団長の心労を取り払うためにも美味しい料理を覚えよう!  
う!

《side out: ティオネ・ヒリュテ》

||||||||||||||||||||||||||||||||||||||||

||  
||



08年○月◆日 天気：暇

最近はソロでダンジョンに挑むか街で喧嘩しかしていない  
そうでもしなければ俺の怒りが収まらない

誰か

誰でもいい、自身でも言葉にできないこの感情をどうにかしてくれ

08年○月◆日 天気：死線

死にかけた

ダンジョンではなく街中で

生まれて初めてだ

圧倒的強者に出会い、歓喜のあまり痺れたのは

妨害してくる第一級冒険者数名を掻い潜り、四肢を砕かれようと俺  
の首に牙を突き立てたあの姿

理性と本能を超えた鋼の意思を持って俺を殺そうとするあの姿は  
俺の名もなき感情を恐怖で塗り替えた

そうだ、強さとはこうあるべきだ

恐怖と憧れは同居すると初めて知った

あの人みたいになりてえ

あの人に勝ちてえ！

いやならなければ俺は弱いままだ

だから——俺はロキ・ファミリアに入団することを決意  
した

08年○月◆日 天気：我慢

先日、俺をボコボコにしたカイトの兄貴の部屋に挨拶に行った

「死ねえええええええ——————————！！！！」

また殺されかけた

「カ、カイト落ち着くつす!?ちよ、まつ!？」

「カイトダメ!!」

兄貴と同室のラウルとたまたま居合わせたアイズという少女が居なければガチで殺されていた

08年○月◆日 天気：我慢我慢

日を改めてまた挨拶と謝罪に言った

なんでも俺が喧嘩を吹っつけた際に兄貴の帽子を蹴りで引き裂いたのだが、その帽子は大事な物だったらしい

兄貴が必要以上に切れているのはそのせいらしい

兄貴が部屋を出るのを待っていたのだが目が合った瞬間に

「くたばれえええええええー!ー!ー!ー!ー!!」

また殺されかけ、というか殺された

「ちよ、誰か!?団長達呼んできてえええええええー!ー!？」

「カイトさんを止めろおとおお!？」

「うおとおおおおおあげび!？」

後々聞いた話によると俺は心臓が一時的に停まったらしい

マジで一回殺されるとは

・・・さすが俺の認めた兄貴だ、パねえ

08年○月◆日 天気：我慢解放

「さすがにカイトに身内殺しをさせるわけにはいかないからね」

「お前らは世話が焼けるのう」

「胃が・・・痛い」

フィン達が見かねて今回の兄貴を説き伏せることのできるという女を連れてきた

ババアは何で腹おさえてんだ、あの日か？

つーか誰だこの眼鏡女？

「初めまして、カイトとあなたを取り持ったために『勇者』<sup>ブレイバー</sup>から頼まれて来ました」

・・・はあ？

何言ってるんだこの女は？

兄貴の女だった

兄貴の女、いやアスファイの姉<sup>あね</sup>さんが間に入って兄貴と俺の間を取り持ってくれた

.....

「・・・わかった、こいつを舎弟にするってことで認めてやる・・・色々き使うからな覚悟しろ、まあついでに訓練くらいには付き合ってる」

「うっす!!」

「ま、これでとりあえず一件落着ですね」

すげえ、あれだけ荒ぶってた兄貴を説き伏せてくれた

かなり最後の方まで兄貴は粘っていたがアスファイの姉さんが最後によくわからん脅し文句を言うとかアツサリと引き下がった

「五人目とかどうですか？」ってどう言う意味だ？

何故あれで兄貴が引き下がったのかわからんが・・・まあいいか

少し問題があるすればこの話し合いの前、アスファイの姉さんに条件を突きつけられたことだ



しかも兄貴に内密でだ

何でも兄貴には現状アスフィの姉さんを含めて4人の女がいると  
のことだ

そのことに驚きはない、強い雄に複数の雌がいるのというのは当然  
だ

さすが兄貴

話を戻そう

兄貴には複数の女が居る

そのため、もしもその4人以外の女の影があるようなら兄貴に内緒  
で密告してこいとのことだ

おそらく姉御はこれ以上兄貴に女が増えないようにしたいのだろ  
う、まさか逆に兄貴の女を増やすためとか……いやいやいや  
いやないないない、さすがにそれはねーわ

はあ……結構めんどくさそうだな

だが兄貴に許してもらえただけではなく舎弟にもしてくれよう  
に計らってくれたアスフィの姉さんには兄貴以上に逆らえねえ……

「……」ニコリ

……こええ

09年○月△日 天気：困惑

「切るときは刃じゃなくて獲物の方を動かせ」

「……わーってる」

舎弟になつてからしばらくして兄貴からへりくだったような話し  
方はキモいから止めろと言われた

今ではそこそこ砕けた話し方になった、こっちはその方が話しやすいから助かる

ちなみに今やってるのは戦闘ではない

「料理は下準備が命だ、ただの野菜と侮るなよ」

「……」

たまにやる兄貴の料理の手伝いだ

「料理は戦闘に通じる部分がある、気を抜くなよ」

「……ああ」

最初は馬鹿にしていた兄貴のこの台詞

割とマジだった

さっきの台詞もそのまま戦闘に転用できる、敵を自分の都合のいい場所や立ち位置に誘導してから斬った方が楽だった

下準備のことは言わずもがなだ

ダンジョンへ行く際には細かい初歩的なことの方が抜けがちになる

解毒薬を忘れた状態でパープルモスの毒を浴びたときは生きた心地がしなかった

それと意外な福次効果なのが芋や野菜類の皮を綺麗に向けるようになってから地味に剣技が上手くなった、何となくだがこういう風に斬れば綺麗に削げるといのが戦闘中に分かるのだ、兄貴曰く「斬線が見える状態」という奴らしい、この斬線に沿って切れるようになればあまり武器を痛めずに長時間の戦闘が可能だとか

「うっし、皮むき終了」

(相変わらずどんな早さしてやがるんだ兄貴は……)

俺の皮むきはまだまだ兄貴ほど上手くはないしスピードもまだまだ遅い

刃物の扱いがまだまだ未熟の証拠だ

兄貴が剥いた芋の皮には一切の実の部分を残すことなく終わっている

何をどうやったらこんな芸当ができるのか

こういった繊細な刃物裁きも兄貴の強さの秘密なのか？

「さーてと、次はマヨネーズでも作るかね」

そう言っつて兄貴が義手の手首を外す・・・つーかそれ外れんのかよ  
「よいしょ、つと」

そう言っつて手首から先に泡だて器の様な・・・というか泡だて器だ  
そいつをカチリと義手の手首にはめ込んだ

「ポチつとな」

高速で回転する高音が周囲に響く

泡だて器が目にも止まらぬ速さで回転していた

・・・なんだそれ

「ふんふんくん」

鼻歌と同時に兄貴が手首から先の泡だて器を使ってボウルの中に  
ある卵と油をかき混ぜ始めた・・・

そーいやこの前はダンジョンの中で飯を作る際は指先から火を出  
してたな

何だあの義手、便利すぎねえか？

・  
・  
・

この作業の後に兄貴と同室のラウルから聞いた話だがあの義手は  
アスフィの姉さんを含めた兄貴の嫁総出で製作した超がつくマジツ  
クアイテムらしい

兄貴の女はほぼ全員が何かしらの専門家

その全員で製作したというあの義手

俺も恥を忍んで何かしらの装備を頼んでみるのもありかもしれ  
ねえな

09年○月△日

天気：奮闘

兄貴との訓練がエグイ

試合と違って訓練になると兄貴は鬼になる

終わりはない

最低でも何か一つができるようになるまで続けられる

気を失おうが立てなくなろうがお構いなしに訓練は続行される

例えば本当に精魂尽き果てて倒れようにも兄貴の女の一人である治

癒と回復の専門家による特別ポーションで強制回復させられる

これに付いて来れる人間は少ない、途中で必ず大勢の脱落者が出る

その証拠に今現在立っているのは俺だけだ

周りは意識のない奴らの死屍累々が転がっている

「ベート、お前さんもギブアップか？」

ハッ、なめんなこの程度で誰が音をあげんだ

俺をそこら辺の雑魚と一緒にすんな

「いい根性だ・・・行くぞ?」

その瞬間に全身の肌が粟立つ

クソがつ、必ず最後まで喰らい付いてやる

09年○月△日 天気：超奮闘

最近、兄貴の周りにチヨロチヨロとうぜえ女が二人増えた

一人は兄貴に料理を教えてもらっているティオネ、こいつのせいで訓練の時間が心なしか減った

今も兄貴が調理場から席を外した後も野菜の皮を必至に剥いている

「・・・ぬぐう」シヨリ・・・シヨ・・・リ

うつわ、皮むき遅え・・・そうだ ニヤリ

意趣返しに少しいいことを思いついた

ティオネからよく見える位置にスタンバイ、余裕顔でスルスルと皮

むきをしてみる

「っ!?!」

そして俺の意外な料理の手際の良さに驚くティオネ

こっちはティオネの手元と芋の身が残りまくりな皮に目線を向けて

「ぷw」

とどめの笑い

「うがああああああ!!」

戦闘が始まった……こいつ俺よりも挑発に弱すぎねえか？

・  
・  
・

中々強かった、久しぶりに同等の実力者と戦った気がする、だが――

「こうらあああああああ――――！！！！」

調理場をメチャクチャにしたため兄貴にかなり怒られた

暴れたせいもあってその日の夕食後のデザートが中止になった

「デ、デザートがちゆ、中止……だと!? な、なぜだカイト!?!」

「いや、実は――――」

ババアが兄貴からの報告を受けて絶望の声を上げていたが

「……………ほう……なるほどな、あの二人が」  
ギロリ

あ、これはヤベエ

ティオネの方もババアのアマリの怒気に顔を引きつらせている

「二人とも……食事の前に少し運動でもしようか」

その後デザート中止の報を受けたりヴェリアのババアにティオ

ネ共々ボコボコというか魔法でボロボロにされた

Lv. 6 の動きで並行詠唱されるとまじでヤベエな

「お前らが！私の炎で！禿げるまで！魔法の詠唱を止めない！！」

「!？」

ババアの魔力が疲弊するまで死ぬ気で回避し続けた

・  
・  
・

一時間後、訓練場にはボロボロの俺とティオネの姿があつた

おい、ティオネ

「・・・なに」

調理場での喧嘩は無しにしようぜ

「そうね、二度としないと誓う」

体中に焼き焦げた後を残しながら俺たちは限定的な休戦協定を結んだ

09年○月△■日 天気：隠密

「カイトカイトー!!」

「のっわ!? おいこらティオナ！急に乗ってくるな！」

歩いていた兄貴に後ろから飛び乗り肩車を無理矢理してもらつて  
いる女

ティオナ

俺的にはティオネよりもこいつの方がうぜえ

なにせアスフィの姉さんから

「ふむ、ティオナ・ヒリュテですか・・・これは姉の方よりもワンチャ  
ンスあり？でしょうか」

ワンチャンス？何のことだ？

「……………」

しばらく黙考した後、いつもと同じように

「……では監視を怠らないようお願いします、今回のように何かあれば報告を」

と厳命されている

そのせいでこいつが兄貴と接触するたびに色々な意味で心臓に悪い

別にテイオナの方を心配しているわけじゃねえ

どちらかといえば兄貴が俺の報告後にどんな目に遭わされるかの方の心配だ

アスファイの姉さんはあまり直接的なことはしてこないがジワジワと精神を削るようなことをしてきそうだからな……兄貴の舎弟としてそれくらいの気配りは見せたいのだが

「カイト……!!またカイトのご飯食べたーい!!」

「また今度なー」

「え……!!次はいつなのー!!」

「時間ができたらだなく、後は食材が朝の市にあるかどうかとかタイミングが難しくてな」

「ふ……ん……じゃ、いや!アイズと遊んでこよーつと」

「おう、お嬢とダンジョンに行くのはいいがあまり遅くなるなよ」

「わかってるつてー、じゃ行つてきまーす」

「おういつてらー」

去り際に俺とテイオナの目が合う

「べ〜〜」

舌を出してガキ臭い挑発をしてから去っていった……うぜえ

アスファイの姉さんから報告しろとは言われてはいるが二人の会話を聞いてると報告とかいらねえ気がするんだよなあ

兄貴とテイオナの会話は近所の兄ちゃんとそこら辺の娘にしか聞こえねえ

「つーかあいつは頭が空っぽの愉快的なアホ女にしか見えねえし、そういった男女の心配とかいらなくねえか？」

「そんなことを考えていると兄貴がこちらを見ながら面白そうに「お前ら仲いいなあ」

なんてわけのわからん言葉を投げてきた

「いや何でだよ、今のやり取りのどこをどう見ればそんな感想が出て来るんだ

「いやいや、喧嘩するほど仲が良いって諺があってな？」

「マジかよ、物騒すぎるだろそれ

「確かに、言われてみれば仲が良ければ喧嘩なんかしないよな・・・改めて言われると変な諺だなこれ」

「どーでもいい、それよりも――

「おう、約束通り試合の相手してやるよ」

「ハッ！今日こそ一撃といわず百発蹴り込んでやんぜ！！

「ふっ、そいつは楽しみなことって」

結局この日

陽が暮れるまで兄貴に一撃入れるどころか立てなくなるまでボコボコにされた

「だが、それでこそ兄貴だ

「これでいい

「目指すべき強さ

「挑むべき強さ

「憧れる強さがそこにあるのは、そうだな・・・楽しいと言っていい  
追い抜いたとき兄貴がどんな顔をするのか楽しみだからな

「必ず追いつく、そして追い抜くこの壁を。」



10年○月△日

天気：我武者羅

・・・うつぜえ

最近まゝた兄貴の周りに女が増えた

今度は女弟子らしい

料理の弟子であるティオネと違い今度は冒険者としてのマジの弟子

新規で新しい団員を補充した際にそいつの才能をババアとロキが見いだして兄貴とババアでの共同弟子つてことにしたらしい

・・・うつわ、だつりい

これ報告しなきゃダメだよなあ・・・これでまゝたアスフィの姉御に報告する内容が増える

あゝ面倒くせえ

報告をサボりたいが姉御には俺が現在使ってる装備、特殊装備『銀靴』の件で世話になったせいでさらに逆らい難くなった

・・・とりあえずダンジョンに行くか

ムシヤクシヤして体を全力で動かしゃ、ちったあ頭もスッキリするだろ

報告はその後だな

つたく、世の中つてのは思い通りに動かねえ

せつかく俺もLv・5になれたってーのに兄貴に至つてはその後すぐにLv・6になりやがった

あー！クソつまんねえ！！

ようやく一撃入れられるようになった途端に元に逆戻りだクソが！！



## 44：珍客×屋台

|||||

オラリオの東部・第二区画、ここはギルド管轄の建物が多く存在し  
その中には巨大闘技場も含まれる

オラリオの観光目玉の一つでもあるここは常に何かしらのイベン  
トが開催しており都市内の住民や観光客等で賑わっている

そのため、そういった客を狙って数多くの屋台が道なりに並んで商  
売に励んでいる

ただしそれは日中の話だ

陽が暮れると共に屋台は撤収を初め完全に陽が落ちるとともにそ  
の喧騒を第三区画の色町・風俗街と第六区画に存在する多数の酒場・  
宿屋に明け渡す

夜の帳と共に第二区画は闇に包まれる

街灯の明りも最低限しか設置されていないためほんの気休めでし  
かない

そんな暗闇にポツンと明りを発するおでんをメインとしつつ様々  
な料理を出す屋台があった

ここは知る人ぞ知る隠れ屋台『狩人狩人』

都会の中にあつて都会の喧噪から離れられる個人屋台である。

||

|||||

「邪魔するぞ」

「らっしやくい．．．って、久しぶりだなおい」  
暖簾のれんから久々に見えた顔に屋台の店主が驚く

「それは偶にしか店をやってないそっちが悪い」

「はは、確かに．．．いつものか？」

「ああ、頼む」

見目麗しい女性、姿や装備から冒険者だとわかる

そんな彼女の正体はLv. 5の第一級冒険者にして都市最多の構成員を誇るファミリアを束ねる女傑

ガネーシャ・ファミリア団長【象神の杖】アンクローシャシヤクテイ・ヴァルマだ

彼女は偶にしか開いていないこの屋台を見つけた場合は必ず食事に来るプチ常連である

「ほい、おまちどう、酒は辛めの熱爛あつかんな」

そう言つて慣れた手つきでシヤクテイの好きなおでんの具を選別して酒と共に出してくる

「ああ、頂ごうか」

味噌と言われるあまりオラリオでは使われない出汁の染み込んだ煮物をさっそく口にする

「ん．．．．．——相も変わらず美味だ」

食べ慣れていないはずの味なのにどこか郷愁を思い起こさせるこの味にシヤクテイは嵌まつていた

(この前食べた醤油ベースもいいがやはり味噌ベースの味の方が好みだな、心に染みる)

久々のホツとする味を堪能する

「ほれ、お酒」

そう言いながらシヤクテイの持ったお猪口に店主が酒を注ぐ

「．．．ん、すまない」

注がれたピリリと辛目の熱爛をクイツと飲み干す  
「ふう〜〜．．．．．」

夜の寒さも相まって暖かい食事と熱爛は旨さを倍に感じさせるだけでなく身体を芯から温めてくれる

(ああ．．．．．やはりいいなこは、何も気にしなくていい)



いいかと思ひ、屋台の暖簾をくぐった

暖簾というたった一枚の布を超えただけで己の鼻孔に食欲をそそる香りが優しく飛び込んでくる

単純な油物を扱う店では決して出せない芳醇な料理の香りに自然と頬が緩んでしまう

(・・・これは味に期待できそうだ)

香りを嗅いだだけでこの店が正当な料理を出す店だと確信

もはや当初の念のため怪しい店の確認を行うという考えは吹き飛んでいた

「らっしやくい」

目の前の四角の鍋を幾重もの仕切で囲った特殊な鍋を突いていた店主が顔を上げて出迎えるが

「・・・は？」

「あれ？」

そこで意外な人物に出くわした

「・・・何をしているのだお前は」

「・・・そっちこそこんな時間にここで何してんだ？」

変装のつもりなのかいつものトレードマークの帽子を黒いバンドナに変え、垂れ流しにしていた長い白髪も後ろで一本に束ね、今や本人の代名詞の一つでもある銀の義手も長袖と黒い手袋によつて隠されていた

彼を知らぬ者であれば少しの変化といえど気づく者は少ないだろう

だが、面識のある者が見れば一目瞭然で分かる程度の変装だった

「先に質問したのは私だぞ 『切札』<sup>ジョーカー</sup>」

「見りやわかるだろ・・・屋台だよ」

屋台の店主は最近ではロキ・ファミリアの中核メンバーの一人であると認識されている男

カイトだった。

（・・・あれからもう一年か）

「ほい、追加の大根」

「うむ・・・ふ・・・うむ・・・あつふいハフハフ」クイツ

当時のことを思い起こしつつクイツとお猪口の中身を飲み干しつつハフハフとおでんに舌鼓をうつ

少し前のことを思い出したからか、話のネタとして素朴な疑問が浮かび上がる

「そういえば聞いたことがなかったが、この屋台は普段どこに置いてあるんだ？」クイツ

「普通に自宅に置いてるな」

「自宅？ロキ・ファミリアに置いてるのか？」クイツ・・・カラッポ「いや、実は嫁と俺の五人共同で工房兼家みたいなのを借りててき、そこに置かせてもらってる」ハイ・・・オカワリ

「クツクツクツク、何だ？愛の巣というやつか？まったくこれだから女垂らしは」ゴクリゴクリ

シヤクテイ・ヴァルマ

年齢Ⅱ彼氏なしの僻みひがみからか酒を飲む手が加速する

「いやちげーよ、元々俺の義手を作るために借りてた工房が五人で集まるときに思いの外便利な感じだからさ、そのまま軽くリフォームして使い続けてんだよ」

「逢い引き用の家というわけか、つまりヤ○部屋だな？ヒック」ゴック  
ゴック

僻みひがみが加速、お猪口ではなく熱燗からそのまま直接飲み始める

「ち、ちがうわい！一応言っておくけどこの屋台も五人でトントンカンテン仲睦まじくその工房で作ったものなんだぞ!？」

「なるほどな、トントンパンと子供もつくってる、と」グビリグビ

リ

「ちが・・・くわないかもしれんけどもつと言い方気をつけろや!?!あと  
ラツパ飲みは危ないから止めようね!」

「どくせ避妊は『戦場の聖女』ディア・セイラントの特製ポーシヨンでバッチシなのだるお  
く?ヒック」

「大分お前さん酔ってるな!」

普段のシャクテイからは決して出ないような下ネタとボケの連発  
にカイトの突っ込みが止まらない

「酔ってらい酔ってらいぞ」

そう言う彼女の顔は紅く、目は据わり呂律が回っていない・・・説  
得力はゼロである

「酔ってる奴は大抵そう言うんだ・・・つーかさつきからガブ飲み  
しすぎ、こいつはチョコビチョコビ飲むようだからかなりアルコール度数  
高めなんだぞ?」

「わらつれるゾ」ヒック グビリグビリ

「分かってねえしベロンベロンじゃねえか」

「なら酒の代わりに何か一品くれ」

「はいはい」

そう言っておでん以外のつまみを作り始める

ちなみにこの屋台、前世持ちのカイト監修による鍛治氏・椿と魔道  
具製作・アスフィの合作ということもあつて無駄に便利な機能が盛り  
だくさんだったりする

縮小版石窯

飲料水の貯蓄及びミニ台所排水機能完備

移動が楽になるよう車輪部分にはサスペンシヨンを搭載

さらに簡単な変形機構等々

カイトも『嫁達とのんびり日曜大工☆』みたいなノリで色々組み込  
んだせいで義手の『銀腕』とはまた異なる意味でのオーパーツの塊と  
なっていた

完成したときは全員で達成感を噛みしめ、嫁達との良い交流だつ



た、と思いはしたが……後々考えると結構不味い知識を覚えてしまったような気がすることに冷や汗を掻いた

「……正直途中から楽しさ優先でやりすぎた」とはカイトの弁である

問。

そんな多機能屋台で一品作る間

カイトの調理音とシャクティの食器音のみが聞こえるつかの間の静寂の時間が訪れる

それは気まずい沈黙ではなく、心地のよい沈黙  
静寂を楽しむ大人の余裕を感じさせる時間だ

(あ、そういやこの前――)

そんな静寂の中ふいにカイトは最近聞いたシャクティに関する噂話を思い出した

「そういや噂で聞いたがお前さん、妹分ができたんだって？」

「ん？……ああイルタのことか、妹分といつてあれはなあ……無理矢理義姉妹の契りとやらをさせられた上で姉者姉者と懐かれているらけぞぞ」

「いいじゃねえか、うちのベートと交換してくれ」

「絶対にイヤだ」

ベートの気性の荒さは今やオラリオ中の冒険者達の間ではかなり有名な話だ、

どんなじゃじゃ馬でも所詮は馬、あの凶狼には敵うまい  
ただ

カイトは意味もなくこの話を切り出したわけではない

「そうかい？……」――なんとなく今日のアンタを見てそのイルタつてのに姉と呼ばれるのが嫌なのかと思ったんだがな」

「っ!？」

頻繁に交流はないが数年という短くない付き合いからカイトはシャクティの奇妙な雰囲気を感じていた

「お前さんが飲み過ぎるのは大抵そういうことがあるときだけって気づいてるかい？」

言われたシャクティは間の抜けた顔を晒してしまいカイトの言葉で深く酔っていた意識も大分覚めた

「そう なのか、・・・ふふ・・・知らなかったな」

「まあ、ウソなんだが」

「ウソかい!!」

「H A H A H A！カマをかけたただけだ」

カイトは彼女が何かを悩んでいることを察してはいたがさすがにそれが何かは断定できなかった

そのため思わせぶりな発言をすることで自然とシャクティから悩み の正体の言質をとったのだ

「くっ・・・お前最近フィンに似てきたな」

「げふっ」

それを聞いてカイトが盛大に顔をしかめる

「マジで止める、あの腹黒シヨタに似てきたとかショックすぎる、俺はもつとピュアでいたい」

「そうか、なら残念ながら手遅れだ」

「うわあ、不治の病を宣告された患者の気持ちは今わかった気がするな・・・・・・で？」

「・・・何がだ」

「何か不満・・・というかモヤモヤしてんだろ、大方、姉と呼ばれるせいでアーデイのことも思い出すとかかだろ？」

アーデイ・ヴァルマ

シャクティとは血の繋がった実の妹であったが、数年前に闇派閥との抗争で相手側の爆弾攻撃によって爆殺された少女だ

彼女の遺体は文字通り跡形もなく爆散しており、まともに埋葬すら

できない状態であったという

当時のカイトは任務上アーデイともそこそこの交流もあった

アーデイの訃報を聞いたときはかなりのショックを受けたものだが、実の姉であるシャクテイの受けた衝撃とは比べもにならないだろうということを理解していたためあまり彼女の前では話題に出さないようにしていた

あれから数年経ち心の傷も時間が薄れさせた今だからこそ話題に上げることができた

「・・・その察しの良すぎる思考は本当にフィンとそっくりだな、察しが良すぎて——逆に腹が立つ」

「理不尽すぎない?」

「理不尽なものか、大体なお前らは——」

そこからシャクテイは酒の勢いもあって日頃貯まっていた鬱憤や愚痴を吐き出し始める

日頃の激務、市民からの苦情、団員からの陳情

そして最後にシャクテイを姉と呼ぶイルタのこと

「イルタは悪くない・・・これは私の一方的な思い込みのようなものだ」

そして、だからこそどうにかするのが難しい

酒を飲む手がすっかり止まってしまったシャクテイを見てカイトがポツリと言葉をこぼす

「そのイルタつてのを通してアーデイを思い出すのはやっぱ辛いかな?」

「・・・そう・・・だな」

「アーデイを思い出したくないってわけじゃないんだろ?」

「当たり前だ、あいつのとの思い出は嫌なことばかりじゃない、むしろ

シャクテイは思い出す

そして今更ながら気づく

最後の別れが突然すぎたこと、そしてその別れ方があまりに酷すぎたせいで妹との思い出が辛いことや悲しいことに感じてしまったが妹とはそんな負の記憶ばかりではない、それよりもっと多くの楽しかった記憶や共に笑い合った暖かい記憶の方が圧倒的に多かったことを

「むしろ楽しかったことの方が多い」

そう言うシャクティは心の靄が晴れたかのような表情になっていた

それを見て屋台の店主はニヒルに笑う

「ならいいだろ、俺の尊敬する医者曰く——人が真の意味で死ぬときつてのは『人に忘れられた時』らしいからな、せめて姉であるお前の中だけでも妹を生かしておいてやれ……あーでも勘違いするなよ？妹の記憶に引きづられるって言ってるわけじゃないからな」

クサイ台詞を吐いたせいも少し恥ずかしそうに言ってくる

それがシャクティには少し嬉しくて非常に面白かった

「ぶっくっくっくっく、なんだ？もしかして元気付けてくれていいのか？私に浮気するなら嫁達に密告するぞ？」

「やめれ、しがな屋台の店主から常連客への接待みたいなもんだよ。」

だから本当マジのマジで密告とかヤバいんで止めて下さい」

ちなみにカイトが恐れているのは怒られることによる恐怖ではなく、嫁をさらに増やされる恐怖である

カイトの脳内で現嫁達が『こいつも嫁にしてやろうか？』と、どこぞの閣下のように言ってくるヴィジョンが見えた

「ふふ……冗談だ、ここまで笑ったのは久しぶりだ、おかげで今後イルタを見るたびに妹を思い出しても大丈夫そうだよ」

「むしろアーデイのことを思いださせてくれるのなら、そのイルタって娘に感謝しとけ」

「そうだな、そうなるよ……いいな」

「なれるさ・・・ほれ、酒のおかわり」

根拠もなく言い切るカイトの言葉を注がれた酒と共に飲み込む

「・・・美味しい」

同じ酒であるはずなのに心なしか先ほど飲んだものよりもおいしく感じた

「ほいお待ちどう、俺特製の一品料理『オラリオ風 揚げ出汁豆腐』だ！」

注がれた酒を楽しんでいる間に先ほどから作っていた一品料理が出てきた

「ふむ・・・初めて見るなこの料理は、まあお前が出したんだから美味であろうことは疑わないが」

「おう、ようやく最近味を再現できてな」

「再現？どこか別の場所で食べたことがある料理なのか？」

「え、あく・・・まあ故郷の料理の一つ・・・みたいなもんかな？ so 一つをこつちにある具材で再現してみたんだよ、まあ微妙に味が違うが美味しいことは美味しい」

「ほお、さっそく頂こうか」

少しトロリとした蜂蜜のような餡に浸かった揚げ物

それを箸ではなくナイフとフォークで切っていくのは西洋文化であるオラリオの御愛敬

(・・・・・・おお)

切りにくい外側の衣と違い切ると柔らかい白い実が露わになる

それを餡に付けて口に運ぶ

「あっふい、はふはふ」

(うむ新食感だな、そしてやはり美味しい！)

餡は甘辛系統そして油の衣が付いていることで淡泊な豆腐の味を二重にフオローしている

(おお、これはっ・・・！！)

無意識に辛めの酒の入ったお猪口に手が伸びる

(酒！飲まずにはいられない!!)

甘い餡にカイトの用意した辛口の酒が非常に合う！

酒を飲んだことで辛くなった口にまたしても揚げ出汁豆腐を投入  
甘い旨い、辛い美味しい、甘い旨い、辛い美味しい

無限ループが止まらなくなってしまっていた

そんな至福の無限ループの中で

「あつふあつふ・・・うん、さすが俺の作った新作料理、美味しい」

目の前の視界に同じ物を食べているカイトが映り込んできた

「・・・何で店主が客と同じ物をわざわざ目の前で食べてるんだ」

「いやわざとじゃねーぞ、具材の関係でこいつを作るときは四人分  
作ってるんだよ、暖かい飯ってのは美味しさに持続時間があるから  
な、美味しい内に食べないともつたいないんだよ、謂わばこれは食材  
を無駄にしないための仕方が無い作業の一つだな、うん仕方ない仕方  
ない」

店主なのだから黙って接待でもしておけという文句を飲み込む、そ  
の代わりに――

「残りは何人分あるんだ?」

「え・・・俺の夕食なんだけど」

「全部よこせ」

「え~~~~~・・・」

この日

心の靄が晴れたシャクティは酔いつぶれるまで全力で食事と酒を  
楽しんだ

普段の仕事の気苦労を知る店主は陽が昇るまでそれに付き合っ  
てやった。

|||||

《後日談》

「オラリオ・新聞」

【『<sup>ジョーカー</sup>切札』五人目の新たな嫁か!】

相手はなんとあの超大手ファミリアの美人団長S

『<sup>ジョーカー</sup>切札』がS氏の本拠に二人で朝帰りしていく姿が目撃されたこのこ

と

状況から美人団長S氏の主神ともそういった話を通っている可能性も高いとのこと

関係者からのコメントに寄れば「私が○○○○だ!!」……え?○○○○が嫁に?……えナニソレ」や「馬鹿な!?姉者が!?姉者があああーうわああん」等々、衝撃を受けており――

|||||

こんなことがあったとかなかったとか

とある某所・某時間でも

そんな新聞を笑顔で突きつける美女と

「……カイト?」ニツコリ

突きつけられて顔を引き攣らせる男が

「いや、違う!違います!?!酔いつぶれたあいつを背負って運んだだけで――」

「五人目イツとききます?」

「イヤアアアアアアアアアアアアア!?!」

いたとかいなかったとか

弟子とスパルタ教育 地獄編

45：手刀×暗殺

|||||

《side：動体視力に定評のある暗殺者》

「はっ・・・はっ・・・はっ・・・ひひひひ、くくうふふ」

俺は暗殺者だ

とある闇組織に所属している

組織の本部はとある国で最大の構成員数と勢力を誇る

その組織が遂に世界の中心とも揶揄されるオラリオに進出した

そんな俺たちの仕事は多岐に渡る

暗殺者だからといって暗殺だけしていればいいわけじゃあない

この街に元々いた同類の組織から縄張りを奪い

その縄張りの中で違法な薬や道具を法外な値段で売りさばき

店を出しているカタギの奴らを脅し用心棒代として多額の金をせ

しめること等々だ

裏の組織も金のためなら暗殺者でも使いつぶす・・・世知辛い

まあ、組織の中でも武闘派の俺とその部下達なら問題など起こりよ

うもない仕事だ

だというのに

「おい、あんた何故だ!？」

何故俺は

「何故 俺はひたすら芋をマッシュユさせられているんだ!？」

「うるせえ、口動かす前に手を動かさせアホチンピラ」



「すんませアべし!？」

既に顔がボコボコに腫れ上がり見るも無惨な俺に強烈なビンタが炸裂する

「隊長う!？」

「てめーらもボーつと突つ立てないでもつと客引きの声出せやコラ!! お前らは全員ノルマは二十人だからな? 出来なかつたら両手両足粉碎、客を無理矢理連れてくるような不作法者は即処刑だから…… あーちなみにだが、客引きと称して逃げたらどうなるか…… 分かつてるな?」

その瞬間、青年から殺気が吹き出す

「「「ヒイヒイヒイヒイ!」「」」」

「おらあ行け!!」

「「「じゃ、じゃが丸君いかがつすかああああー!」「」」」

客引きのために顔以外をボコボコにされた俺の部下達が涙ながらに必死に笑顔を作つて一般市民に媚びを売る

そんなことをしている内に――

「兄貴、済んだぞ」

青年の後ろに銀髪の狼人が誰かを引きずつてやってきた

「おう、すまねえな面倒事頼んどじまつて、で――  
――…そいつは?」

「元締めだだよ、連れてきた方が手っ取り早いだろ」

「へえ……気が利くなベート」

いや待て……ていうか引きずられてるのって

「ボス!？」

あろうことか引きずられてきたのは組織での俺の上司だった

「ボス、大丈夫で――」

「あ、あ、悪夢だ、悪魔だ、鬼だ」ガクガクブルブル

わずか数時間前まで組織の幹部、そしてオラリオ支部のトップとして俺たちに命令を出していたときの堂々としたの威厳は微塵もなく

なっていた

(い、いったい何が・・・)

ボスは顔面を蒼白にしつつ震えながらブツブツと何かを呟くだけの廃人になっていた。

「こいつらのアジトは？」

「言われた通りに更地にしてきてやったけどよ・・・あの雑魚共程度じゃ準備運動にもならねえな」

(さ、更地ッ!?)

ありえないことだ、俺たちの組織にはランクアップを果たしている手練れが何人も居たはずだ

それが全滅したというのか!?

しかも俺を圧倒した人間の方ではなく、この男の部下であろう狼人に!?

有り得ない

認めたくない

馬鹿な

こんなの夢だ

俺の頭の中が目の前で為される会話を否定するために拒否の言葉が無数に反芻する

眼球が俺の意識に反してグルグルとせわしなく動く

あまりにも非現実的な事実が目眩と吐き気がする

何度も何度もこれは夢だと思い込みそうになるのだが・・・

「うえへへへへまかせてくらさいよ〜ビッグボス〜、オラリオ支部はこの私におまかへをようへへへへ」

夢ではなく現実であることを突きつけるかのように廃人同然のボ

スが先ほどから目の前で狂言を吐き続けている

(俺も現実から逃げたい……)

「……さて」と

「っ!？」

男の発する一言一句に俺の身体は身構える

(ああ、何故こんなことに……過去に戻れたら戻りたい)

わずか二時間前のことだ

用心棒代をせしめるための不運な最初のターゲットとして俺と部下はこの店を選んだ

屋台ではちようど客であろうエルフの小娘が店を出している食べ物を男から渡され食べている呑気な雰囲気だった

「オラァ！誰の許可があつて俺たちの縄張りマで商売してんだア!!」

恐怖と衝撃を与え、従わし易いように店で用意してある飲食用の机や椅子を蹴飛ばし破壊する

どんなことも最初が肝心だ、そのためにも俺と俺の部下は店先でわざと派手に暴れた

いくら天下のオラリオであろうともその程度なら他の街と変わらない——そう思っていたからだ

甘かった、激甘だった

店先で暴れる俺の部下はあつとういう間に地面に転がされた

軽々とあしろう実力からただの屋台の店員ではない、と本能で感じてはいたがL.V.3にランクアップしてから長らく相手が居なくなってしまう俺は無意識に強敵を求めていた

餓えていたと言つてもいい

俺の部下を一瞬で昏倒させた攻撃——恐ろしく早い手刀——

——俺じゃなきゃ見逃しているであろうその攻撃が俺には見え  
ていた

故に久々に戦闘が楽しめそうだ

そんな馬鹿で愚かすぎることを思ってしまったのだ

それが極限まで手加減された攻撃だとは知らずに。

ただの屋台の店員ではない、と本能で感じた？

アホか俺は

おい、俺の本能 もっと働け

俺が対峙した男は化け物じゃねえか!?

半日足らずで一つの組織を潰すような狼人も化け物だが、俺を瞬殺  
しその化け物を従えているこの男の実力は一体どれほどなのか見当  
も付かない

そしてそんな化け物が真つ昼間の出店に、しかも店員として居るな  
どと誰が想像しようか

完全に相手を見誤った

それともオラリオでは屋台の店員ですらこれ程の実力を兼ね備え  
ているのか!?

・・・だとしたらオラリオは化け物達だけの巣窟だ

俺はオラリオの厳しい洗礼を受けて完全に心が折られた

そして今現在、俺たちはこの男にこき使われている

「とりあえず、当分お前らタダ働きなー いやあチンピラの掃除と人  
材確保が同時にできてラッキーだ」

いや待ってくれ・・・修繕費と迷惑料とか言われて有り金を全て取  
られて文無しなんだが・・・

組織の支部に戻ればあるが、先ほど言った内容が事実なら俺の金な  
ど跡形もなくなっている

「あの、食事とかはどうすればよろしいでしょうか？」  
「安心しろ毎日おいしい じゃが丸くんを食べさせてやろう」  
「・・・こんな揚げ物ばかり毎日食ってたら死ぬのでは？」  
「あの、できればいいので野菜とかも・・・」  
「大丈夫大丈夫、ポテトも野菜だし」  
「・・・」

暗殺者などをやっているのだ

いつか俺も誰かに殺されるのだろうとは思っていたが  
メタボになって死ぬというのは予想外の死に方だ・・・。

《side out：動体視力に定評のある暗殺者》

||  
||  
||  
||

## 46：貴猫？凡夫

|||||  
|||||  
|||||

《side：アナキティ・オータム》

ドン

と言う爆発音が今日も私たちの本拠『黄昏の館』に鳴り響く

ちなみに私は現在食事中、周りの皆も同様に食事中だが誰もが一瞬だけ手を止めて

((((ああ またか・・・)))

とでも言うような表情を作ると食事を再開する

最初の頃は すわ!?他のファミリアの襲撃か!?

と身構えていたが、今ではファミリアの全員がその音に慣れすぎてほぼ無反応だ

(ハア~~~~・・・あの子も災難ね)

そんなことを思っている

「今日もボロボロで部屋に帰ってきそう、せめて何か元気の出る果物とか用意しとこうかしら」

一緒に隣で食事中のアリシアが困ったような笑顔で呟く

「アリシアってあの子の隣室なんだっけ？」モグモグ

「うん、たまに見かけるのよねえ：魂が抜けた様な顔でヨロヨロくつて部屋に帰る姿、さすがにほっとけなくて・・・」

「うわぁ・・・」

今私たちが話している、あの子というのは最近入団してきた新人団

員のことだ

2 その新人団員は後方支援特化型の魔導師で入団時点で既にL V.

あの都市最高の魔導師である副団長を知るロキ曰く

「呆れるほどの魔力バカ」

と言わしめる程の才能を秘めているとのことだ

だが

そんな羨ましがられる才能を持つ才女も今では逆に哀れみと同情の感情を向けられている

なにせあの子の冒険者としての師匠にスパルタ訓練が日常のカイトが就いてしまったからだ、先ほどの爆発音も恐らくそのスパルタ師匠との訓練中に魔力爆発イグニス・ファトウスを起こしたものだ

ちなみに、正確に言えばその新人団員は副団長とカイトの共同弟子になる

副団長は普段忙しいので通常の面倒はカイトが見るといふことらしいが・・・

魔法では副団長に扱しこかれ

近接ではカイトに扱しこかれる

・・・なにその地獄。

特にカイトとの付きつきり訓練とか悪夢よ悪夢

ラウルと一緒に訓練させられたときはマジでボコボコにしてくるし

「一応私女なんだけど!?」って言ったら

「男女平等!!オラア!!」

「へバア!?!」

と見事なアツパーを食らって昇天させられた……グーでよ!?

乙女の顔をグーで殴るか普通!?

……いやまあ、実際戦闘になったらそんな男だとか女だとかは関係なくなるし、あいつとの訓練はマジで強くなるにはなるのよねえ  
いやそれでも、できればカイトとの訓練は全力で避けたいというのはガチの本音

いやもうマジで二度としたくない、マジのマジ、ほんつつつとうに  
したくない……

何度もアノ地獄に挑むベートの強さへの直向きさだけは本気で尊敬するわ

ま、当分は弟子になったあの子に付きつきりで私たち構う暇はないから安心ね

(さて、と そろそろ私もダンジョンに――  
「お〜い、アキ〜」

ダンジョンに向かおうとしていた私を食堂の入り口からラウルが呼んでいた

「どうしたの、何か忘れ物?」

ちなみに今日のダンジョン探索メンバーは私、ラウル、ナルヴィ、アリシアの四人だ

前衛の私とラウル、遊撃にナルヴィ、後方支援にアリシアと非常にバランスの取れたパーティ構成となっている

目的は下層付近での経験値稼ぎ<sup>エクセルリア</sup>

そのため各自に必要な物は事前に準備してあるはずだけど……何か準備漏れでもあったのかしら?

「いや、そうじゃなくてカイトがあの子と一緒に付いて行っているか? って言ってきたるんですけど」

「え 大丈夫なのそれ? あの子に何かあったら……ってカイトが居ればそんな心配するだけ無駄ね」

ぶっちゃけ下層程度のダンジョンでカイトと一緒に居て何かあるなどアホらしいくらい有り得ない話だ



先ほどカイトとの訓練は嫌だと言ったが、私は別に彼個人を嫌ってない

むしろ同期組の中でも特にラウルとカイトを私は尊敬している

・・・そんなこと恥ずかしくて絶対口には出さないけど

と、とにかく！

その中で特にカイトの実力に関しては私を含めたロキ・ファミリアの全員が全幅の信頼を寄せている

ダンジョン内でカイトは居るだけでモンスターの索敵だけでなく奇襲の完全察知までできることができる、おかげでダンジョンにおける死の危険は限りなくゼロと言ってもいいだろう

そんなわけでどうやら今回のダンジョン探索は楽ができそうだ

「アキ、カイトさんが付いてくるなら今回のダンジョンは百人力ですね!!」

アリシアが嬉しそうに言ってくる

「ええ、ラッキーね、カイトが付いてくるなら新人の面倒を見ながらでもお釣りがくるわ・・・ってラウル、どうしたのよ青い顔しちやって？」

「い、いやそれがカイトが――

『久しぶりにお前らの連携と動きも見るから俺の弟子の参考にならないようなら一緒に訓練な』――  
つて・・・」

ピシリ

と私たちの周りの空気だけがヒビが入った

「・・・え?」

「・・・例の訓練っす」

マジで

「・・・不出来すぎたらアレ以上の訓練らしいっす」

「・・・」

あれ以上?

乙女がゲロ吐いて血流してラウルが漏らしながら阿鼻叫喚になっ





アップは非常に希有なことなのだそうです

ですが実際にそれは優秀な先生方による指導のおかげなところが大部分を占めます。

先生方に比べると私は魔力操作も詠唱速度もダメダメです

「いや扱う魔力量が違うし」

そうでしょうか？

「詠唱速度も追い越されそうなんだけど」

ふふふ、またまたご冗談を、でも嘘でも誉めてくれて嬉しいです

先生方はやはり教育者、先に謙遜が口に出ます

「「いや、ちがうて」」

いやあさすが教育者、ほんとうに謙虚です。

その先生方から、私であればオラリオであろうとも様々なファミリアから引く手数多だとおっしゃって頂けました

・・・本当でしょうか？

正直今でも半信半疑です。

とりあえずそんな太鼓判を押されたこともあって、かねてから外の世界を体感してみたかった私は先生方にとあるファミリアへの推薦状を書いてもらいました。

私が推薦状を書いてもらったのはロキ・ファミリア

団長の『勇者』それに並ぶ『重傑』エルガラムそして全てのエルフが敬い憧れる

王族、ハイエルフにして尊きお方、先の二人に並ぶファミリアの副

団長『九魔姫』ナインヘルリヴェリア・リヨス・アールヴ様、三人をトップとする

世界に名を轟かせるファミリア

そう、私の憧れのファミリア

ちなみに最近ではそれ以外にも『切札』ジョーカーを筆頭に『剣姫』ヴァナルガンド『凶狼』ヨルムガンド『怒蛇』アマゾン『大切断』といった方々もメキメキと頭角を現しているのとことです。

その中でも私が注目しているのは『剣姫』様！

森では外界の情報を得る方法は二つ、一つは商人から、そしてもう

一つは吟遊詩人達による歌

森に来る吟遊詩人達が歌い上げる英雄譚の中でも私が最も好きなのはこの一説

『音に聞こえし ロキ・ファミリア

頂を知る彼等の中に たった一人の剣士あり

並居る剣士を睥睨するは たった一人の少女なり

流麗なるはその剣技 悪鬼を貫くその金眼、戦尾に残るは金糸の閃光

巨大な魔物と対峙をすれば 一つの剣で敵を討つ――

』

私より少し年上の『剣姫』様が歴戦の冒険者を飛び越えて最前線で戦っているという歌

オラリオに実在する女性剣士

これには憧れと情景を抱かずにはいられませんでした。

・  
・  
・

そんな私が今居るのはロキ・ファミリアの本拠『黄昏の館』……の通路です。

向かう先は訓練場

「はくい、皆さんこっちつすよー」

案内人の誘導に従い進んでいきます

いえ、ロキ・ファミリアに入団できたわけではありません

——入団するために私は今、この通路を進んでいるので  
す。

実は前々からロキ・ファミリアは団をより大きくするために新たな  
団員を募集していたとのこと、そして『学区』の先生方もそれを知っ  
ていてこれ幸いにと私の推薦状を書いてくれたらしいのです

ですが推薦状があったとしてもキチンと試験自体は受けなければ  
いけないみたいです

確かにいくら学区の推薦状とはいえ大派閥のロキ・ファミリアに  
はいそうですか と入団できるわけありませんでした

我ながら考えが甘過ぎです

推薦状の効果は精々面接で普通よりも興味を持つてもらえるくら  
いのです、まあそれでも何も知られていない方々よりはかなり優  
位に立てるはず

そして今から行われる実技試験に対しては推薦状は効果がありま  
せん

こればかりは私が頑張るしかないということです！

ちなみに入団試験を受けるのは私だけではありません、腕に覚えの  
ある者や私のように他のファミリアから改コンバージョン宗して待機状態の方な  
どが大勢います

そんな方々と共にゾロゾロと広い訓練場に向かいます

「じゃあ一時間後に試験を始めるっす、試験の内容はこちらで用意し  
た相手との模擬戦に近いものだと思っして下さい、それまで各自装備を  
調えるたり準備運動をして用意しておくように、何か質問があれば  
今のうちに受け付けるっすよー？」

質問・・・あ、気になることがあります

「あの一・・・後衛の魔導師とかも同じ実技なんでしょうか？」

これは聞いておかねばならない質問です

「基本的に共通試験の後に 前衛・遊撃・後衛 別々の試験を用意して  
るっす」

(よ、よかった)

『学区』でも近接系の授業は苦手だったので後衛用の試験があるというだけで安心できました

「他に質問はないっすか？」

私の質問を皮切りに他の方々もそれぞれの質問をしていきます、全部の質問を聞いていましたが特筆すべきものはありませんでした、精々試験前にランクアップしているかどうかを口頭で確認するといった内容くらいでしょう

「ふむ、これ以上質問はないようっすね、じゃあ健闘を祈ってるっすよ！」

最後にありきたりな言葉を言ってから案内してくれた方は去って行くと全員がそれぞれ試験のために動き始めました

よし！私も準備を始めましょう！！

今日の私は一味も二味も違いますよー！！

何故ならばっ！

昨日、私は憧れの冒険者の一人である『剣姫』 アイズ・ヴァレン シュタインに直接会うだけでなく言葉まで交わしたのです！

もうやる気バリバリですよ！

・・・それにしても、憧れの『剣姫』に会えたのは良かったのですが、同時に変な騒動に巻き込まれそうになったのは危なかったです  
そんな風に昨日のことを思い出していると

「・・・って、あれ？もしかしてあそこにいるのは昨日の屋台のお兄さん？」

つい最近、というか昨日会ったばかりの屋台のお兄さんが何故か訓練場の隅で目立たないように柔軟運動をしていました

というか何故、屋台のお兄さんがここに・・・？

先日のもあったのでとりあえず挨拶しましょう

「こんにちは、屋台のお兄さん」

「・・・ん？ ああ昨日のお嬢ちゃんか、昨日言ってた入りたいファミ





上でかなりの実力者であったということでしょう

なにせ屋台にいちやもんを付けて暴れる男共をバツタバツタと倒す屋台のお兄さんの攻撃方法を

「恐ろしく早い手刀、俺でなきゃ見逃しちゃうね」

と、余裕綽々で意図もたやすく見破るほどです、その隙のない立ち姿からは歴戦という言葉を彷彿とさせました

「1対1だ、——闘ろう」

「やだよ」

「クツクツクツク、そうつれないこと言うな——よっ  
!!」

実際、私にはその男の攻撃はおろか動きを目で追うことすら出来ませんでした

ですが、それ以上に

「ゲボヤゲガブハっ!」

「はい、乙々」

屋台のお兄さんの強さは尋常ではありませんでした

いや、チンピラ達を圧倒している時点で間違いなく強いというのはわかっていましたが、ここまで強いというのはわかりませんでした

すぐに屋台のお兄さんに何者なのか、と問いたいただきました

え、・・・は？

ただの屋台の店員でもこの実力がデフォ?

・・・いやいやいやいや!有り得ないですよ!?

は?

店長がL v. 6で店員が軒並みL v. 4の飲み屋とかが普通にあら?

そんな店があるわけが・・・

「普通にあるよな？」

「ミアさんのお店のこと？」

・・・マジですか

オラリオは人外魔境の魔窟である、と言う人もいるそうですが  
・・・人外しかないのでは？

そんな衝撃体験の後に屋台のお兄さんの勧めで『剣姫』様に道案内  
をしてもらっちゃいました

「目的地とかは、ある？」

「はい、えっと明日入団試験のあるロキ・ファミリアの本拠<sup>ホーム</sup>なんですけ  
ど・・・」

「うちっ？」

「はい、私ロキ・ファミリアに入団したくて」

「そう・・・じゃ、案内するね」

「は、はい！よろしくお願いします!!」  
「・・・ん」

案内がてら『剣姫』様に聞いたところ、先ほどの屋台のお兄さんの  
話は少しオーバーで、実際にあれ程の強さを持ちつつ店を出している  
のは一部だけとのことでした

・・・一部と言うことは本当に居るところには居るのですね、改め  
てオラリオの凄さを実感させられました

それにしても、何故それだけの実力のある冒険者が屋台やお店を  
やっているのでしょうか？

お金を稼ぐだけなら冒険者を続ける方が実入りが良いのでは？

「皆、それぞれ事情がある、引退や元々そういったお店を出すための資  
金稼ぎのために冒険者になった人も居る」

な、なるほど事情は人それぞれですからね

「あなたは どうして冒険者になりたいの？」

「え、えっとその・・・憧れの人みたいになりたくて」

本人を前にして、『あなたに憧れて』と言うのはさすがに恥ずかしいので微妙に言葉を濁しました

「そう・・・うん・・・私にも、わかるよ」

そう言う『剣姫』様の表情はとても穏やかで優しかったです、『剣姫』様にも憧れる誰かが居るといふことなのでしようか

（あわわわわ、沈黙が気まずいです・・・？）

憧れの『剣姫』様と何を話せばいいのかわからないまま歩いていると奇妙な建物が見えてきました

「ん、あれが私の本拠ホーム、『黄昏の館』」

「ここが」

ここで私の人生の何かが決まる

そう思うだけで緊張と不安で震えてきそうでしたが

「明日の試験、頑張つてね」

「っ!!」

『剣姫』様からの激励っ 感動です！

これを聞いたというだけでもオラリオに來た甲斐がありました

「は、はい！頑張ります!!!」

先ほどまでの緊張と不安は消し飛び、やる気が漲ってきました!!

うおおおおおおやりますよおおおー！！！！

レフィーヤ、ファイトオオオオオオオオ!! 『剣姫』様の期待に  
応えるのです!!

|||||

ふんす！

お兄さんと再会したことで昨日のやる気が再充電されました  
今の私の心は不動

もはや何が来ようと不断の意思で試験に挑んで見せます

〔『剣姫』様、見ていて下さい!!〕

そう決意を改めていると

「ふむ、揃っているようだな」

訓練場の入り口から誰かが入ってきましたって……ま、まままま  
ままままさか、あの御方は!?

「お、おいあれって……」

「まさか」

「マジかよ」

その御方に気づいた者から波が引いていくように静かになってい  
きます

その方の持つ雰囲気はエルフでなくとも敬意を払いたくなるもの  
だからです

「全員、適当でかまわないので並んでくれ、……アリシア、ソニア、彼  
らに整列の指示を」

「おまかせを」

その言葉に傲慢はなく驕りもない、上に立つ者としての当然のカリ  
スマ

従者の様に二人のエルフを従えるその御方に全員の視線が集中し  
ます

全てのエルフが敬う高貴なるお方

通常のエルフよりも長い耳はハイエルフの証

「私は今回の試験の補助を行うリヴェリア・リヨス・アールヴと言う者  
だ、一応ロキ・ファミリア副団長を務めさせてもらっている、今日は  
よろしく頼む」

訓練場に現れたのはエルフの王族『リヴェリア・リヨス・アールヴ』

様でした

今の私の心は不動？

さすがにこの状況は無理ですよ

エルフの王族であるリヴェリア様は例外ってことになっておきましよう、驚かないのは逆に不敬です、うん

これ以上は不動ってことにしておきましょう

そう、今度こそ今から私の心は不動!!!

「さて、それでお前はそこで何をしている？」

・・・え？

リヴェリア様がこちらを見て咎めるような口調で言葉を放ってきます

それに釣られて訓練場にいる全員の視線が私に集中しました

え、ちよ、なんですかこれ？ どういう状況ですか!?

私は何もしてませんよ!?

「いやあ、ちよつとこれから試験を受ける奴らの品定めってところかね」

よつこらしよ、という言葉と共に困惑する私への回答がすぐ隣から聞こえてきました

「・・・へ？」

あれ、屋台のお兄さん？

・・・あれあれあれ？・・・屋台のお兄さん!?

「・・・よつと」

困惑する私を余所にお兄さんが纏っていた外套を脱ぎ去ります

黒いズボンそして腰に下げるベルトには一本の刀

腰まで届く白髪に青色のハンチング帽を被り直し、服装は白色

そして何よりも特徴的なのは左腕の白銀の義手

「諸君！驚かせてすまないな、これから君たちの入団試験の実技の相手を主にさせてもらおう」

え、ちよ、これ

この特徴ってまさか

思い出されるのは吟遊詩人が歌う中でも私が好きな『劍姫』様の一説

『音に聞こえし ロキ・ファミリア

頂を知る彼等の中に たった一人の劍士あり

並居る劍士を睥睨するは たった一人の少女なり

流麗なるはその劍技 悪鬼を貫くその金眼、戦尾に残るは金糸の閃光

『 巨大な魔物と対峙をすれば 一つの劍で敵を討つ —— 『

その続きはこう歌われている

『彼の者が背を預けるは 白磁の如き龍髪なり

白磁に劣らぬ白銀の 腕かいな持つは彼の者のみ

並居る戦士は地に伏せる 主神の名を継ぐ申し子なり

道化の名を継ぐ 彼の名は —— 『

「カイトと言う者だ！ 聞き覚えのない者には『切札ジョーカー』と名乗った方がいいか？」

あ、はい。

もういいです、私の心で不動とか無理です、はい。

《side out : レフイーヤ・ウイリデス》

|||||

||  
||  
||  
||  
||  
||  
||  
||

## 48：妖精？試験 その2

「あれが!？」

「・・・ロキ・ファミリア最強」

「マジでか・・・やべえよさつき俺、小汚い格好とか言っちゃまったよ」  
「すげえ、本物だ!」

「サ、サイン、サインもらわなきや」

「バカ、こんな時にもらえるわけねえだろ!」

入団試験を受けに来た者達にドツキリ的な感じで名乗りを上げると全員が驚きの余り動揺しまくっていた

「あ、あわわわあわわわ!？」

特に俺の目の前でエルフの小娘が口をアングリと開けてビツクリしているのはかなり痛快だねえ

いやあくナイスリアクション（笑）!

そんな餌を求める金魚の様に口を開閉し続けるエルフ娘と目を合わせてみる

「・・・ふむ」

「ほえ!？」

はえくそれにしてもこの娘、改めて『凝』で潜在魔力を探ってみるとマジで化け物だな、本当にLv.2か？

昨日、偶々出会ったときも驚かされたが再度確認しても信じられないほどの魔力保有量だ

「・・・ま、いいか」

「はえ!?!え!?!何ですか!？」

とりあえず試験で実力を見せてもらいますかね、どれだけ才能があるろうと扱う者が使い物にならないようなら文字通り宝の持ち腐れだし

ちなみに『凝』は眼にオーラを集中させることで本来なら見えることのないものが見えるようになったりする、四六時中使いたいのだが使い過ぎると目が痙攣とか仕始めてヤバいことになるので常時使用



は難しい、連続使用は1時間ちよいが限界と言った所だ

その1時間で他の入団志望者にも『凝』で探りを入れてみたがこの娘以上はさすがにいなかった、まあボチボチ行けるんじゃないかね？つて奴らなら数人と言った所だろうか

さて、と

じゃあそろそろ始めますかね――

「では、これよりロキ・ファミリアの入団試験を始める!!」

|||||

《side：レファイヤ・ウィリデイス》

ま、まさか昨日会った屋台のお兄さんがロキ・ファミリア

しかもただの団員ではなく幹部級だとは……いや確かに『劍姫』様と妙に親しげに話していたことに引つかかってはいましたが、天下の第一級冒険者が屋台で揚げ物を販売してる等と誰が想像できましようか……無理でしょう

そんなこっちの心境も知らずにお兄さんこと『ジョーカー切札』がスタスタと広場の中心に向かって行きますと

ガリガリガリガリとお兄さんが鞆に収まったままの武器を使って地面に50メートル程の線を引いていきます

線を引き終わるとその少し手前に直径2メートル程の円を描くとその中にお兄さんが入りました

「では、確認を兼ねて今から改めて試験の説明を始める!」

その言葉で場の空気が変わります、なにせ周りに居る者達は私を含めて全員がライバル、嫌でも空気が引き締まります

「先に説明を受けたように今から行う共通試験の後にはそれぞれ前



言葉が理解できても内容が理解できないという不思議な体験をしています

「おつと言い忘れていた、俺に攻撃を当てて円外に押し出すことができれば一発合格だ」

お兄さんの言葉でさらに頭の混乱具合に拍車がつ!?

ん?

んんん?

障害物であるお兄さんは直径2メートルの円内から出ない

線は50メートル以上

んんんんんんんんん  
??????

それ・・・離れた場所を走り抜ければ楽勝ですよね・・・これが共通試験?

先ほどとは違う雰囲気の動揺が周囲で起こります

「おいおいおいおい、もしかしてこれってサービスか何かか?」

「・・・そういや、最近ロキ・ファミリアで死者が出たって話を聞いたな」

「お、じゃあもしかして団員を手早く補充したいからここにいる奴らができるだけ多く入団させたいとかか?」

「じゃあ何のために入団試験なんてやるんだよ」

「そりやお前、大派閥としてのポーズが必要なんだろう」

「なるる、ヒヒヒヒ!俺たちラツキーだな!」

周りから嘘か本当かもわからない声が聞こえてきます

(大派閥の面子のためだけにこれだけの規模で試験をするのでしょうか?)

周囲の声とは反対に私の心には猜疑心が生まれます

憧れのロキ・ファミリアがそんな中途半端なことをするのか?

否だ。

私の憧れた英雄達と歩むための試練がそんな簡単なのか？  
そんなわけがない。

あの英雄達がそんな惰性で選ばれただけの者を入団させるのか？  
有り得ない！

「んじや、始めるぞ〜」

（え、ちよつま、まだ心の準備が!?)

「待て」

しどろもどろしている間に試験が始まろうとした所にお兄さんに  
待ったを掛ける方がいました

「———なんだよ、リヴェリア」

待ったを掛けたのはリヴェリア様

「いやなに、一応試験を受ける者達に一言助言をしようと思ってな」

「え〜・・・あんまりネタバレされると意味が無くなるんだけど」

（ネタバレ?・・・やはりこの試験、先程の説明はこちらを油断させる  
何か、ということでしょうか）

「はあ・・・そうでもしなければ下手すれば今回の試験、合格者はゼロ  
になりかねندろう」

え、なんですかそれ

合格者がゼロになりかねない？

（・・・やっぱり何かあるってことですね）

私の中での疑問が確信になりました

お兄さんの横に下がっていたリヴェリア様が一步前に出てきます

「この試験の前に全員に忠告しておく、君たちは今からこいつに一度  
殺されると思え」

「「「・・・・・・は?」」」

その場にいる入団希望者数十人全員の声が一致しました

え、こ、殺される？

その余りにも殺伐とした言葉に先程までの余裕そうな空気が霧散  
します、そりやそうでしょう試験なのに殺されるって

「君たちは今から腕を切り落とされるかも知れない、首を切り落とさ

れるかも知れない、胴体を真つ二つにされる者もいるだろう、だがそれでも意識だけは手放すな、そうすれば……いや、そうしなければ次の試験を受けることもできないと思え……以上だ。」

殺されるのに意識だけは手放すなどは一体？

殺されるほど過酷な試験だけど気絶するなということでしょうか、いやそれほど過酷な試験には思えないのですが……いえだからこそリヴェリア様は忠告してくれたのでしょうか

あの円内からお兄さんが何かしらの攻撃を行う、とかでしょうか？  
だとすると投石や飛び道具の可能性がありますが……いえ、明らかにお兄さんはそんな者を所持しているようには見えません、よしんば何かそういった物を所持していたとしてもこの人数に対して数が圧倒的に足りません

残る可能性としては――

「余計な茶々が入っちゃったが、今度こそ始めるぞ」

(は、始まる!?)

思考の最中にお兄さんのが開始の合図を言おうとします

「よつこらせ、と」

年寄り臭い言葉と共にお兄さんが円内の地面に直接腰を下ろして座り込みました……え、何で座るんですか？

「ふい……じゃあ」

先程までの凜々しさはどこに行ったのか、今はやる気が感じられないです

あまりのリラックス具合にこちらまで気が抜けそうです、本当にこの人は『剣姫』様やリヴェリア様と同じ――

――この時、少しでもお兄さんのことを――師匠を侮った当時の自分を私は呪います。

「開始」

ズ  
ン

肺が凍る、筋肉が強ばる、呼吸も止まる、視界が歪む、嗅覚は消え、耳からは絶えず爆音となった自分の鼓動が聞こえる

「あ

自分の身体が見えます、視点

が

おか　しい

です

身体に

首あり

ません

で  
た

「いいいいいいいい——　　っっ?!?!?」

気づけば私は自分の杖に縋り付くようにして辛うじて立っていません  
した

「つく、首!?!　私の首!?!」

震える身体にムチを打って首が繋がっているという感触を確認します

「あ、ある、つ、繋がってる……い、今は……い、いいい、いいい、いいい」

なに　と言続く言葉も呂律が回らず言い切れない

「ヒュー・・・ヒュー・・・ゲホゲホ！」

呼吸が狂しい、激しく動いたわけでもないのに息切れと動悸が止まらない

脚は生まれたての子鹿の様に震え続けている

「っは・・・っは・・・っは・・・くくくくっ」

自分が生きているという実感を得られた安心感だけで崩れ落ちてしまいそうです

でも何故か私は倒れませんでした、奇跡です

きつとここで一度でも地に倒ればレフィーヤ・ウイリデイスというエルフはレフィーヤ・ウイリデイスとして二度と立ち上がることはできないという本能の警告が必死に私を繋ぎ止めてくれたのかもしれません

気合いを入れ直して伏せ気味だった顔を上げると

「——っ!？」

目の前には死屍累々の光景、ほとんどの者が泡を吹いて地に伏していました

「っは・・・はっ・・・は・・・ふっ・・・ふ・・・」

「くそっ・・・何だっ・・・今の」

「腹があ!?!俺の腹がら血があひひいいい・・・い?！」

「あ・・・あああ・・・あ」

かろうじて立っている者も私と同じように全身に大粒の冷や汗を滲ませ怪我もないのに満身創痍の様な状態です。

全員が私と同じ様なあの光景に近い何かを見たと言うことでしょう、そうでなければこの異様な状況の説明ができません

(お、落ち着きなさいレフィーヤ、思考、思考に集中)

恐怖を忘れるためにあえて思考の波に身を委ねます

——なぜこんな事が起こったか

原因は間違いなく『切札』  
では『切札』は何をした？  
魔法？

魔法には幻覚を見せるものもある  
開始直前に確かに膨大な魔力を『切札』から感じた気がする  
でも詠唱はなかった  
魔法名も口にしていない  
可能性は低い

では第三者が魔法を掛けた  
それも可能性は低い

魔法を発動させれば自分はその魔力を感知するはずだ  
魔法である可能性は低い

ではスキル？

・・・これ程の幻覚を見せるのがスキルによるもの？  
有り得ない

では今も自信を襲い続ける威圧感は何か？

わからない

こんな力を私は知らない

生まれてから見たことも聞いたこともない

回答が出ない。

「ふう・・・ふう・・・ふう・・・」

思考に没頭していたおかげで多少の落ち着きを取り戻すことができ  
きました

でもお兄さん、いえ『切札』から放たれているであろう不可視の何  
かは今も絶賛私たちを襲い続けている

(本当に何なんですかこれは!?)

先程まで普通だった、普通に人であったはずの『切札』が今は理解  
の外側にいる化物にしか見えません

ただ座っているだけ、ただそれだけ

なのに存在しているというだけでこれ程までに自分たちを恐怖さ



せる

ニゲロ

コワイ

サカラウナ

ウゴクナ

イキヲコロセ

メヲアワセルナ

一見普通に地面に腰を下ろしているだけの姿、ですがその姿を見ているだけで心臓の早鐘が速度を増し本能が痛みと共に生命の危機を激しく警鐘してきます

「おい」

「「ヒ・・・ッ!」」

『切札』が言葉を発するだけで意識のある者達の肩が跳ね上がりました

私に至っては息が止まる寸前です

「どうした、この線を越えるだけだぞ？ 何を突っ立っているんだお前ら・・・っていかまあ、やっぱこの程度でも来れないか」

その表情は落胆

それも期待ではなく、やはり、とでも言うかのような諦めの混じった落胆の表情だ

「——お前らは先程の試験内容を聞いて大方楽勝とでも思ったんだろうが」

『切札』の表情は変わりません

「あまり第一級冒険者を舐めるなよ〜?」

「ひい!」

威圧感だけが倍になりました

かろうじて意識のあった者が次々に倒れていきます

もはや私の意識が残っているのは奇跡では?というレベルです。

「お前ら程度なら身動き一つせずに殺気を飛ばすだけで押さえ込むなんてのは楽勝なんだよなあ・・・俺も強くなったもんだ」

殺気？

正体不明の威圧感がただの殺気？

それを聞いただけでその余りにも掛け離れた実力差に愕然となりました

これが第一級冒険者だと言うのですか

遠い

高い

あまりにもっ・・・!!

(・・・っく!!)

その言葉を聞いて生まれるのは諦めと

ほんの少しの

(まだ ですっ!!)

反骨心

(気絶して全てがダメになるなら出来ることを全てやりきる、そうじゃなきゃ私は何のためにつ！)

思い出すのは送り出してくれた両親や学区の先生方

(————— なんのためにここまで来たんですか!!)

『頑張つてね』

そして最後に応援してくれた『剣姫』様の言葉も私の背中を押してくれます

「はああああああつ—————!!」

なけなしの気力を振り絞って魔力を活性化させる

自分でも込めたことがないほどの魔力を注ぎ込み魔方陣を展開

そして詠唱

【解き放つ一条の光—————】

使用するのは最も慣れた第一魔法

【聖木せいぼくの弓幹ゆがら 汝——】

先程、『切札ジョーカー』は言っていた、自分を円外に出しても合格だっただったらここから魔法でブッ飛ばします!! もう後の事なんて知りません!!

「へえ〜」

座っていた『切札ジョーカー』が立ち上がりました

(くううう——!?)

それだけなのに威圧感が増していきます、ほんと化け物ですね!?

——…っ弓の名手なり!!

詠唱中は平常心を持たなければなりません、そうでなければ魔力爆発で自爆するからです

——狙撃せよ 妖精の射手!—

この意識も途絶えそうな状況で平常心を保ちつつ魔力を操作するのは至難でした

だからでしょうか?

——穿て 必中の矢——

(このままじゃ暴走、暴走しちゃう……ああ、もうっ!するならしろ!!暴走させてでも撃ってやる!!)

ちよっと思考がおかしな方向に振り切れてました

【アルクス・レイ!!】

「へ!?!」

自分でも見たことのないくらいの威力が出ました

だというのに

「ほいさあ!!」

「うそおおおおお!!?」

『<sup>ジョーカー</sup>切札』が私のこれまで放った魔法で最高の威力だと思つた一撃はアッパー気味に殴られて天に昇つていきました

「な、殴つた・・・魔法を!」

避けられるならわかりませんが殴るって何ですか!?

って言うか魔法つて殴れるの!?

疑問が頭を駆け巡りますが

(・・・っ!・・・まだです!!)

まだ私の放った魔法とのパスが繋がっているのを感じました

「曲がれえええええええええ!!」

天に向かつて消えるだけだったはずの極大の光線が空中で急旋回、『<sup>ジョーカー</sup>切札』の真上から襲いかかります

規模は丁度直径2メートル

それは『<sup>ジョーカー</sup>切札』が移動できる限界領域と同じ

重力すら味方に付け威力を増した魔法が襲いかかります

(これなら!)

円外に逃避するか真正面から受けるしかないはずですが、円外に逃避すれば私の勝ち、よしんば真正面から受けられてもあの威力を受けて無傷では済まないはず、その隙に何とか線の向かう側に行ければ私の勝ち!

僅かな勝機を希望に私は走り出します!!

「あれ?」

・・・ですがそれは叶いませんでした

(な、なんで・・・)

地面が近いかったです

(あ、脚が動かな

走り出そうと一歩目を踏み出した瞬間に私は膝から崩れ落ちていました

心身の疲弊とマインドダウンのダブルパンチは想像以上に私の身体を自由を奪っていたようです

「ふん!!」

そんな風に倒れ込んでいる間に凄まじい轟音と『切札』<sup>ジョーカー</sup>の声が聞こえてきました

身動きできない身体を振って視線を向けた先には『切札』<sup>ジョーカー</sup>の周囲の地面だけがめくり上がった大地が広がっていました

肝心の『切札』<sup>ジョーカー</sup>に至っては

(あれでも無傷ですか・・・はは・・・)

天に拳を突き出した状態でまったくの無傷、もはや乾いた笑いしか出てきません

(・・・本当に遠いなあ)

先程の勝機を見いだしたと思っていた思考は自分でも都合の良い甘い作戦だと思っていました、ここまで手も足も出ないとは・・・

(目の前が真っ暗になってきました)

ああ・・・酸欠に似た様なこの感じ、懐かしいです

初めて魔法が使えたとき調子に乗ってバカス力撃ちまくって精神疲弊した時にそっくりです

これは半日以上は意識が戻らないでしょう

ということは次の試験は受けることも出来ずに寝て終わり

つまりは失格

ごめんなさい先生

ごめんなさいお父さんお母さん

ごめんなさい『剣姫』様

わたしはロキ・ファミリアに入団できなかつたみたいで



焦げ臭い匂いが周囲に立ちこめる

地面が焼き焦げたせいだ

「・・・やるねえ、あの子」

そう言って自分の後ろに目を向ける

自身の身には一切の負傷はない

だが

エルフの小娘が放った魔法が俺の引いた線を越えて地面を抉って  
いた

「一本取られたなあ」

今回の試験は受験者の向こうからすれば線を越えればクリアとい  
う内容だが

俺も試験を受けている立場だとすれば俺が自らに課した試験内容  
は限定条件を付けた防衛戦の死守だ、つまり一人でも線の向こう側に  
通したら戦線崩壊という設定

つまり、何かしらの脅威を自分の後ろを通したら任務失敗というこ  
とだ

再度、自らの背に目を向ける

小娘の魔法がかなり大胆に地面を抉っていた

「ま、負けは負けだな・・・リヴェリアこの子は良いよな？」

「今回の私はお前の補佐だ、好きにしろ・・・と言いたいが」  
「・・・？」

「やり過ぎだ馬鹿者」

目の前には一人残らず昏倒している入団希望者の死屍累々  
「あゝ・・・うん、まあ・・・」

自分でもちよいとやり過ぎたのは自覚できてる

「もう少し団員を補充したいのでなカイト、お前が直接2人は選抜しろ」

「了解」

とりあえず半日以内に意識が戻った者から直接模擬戦でもして実力を測るとしよう、半日経つても目を覚まさなかったものは問答無用で失格ってことでいいだろう

「さてさて、何はともあれ――

合格おめでとう　そしてロキ・ファミリアへようこそ『レファイヤ・ウイリデイス』」

## 49：妖精？試験 その3

《side：ラウル・ノールド》

（ふいゝ後はカイトと副団長にお任せっすね、さてと案内も終わったしどこかで・・・）

ファミリアの規模拡大に伴い新規の団員を募集するための今回の入団試験

自分から見てもまだまだ冒険者としてひよっ子以前の者達を試験場まで案内し質問に対する説明をするのが今回の役割だったすけど、それも終わったので一息つこうとするとー

「ん？・・・あれは」

この会場を見渡せる空中回廊からこちらを見ている意外な組み合わせな人物が二名ほど目に入ったつすよ

（珍しい組み合わせっすね・・・うくん・・・どうせなら、二人と一緒に高みの見物といくつす）

少し食堂に寄ってから見知った廊下を急ぎ足で進み、二人の下に向かう

（いやあく、カイトと長く居ると美味しいお茶の入れ方もわかってくるっすねえ・・・カイトの入れるお茶には全然敵わないっすけど）

なにせ紅茶にはうるさいと言われる副団長ですら舌を巻く美味しさっすからねえ

・  
・  
・

「団長、ベートさん、ご一緒してもいいっすか？」

ちなみに自分の手にはお盆とその上にお茶の入った急須にカップが三つ用意してあるっす



そんな自分の声に気付いて二人が振り向く

「もちろんかまわないとも、それと案内ご苦労様」

「・・・勝手にしろ」

ベートさんは相変わらずすけすけど団長が雑用に対する労いの言葉を掛けてくれた、感激つす。

お茶を淹れながら、それにしても珍しい組み合わせつすね、と二人に来てみると

「ただの暇つぶしだ、兄貴が試験官やるって聞いてなけりや暇でも来ねえがな」

「僕の方は少し気になる子がいてね」

「えゝ!?!」

|||||

同時刻

くダンジョン23階層く

「団長に何かガア起こってるううう!?!」

「ちよ、テイオネいきなりどうしたの!?!」

「・・・ん?」

戦闘中、急に猛りだしたアマゾネスの姉に妹と仲間の女剣士が困惑していた

「ンガアアアアア!!団長オオオオオオオ!?!」

|||||

(ちよちよちよつベートさん!?やばくないっすか!?)

(おい、ティオネの奴が周りに居ねえだろうナ!?)

団長の爆弾発言に自分だけでなくベートさんもギョっとなったつす、ティオネさんは団長が他の女性と男女として関わる話には敏感で見境無く凶戦士になるっすからね

その恐怖は同じファミリアの者なら誰もが知ってる周知の事実です

面倒事に巻き込まれては堪らないと自分とベートさんが周囲をしきりに警戒する

いや、もう団長が関わったときのティオネさんはマジで怖いんすよ

「いや、君たち何か勘違いしているようだけど、気になるっていうのは男女の話じゃないからね?」

団長は顔の前で手を振って違う違うと軽く言ってくるっすけど

「いやあく、それでも・・・」

「・・・あの狂戦士おんなだったら今のてめえの言葉だけで暴走すんぞ」

「ははは大丈夫さ、ティオネ達は今日は下層付近まで潜るって言うってたから——」

ダンチヨオオオオオオオオオ

「あれ、なんすかね、今何か直接頭の中に・・・」

「・・・幻聴だろ」

「僕も幻聴だと思うよ・・・何故か寒気が止まらないけど」ゾクリ

団長、顔が真っ青なんすけど・・・

「えーと、それで何の話だったかな・・・」

「今回の入団希望者の中に団長が気になる子がいるって話つすよ」

ダンチヨオオオオオオオオオ

「二・・・う・・・頭が」

三人が同時に頭痛に襲われたように頭を押さえたつす

・・・これ本当に幻聴？

「あの、団長、これってもしかしなくても・・・」

「オッホン・・・今回の入団希望者に気になる人物が居る理由はこれさ」

あ、聞こえなかつたことにするんすね

澄まし顔のまま顔色の悪い団長が自分達に一枚の蠟で封がされていたであろう封筒を渡してきたつす

「つーかなんで俺に渡すんだよ・・・ラウルに渡せよ、ほれ」

ベートさんから渡された封筒には一枚の紙が入ってたつす

というかベートさんもさっきの声を聞こえなかつたことするんすね・・・つと見た目は普通の封筒つすね？

えつと中身は・・・

「・・・推奨状？ これどこの・・・って『学区』からつすか!？」

『学区』？ なんだそりゃあ？」

「ベートさん知らないんすか!？」

『学区』

世界中の一定の区域を拠点として数年ごとに移動する教育機関

そこではほぼ無償で様々な教育を施してくれるだけでなく、その人の才能に合った職場への紹介もしてくれる

そしてその中にはもちろん魔法や冒険者を育成する部門も存在する

ただし、人材育成が主題のこの教育機関は評価の誇張を嫌う

あくまでも実直な評価をその人物にとつていつそ残酷なほどに下す

それはつまり、才能があると言われた者は間違いなくその分野に於いて天才なのだ

そしてそんな『学区』が推薦状を書いた上で紹介するのがこのロキ・ファミリア

余程の人材が今回の入団試験に紛れ込んでいるということになる

そのことをベートさんに説明すると

「あそこにエリート思考の甘ちゃんがいるってだけじゃねえか・・・使えねえだろそいつ」

くだらない、とでも言うかのような表情で吐き捨てられたっす

「いやいやいや入団してくれたら即戦力っすよ!？」

「お勉強しかやってこなかったモヤシがダンジョンで通用するかよ」

そんな怖い目で睨まないでほしいっす

「いや、そう言われるとそうかももしれないんすけど・・・」

うう、ベートさんの言ってることは多少乱暴っすけど一理あるんすよねえ、冒険者として実力が伴わないくせに机上の空論ばかり上げる者を自分たちは今まで腐るほど見てきたっす

それでも『学区』の推薦というのは別格であるということ踏まえただ上でベートさんにどう返答しようかしどろもどろしている——

「だから、僕が直接見に来たのさ」

団長が間に入ってきてくれたっす、カッコイイ!!

「ただの見かけ倒しならぬ、推薦倒れかどうか判断するのなら直接見るのが一番だからね、それに今回の試験官は厳しいことで有名なカイトだ、その人物の器を測るには――」

ズン

「!？」

「――ちょうどいいだろうしね？」

とんでもない威圧感に自分とベートさんがその発生源に目を向ける

(こ、これは・・・っ!?)

殺気の発生源は自分達の視線の先にいるカイト

その威圧感に離れた自分にまで届く程でもう、うひゃくって感じっす

いや、でもこれ・・・

「うわ・・・ちよ、団長これ、試験にしてもカイトのやりすぎじゃないつすか・・・？」

気の弱い者や実力が伴わない者がカイトから発せられる殺気に耐えられずにバツタバツタと昏倒していく

「うくん、今回の試験はカイトに一任してるから僕はノータッチなんだよねえ・・・ま、大丈夫でしょ」

「ハッ、雑魚共が身の程を知るにはちよっどいいじゃねえか、意識もねえ腰抜けは入ってくんじゃねえってことだろ、さすが兄貴だぜ、わかってやがる」

団長もベートさんも楽しそうにカイトと入団希望者達を見てるっす・・・鬼かと

自分達が目を向ける先には試験を受けに来た者達にスキルを使用したカイトが殺気を含ませつつ威圧を放ってるっす、一応手加減はし

てるみたいっすけど、下級、もしくはそれ以下じや最悪一日中気絶コースで次の試験はおじやん、上級でもカイトとの実力差を心身ともに刻まれて戦意喪失状態になる者も現れるはずっす・・・あそこに入団当初の自分がいたら間違いない泡吹いて気絶してっすねえ

「まあ、カイトなりの手っ取り早い振るい落しだね、やり方は荒っぽいけど、これに生き残れる子は期待が持てるね」

「ハッ、あれに耐えて噛み付けるなら米粒程度には認めてやっていいぜ・・・ま、できればの話だがー」「うそお!？」

ベートさんが馬鹿にしたかのような口調で言っているとき目を疑うような光景が入ってきたっす

「・・・へえ、もしかして学区から推薦されたのはあの子かな？」

団長もその光景を見て少し驚いてたっす

カイトがスキルで威圧しているにも関わらず一人のエルフの女の子が魔方阵を展開、しかも

ドン

「撃ちやがった!」

街中での魔法の使用は原則禁止っすけど今回の入団試験のためギルドには絶対の安全をうちらで約束した上で許可をもらってるっすけれどこれは

「やばいっすよ、けっこう威力がでかくないっすか!？」

「はははは、まあ大丈夫だよ、カイトなら何とかするはずさ」

ええええええ!?

団長さすがにカイトに色々ぶん投げすぎでは!?

めちやくちや焦る自分とは対照的に団長は朗らかっす

いくらなんでもカイトでも、カイトでも・・・

・・・いや、確かにカイトなら大丈夫っすね

思い出すのはここ数年でのとんでもない事件やダンジョンでの出来事

アホみたいないな偉業を連続で打ち立てているカイトの心配をする自分がアホらしくなってきたっす

あー・・・なんだろこれ、カイト基準で物事を考え始めると大抵のことが普通に・・・いやいやいや！だめっすよ自分!!

カイト達の異常性に慣れちゃダメっす！ 自分が常識人枠として踏みとどまらねばっつ!!

あ、今回の合格者は最後に魔法をぶっ放したエルフの女の子のみみたいっす

どうやらあの騒動の後に再試験を行ったそうっすけど全員が怯えて試験どころじゃない状態になったそうっす

まあ、カイトのやり過ぎっすね

副団長が珍しくカイトに説教してたっす

ちなみに合格したエルフの女の子の名前はレフィーヤ・ウイリディ  
ス

もちろん学区からの推薦はこの子のことだったっすよ

ランクアップ済みであるとうことに加え貴重な後衛の魔導師エルフということで皆で超歓迎したんすけど・・・

かわいそうなことに、歓迎会の中盤であることが決定したせいで新人団員であるレフィーヤのこれからの生活が地獄の如きキツイことになることが決定したっす

本人は全く何のことか分かってなかったっすけどね

まあ、入団したばかりじゃ分からないのも無理ないっす

これからのレフィーヤの地獄を容易に想像できるからか

「レフィーヤ、このケーキ美味しいわよ」

「え!?!」

「レフイーヤおかわりはいるか？」

「え、はい、いただきます」

「レフイーヤこれ効果の高いポジションだ、もらつとけ」

「は、はい！ありがとうございます！」

と、こんな感じで自分の分のデザートを上げたり、料理を追加してくれたり、団員のほぼ全員が必要以上にレフイーヤに優しくなつてたつすねえ

レフイーヤは

「わあ、なんて優しい先輩方なんだろう！」

みたいな感じだったんすけど

・・・違うんすよレフイーヤ！

そうじゃないんすよレフイーヤっ！！

それは明日以降地獄を見るであろう君への哀れみなんすよっ！  
うう、でも自分にはどうしようもできないっす

ならばせめて――

「レフイーヤ、自分はカイトと長年パートナー組んでたことがあるんで何かあったら相談だけならいつでも受けるっす」

「はえ？ えっと・・・ありがとうございます？」

これが自分にできる精一杯っす

生きるっすよレフイーヤ！！

諦めたらそこで人生終了っすからね！

自分がかつての被害しゅ・・・いや先輩として全力で応援するっす  
よ！！

《side out：ラウル・ノールド》

|||||



## 50：師匠？弟子 前編

|||||

《side：レフイーヤ・ウイリデイス》

◇ 10年〇月▽日 天気イヤツフー ◇

今の私は最高にハッピーです！

不合格だと思った入団試験に奇跡的に合格できました

マインドダウンから回復したその日の夕食で簡単な歓迎会を開いて頂き、その会の半ばで団長から私には直接の指導員が付くということが告げられました

私の指導に付いてくれたのはなんと副団長にして我らがエルフの王族

『リヴェリア・リヨス・アールヴ』様!!!

もう、感激で言葉が出ません

私なんかが直接あのお方と言葉を交わすだけでなく教えを請うことが出来るだなんてっ！

我がウイリデイス家に末代まで語っても一切恥じることはない非常に名誉なことですよ!!

ですが、リヴェリア様は副団長としての職務だけでなく私以外の後衛魔導師の指導も行っており非常に忙しいとのこと、魔法に関する事以外は違う方が指導に付くことになりました

リヴェリア様と一緒に私を指導してくれるのは、例のお兄さん

いえ『<sup>ジョーカー</sup>切札』ことカイトさんでした!!

入団試験で見たあの実力は紛う事なき本物

そんな実力者までもが私の指導に加わってくれるだなんて光栄すぎで逆に申し訳ないというか——

「……うわあ……」

……え、何ですかこの空気

ガヤガヤと騒がしかった送迎会から一瞬音が消えたんですけど……

「レフィーヤ、このケーキ美味しいわよ」

「え!？」

「レフィーヤおかわりはいるか?」

「え、はい、いただきます」

「レフィーヤこれ効果の高いポジションだ、もらつとけ」

「は、はい!ありがとうございます!」

何故か急に次々と先輩方が優しく声を掛けてくれたりデザートを譲ってくれたり……とりあえず先輩方とたくさん交流することができました!

新人である自分にこんなに良くしてくれるなんて何て暖かいファミリアなのでしょうか!

(優しい先輩達の期待に応えるためにも頑張ろう!)

これからの冒険者生活への気合いがより一層強まりました。

.....

◇ 10年○+1月▽日 天気ゲボエ ◇

訓練がキツイです

いや、覚悟はしていましたよ?

でもその10倍キツイです

なぜあの入団時の歓迎会で先輩方が優しく接してくれたのか訓練開始の三日目辺りで悟りました。

師匠——カイトさんと呼ぶのに何か抵抗があったのでこう呼んでいます——

師匠はかなりスパルタです

そして非常に合理的です

『アルモビュライ・エノモタイア炎門の守護者』アアアアアア!!』

師匠、違います、何かはわかりませんがそのスパルタは違うと思います。

「とりあえず、走り込みと走り込みと筋トレと筋トレな」

師匠はこちらが逆らう理由を理論的に潰してから拷問……訓練を課します

効果だけは如実に表れるので逆らいにくいです。

◇ 10年○+2月▽日 天気 爆裂 ◇

今日も今日とて私は体中から煙をしゅくと炊きあげながらグロツキー

最近はりヴェリア様と魔法の本格的な修練も始まりました、とてもとても光栄なのですが師匠程ではなくとも厳しめです。

ちなみに今日はそこに師匠も指導に加わり難易度がナイトメアになっっています 助けて。

先輩方はこの二人の訓練を初見殺し訓練と言っていましたですが初見じゃなくても余裕で死にそうです いっそ殺せ。

ちなみに訓練内容は限界値まで魔力を振り絞って魔法を放つとい

う単純ながらも厳しいものです

「目標は入団試験でカイトに放った魔法以上の威力を常時撃てるようになること」

と、リヴェリア様には言われました。

んな無茶な・・・あ、リヴェリア様、いえ何でもありません・・・はい、頑張ります。

今まで魔力爆発を恐れて込め切れていなかった魔力を魔方阵と魔法に込める

言葉にすると簡単ですが、例えるなら巨大な樽に限界まで火薬を詰めてそれを片手で持ちつつ火山地帯を綱渡りで歩く様な難易度です

『平行詠唱』ならこれを全力疾走で行う、といったところでしょうか

今の私では逆立ちしても無理

次元の違う話です。

入団試験のときに師匠に放った魔法は普段の私なら魔力爆発を恐れて絶対に込めないほどの魔力を込めて撃ちました、その結果として私でも驚くほどの威力となったわけですね、いやああの時は我ながら自分で撃った魔法の威力に驚きました

まあそれも師匠に簡単にブツ飛ばされましたけど・・・ヘコむ

うう、とりあえず話を戻しましょう。

まあ、そんなわけで魔法の訓練で私は限界ギリギリまで魔力を込めて魔法を放つ練習をしているわけなのですが、そう簡単に上手くいくわけもなく・・・ボン！

しゅくくく、と焦げる臭いと音をあげて倒れているわけです

そして本当にキツイのはここからです

普通ここまでボロボロになったらその日の訓練って終了だと思うじゃないですか？

「んじゃ、リヴェリア、いつも通り回復魔法よろしく」

「仕方ない、ハイポーションの代金も馬鹿にならんしな」

そう言つて強制回復で即座に訓練再開です  
訓練？  
いいえ拷問です。

◇ 10年○+3月▽日 天気 オロロロロ ◇

「お前さんは良くも悪くも後衛特化すぎなんだよなあ、まあそれも悪くないんだが・・・いざと言うときにそれだと困る」

それは、まあ、はい

訓練開始から早くも3ヶ月

自衛の近接訓練でズタボロ&仰向けに転がされている私に師匠がポツリと呟きました

私自身、近接に於ける最低限の自衛の力は必要だということはこの数週間の訓練で嫌と言うほど思い知らされている、主に師匠からの暴力とか暴力とか暴力とか暴力とか・・・正直ダンジョンのモンスターよりも師匠がコワイ

ですが、おかげでダンジョン上層では近接のみでも問題なく潜れる様になりました

つまり今の私の自衛技術の訓練はダンジョンのモンスターからではなく師匠から身を守るために鍛え上げていると言つても過言ではない・・・自分で言つてて内容がおかしいですね

何故、対モンスターではなく対師匠の訓練をしとるんですかね私は。

「今のお前さんを図で表すとこんな感じだ」

そう言つて師匠は地面にガリガリと簡単な文字と図を描いていきます

力

防

技

速

魔

いや・・・魔力評価はちよつと盛りすぎでは？

「ちなみにこの数週間の訓練がなければ魔力以外の評価は0な」

ぐは、マジですか・・・

「つてなわけでこれを多少マイルドにするのが当面の目標だ」

マイルド？

「ああ、基本的には魔力を中心に他のステイタスを底上げする感じだな・・・つと・・・こんな感じか」

師匠が先程の図を雑に書き換えていきます

力

防

技

速

魔

ステイタス値が階段みたいに綺麗に並んでいる様に見えますね、後衛としては確かに最低限のバランスといった所でしようか

「とりあえず、行軍に付いていけるための俊敏、近接での杖術による自衛技術を優先して他の耐久と力は最低限でいいだろ」

うくん、でも有事の際を考えるなら耐久ももう少し上げた方がいいのでは？

「そうなんだが、エルフって種族特性的に耐久が上がりにくいことに

加えて：・つか、おいこら馬鹿弟子、ステイタスの『耐久を上げる』って意味をわかって言ってるのかそれ？」

ぬぐう・・・

言われて自覚する

ステイタスというのは理不尽なほどに経験を反映する

耐久を上げるということはそれだけ負傷しなければならぬということだ、後衛の自分が耐久のステイタスを上げるのは非常に難しいだろう

というか誰が馬鹿弟子ですかこの鬼畜師匠め

「ほくう・・・ま、耐久も上げたいってのなら話は簡単だ」

へ？

「今日からもうちよい厳しめに逝くか」

え、これ以上厳しく？

あれ、もしかして鬼畜とか言ったの　お、怒ってます？

そんな、これはほら、あれですよ！

師匠と弟子の気軽なコミュニケーションじゃないですか・・・あ

の……顔がマジなんですけど……。

「休憩終わり〜　それじゃあ行くぞ〜」

ちよまつ無理！無理ですって!?

テルモビュライ・エノモタイア

『炎門の守護者』アアアアアアア!!」

いやああああああ!!?

今日も師匠は超スパルタです。

◇ 10年○+4月▽日 天気　ズーンとシヤラ〜ン　◇

ダンジョンの中層で死にかけました

油断していたつもりはありませんでしたが探索中に床が急に崩落  
そのせいでパーティメンバーとはぐれてしまったからです

唯一の救いは孤立ではなく1人の先輩冒険者と一緒だったことで  
しよう

「レファイヤ、とにかくここから移動しよう、今の音を聞きつけてモン  
スターが集まってくるかも知れない」

「っ……はいー」

時には息を潜め、時には全速力で駆け抜け

そうして、かなりの長い時間を彷徨さまよいました

もし訓練で師匠に扱かれていなければこの行軍に付いていけな  
かったでしょう、厳しすぎる師匠との訓練が私の命を間違はなく繋い  
でくれました、調子が良いかもしれませんがこのとき心の底から師匠  
には感謝しました

「……くっ」

「ひっ?」

それでも、とうとう中層で最悪のモンスターに数えられるヘルハウ  
ンドの群れに追い込まれてしまいました

先輩もさすがにこの状況には焦っていましたし私に至っては絶望  
です

背後は高さ15メートル以上の壁

先輩や私にそれだけの高さを跳躍できる力はありません

『GAAAAAAAAAAAA!!』

唯一の逃げ道である前方を塞いだヘルハウンドの群れが一斉に極  
炎の炎を私たちに向けて放ちました

——ああ、私死ぬんだな

と諦め掛けたときでした



『——盾となれ 破邪の聖杯』さかすき

頭上から綺麗な詠唱が聞こえてくると同時に誰かが私達の目の前に降り立ちました

でも

間に合いません、だってもう炎が目の前に——

「魔 法 障 壁「ディオ・グレイル」!!」

た、短文詠唱魔法!?

ヘルハウンドの炎は全てその人が展開した魔法障壁によって防がれ、私たちは九死に一生を得ました

あの詠唱の短さでこれ程の強力な障壁を展開するなんて・・・すごい。

「あ、あなたはカイトさんの——」

先輩が何か言っていますが放心状態の私では「すごい」という陳腐な言葉しか出てきません

「——無事か?」

「は、はい・・・あ、もしかしてカイトさんからの救援ですか?」

「そういうことだ、あいつもすぐに駆け付ける」

どうやら師匠からの救援とのこと

背後の壁から降り立ったのは白の装束をメインとしたとても綺麗なエルフ同胞でした

名前は『フィルヴィス・シヤリア』さん

二つ名は『マイナデス白巫女』

後から聞いて話ですが、崩落に巻き込まれなかった私のパーティーメンバーがすぐに地上の師匠に救援を呼びに行き、そこで師匠と共に居たフィルヴィスさんはいついでとばかりに探索に協力してくれたのだそうです。

「私が来るまでよく生き延びていてくれた、カイトが来るまでにはこいつらを一掃する——後は任せろ」

「お願いします．．．ふう、レファイヤどうやら何とか．．．あれ、レファイヤ？」

か、かつこいい　．．．

はっ、い、いけません

私にはアイズさんという心に決めた憧れがつつ．．．!?

「おくい、レファイヤく帰ってこーい．．．」

その後、フィルヴィスさんは複数いたヘルハウンドを宣言通りに一掃

先輩と私はこの後すぐに到着した師匠達に保護され地上に帰還しました

それと不謹慎かもしれませんが、私が生きていることに安心した師匠の顔は中々に見応えがありました、あんなに焦った顔もできるんですねくふふふ、心配を掛けてしまい申し訳なかったですけど、きちんと心配してくれたことが少し嬉しかったです．．．我ながら不肖の弟子だと思えます。

．．．  
私は今回の件でダンジョンの恐ろしさを初めて知りましたが  
ですが

帰還した後の私の心を占めたのは恐怖ではなく興奮、私を助けに来てくれたフィルヴィスさんの戦闘時の光景が目には焼き付いて離れなかつたからです

魔導師であるにも関わらず前衛に負けないほどの短剣による鋭い  
剣戟

そして『平行詠唱』

しかもただの『平行詠唱』ではなく魔方陣を起動させつつの戦闘

魔導師として理想の戦闘スタイル

リヴェリア様や一部の特別な者にしか使えないものだと、どこか遠くで思っていた絶技

でもそれを当たり前のように使う者達がゴロゴロいるオラリオ！

私もいつかあんな風に！

私はいつかの未来に思いを馳せつつ昂ぶって眠れませんでした

あ、ちなみにフィルヴィスさんは師匠と将来を約束した恋人だそうです  
です

我が師匠ながらあんな美人を捕まえるとは羨ま・・・やりますね！

◇ 10年○+5月▽日 天気 カくくツ・・・ペツ！ ◇

師匠がクズでした

将来を約束した恋人がフィルヴィスさん以外に3人もいるそうです・・・ゴミですね、女の敵です。

フィルヴィスさんというあんなに綺麗な人が居ながら他の女性にも現を抜かすとは・・・死ねばいいですよ。

訓練時に刃を間引いていない短剣で斬りかかりました  
天誅ううううううそして日頃の恨みいいいいい！

「お、今日は妙にヤル気満々だな！ 結構結構ハッハッハッハ！」  
へブあるぶ!?

・・・掠り傷一つ負わせることもできずにボロボロにされました  
無念。

◇ 10年○+5月▽+5日 天気 ◇

「いや、カイトに嫁が増えたのには色々事情があるんすよ」

食事の際、たまたま居合わせたラウルさんに師匠の愚痴を零していたら師匠の事情に関して軽くですけど教えてくれました

何でも最初の恋人である『全能』ベルセウスこと『アスファイ・アル・アンドロメダ』

その人がはちやめちな事件に巻き込まれやすい師匠を支えるために集めたのがフィルヴィスさんを含めた3人なのだから

師匠を愛するが故に師匠の命を最優先で動くロキ・ファミリア以外での師匠の嫁

・・・というか私兵のような感じらしい

「まあ、これがまた面子がスゴいんすよねえ」

### 《筆頭嫁》

『全能』ベルセウス『アスファイ・アル・アンドロメダ』Lv. 4

ヘルメス・ファミリア団長にしてオラリオでも5人と居ないアピリテイ『神秘』を持ち数々の魔道具を製作してきたアイテムメイカー

### 《嫁序列次位》

『戦場の聖女』デア・セント『アミッド・テアサナーレ』Lv. 2

オラリオ最高の治療術士にしてこちらも『全能』ベルセウス同様に『神秘』を持ち 数多の薬を開発・製造し現在もオラリオの冒険者全てに多大な貢献をしている

### 《嫁序列下位》

『単眼の巨師』キョクロープス『椿・コルブランド』Lv. 5

世界にその名を馳せる第一位の武器ブランド『ヘファイストス』、そしてそのヘファイストス・ファミリアの団長にしてオラリオ最高の上級鍛冶氏

### 《嫁序列下位》

『白巫女』マイナデス『フィルヴィス・シャリア』Lv. 5

ディオニユロス・ファミリア団長

．．．．．はい？

筆頭嫁？嫁序列？．．．．．なんですかそれ

「なはははは、いや、これは周りが面白がつて勝手に言ってることなんすけどね？」

何でフィルヴィスさんが《序列下位》なんですか!!!

「そつち!？」

というかフィルヴィスさんの紹介が雑くないですか!?

もつと、こう、すごいスキルとか魔法とか!

「確かに、フィルヴィスさんだけのすごい魔法があるといえはあるんすけど．．．」

それー！ー！それです!!そう言うのを教えてくださいよ!

「いや、あの魔法は極一部の者しか知らない魔法つすからねえ．．．本人の許可無く自分が教えるのはちよつと．．．」

なるほど確かに他人の魔法を無闇矢鱈に．．．．．ん？

いや、待つて下さい、何でラウルさんがその極一部しか知らないことを．．．

しつてるんです？

あれから師匠を通じてフィルヴィスさんとお話を色々しているんですけどそんな秘密の魔法があるとか聞いてもいませんしそもそも私はまだ出会ったばかりで全てを教えて貰えるとはおもいませんけど男と女には遙か彼方の距離があるんですよそれなのに男のラウルさんが知っていて同じ女である私が知らないのってちよつとおかしいとか納得いかないというかそもそもラウルさんがフィルヴィスさんの名前を呼ぶときにかんりの気安さを感じましたもしかしていやもしかなくても私以上に親しい間柄なのでしょうか確かに冒険者としての経歴の長さから知り合いでもおかしくはないので

しようけど親しき仲にも礼儀ありもうちよと畏敬の念を持って名前を呼んでみてはいかがでしょうかいや別にラウルさんを軽んじているわけではありませんよええ決して羨ましいとかそんな低俗な感情で聞いているのでなくただただ尊敬するフィルヴィスさんとの距離がどのくらいあ

「ちよっ、レフィーヤ！いや、レフィーヤさん!? 乙女がしちやいけない顔になってるっすよ!?!」

な  
ぜ

「い、いや、昔からよく自分にカイトとアイズさんフィルヴィスさんの四人でパーティを組んでダンジョンに――」

フィルヴィスさんどうあけえじゃなくてえアイズすわあんともオオオオオオオオオ!

「ひいひいひい!?!人がしていい表情じゃなくなってるうううう!?!」コワイ!?!

コオオオオオオオオオオオオオオオオオオツオオ〳〵  
? ? 、 〵アアアアアア

. . . . .

「うう、さ、さすがカイトの弟子っす……この親にしてこの子ありとはこのことっすよ……」

先輩のラウルさんに失礼しちやいました、レフィーヤ反省☆

うう〜でも〜・・・

フィルヴィスさんに関してもうちよつとすごい感じの内容ってないんですか？

何かフィルヴィスさんが軽んじられているみたいで良い気がしないというか……

「いや、第一級冒険者でファミリアの団長つてだけでもかなりすごい事だと思うんですけど……」

いや、でも嫁の半分以上が同じく団長じゃないですか……って言うか師匠どんだけすさまじい方々に手出してんですか!?

「いや、むしろカイトの方が喰われた感じっすよ」  
ええええ!?

あの鬼畜師匠のどこがいいんでえあだだだだだだ!?

誰かに頭をとんでもない握力で握られました、

誰ですかあ!?

「うるせえから何事かと来てみれば……随分と好き勝手に言ってくれるなあ馬鹿弟子?」

ぎよああああああ師匠おおおー!?!?

後ろを振り向くと不必要に笑顔の師匠がいました……あ、死んだこれ

「元氣一杯だなおい、よくしじやあ今から訓練行こうぜ、訓練の相手は階層ボスな?」

師匠それ、ただの処刑です。

「カイト、さすがにいきなり階層ボスはヤバいつすよ」

「じゃあ、久しぶりにラウルもー」

「レフィーヤ、人間死ぬ気になれば大抵の事は何とかなるっす! ファイトっすよ!! それじゃっ!!」 アデユ〜

あ、ちよ、ラウルさん逃げないで下さい! 待ってええええええええー!?!

「さすがに死にそうになったら助けてやるが、四肢の一本なくなるくらいなら助けねえから死ぬ気でやれよーH A H A H Aー!」

ちよ、これ、師匠マジですよ!?ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい、いやちよ引つ張らないで、ぬああ!?ホント誰か助けてええええええ!?

「うるさい、階層主のどこまで寝てる」

あべし!?

この後、目覚めたらマジで17階層でした。

『G A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

いやああああああああ!?ホントに死ぬうううううう!!

現在、階層主との命を掛けた鬼ごっこ中、もちろん鬼は階層主のゴライアス

捕まる!!死 という史上最悪の鬼ごっこです

「頑張れ〜我が弟子〜!」フレーフレ、レフイーヤー

遠くからわざわざ黄色のポンポンを持って声援を送るアホが一人、  
というか師匠

「ゴライアス君も頑張れ〜」ヒュ〜

このっ・・・くたばれ鬼畜師匠ー!ー!!

『G A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

師匠に気に向けた瞬間、私のすぐ後ろにゴライアスの拳が振り下ろされました、衝撃だけで数メートル吹き飛ばされる威力です

ああ、もうっ!いつかあの鬼畜師匠、ぶっ殺

『G A A A A A A A A A A A G A A A A A A A A A A A A A A A A!!』

その前に私が死ぬう!?



でもこの時の私はまだ知りませんでした  
これすらもラウルさん達が恐れる訓練の半分にも届かないなどと  
は・・・

《side out：レフイーヤ・ウイリデイス》

|||||

51：師匠？弟子 中編

|||||

《side：レフイーヤ・ウイリデイス》

◇ 11年〇月▽日 天気パーリー ◇

早いもので入団してから一年と少しになります

おかげでロキ・ファミリアにも大分慣れてきました

そんなアンニユイな時期にリヴェリア様から直接お達しがありました

なんでも

「カイトから、『そろそろ遠征に参加するだけの最低限の基礎は叩き込んだ』と報告を受けた、レフイーヤ、お前も次の遠征に参加となる、2週間後までにしっかりと準備をしておけ」

———とのこと

っ、つつつつつつっ……っいにっ！

初めて大規模の遠征への参加!!

長かったっ！本当に長かったですっ!!

ああ…思い出すのはこの一年と少しの地獄の日々

・

・

「おらあ！足元がお留守だぞ!!」

「アキヤアアア!?!」

地面に何度も転ばされ、泥が付かない日は一日としてなく

「杖術は回転が基本!というわけでバトンの練習を楽しくダンスをし  
ながらー」

(あ、少し楽しそう)

「18時間だ!!」

ニゲロ!!

「あ、こちら!どこに行く!?!」

「イヤアアアアア離してええええええ!?!」

筋肉痛に悩まない日々もない

ふ、ふふふ、よく死ななかつたなあ私…

いえ、ですがあの地獄の特訓の成果が今まさに「遠征に参加」とい  
う実を結んだのです

よ、よおくくし頑張りますよー—————!!!

◇ 11年○+1月▽+14日 天気 暑い ◇

あれから一月半

本日未明、遠征からようやく帰ってきました

今回の遠征では色々反省することばかりでした…はあ

『遠征メンバーに選ばれた』テツテレー♪

そのせいでしょうか、自分でもちよつと調子に乗ってたと思います

『憧れの方々と肩を並べてダンジョンに潜れる』

ただそれだけのことで舞い上がっていました

世界に名高いオラリオ

その中でも二大派閥の片割れの遠征がそんなウキウキ気分で済む  
わけがないのに

少し想像すれば分かることなのに…はあ、私のバカ

…何か色々疲れました

続きは明日書くとしましょう。

◇ 11年○+1月▽+15日 天気 だるゝい ◇

『上層』・『中層』・『下層』を超え

初めての『深層』

『下層』ですら初めてなのにそれを超えての『深層』

完全にサポートに徹していたとはいえ、その道は想像を絶するもの  
でした

なにせ深層ではあの師匠が血を流す事態が起きるのです、それも頻  
繁に。

私の中で「憧れ」がアイズさんやリヴェリア様だとしたら

「理不尽」の代表は師匠です

…わかるでしょうか？

理解できるでしょうか？

そんな方々が血まみれになって息も絶え絶えになるのが『深層』なんです

理不尽代表の師匠がそれ以上の理不尽で膝を突く姿には自分の眼を疑うほどでした

師匠が血を流す所なんて初めて見ました、ダンジョンってすげえ：いいぞもつと：あ、いえ、ダンジョンの恐ろしさの一端を垣間見た気分です、はい。

でもそれ以上に――

「第二部隊は槍を構え！第一が下がると同時に突撃！前線を押し上げろ！」

全員に的確に指示し鼓舞する団長

「全員、耐えるんじゃ！背中に一匹たりとも魔物を通すでないぞ!!」

前衛の先輩方を率いて数え切れないモンスターを自らも最前線で食い止めるガレスさん

「第二部隊が下がると同時に撃つ、全員詠唱開始!!」

そのモンスターを魔法で一気に殲滅するために魔法部隊の指揮を執りつつ自らも魔法を行使するリヴェリア様

「ティオネー！後退する第一部隊の援護にラウル達と行ってくれ、こっちは残り全員で第二が取っ付きやすいように『視野混交』<sup>シャッフル</sup>と同時に突入！中から掻き回す!! 行くぞおおおお!!」

「「応おおおお!!」」

そしてアイズさんやベートさんといった突起戦力メンバー全員を率いて独立遊軍のように立ち回る師匠

かつこよかったなあ〜…

御伽噺を実際に眼にしたかのような、いえ、あれは間違いなく後世

に語られる冒険譚的一幕

それを間近で見ることができるといふ自らの僥倖にわけもわからず感謝したくなりました

はあく…かつこよかつたなあ…いやほんとかつこよかつたんですよ

団長達やアイズさんはもちろんですが、いつも鬼畜な師匠ですらカツコよく感じた程ですから相当なものですよ

つていうか師匠や他の方々から話だけで聞いていた師匠の例のスキルを始めて眼にしました

代償を伴う代わりにランダムで強力な能力をその身に宿すというギャンブルちつくなりスキースキル

何ですかアレ…強すぎでしょう

深層で超大規模なモンスターパーティーに巻き込まれた際に一切の躊躇無く発動させた今回の能力は『神々の義眼』という支援系の能力らしく

透視、視覚の共有、視覚の篡奪といった視覚に関することは大体できるといふようです

そして、それを利用して団員全員に視覚共有を行い部隊行動を行うという離れ業

大規模な戦闘中に急に片目から私が見ている光景とは違う映像が見えるのは慣れていないせいで平衡感覚が少しおかしくなりそうでした

ですが、慣れている方々への効果は歴然

片目から筆談で即座に団長の指示が伝わり

リアルタイムでの現場状況の把握

ただでさえ集団として強いロキ・ファミリアの動きがまるで一つの生物のようでした

ただし、確かに師匠の今回の能力は強力なのですが…その代償がキツイ

代償は『一時的な失明』

一時の油断も許されないダンジョン

しかもその深層で視覚を奪われるという致命的過ぎる代償

・・・普通なら、ですけど

大規模のモンスターパーティーを乗り越えた後しばらくしてからのことです

通常の行軍中に突如、壁からモンスターの群れが現れるという奇襲を受けました

「カイトさん危ない!？」

「師匠!？」

突如現れたモンスターからの奇襲に後方に下がっていた失明状態の師匠がモンスターに囲まれるという事態があったのですが

焦るこちらとは裏腹に師匠はゆつくりと自身の武器である「刀」その柄に手が触れ

「シツツ!!」

——た瞬間

ビシヤ

「「え……え!?!」」

聞こえてくるのは師匠の周囲で血肉が飛び散る凄惨な音

「おゝい、すまんが一応、魔石の回収を頼む」

取り囲むようにして師匠に飛びかかった複数のモンスターが一瞬で細切れになってました

「「え……?」」

「ん?……どうしたお前ら?」

この程度なんでもないとでも言うかのような師匠の人外つぷりに

一部の方々を除きどん引きです

師匠、あなた本当に眼は見えてないんですね？

「ああ、マジで見えてないぞ、まあこの程度なら音の反響とかで把握できるさ、例えば…そうだな…ここから20メートル先を歩いているのはリヴェリアだろ？」

あ、当たってます、本当に音の反響だけで？

「まあ、音だけじゃないがな、特にリヴェリアは最近俺の作るデザートを食べ過ぎて体重がベエゲエ!？」

どこからともなく飛んできた杖が師匠の喉につ!?

「おっと、すまんなカイト、手が滑った」

ツカツカと歩いてきて杖を拾うのはリヴェリア様

「何すんだリヴェリア、増えたつつつてもたつたの「ふん!!」ボエ!？」

師匠にトドメが…

「…………お前達、カイトから何か…キイタカ？」

『『ブンブンブンブン!!』』』

全員、首が千切ればかりに横に振ります、藪を突いてリヴェリアを出してはいけません

「うむ、賢明なものはダンジョンでは長生きするぞ、ではな…行軍には遅れるな、そこで倒れてる荷物も一緒にな」

そう言つてリヴェリア様は離れて行かれました

…色々な意味で危機は去りました、ふう

それにしても、どうやら師匠の場合は他の感覚が優れすぎていて普通に過ごせるみたいです、相変わらず化け物みたいな人ですね

私、あんなすごい人の弟子なんですねぇ…地上ではあまり実感しにくいことを改めて痛感させられます…私もいつか師匠達みたいになれるのでしょうか？

◇ 11年○+1月▽+18日 天気 わけわかめ ◇



ダンジョンから帰還して早数日

幹部クラス、先輩方のステイタス更新もほぼ終わったと聞いたので  
私自身のステイタスを更新をするためにロキの部屋へ行きました

ステイタスを更新するためとはいえ裸になるのは今でもちよつと  
恥ずかしいです

まあ、未だに恥ずかしいのはロキのせいなんですけど・・・

「グへへへッへ、すべすべな肌やで〜」

うう…主神のセクハラが酷いっ

「変なことをしたら指を切り落としていいぞ」とリヴェリア様からは  
言われていますが、そんなことできるはずもないのでため息を尽きつ  
つ耐え忍びます

「んお？・・・これは・・・んんん〜？」

あれ？

なんででしょうか、いつもより少し更新が長いような・・・

「レフィーヤ、すまん、ちよつと急いでフィン達を呼んできてくれへん  
？」

え・・・団長達ですか？

「せや、最低でもリヴェリアとカイトだけでもちよつと連れてきて欲  
しいねん」

それはいいですけど・・・また急にどうして

「せやなく・・・とりあえずなんやけど、レフィーヤ、おめつとさん!!」  
はい？

「最後の三つ目の魔法が発現しとつたで〜」

え、は、？魔法？

「それに関してリヴェリアやカイトと相談したいから呼んできて欲し  
いねん」

わ、わかりました！・・・あの、二人を呼ぶ前にどんな魔法が発現  
したかステイタスの写しを見せてもらっても良いですか？

「ええで〜 いやあくそれにしてもカイトのスキルもチートやったけ

どレファイヤも大概やなあ」

え、そんなすごい魔法なんですか？

「ま〜じですごいでこれ……ぶっちゃけ、下手したらカイト以上のチートや！ほれ、これがステイタスの写しや」

ロキから渡されたステイタス紙には確かに今までなかった三つ目の魔法欄に新たな魔法名が刻まれていた

「なに……これ……『サモン・バースト召喚魔法』？」

◇ 11年○+1月▽+20日 天気 ブリザード ◇

私に発言した新たな魔法

『サモン・バースト召喚魔法』

魔法名《エルフ・リング》

同族であるエルフの魔法であれば文字通りいくつでも召喚し行使することが出来る

ただし、召喚するには使用する魔法の詠唱及び効果の完全把握ができていなければならず魔力の消費も倍になる。

ただそれを補って有り余るほどの有用性があるとロキも師匠も言っていた

なにせ手数を無限に増やすことが出来る上にそれを自分で選択まのできるのだ

その程度の条件はむしろ軽い方だと思えと言われたし、私自身そう思う

ロキ曰く

「この弟子にして師匠あり……いや逆やな、この師匠にしてこの弟子

ありやな」

師弟揃って、一つのスキルや魔法で複数の能力を行使するという前代未聞の大珍事

「レフィーヤがこの魔法を発現したのは間違いなくリヴェリアとカイトの影響やろうからなあ」

本来なら三つしか使えないはずの魔法、その常識を越え九つの魔法を使いこなす『九魔姫』<sup>ナイン・ヘル</sup>リヴェリア様

スキルという魔法ではない力で未来・過去・次元すら超えて未知の力を複数使用する『切札』<sup>ジョーカー</sup>師匠

この二人の共同弟子という偶然が今回のイレギュラーである私の魔法を発現させたとロキは言っていた。

魔法というのは本人の心の底の願いが現れやすいと云われているのであながち間違いではないのかも知れない

とまあ、そんなこんなで本日は私に発現した新たな魔法の試し打ちということでダンジョンにきています

ちなみに同行者は師匠とリヴェリア様の二名

あまりゾロゾロと大人数を引き連れて目立つのを避けるためにも必要最低限ということでの三人になりました

そして――

「ウィン・フィンブルヴェトル!!」

大気中にある水分が凍りつく音と共に広大なルームの一角が絶氷の津波に飲み込まれる

使用された魔法はリヴェリア様の所有する魔法の中でも最大の威力を誇る第一階位の魔法

氷による恐像がルームの半分を覆い尽くしている光景が目の前に広がる

そして、それを放ったのはリヴェリア様ではなく私

「ひ、ひいえ〜…」

自分で自分の放った魔法の威力にドン引きしてしまいました

「おろすげえすげえ、マジで撃てんのな」

「ふむ…戦略の幅がさらに広がるな、フィン達と新たな陣形について  
練りたい所だ」

「だなく、平行詠唱ができない内は当分、遠征中は後衛をメインでいく  
しかないしなあ」

「そっちの遊撃から何人か護衛を抜けば独立して砲撃手もできるが  
？」

「いいなそれ！…っつてくると、ラウルかアキ…いや念には念  
を入れてティオナ辺り…か？」

少し後ろでお二人が私の放った魔法を見て品評会の様なコメント  
をしていました

「レフィーヤ、この威力の魔法なら何発までなら撃てそうだ？」

「はい!! えっと…たぶん、ですけど…余裕を持って二発、マ  
インドダウン覚悟でも三発目が撃てるかどうか、だと思えます」

分かつてはいましたが魔力の消費が洒落になりません、師匠には  
「余裕を持って二発」なんて言っちゃいましたけど、たぶん二発撃った  
時点でかなりヘロヘロで余裕がなくなると思えます。

「カイト、これなら…」

「ああ、これで今まで以上にアレもできるし…それにこいつ  
が居ればメレン港まで直接行くこともできそうだ、あそこはオラリオ  
への海の玄関、情報提供できるパイプがあれば後々色々な事で役に立  
つこともあるだろ」

「成る程…ニョルズ・ファミリアに貸しを作る、か…」

「まあ、そこら辺は交渉次第だな」

あの・・・何の話をしているのでしょうか・・・私の関知しない話に間違いなく私が組み込まれている会話が聞こえてくるんですけど・・・

「とりあえず、今日はこいつにリヴェリアの魔法を全部使えるようになってもらおうとするかね」

今日で全部!?

「今日一日で全ては難しいぞ」

さ、さすがリヴェリア様、魔導師としての負担をわかってらっしゃ

「とりあえず攻撃のみは今日中に、回復と防御系は明日以降でいいだろう」

——おっふ・・・連日で魔法の実地修練ですか・・・キツそうです

そんな私の悲壮な覚悟を知ってか知らずかお二人の改造計画（私）の話はドンドン進んでいきます

誰も止める人がいないのが私の不運・・・うう・・・

「全部で何日かかりそうだ？」

「覚えるだけなら三日もあればいけるだろうが・・・使いこなすとなると・・・」

「こいつ次第か」

「そうなるな、魔法の修練は魔力が回復する時間も考えなくてはならないからな」

「魔力の回復も考えると三日に一回が限界ってところか・・・となると・・・余裕を見て、一月で全部の魔法を『とりあえず使うだけ』はできる』ってレベルまで持って行きたいな」

「ふむ、善処してみるとしよう」

「となると、俺の方の訓練を——」

恐ろしい教育計画が後ろで着々と立てられています

拒否権とかないんだろぅなあ・・・いや、ちゃんと頑張りますけどね？

詠唱の暗記とこれまで以上の魔力操作練習

師匠との訓練よりかはいくらかはマシでしょう・・・うん、そう思えば、いくらか気持ちになりました！

頑張ろう!!

・・・っていうかお二人はまだ訓練について話してます

「マインド・ポジションを多めに用意してぶっ倒れたらそれをガンガン突っ込めば訓練の効率が良くなるんじゃないやね？」

あ、師匠、これ私を殺す気ですね・・・ほんと死ねば良いのに「馬鹿を言うな」

さすがリヴェリア様！リヴェリア様は最後の良心です!!

「一日5本までにしておけ」

・・・最後の、良・・・心・・・。

《side out :レファイヤ・ウイリデイス》

|||||



・  
・  
・  
・  
・

私が三つ目の魔法を発現させてから二ヶ月

地獄の特訓を乗り越え、とりあえずギリギリ及第点でリヴェリア様の魔法が使えるだけにはなりました

(ふう…少しは使用にも慣れてきましたね……ん?)

訓練で私が魔法を使用するのを見て師匠とリヴェリア様がなにやら密談をしていました

「もうそろ…メレ…に…クククク」ヒソヒソ

「そうだな…だがい…魔ほ…しの取り分…フフフ」ヒソヒソ

こ、怖い…っていうか絶対良からぬことを考えてますよこれっ！

「あ、あの…お二人とも、何か…？」

意を決して二人に声を掛けました

「いや、なんでもないぞ」ニツコリ

絶対に嘘だー！ー！！

「嘘だー絶対に嘘ですよ!!お二人とも何か新たに企んでましたー!!何ですか次はどんな訓練ですか!地獄のその先がまだあるって言うんですか!？」

「おいおい被害妄想がすぎるぞ?」

「既に被害にあってるから言ってるんですよ!」

シャーつと師匠に警戒する私



この一年間のことを考えれば当然の警戒心です

「落ち着けレフイーヤ」

「うう、ですが・・・」

師匠とギヤアギヤアと言い合っているのを見かねてリヴェリア様が仲裁に入ってきました、さすがにリヴェリア様には正面切って文句が言いづらいです

「やれやれ、このバカ弟子は何を勘違いしているのかねえ、俺とリヴェリアは頑張ったお前に何かご褒美でもやるかどうか話してただけだったの」

「え・・・う・・・うむ、最近のレフイーヤへの頑張りに何か報いるものでも用意しよう」と話していてな

「とりあえず、今日は俺が特性のデザートでも作ろうと思っただけ・・・何か希望とかあるか?」

「え!?!」

な、なんでしょうリヴェリア様はともかく師匠が優しいですキモチワルツ

「……罨?」

「失礼な、心優しい師匠の気遣いを何だと思っただ」

この日の夜

夕食後、本当に師匠お手製のデザートが振舞われました

「え!?!ちよつ、カイト何それ新作デザート!?!」

「私も食べたーい!」「私も!!」「自分も食べたい」

師匠の料理の腕はファミリア内なら周知の事実

師匠がデザートを出した瞬間に甘いものに目がない方々が次々に集まってきました・・・ですが

「わりい今日は馬鹿弟子へのご褒美なんでな、一人分しか作ってないんだ」

「「ガーーーーーッーン!!」」

師匠の無慈悲な一言に全員が絶望の表情に…あんまりそういう反応されると食べにくいのですが…

「それに、まだ未成品の試作段階でな、全員に振舞うときはもっと仕上げた完成品を出すから勘弁してくれ」

「ええ〜」「はあ、仕方ないかあ」「残念」

他の皆さんも新作の試食という名目と師匠の説明によりとりあえずは納得したのか残念そうに食堂を後にしていきます

「…何か申し訳ないですね」

「アホ、こんなことくらいで遠慮すんな、パクツといけパクツと、ちなみにこのお菓子の名は『水マル餅』だ」

「へえ〜、餅って確か少し前に師匠がお米で作ってた奴ですよね」

「ああ、だが食感が似てるから餅って付けてるだけで材料は全く違うぞ」

「でしようね」

なにせ以前見たことがある餅とは似ても似つかない

見た目は文字通り水のように透き通った半球体、そのため何かしらの具が入っているのが透き通って見える、食べるのが少し勿体なく思えるくらいには美しい

「ちなみに中身は何ですか？」

「それくらいは食べてからのお楽しみでいいだろ…あ、きちんと細かい感想も頼むな」

「わかっていますよ」

師匠は何か作った際には必ず食べた者からおべっかなしの感想を求めます、そして次に同じものが出た際には必ずその感想を元にグレードアップした料理が再登場するので美味しいものを食べるためにも素直で率直な感想を伝えなければなりません。

ちなみに食レポで一番師匠の評価が良いのは団長とベートさん

だったりします、付け加えるならベートさんはその見た目や言動の荒々しさからは想像できないくらい料理上手、このファミリアに入団した女子はまず自分より遥かに料理の腕が上の師匠、そしてとどめとばかりにベートさんの料理で女子としてのプライドを粉々にされま  
す。かく言う私もその一人でした

「では、さっそく」

「おう、頂け」

竹で出来た楊枝でパクリ

(……………んんんん美味しい！！)

口に含んだ瞬間に肌に張り付くようなしつとりとした不思議な食感、噛みしめると中から出てくる甘味が透明な餅部分と見事なマッチング、中身の正体は餡子と呼ばれる甘味、よく師匠がお菓子作りで使用する具材です、ああ今回のお菓子にも非常に合っていて美味!!

師匠の料理の腕を知ってはいても美味しいと思わずにはいられません

何でしょうね、初めての食感と味に例えるべきものが見つからず原始的にただ『美味しい』という陳腐な言葉でしか言い表せません、くっ、自身のボキヤブラリーの無さに無知を禁じ得ません

「で、どうだ? 個人的にはもうちょい大きく作るか透明な餅部分を厚くしてもいいかなと思ってるんだが」

「んー、そうですねーそこら辺は個人で趣向が違ってくると思いますけど、私的にはむしろ一口で食べやすいようにもう少し小さくてもいいかなって思います、あ、でも餅部分の厚みは今ぐらいがちょうどいいです」

「なるほど、ふむふむ『エルフ 女性 十代の意見』つと」カキカキ  
あ、出ました、師匠の『丸秘ノート』

師匠はこうした感想や意見をレシピを書いているページに書いたり貼り付けたりして独自の料理本を作ったりします、一度見せてもらおうとしたら「将来の商売道具だから絶対ダメだ」と見せてくれませ



・  
・  
・  
・  
・

ぐ褒美のデザートを食べた次の日

(……ん……ん？揺れ……てる？)

少し激しい震動で目覚めました

「よお、おはようさんレフィーヤ」

「……………おはようございます」

目覚めた直後に師匠の顔面ドアップ

通常なら少しは気恥ずかしさで顔を紅くするところですが今現在の私の状況がそれをさせませんでした

移動による流れる景色、身動きできない身体 師匠によって担がれている身体

(ナニコレ……………)

今の私の心情を表すとするのなら 怒り2・呆れ3・達観3・諦め

2

こんな感じ。

「…師匠、いくつか質問があるのですが」

「んー？ 別にまだ時間があるからいいぞー」

何でもないというような態度が逆に私の神経を逆撫でします

「これ、どこに向かってるんですか？」

「メレン港だ」

「メレン港？…オラリオ近くのですか？」

「おう、正確にはそのニョルズ・ファミリアに用があつてな」

「はあ、なるほど…」

とりあえず現状を一つ把握、私と師匠はメレン港に向かっている、目的はどこぞのファミリアに会うこと、と。

「次の質問なのですが」

「おう」

「何で私は師匠に担がれてるんですか？」

「あまりにも気持ちよく寝てたから起こすのも忍びないと思ってな」

「ほほうう…私の記憶に寄れば師匠に渡された飲み物を飲んでからの記憶がないのですが」

「気のせいだろう H A H A H A !」

「~~~~っ！何が H A H A H A ですかっ！この鬼畜!! ついに盛りましたね!? 人としてやっちゃいけないライン超えたなこのアホ師匠!?! っていうか一応上級冒険者である私の状態異常耐性が効かない薬ってどんだけやばい薬を盛ったんですか!?!」

「いやあ、新薬を試してみたいなくって」

「弟子で人体実験しないで下さい!」

「アミッドが」

「アミッドさああああああん!?!」

脳裏にフフフフと微笑ましく笑いながら手を振る知り合いの姿が思い浮かぶ

—————  
そして現在

私はメレン港の市場付近の倉庫でただひたすらに魚介類に冷凍魔法を撃つだけの冷蔵魔道具になっています

ちなみに師匠はメレン港に到着するなりニョルズ・ファミリアの方々といくつか交渉をした後、私に過酷な命令だけして先日から大量の漁船団を率いて遠洋漁業に行っています…何やってんですかねあのアホ師匠は

(そして私も何やってんですかね…)

そう思いつつヤケ酒の様にポーションを一气飲み

(うう…マインドポーションの飲みすぎでお腹がチャプチャプですう  
〜)

ちなみに既に4本のマインドポーションを消費済み  
小食の私には液体とはいえ結構キツイです

(…そういうえばポーションを吐いたら回復した分の精神力<sup>マインド</sup>つてどうなるんでしようか…吐いたのをまた飲んで無限に回復が…いやいやゲロを飲む勇氣はさすがにないです…あ、でもアイズさんのならご馳走では!?ウツヒョー!!)

………。

ギンギラギンと容赦なく照り付ける太陽

そして師匠によって言いつけられた過酷な労働環境

この二つが私の頭を極限までアホにしています。

そんな極限状態のとき――

「おいおい、お前らこの娘を少しは労れ!」

とある方が声を掛けて下さいました

「す、すみません、魔法がすごくて…サウザンド・エルフ…つい」

「つい、じゃないっての、ったく…『千の妖精』今日はもう上がり  
で良い、無理はしないでくれ」

フラフラの私を見かねて声を掛けてくれくれる方

「ニヨ、ニヨルズ様」

「おう、今日はもう十分だ!あいつらに代わって礼を言わせてくれ!」

メレン港に根を張る漁業専門ファミリア

ニヨルズ・ファミリア主神、ニヨルズ様、本人でした。

・  
・  
・

「ほれ、取れたての魚だ」

そう言つてニョルズ様が手自ら七輪で焼いてくれた焼き魚を串に指して渡してくれれます

「あ、ありがとうございます」

疲れ果てていた私はすぐに目の前で香ばしい香りを撒き散らしている焼き魚に被りつきます

(ああ、美味しいですう)

半日ぶりの固形物、口当たりの甘いポーションばかりガブガブ飲んでいたこの身に魚の塩分が染み渡る

「しつかし、あいつらが無理させてすまん」

「い、いえ」

むしろ神にそこまで謝られるとこっちの方が恐縮してしまいます

「うちは基本ダンジョンに潜らない」「生産系ファミリア」だからなあ、最高レベルでも第三級しかいない：お前さんみたいな強力な魔法を見れる機会つてのは貴重でさ、良い歳した奴らまで一緒になつてはしゃいじまつてる」

「そう…なんですか？」

「ああ、あの『九魔姫』と『切札』<sup>ナインヘル</sup>の直弟子の魔法とくればなおさらだ…憧れの冒険者の魔法がタダで見れるつてなれば仕方がないのかもしれんけどな」

「…？…憧れ？」

「ん？お前さんのことだぞ、『千の妖精』<sup>サウザンド・エルフ</sup>」

「……はえ？」

ニョルズ様に言われた言葉が頭の中をすり抜けて理解するのに数秒かかった

「団長達ならまだしも私が憧れだなんてそんなこと——」

「いやいや、十二分にあるぞ、これだけの魔法が使えるんだ誇つてもいい、それは神である俺が保障する」

「あ、ありがとうございます」



あまり誉められるということがないため手放しの称賛に照れてしまいます

「カイトもお前さんも謙虚が過ぎるぞ？ お前さん達のおかげで俺たちメレンの住人はすっげえ感謝してるんだからよ」

「そうなんですか？」

「ああ、お前さんの魔法で凍らせた魚介類の氷は融けにくい、おかげで遠方の街まで運ぶ際に使う冷凍魔道具を使用しなくて済む、これだけでかなり経費が浮くし、カイトが護衛として漁へ一緒に付いて行ってくれるだけで普段は行けない危険な遠洋まで魚を捕りにいけて漁獲量が一時的にはあるが全盛期以上だ・・・本当にお前さんたちには感謝してもしきれないんだ」

師匠、「ガツハツハツハ！」と船に乗って何しに行っているのかと思っていました。が船の護衛だったんですね

「師匠ってほんと色んなことに手を出してるんですね・・・」

「おかげでこっちは助かってるんでな、カイトの多趣味多興味に感謝感謝だ、・・・と噂をすれば何とやらだ、あいつらが帰ってきたみたいだな」

そう言って視線を向けた先を追うと確かに大量の船が着港し始め、港のほうが少し騒がしくなってきました

そんな、どこかのどかな光景を眺めているとふいにニョルズ様が言ってきました

「・・・『千の妖精』」

「はい？」

「今回カイトがお前さんを連れてきたのはおそらく引継ぎのためだ」

「引・・・継ぎ？・・・え、なんで」

「カイトの弟子なんだから聞いてるだろう、あいつはいずれロキ・ファミリアを離れる、その際にうちのパイプ役がいなくならないようにお前さんを連れてきたんだと思う」

「そ、そんな・・・」

もし師匠がファミリアから抜けたら大幅な戦力ダウンとなるだけ

ではない

ダンジョンで師匠VS三幹部を除いた全員というの地獄の大訓練の廃止

それだけでなく私の極限訓練もなくなり、今回のように薬の実験に使われたあげく拉致されることもなくなり、そしてさつきまでのように冷凍魔道具代わりに魔法を連発させられることもなくなる

……あれ、それって楽園パラダイスでは？

あえてマイナスがあるとしたら師匠の料理が食べられなく、いや待てよ？ 師匠がファミリアを出て行くのはお店を持つ準備が出来てから、ということは、だ

師匠の料理はそのお店で食べることが出来る……あれあれあれ？

師匠が出て行く際のデメリットがなくなーい？

「……………」

しばらくの沈黙

ニオルズ様は何を思ってたか少し悲しげな表情で潮風になびかれています、私は絶賛効用計算で脳内がフル回転していました

「…ニオルズ様」

「ん？」

「私、師匠の夢を全力でお手伝いします」

「そうか…カイトは良い弟子を持ったな」

ニオルズ様がとても憂いを含んだ笑みで言ってきます

あ、いえ、そんな良い話じゃないです、めっちゃ私情の入った理由で手伝うんです

おっふ、ニオルズ様の優しい笑みが良心に突き刺さります。

そんなとある日のとある午後で割りとうどうでもいいやり取りがありましたとさ

《side out：レフイーヤ・ウイリデイス》





|| || || || || || || ||

それから数ヶ月の旅の末、私たちはようやく明日にはオラリオに着くであろう地点まで来ていた

まだまだ金を稼ぐという目的を達成していないながらも、目的地に到着できるという達成感に心が逸る

それは自分だけではないようで皆どこか浮き足立っている  
そんなとき

「ん？ あれは…」

鳥獣の羽ばたき音が中空から聞こえてきた

「お！来たか！」

音源であった一匹の鷹がタケミカツチ様の肩に止まった、脚には手紙が括り付けられている

「ハッハッハ、中々賢い奴だな」

『ピーー!!』

タケミカツチ様の反応から察するにこの伝書鳩、いや伝書鷹にはどうやら心当たりがあるようだ

慣れた手つきで鷹を撫でると気持ち良さそうに鷹が鳴いている、ナニソレかわいい私も撫でたいんですけど

「タケミカツチ様、その鷹は一体…いえ、それよりもその手紙は？」

「こいつはおそらく俺の知り合いが寄越した物だ、最後に手紙をやり取りしたときにヘルメスに何かしらの方法で連絡を取らせるとは聞いていたが、こうきたか…さすがに奴でも青い鳥は用意できなかったか？ カツカッカ！」

青い鳥？何のことでしょうか…

タケミカツチ様以外の全員が頭の上に疑問符を浮かべている間に鷹の足に括り付けてあった手紙を開き目を通していく

「ふむ…ふむ…おお助かる…」

読みながら何度も頷きつつその表情は明るくなっていく

もしかして何かの朗報・・・オラリオに居る知り合いの神に何かしらの連絡が取れたとかでしょうか？

神々の交友は広い、基本的に天界で不老不死なため全ての神々は顔見知りだ

顔見知りとは言っても仲の良い悪いは神であろうともあるわけですが、タケミカツチ様の表情から察するに仲の良い方の神と連絡が取れたということだろう、そうだとするならばオラリオに着いても早々右も左もわからないという困った状況は回避できそうですね

「タケミカツチ様、その手紙はいずこかの神からですか？」

全員の疑問を桜花殿が代表するかのように聞いてくれた

「ん？ああ、この手紙を寄越したのは神だが手紙を書いたのは別の奴だ」

「手紙を書いたのは別の神、ということですか？」

「いや、手紙を書いたのは神じゃなくておまえ達の兄弟子な」

「へー・・・」

「兄弟子かあ」

「なるほど」

「・・・うん？」

「・・・え」

「・・・あれ？」

なるほど、私たちの兄弟子・・・兄・・・弟子・・・？

タケミカツチ様の言葉を脳内で処理するのにその場の全員が10秒以上の時を要した

「「「兄弟子!?!?」」」」

兄弟子が私達にいたのですか!? いつ!?

「あ、あれ・・・言っただけじゃなかったか?」

「全員初耳だと思えますけど・・・」

一応確認のために皆へと視線を送ると全員が首を横に振っていた

「なるほど・・・実はなおまえ達には兄弟子がいるのだ!!」バーン!

いや、バーンじゃないですよ、バーンじゃ

遅すぎます、色々。

オラリオ到着の前日

タケミカツ子様、まさかのカミングアウト。

|||||  
|||||  
|||||

翌日

タケミカツ子様曰く

まだ見ぬ兄弟子は相当に腕が立つだけでなくオラリオでもかなり

幅広く顔が広い人物とのこと

いや、そんなことより名前とか教えてくださいよ

「名前はカイトだ、家名は事情があつて名乗っていないそうだ」

カイト殿ですか・・・ん? どこかで聞いたことがあるような?

私が聞き覚えのある名前に首を傾げていると

「み、命ちゃん、カイトつてもしかしていつも支援金を送ってきてくれていた人じゃ」

おお! 言われてみれば確かにそのような名前の方でした!

何年か前に千草殿と一緒にお礼代わりの押し花を送った記憶があ

ります。

「……あれ、それ以外でもカイトという名前に聞き覚えがあるような？」

「うむ、その人物で間違いはないぞ、お前たちの兄弟子には何年も前から社に金銭的にも物資的にも支援をしてもらっている」

「なんと、やはりそうでしたか」

「あの、そのカイトって兄弟子は俺たちと同じタケミカツチ様の眷属なのですか？俺は他に眷属がいるなんて聞いた事がないんですが」

「いや、他の神の眷属だ」

「他の……」

桜花殿の疑問に何でもないように答えるタケミカツチ様ですが、桜花殿はそれに納得がいかない様子

「まあ気持ちはわかります、武神であるタケミカツチ様に武技を教えてもらっているのは眷属である自分たちだけのはずと思っただけだし、自分たちだけという独占感が侵されてしまいみつともない嫉妬心が私にも芽生えます。」

「まあ、武を教えたというのも、何と云えばいいのか……ぶっちゃけ俺は一度も直接教えたことがなくてな」

「は？」

「えっと……どういうことですか、教えたことがないのに俺たちの兄弟子ってのは？」

「うむ、簡単に言うと俺は書伝であいつに技や訓練方法を教えただけでな、これができるようになったら次はこの訓練を、といった感じだな」

「なるほど、でもそれは……弟子なのでしょう？」

「弟子うんぬんとかを最初に言い出したのは向こうの方でな、俺たちがオラリオに出稼ぎに行くことを伝えたら『師や兄弟弟子達に何も知らないわけには行かないので当面はご安心下さい、色々と準備をしておきます』とな、最初はそこまで迷惑を掛けるわけにはいかんとは思ってたんだが……正直ここまで来るだけでも路銀や風習の違いで大変だっ



ただろ?」

それは確かに・・・移動続きの旅は私達の心身を疲弊させるには十分でした

「ここはカイトの言葉に甘えようと思ってな、さっきの手紙もそういったオラリオでカイトが準備している俺たちの仮の拠点や手続きのことに關してでな、とりあえず明日はオラリオの門まで迎えに来てそのままオラリオの案内までしてくれるそうだ」

なんとまあ、至れり尽くせりではないですか、不安だらけの新天地への不安が一気に減った気がします

「それでその兄弟子のカイトって人はどこのファミリアに所属しているんすか?」

あ、それを聞いてませんでしたね

あ、何故かタケミカツ様が悪戯でもするかのような表情になってます

「ふふ〜聞いて驚くなよ?」<sup>??</sup>なんとあの「ロキ・ファミリア」だ!」

「二「ろ、ロキ・ファミリア!!」<sup>??</sup>」

さすがに全員の顔が引きつりました

オラリオにそのファミリアありと言われ、構成団員のみで国家を相手に蹂躪できる戦力を保有するというあのファミリアですか!?

・・・ん? あれ? カイト? ロキ・ファミリアの・・・カイト

?

先ほど私が兄弟子の名に感じた違和感がロキ・ファミリアの名と共に再度浮上してきました

それに気付いたのは自分だけではないようで、他の皆も「え?嘘でしょ?」みたいな顔になっています。

いや、でも、まさか、そんな・・・ねえ?

「あ、あ、あああ、あのタケミカツ様?」

「ん?どうした千草?」

「あ、兄弟子のカイトさんって上級冒険者ですか？」

「おう、そうだぞ」

上級、つまり最低でもランクアップ済みでLv. 2以上は確定ということ

世界的にはそれだけでも十分すごいのですが・・・

今思い描いている内容はさらにその数段上を行くわけで・・・

「その人の二つ名って・・・？」

桜花殿がまさか、とでも言うかのような顔で質問しています

『<sup>ジョーカー</sup>切札』だな」

「二「やっぱいいいいいいいいー！！」」

な、なにをあつけられかんと答えているのですかタケミカツチ様は!!  
ロキ・ファミリアの『<sup>ジョーカー</sup>切札』と言えば数年前から頭角を現し今では  
ロキ・ファミリアに所属する最高戦力である4名のLv. 6、その内の  
一人ではないですか!?

旅の途中で一体どれだけの吟遊詩人達がその方の活躍を詩にして  
語っていたことか!

正直、ランクアップ所かステイタスも低い自分たちでは千、いや万  
倍の数で逆立ちした所で足下にも及ばない高みにいるはずの人物!

ええー・・・そんな方が

兄弟子?

私達の?

マジっすかー・・・

「何をそんなに驚いているんだお前ら?」

いや、驚きますよ

昨日、兄弟子が居るということだけでも驚いたのにその人がロキ・  
ファミリアでしかも第一級の冒険者である『<sup>ジョーカー</sup>切札』ですよ?

皆、驚きの連発で感情と思考が放心状態ですよ

「いや何言ってるんだ、これから向かうオラリオでこれ以上心強い味方なんていないぞ？」

まあ、それは確かに……でも自分たちみたいなのが雲の上に居るような方に会うのは気が引けるといっつか何というか

「そんなに不安にならずに頼りになる兄弟子がオラリオで俺たちを迎えてくれるくらいの感覚で行けばいいさ」

「だ、大丈夫なんすか……？」

不安そうな桜花殿の言葉はここに居る全員の代弁だ

なにせまだ見ぬ兄弟子はLv. 6、私達が何か粗相をして怒らせようものなら指一本で消し飛ばされます

「心配するな、あいつは第一級冒険者の中では貴重な人格者だと言われているらしいし、そんな人物でもなければ俺も訓練方法の指示などせんよ」

「まあ、そこまで言うのなら……」

タケミカヅチ様にここまで言わせるとは……

まだ見ぬ兄弟子は良き方のように――

「ちなみに、将来を約束した恋人が4人いるとのことだ、はっはっは、英雄色を好むとはカイトのための言葉だな」

あ、ダメですね

女の敵です

雲の上の存在の兄弟子が急にゴミ以下の存在になりました。

## 54：来訪？武神 その2

《side：桜花》

タケミカツチ様による俺たちの兄弟子という存在の暴露から一夜明け

(ここ並んでいる全員がオラリオが目的か…)

オラリオの外壁が1キロ先に見える

それにも関わらず人が成す列はそこから自分たちのところまで伸びていることに驚きを通り越して呆れてしまう、というよりこれに並ばなければならぬという事実には辟易してくる

「こりゃ下手したら街に入れるのは夕方だなく・・・」

遠くを見ながら呟くのはタケミカツチ様だ

さすがに気の長いこの方でも目的地を目の前にしての長蛇の列にはうんざりと言ったところだろう

「なんだい、あんたらオラリオは初めてかい？」

全員が並ぶだけの退屈な時間を予想しうんざりしていると、すぐ後ろに並んでいる商人らしき男が話しかけてきた

「ん？ ああ、出稼ぎのためにファミリア全員でオラリオに来たんだがこの街はいつもこうなのか？」

情報収集は大事だ、自分たちみたいなの今から一旗揚げしようとしている田舎者は特に、だ。

「いやいやここまでじゃないさ、兄ちゃん達は時期が悪かったねえ、もうそろそろここいらの収穫祭だからね、色々な奴らの出入りが一年で最も多くなる時期なんだよ」

なるほど、収穫祭か

俺たちの国でも年で数回、平民や農民が少し贅沢な食事が許される数少ない祭りだ

孤児である俺たちですら、その日は祭りのおこぼれに預かることが

出来た

この長蛇の列が常ではないことはわかった

問題は『グウ』と鳴る腹の音

切り詰めに切り詰めての旅、食事は質素なものだ

街に無事に着いたら前途を祝し、少し贅沢に腹ごしらえをしようと考えていた自分たちの胃の中は期待していたエネルギー摂取の機会を先延ばしにされ随分とご立腹だ。

「何だい豪快な腹の虫だな、兄ちゃん達朝飯でも抜いてきたのかい？」

「まあ、そんなところだ」

商人には何でも無い様に答えては居るが実は昨夜から何も食えていない

街が近くなるとどうしても野生の獣は少なくなるからだ

路銀の少ない自分たちの苦肉の策

金も無い飯も無い、だったら狩れば良いじゃ無い！ である。

実際、この策で道中はどうにかなっていた

船に乗れば魚を捕り、山を行けば山菜、運が良ければ獣の肉社に居た頃から慣れたものだ

だというのにオラリオに近づけば近づくほど治安が良くなり魔物はおろか獣の姿すら見えなくなり狩りがしにくくなった

出稼ぎのためにオラリオに向かっているのに目的地に近づくほど困窮するとはなんたる皮肉か

皮肉……皮肉って言葉美味しそうだよな…皮、鶏皮…肉、豚肉…。

空腹感がいよいよヤバイ、あまりの空腹に自分で言った言葉で夢想するとかアホか俺は

「ははは、それならあんた達にはちょうどいいかもしれないね」

「……？」

どういうことだ？

商人の言葉の真意がわからずに頭を捻っていると

『カラーンカラーン』とオラリオの方から正午を知らせる鐘の音が聞こえてきた

「オラリオの商人つてのは儲け話やその時期を決して見逃さないのさ…ほら噂をすれば何とやらだ」

「いったい何のこゝろ…なんだあ!？」

オラリオの方から土煙を上げつつ何かとんでもない数がとんでもない勢いでこちらに向かつてきている

へいらっしやいらっし腹に貯める美味しいスープはいかががつかーやいらっし飲み物はいかががつか〜?やいらっしやい美味しいじゃが丸君だよー出来立てだよー!はいまいど〜いくつご所望で?お、たくさんお買い上げありやくすサービスで一個多めに入れとき並んで暇なそのあなた!オラリオ新聞はどうだいクツキークツキーあま〜いクツキーはいりませんか〜?どなたかポーシヨンはいいりませんかご気分の優れない方〜オラリオ名物の金細工はどうだい、お旦那これとかどうだい?はいはい串焼きはどうだい、5本買うと一本おまけだよ〜

な、なんだこれは!?

目の前には数々の屋台や売り子の数々、それが一瞬で街道沿いに展開、商売を始めてしまった

「はっはっはっは、びっくりしたかい?」

「あ、ああ…すごいなこいつは」

命たちも突然の事態にあたふたしている

「はっはっは、だろう? 昼時になるとこうやって商人たちが飯時を狙ってやってくるのさ、どうだい兄ちゃん達にはちようどいいだろ」

「ああ…まあうん」

どうする?…ここであまり無駄遣いはすべきではないがここで飯にありつけなければ下手をすれば夕方まで空腹に耐えなければならぬ

(うゝん：下手に悩むよりタケミカツチ様に聞いた方が早いかな)

判断を仰ぐようにタケミカツチ様に顔を向けると

「さすがに皆も空腹が限界だろう、何か口に入れるとしよう」と苦笑いしていた

「商人殿、いくつかお勧めを教えてくださいませんか？あとできれば路銀が心許ないので手ごろな奴だと尚嬉しいのだが」

「まかせてくださいませどうぞの神様、私もここは長いんでね多少の顔が効きまさあ：お、ちょうど良い所に顔見知りが出てくれた、おーい！シュートー!!こつちだこつちー!」

そう言うと少し向こうに居て屋台で飲食物を売っていたペレー坊を被った小太りの親父がこちらに屋台ごとやってきた

「久しぶりだな、サイセー、今回はオラリオで仕入か？それとも売りかい?」

「収穫祭が迫ってたんだ、売りに決まってるだろ?」

「そりやそうか、 H A H A H A H A H A!!」

互いに気心の知れた会話の様子からどうやら本当に顔見知りらしい

「それで?後ろの連中は?護衛か何かか?」

「いや、検問待ちの間に少し世間話を楽しんだ出稼ぎファミリア一行様さ、安くて旨い屋台を教えてくださいね、お前さんの所を紹介しようと思ったわけさ」

「そいつあ良い!ぜひうちの煮物を食べてくれ、うちの屋台は安い早い旨い多いの四拍子が揃った優良店よ!」

そういつて品名と値段の書いた木の板を持ってくる

(へえ、本当に安いな)

オラリオという大都市の物価からすればかなり良心的な値段だ

「じゃあ俺はこれとこれを一つずつ、お前らはどれにする?」

「私はこれを」

「わ、私はこつちをお願いします」

それぞれ好きな物を予算の範囲内で注文していく

特に待つこともなく、すぐに皿が出てきた

「へい、お待ち！オラリオ特性煮込み一丁!!」

「お、おう」

(テンションたか……っ、これは!?)

そして食べてみて全員が驚いた

醤油味!?

旅に出たから口にする事のなかった懐かしき故郷の味に一瞬固まってしまったが、その味を自覚した後は掻き込む様に残りの煮物を口に入れていく

(う、うめえ……うめえ!!)

惜しむらくは米がない事だが、さすがにそれは贅沢というものだ

「おっ!!あんたら良い食いつぶりだな!ほれサービスだ、この煮物はこの『おにぎり』という穀物を丸めたものと一緒に食うとさらに美味しいし腹が膨れるんだ」

なんて贅沢か!!

しかも、おにぎりには海苔が巻いているだけではない、米の質が故郷の米に近い品種で作られたおにぎりだった

「いや、良い食いつぶりだねえそれでおか」

「「「お代わり!!」」」

「まいど!!」

この後、タケミカツ子様を含む全員が予算オーバーということなど忘れてお代わりをってしまった

しかも二回…

・  
・  
・  
・  
・

「お粗末さま」



うつぶ、もう食えね

数ヶ月にわたる過酷な旅による反動がオラリオというゴールを前にしたせいか爆発してしまった

だが煮物は絶品だったので悔いはない

「ほれ、兄ちゃんたち安物だけど食後の茶だ」

しかも緑茶、至れり尽くせりだ

「かたじけねえ、ありがたく頂く」

オラリオに居を据えた後はこの店は鼻屑にして通いたいと思わせ  
てくれる…つていうかするわ

(ふう…)

オラリオに入る前にこれほど旨い飯にありつけたのは僥倖だった

他の皆も和気藹々とした穏やかな雰囲気談笑をしている

そんな中で先ほどの商人と屋台の店主の話が聞こえてくる

「はあく、飯も美味しいし天気も良い…平和だねえ」モグモグ

「だなあ、ほれ茶だ」

「おう、すまねえな、それより最近のオラリオはどうだ？何か変わった  
こととかあったか？」

「おう、あつたぞ」

「へー、どんなことだ？」

「昨夜に『ロキ・ファミリア』と『フレイヤ・ファミリア』が派手にぶ  
つかったことだな」

「「「ブーーーーー……………つ??」」」

質問をした商人は食べていた物を噴出し、それを何となく聞いてい  
た俺たちは茶を噴出した。

「どどどどどど、どういうことだそりゃあ!?!」

「落ち着けて、サイセー」

「いや落ち着けるかよ、天下の二台派閥がぶつかったなんて世紀の大ニュースじゃねえか!？」

「ぶつかったって言っても小競り合いみたいなものさ」

「そ、そうなのか？」

聞き耳を立てている俺たちも小競り合いと聞き少し胸を撫で下ろす

店主の落ち着きようも本当に大した事が無いからだろう

「それで街の被害は？大したことないといってもかなり出たんじゃないか」

「家屋が少し被害を受けたのを除けば――」

「どうやら本当に大した被害は

「闘技場が半壊したな」

大した被害だった!!

俺たちは被害の大きさに驚いているが

「う〜ん…まあ、小さくは無いがまだましな被害だな」

「だろ？」

(ええ〜〜〜)

おかしい、2人の会話がおかしい

「しかも、L.V. 6が4人も暴れて闘技場が半壊程度で済んだんだぜ？」

半壊で程度なのか…

「そりや確かに奇跡に近いな、暴れたL.V. 6ってのは誰と誰なんだ？」

「ロキファミアリアの『切札』とフレイヤファミリアの『女神の戦車』

『白妖の魔杖』『黒妖の魔剣』この4人だな」

その名を聞いた瞬間に時が止まったのを感じた

『切札』

兄弟子が？

聞く限りでは同格の冒険者相手に1対3という圧倒的不利な状況で戦ったと聞こえるが大丈夫なのか？

「4人の内3人は重症だとき、特にその中の1人は今もディアンケヒトフアミリアの治療院で生死の境をさま迷ってるんだと」

「「「「っ!?!」」」」

俺たち全員の顔色が変わった

同格相手に多勢に無勢

その生死の境をさま迷う程の重症を負ったのは兄弟子である可能性が高い

頼りにしていた兄弟子がまさかの瀕死

いきなり聞かされた凶報に動きを止めていると、誰かが俺たちの中から飛び出し話をしていた店主の肩を荒々しく掴んだ

「カイトはーカイトは無事なのか!?!怪我の程度は!?!生死の境とはどういうことだ!?!」

タケミカヅ子様だ

「ちよ、どうしたんでさあ!?!神の旦那!?!」

店主に問いたただす目の中には真に子供を心配する親の光が見て取れる

兄弟子が生死不明と聞き自分はオラリオでのこれからの生活に対して打算的な考えが一瞬よぎったが、この人の場合はそんな考えなど微塵もないのだろう

(俺たち孤児を無制限に引き取るようなお人好し、いやお神好しだからなあ)

「ちよちよ、ちよっと待って下せえ!あんだ『代表』と知り合いなんですかい!?!」

タケミカヅ子様には肩を前後に揺らされなが店長が声を上げる  
っていうか『代表』?

「す、すまん、カイトとは知り合いなのだが、というか代表?誰のことだ」

「あー…『代表』ってのは『切札』の下町での愛称になりやすね、あの人は『下町屋台連合』の顔役もやってるんで」

なんだそれ

「そ、そうなのか、いやそんなことよりカイトは――」

「だから、待ってくだせえ！神の旦那!!あんた何か勘違いしてますぜ？」

「なぬ？勘違い？」

「死にかけてるのは『女神の戦車』<sup>ヴァナ・フレイヤ</sup>で重症なものも『白妖の魔杖』<sup>ヒルドスレイヴ</sup>『黒妖の魔剣』<sup>ダインスレイヴ</sup>で『代表』は今朝もピンピンしてやしたよ！」

「「……え？」」

全員が先程とは違った意味で固まる

「い、いや、だが相手は同じLv. 6が3人だったのだろう？」

「そうですが…『代表』は色々規格外な方ですからねえ、なあ？」

「いや、俺に同意を求めるなよ、あの人とはあんま話したことないし」

店長が商人に同意を求めるも袖にされる

「店主、何度も確認して申し訳ないが本当にカイトは無事なのだな？」

「本当ですって、今朝普通に会いましたし」

会ったんかい、道理で知り合いであろう店主が落ち着いているはずだ

「そ、そうか、無事か、無事なのか…ふう、まったくオラリオに着くなり心配させてくれる奴だ」

「でも神の旦那、『代表』と会うなら少し気をつけた方がいいかもしれませんが、Lv. 6を3人病院送りにしてもピンピンしてはいやした  
が相当機嫌が悪そうでしたから」

同格のLv. 6を3人病院送りにできる兄弟子が不機嫌…別の意味で不安感が増してきた

いや、昨日のタケミカツチ様の話では兄弟子は人格者とのこと、大丈夫……だといいなあ

「何があった？俺の知るカイトはそう簡単に怒る奴ではないはずなのだが」

「ええ、確かに普段の『代表』はめつたにぶち切れたりする方じゃあないんですがね…何でも先の3人に屋台を破壊された上に、屋台が破壊された際には命よりも大事な嫁の一人まで傷物にされたらしく…まあ、相当やべえ雰囲気でしたね、ぶつちやけ今の『代表』には近づ

きたくねえですね」

顔見知りであるはずの店主ですらこの言い様、合ったことも無い俺たちはどうなるのというのか

…会うのが少し楽しみだったのがこの一連の話で一転、会うのが怖くなってきたな

「そうか、自分ではなく大事な人を傷付けられて怒るといのはカイトらしいといえばらしいか」

「まあ、今回の件とは関係ない神の旦那方に八つ当たりするほど代表は小さい人間じゃないんで、あんたたちは大丈夫だと思いますけどね…たぶん」

最後の方に不穏な事を付け加えないで欲しい

だが俺たちの兄弟子は色んな意味ですごい人だということが実感できた

どうか兄弟子が良い人でありますように

マジで。

《side out：桜花》